

## 甲子園野球の神話作用に関する研究

著者	清水 諭
内容記述	筑波大学教育学博士学位論文・平成3年3月25日授与 (甲第921号)
発行年	1991
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00148654">http://hdl.handle.net/2241/00148654</a>

DA  
921  
1990  
(4)

寄	贈
清水諭氏	平成 年 月 日

教育学博士論文

甲子園野球の神話作用  
に関する研究

筑波大学大学院博士課程  
体育科学研究科体育科学専攻

清水 諭

92005237



## 目 次

序 章	研究の動機、目的及び意義	1
第1章	先行研究の検討	5
1.	本論文の視点—その思想の系譜—	5
2.	神話とパフォーマンス、見世物の理論	11
(1)	神話の概念—社会心理学・心理学の視点—	11
(2)	神話の概念—文化人類学・民族学の視点—	13
(3)	文化的パフォーマンス、見世物と神話	17
(4)	現代社会における神話研究 —方法としての記号学を含めて考える—	20
3.	スポーツ・シンボリズム論 —スポーツにおける文化的パフォーマンス、見世物、神話論—	26
4.	テレビ・スポーツと神話	39
5.	先行研究にみられる視点と諸問題	47
第2章	研究の方法及び分析枠組の提示	56
1.	本研究の方法論的根拠 —方法としての Roland Barthes—	56
(1)	コノテーションによる神話学	57
(2)	コノテーションからテキスト分析へ	61
(3)	社会をテキストとして捉えること —コンテクスチュアリズムの可能性—	63
2.	本研究の方法	67
(1)	甲子園野球の歴史的な神話形成について	67
(2)	テレビによる神話作用の分析について	68

(3) 文化的コンテクストの地平における神話作用の実証 について……………	84
3. 本研究の分析枠組の提示……………	87

### 第3章 甲子園野球の歴史的な神話形成 —— 場としての「甲子園」の歴史性 —— …… 92

1. 日本人と野球 — 移入期から全国中等学校優勝大会開催前まで — ……	92
(1) 移入期 (明治5年(1872)～明治14年(1881)頃) ……	92
(2) 群雄割拠時代 (明治15年(1882)～明治22年(1889)頃) ……	97
(3) — 高時代 (明治23年(1890)～明治36年(1903)頃) ……	101
(4) 早慶時代以降 (明治37年(1904)以降) ……	112
2. 全国中等学校優勝野球大会開催にむけての 神話形成のプロセス……………	139
(1) 全国的規模での中等学校野球大会の発案……………	139
(2) 朝日新聞社『野球と其害毒』と 全国中等学校優勝野球大会の開催……………	143
(3) 全国中等学校優勝野球大会の発足……………	147
3. 全国中等学校優勝野球大会及び 全国高等学校野球選手権大会史における神話形成……………	148
(1) 舞台・儀式・「野球大会の歌」……………	148
(2) 全国中等学校優勝野球大会における組織の単独性……………	153
(3) 神話生成の仕掛けとしての処分……………	157
(4) メディアの側からの甲子園野球神話の強化 — 早稲田大学野球部OB飛田穂洲の言説 — ……	165

### 第4章 全国高等学校野球選手権大会のテレビ中継における テレビの神話作用分析…………… 186

#### 1. 視聴者の特徴

-甲子園スタンドでの観戦者との比較から-	186
2. テレビ中継における映像・音声の内容分析	188
(1) 映像の内容分析	188
(2) 音声の内容分析	190
(3) 視聴者の印象分析	194
3. 全国高等学校野球選手権大会テレビ中継における テレビの神話作用	196
 第5章    文化的コンテクストの地平における神話作用の実証 ——池田町でのフィールドワークから——	197
1. 主題・方法・範囲	198
(1) 民族誌的記述の方法	198
(2) 池田町におけるフィールドワークの方法	201
2. 池田町の風土・人口・産業	204
3. 池田高校と池田町民 -池田高校気質の醸成と自然環境-	209
4. 池田町民と甲子園	212
(1) 池田高校と甲子園	212
(2) 池田町民と甲子園-1988年夏-	214
5. 神話生成の中核-監督薦文也-	232
6. テレビ局による池田高校神話の生成	241
7. 池田高校神話の連環性と再生産	242
8. 神話に対抗する事実-対抗神話の生成へ-	245
 第6章    結章	290
引用・参考文献一覧	293



## 序章 研究の動機、目的及び意義

現代におけるスポーツの特徴のひとつとして、技術の高度化、経済力を背景とするプロフェッショナルの君臨、そして、これらを基盤とする、見る者とやる者との完全な分離が考えられよう。スポーツを見るという行為は、マス・メディア — 特に、同時進行的にゲームを伝えるのに大きな役目を果たすテレビ — との密接な関係によって益々強化され、現代スポーツは、見世物（スペクタクル）だといってもよいだろう。このようなスポーツの見世物化現象の中で、人々は、競技場のスタンドやテレビの前で、選手の一挙手一投足をどのように解釈し、意味付与しているのか？ なぜパフォーマンスに熱狂し、感動を覚えるのか？ といった問題が出てこよう。日常生活の決まりきった行動の中では考えられない要素を、身体を用い、非言語化された状態でパフォーマンスを通してコミュニケーションしているスポーツを個人個人が内的にいかに解釈しているのか、個人のトータルな認識の枠組の中で、どのように意味づけられているのか。この問題は、スポーツの社会的イメージと個人の解釈との関係、すなわちスポーツを媒介として社会と個人とのかかわりを考えることにつながるだろう。

J. J. MacAloonは、スポーツ・イベントを、「単なる娯楽や教訓ないし、説得の形式やまた放縦な憂さ晴らしなどを越えるもので、一個の文化あるいは、一個の社会として我々が自らを鏡に映し出し、自らを定義し、  
.....  
その集合的神話と歴史を劇化し、さまざまな代替（オルタナティブ）案を自らに提示し、結局ある面では、同じ姿のまま留まりながら、ある面では、変身を遂げる場となる」<sup>1)</sup> 文化的パフォーマンスのひとつとして捉えた。そして、V. Turnerは、この文化的パフォーマンスを、「日常と

は異なった時空間と秩序のもとで、通常の思考、体の動きにおいては気づけなかった隠れた意味を引き出し、表現することで、シンボリックに人間の多様性、可能性を認識することができるもの」<sup>2)</sup>と定義している。これらの言説は、スポーツ・イベントが文化的パフォーマンスとして、集合的神話、隠れた意味を我々に伝達し、解釈させていることを示す。

本論文では、このような神話を、「<sup>イメージ</sup>像やストーリーの束から構築された、我々の意識の表層を決定するための思考の枠組 — モデルであって、ひとつの共同体においてその集合意識の中で、「固定化」したコノテーションとして、共通の解釈を呼び起こす作用を持つもの」とした上で、スポーツ・イベントの中で、甲子園野球の神話作用について限定して分析する。毎年、夏行われる全国高等学校野球選手権大会は、朝8時から夕方6時まで、全試合テレビ中継され、新聞も球児たちの記事であふれ、どこの県が勝ったか、負けたかが、話題になる。今や夏の風物詩となった甲子園野球が、人々を魅了するメカニズムは一体何か、甲子園野球の社会的神話を作り上げていくプロセス、及びそれが解釈されていく背景を分析することで、明らかにする。

具体的には、1) 歴史的に形成されてきた甲子園野球の神話の追求 — 歴史的に生成され、伝達されてきた甲子園野球の神話は、我々が甲子園野球を観て解釈する際、無意識のうちにその基盤となるような精神的古層ともいえる。このような歴史的に作られてきた神話は、日本における野球の歴史においてどのような観念のもとに野球を考え、行われてきたのかということから明らかにする。一高時代→早慶時代の精神的側面から全国中等学校優勝野球大会が生まれたプロセス及び開始後の歴史の中から生成された神話について分析する。2) マス・メディアの生む神話作用の分析 — 以上の歴史を踏まえ、現代社会における神話を生成



する重大なファクターとしてのテレビ中継を記号学を方法として用い、分析する。3) 文化的コンテクストの地平における神話作用の実証 — 甲子園野球の神話を解釈するコンテクストに注目し、フィールドワークすることで、我々にとって甲子園野球は、どのようなシンボリックな作用及び意味を持つのか調査する。

といった3側面から甲子園野球の社会的神話の生成プロセス及び解釈のメカニズムを探る。そうすることで、なぜ「純真で」「男らしく」「すべてに正しく、模範的な」「青少年」が「スポーツマンシップ」と「フェアプレイ」の「精神」で「地方の代表」として「潑刺たる妙技」を甲子園野球が見せてくれるといった神話が歴史的に形成されたのか。そして、現代社会においてどのようにメディアにより伝達され、また、我々が生活している中で、その神話をどう解釈しているのかを明らかにできるに違いない。

このような研究は、スポーツ・シンボリズム研究として、スポーツがどのような意味を我々に伝達し、我々がどうそれを解釈して生きているのかを、広い視野の中で、具体的に明らかにすることができよう。

## 序章 引用文献

- 1) J. J. MacAloon, 光延明洋訳 ; 文化的パフォーマンス, 文化理論, J.  
J. MacAloon編 ; 世界を映す鏡, 平凡社, 1988, p. p. 11-12.
- 2) V. Turner, 今福龍太訳 ; リミナリティとパフォーマンスのジャンル,  
J. MacAloon編 ; 世界を映す鏡, 平凡社, 1988, p. p. 38-39.

## 第1章 先行研究の検討

本研究は、甲子園野球が我々日本人にどのようなシンボリックな意味をもたらし、それをどう解釈するかという点にスポットを当てるものである。ここでは、シンボル、意味の探究についての研究の系譜を述べながら、自らの研究上の立場を示しつつ、シンボリズム、パフォーマンス、見世物と神話についての先行研究を概観する。

### 1. 本論文の視点 — その思想の系譜 —

我々人間が、行動を起こす要因となるものは何かについて、物質的な欲求を合理的に充足するのが人間であり、社会における制度・組織の機能を重視する従来の見方から、意味と象徴作用こそ人間の特徴であるという人間観に変化してきた流れは、18世紀ロマン主義運動期におけるRaymond Firthに端を発するとみてよいだろう。そこにおいて、純粹理性に対し、感情を重んじ、外面的な秩序を内面的な意味から見直す志向性がはっきりと打ち出される。これは、深層の意味への希求とってよく、詩的表現・夢・神話に関心を呼び起こし、現実の別の次元を想起させる自然の全体性、異世界への憧憬をもたらすものといえる。<sup>1)</sup>

初期の人類学者においては、James G. Frazer<sup>2)</sup>にみられるように、自然崇拜、王殺し、トーテミズム、タブーなどのテーマで、宗教や呪術の象徴性が研究された。しかしながら、今日の象徴研究への直接的影響を与えたのは、Emile DurkheimとSigmund Freudとみてよい。E. Durkheimは、個人と社会とのかかわりを集合表象の概念を用い、集団のシンボリズム、つまり、象徴による社会統合を宇宙論的枠組を通して考える方向



性を示唆した。<sup>3)</sup>そしてS. Freud は、分裂病や精神異常から、個人内における象徴と社会の不調和、葛藤を分析しつつ、心の中での抑圧と無意識の精神レベルという新しい傾野を開いた。<sup>4)</sup>深層という語は、このS. Freud が心(精神)を意識(表層)と無意識(深層)に分けたことに生起している。人間の真の動因を、自覚できない無意識にみてとる理論が、C. Lévi-Straussを初めとする社会、文化における深層構造という概念形成にひとつの重要な影響を与えた。

この深層への注目という新たな見方を境界として、1920年代の文化人類学のフィールド・ワークでもふたつの傾向が見られる。B. K. Malinowski は、トロブリアント諸島における交易(クラ)において、経済上の事業と呪術的儀礼が、緊密に結び合い、互いに影響し合っていることを明確にしながら、それらをもっと掘り下げて分析、比較してみると理論的考察にとって、ある興味深い材料が得られる可能性を示唆した。<sup>5)</sup>「更に、私が確信をもって繰り返したことは、本当の問題は詳細な点や事実にはなくて、我々がどうそれを学問的に使うかということだった。したがって、クラの詳細な技術的問題は、原住民のある中心的な心の態度を表していて、その結果、我々の知識と視野を広め、人間性の理解を深める限りにおいてのみ意味を持つのである。……原住民に関する研究で、本当に私の関心をひくものは、彼らの事物に対する見方、世界観、原住民が呼吸してそれによって生きていく生活と現実の息吹である。あらゆる人間の文化は、その文化を作る者たちに、一定の世界像を与え、はっきりとした意味を示す。」<sup>6)</sup>し、クラが、未開人の価値の全体像的概念を示すものと意味づけ<sup>7)</sup>、そこから、人間にとって交易(経済)が根本的に何を意味するのかを考える継起となった。

このように文化の目に見えない隠れた論理を掘り起こそうとするB. K.

Malinowskiと対照的なのが、あくまで目に見える観察可能な部分を中心に文化及び社会を論じていく機能主義的立場のA. R. Radcliff-Brownである。

更に、B. K. Malinowskiが交換の問題が、単に経済関係だけでなく、広く、親族組織、社会組織、呪術（パフォーマンスといえる）、神話、儀式、そして、人間の世界観までをも説明するものとしたのに影響され、M. Mauss は、ポトラッチ（アメリカ北西部Kwakiutl族インディアンの酋長同志の贈与交換）の研究から、人間のコミュニケーションの中で、贈与交換が、非常に重要な役割を果たしており、人間の社会的関係の基礎は、このような紐帯の中で、贈り物をする行為にあることを強調した。<sup>8)</sup>

このように、社会組織や経済などの表面的なあり方を研究するよりも、現実では見えない深層を捉えようとする文化研究、すなわち、シンボリズムそして意味と解釈を研究する学問的系譜に本研究も位置づけられる。

象徴と解釈の側面から文化を定義するにあたって、C. Geertzは、文化は、解釈できる記号の絡み合った体系であり、脈絡（コンテクスト）であるとした。<sup>9)</sup>つまり文化は、シンボルとその意味の体系であって、象徴形式を通して表現される意味のパターンを人々が世代から世代へと継承していくのだという。またB. Leach は、文化を伝達形式の体系とみなし、文化事象が伝達するメッセージを人間の文化的営為とする。<sup>10)</sup>

現実の多義性と象徴への関心、更に深層を理解しようとする研究の傾向は、M. Mauss の後に、C. Lévi-Straussが抽象的なシステムとしての構造モデルを提示し、トーテミズムなどは人間の無意識の思考体系（分類体系）が象徴的に表れたものだとする。ここから、社会を構成しているいろいろな部分は、ばらばらではなくて、ひとつの基本的なモデル（C. Lévi-Straussは、これを構造という）の投射したものだという考え方が



確立する。

また、V. Turnerは、象徴が、人々を動かし、行動に駆り立てるダイナミズムに焦点を当てる。そして、シンボリズムと儀礼、神話、パフォーマンスについて、「我々が日常生活でどう生きなければならないのかということは、日常生活の同じ土俵の上では理解することは困難であり、古くから儀礼や物語としての神話によって（メタ言語あるいは、非言語的なものが媒介となり）シンボリックに表現されてきた。そうすることで我々は、自分が一体何者であるのかということを知る以上に共同体の文脈を探り、目前の可視的なものを規定し、様々な可能性を導き出す不可視の構造を理解するのである。それは日常と異なった時・空間と秩序のもとで、通常的思考、体の動きにおいては気づかなかった隠れた意味をパフォーマンスによって引き出し、表現することで、人間の多様性、可能性を認識することができる。この不可視の構造を理解する言語以外のもの、つまりパフォーマンスに、儀礼、舞台劇、カーニバル、人類学のモノグラフ、絵画の展示、映画といった様々な文化の象徴的行動や形態がある。」<sup>11)</sup>と述べている。

更に、V. Turner一派のJ. J. MacAloonは、文化的パフォーマンスについて次のように定義している。文化的パフォーマンスは、「単なる娯楽や教訓ないし、説得の定式やまた放縦な憂さ晴らしなどを越えるもので、一個の文化あるいは、一個の社会として我々が自らを鏡に映し出し、自らを定義し、その集合的神話と歴史を劇化し、さまざまな代替（オルタナティブ）案を自らに提示し、結局ある面では、同じ姿のまま留まりながら、ある面で変身を遂げる場となるものである。」<sup>12)</sup>このことは、文化的パフォーマンスが、自分達が自らの現実を見、通常話していること自体について語ることを可能にする言葉（言語あるいは非言語）を生

み出そうと努める時期 (moments) であることを示しており、またそれが reflexivity (再帰性) を確認し、進んで reflection (内省) へと向かわせてくれる時・空間である<sup>13)</sup> ことを示唆している。

スポーツ・イベントとしてここで甲子園野球を取り上げ、文化的パフォーマンスとしてどのようにシンボリックな意味を持っているのかを研究していく上で、この V. Turner と、J. J. MacAloon の諸説に依拠しながら、C. Lévi-Strauss のいう深層の構造を垣間見ようとするのが、本研究の立場並びに視点である。この点について、V. Turner が、「儀礼、祝宴、カーニバル、祝祭、ゲーム、見世物、パレード、スポーツ・イベントが様々なレベルでしかも様々な言語的、非言語的コードの中で、一連のメタ言語を構成し、このメタ言語を通じて、集団ないし、共同体は、自分自身を変えていくために自分自身を理解しようとする活動を活発に行ってきた。簡単に述べれば、こうしたジャンルは、スポーツのようにそこに生ずる相互のぶつかり合いが苦痛を伴うものであるにせよ、参加者がひとつの統一的体験へと『流れ』ていく機会を与えることになり、同時に内省的な側面をも合わせ持つものだ。」<sup>14)</sup> と述べているように、スポーツ・イベントは、文化的パフォーマンスとして個人が共同体においてどのように生きるべきかを認識できるものといえるのである。

この文化的パフォーマンスの概念は、山口昌男のいう見世物の概念を含むものであるが、それが、パフォーマンスをするものと、見る者とのはっきりした分離であることを考えると、「競技の当事者の技芸、智力、フォームが鑑賞の対象となることに加えて、人生の再構成として、日常空間で起こることの強度に圧縮された喩 (metaphor) であるもの。」<sup>15)</sup> と見世物を定義できる。すなわち、見る者は、パフォーマンスを自分の人生に沿って解釈していることになるわけである。

本研究は、象徴と意味、神話、文化的パフォーマンス、見世物の概念を基盤とする以上のような系譜のもとに位置づけられる。次節では、本研究のキー概念となる文化的パフォーマンス、スペクタクル（見世物）と神話について詳しく述べていく。



## 2. 神話とパフォーマンス、見世物の理論

前節のような学問的系譜を踏まえ、シンボリズム、パフォーマンス、見世物そして神話を定義する。まず、神話の概念を見ると以下のような視点と定義がある。

### (1) 神話の概念 — 社会心理学・心理学の視点 —

#### ① Roger Cailloisから<sup>16)</sup>

R. Cailloisは、神話とは、個人の内的世界と外的世界との葛藤を表現するものであり、個人の心の最も内奥の、最も激しい要求と、社会生活の最も強圧的で乱暴な圧力との衝突を巧みに核心で把握できるものであると考えた。彼にとって神話は、人間の本能的な欲求によって作られるもので、心理の潜在的性質、葛藤やそれによる補償作用を特殊世界で具体化するものである。

#### ② Sigmund Freud, Erich Frommから<sup>17)</sup>

S. Freud は、神話と夢のどちらもが同じ象徴言語 — 心の中の経験や感情や思想があたかも感情上の経験、外界の事件であるかのように表現される言語であり、日常の言葉と違って連想に支配されるもの。また、それは、人類が発展させた唯一の普遍的な言語であり、すべての文化について、あらゆる時代に同じもの — で「書かれて」いることから、神話も夢も精神の最も意味深い表現であるとした。どちらにおいても、人間の内面的な不安定性つまり、名声と威信への激しい渴望のうちに補償を求める要求が働いているとする。

S. Freud及びE. Frommにとって神話とは、夢における場合と同じく、特殊な言葉すなわち象徴の言葉で表現された過去の時代の知恵というより

むしろ、非合理的、反社会的な衝動の表現であり、個人の内面的な葛藤の表れであるというわけだ。

V. Turnerは、神話の定義として、文化的側面、心理学的側面、宗教的側面から述べており、特に、心理学的側面について、Freudians（フロイト派）とNeo-Freudians（ネオ・フロイト派）及びC. G. Jungを挙げているのでここに心理的側面からの神話の定義について付記する。彼はC. G. Jungが「神話は文化的な制度の指標や図表ではなくて“集合的無意識”に関する“祖型”（archetypes）もしくは、“原初的イメージ”の表現としての“心理学的リアリティー”である。」<sup>18)</sup> としていることから、神話は、C. G. Jungにとって「人間が本源的に持ち、継承されていく心理的形態やパターンのこと」<sup>19)</sup> とまとめている。更に、V. Turnerは、儀式や神話が時・空間的にリミナルな場で行われ、そのことについて語られたりするという考え方から、以下のように説明している。すなわち、「……リミナリティが普遍的に緊張を与え、特有の文化的構造の配列を解体させるので普段なら規範に支配されるか、実用的（プラグマティック）な行為における先入観で表れることが抑えられている心理的内容が豊富に表れる。」<sup>20)</sup> と述べ、フロイト派、ネオ・フロイト派の人々の神話の定義を「生命の危機が“抑圧の再発”として再び儀礼、神話に表れることからリミナルなシンボリズムの無意識的な意味論的構成要素に、多くの光を当てることになった。」<sup>21)</sup> と評価している。更に、Jungの神話の定義について「(神話は、)成人の危機の抑圧における“集合的無意識”(collective unconscious)から噴出したシンボルの解釈に基づき……自然の出来事の投影によって、人間の意識に近づきやすくなる内的、無意識な心理的ドラマのシンボリックな表現である。」<sup>22)</sup> とする。

以上は、心理学的要因からの神話の定義である。しかしながら、V.



Turnerがいうように、事象を社会的・文化的コンテクストに注目して分析していく必要がある。すなわち、「儀式がそこで起きる生きたコン  
 テキストの中でそれを研究する必要がある。……このコンテクストは、  
 社会的な位置、一連の文化的制度、文化的メカニズムといったすべての  
 事例にある、ひとつの社会的フィールドのことである。そして、加入儀式と神話は、総合的な宗教的システムの構成要素として取り扱われなければならない。意味 (significata)、舞台 (stage)、言葉、センテンス、モチーフ、登場人物 (personae)、対象そして関係さらにはそれらの底にある原理やテーマといったユニットに細分化されるシンボルと神話は、総合的な宗教的システムの他の部分に見い出されるものと関係させなければならない。」<sup>13)</sup> という。更に、「宗教的なシステムの特質と構造は、親族システム、経済システム、法律・政治システムといった、他の文化的サブシステムの特質と構造に比較され、対照されなければならない。つまり、我々はひとつの神話の部分的な意味を、その文化的コンテクストの特異性、コンテクストの多次元性において探究しなければならない。」<sup>14)</sup> というのである。

ここに、神話について、定義し、研究していくときに文化・社会的コンテクストに注目することの重要性が生じる。次ページからの(2)では、この側面から定義していく。

## (2) 神話の概念 — 文化人類学・民族学の視点 —

### ① B. K. Malinowskiから

B. K. Malinowskiは、神話 (myth)・伝説 (legend)・民話 (folk-tale) を比較して神話を以下のように定義している。神話は、「超自然的靈格の意志行動を解釈し、そしてまた、描写しようとする心的態度をもとに、



単に真実としてではなく、畏敬すべきものとして、また神聖なものとして考えられる物語である。それは、式典や社会的あるいは、道徳的な規則がその正当な機能や伝統性の保証を要求したり、その真実性や神聖性の要求をするときはじめて表出する。」<sup>25)</sup>

そして、機能主義の立場から神話は、「道徳的な価値や、社会的な秩序や、呪術的な信仰の回顧的な典型を提供する」<sup>26)</sup>と述べ、神話はその機能として、「伝統を強化し、それを辿って太初的事件のより高い、より優れた、より超自然的な現実に立ち帰ることによって、それに一層偉大な価値と威信とを付与する」<sup>27)</sup>としている。このように神話を機能主義の側面から考えるB. K. Malinowskiは、トロブリアント島民の神話と地形上の性質そしてクランの分類、親族のパターンや社会的階層の関係性を明らかにしながら、「神話が現存している社会制度の図表であることを示し、神話はつくり話ではあるけれども、それらの細部は、社会的、文化的な配列と相互に関係している」<sup>28)</sup>と結論づけている。

## ②松村武雄から<sup>29)</sup>

神話とは、非開化的な心意をもつ民衆が、おのれと共生関係を有すと思惟した超自然的存在態の状態・行動、またはそれらの存在態の意志活動に基づくものとしての自然界・人文界の諸事象を叙述し、または説明する民族発生的な聖性的もしくは俗性的説話である。松村の場合、B. K. Malinowskiと異なり神話を未開社会の人々に限定している。

## ③Claude Lévi-Straussから

ここまでの神話は、未開民族における物語としての神話を定義してきたのであるが、C. Lévi-Straussは、人間に普遍の構造を追求する視角か

ら、神話的思考、認識論としての方向性に注目した。そして、未開の宗教的現象において「二項対立による論理的操作は、象徴主義の最初の出現と合致している」<sup>30)</sup> ことをみつけた。そしてトーテミズムというシンボリックな考え方は、「推論的思考の原初的形態」<sup>31)</sup> であるという。さらにV. Turnerがいうように、「対立と相関、排除と包含、調和と非調和といった厳格な構造の論理が神話的また儀礼的シンボリズムとディスクールにおいて存在している」<sup>32)</sup> ことにC. Lévi-Straussは注目し、シンボリックなおおいの後ろにあるようなこの論理の厳格な構造をあらわにしようとした。

このように、C. Lévi-Straussは、物語としての神話の構造分析から、人間のいつの時代にも存在する普遍的な神話的思考の構造に着目した。そして、Saussureが、記号を、心像（記号表現）と概念（意味内容）の総体であると定義したのを受けて、C. Lévi-Straussは、記号が、具体的な存在である心像と限りない指示の能力たる概念の結合であると考えた。そして、神話的思考の際には、概念を用いる近代科学と異なって、記号を使うと述べ、神話的思考をする人が閉じた総体の再組織化を、記号の潜在的な指示能力によって行うことを説明している。<sup>33)</sup>

物語としての神話の分析から、思考、認識の構造の普遍性を追求したこのC. Lévi-Straussの神話の考え方の延長上に現代の神話の存在理由とその記号論的モデルの適用が可能になるわけである。現代において、記号の限りない指示能力（人類は、たくさんあるとはいってもやはり限度があり、しかしながらほかに何もなくてそれを使わねばならない材料を用いて「bricolage」（器用仕事）するのだという考え方）<sup>34)</sup> により、様々な事象について神話的に思考しているのであって、本論文でもこの考えを基盤に、神話及び神話作用を考えていく。



#### ④山口昌男から

以上の、C. Lévi-Straussの神話的思考をふまえ、山口昌男は、神話を以下の3つに類型化している。i) はじめの時の神々の物語として、一定の儀礼で語られるか、聖典に記されるかしてみだりに口にしない物語。

ii) 毎日の生活の中で世俗化されて語られるか、昔話という形で語られ

.....

るかする物語。iii) 時代のパラダイム（知の枠組、思考の規範としてい

るが）として、人間の非合理性への欲求を満たす思考の潜在的枠組の

ようなもの。<sup>35)</sup> そしてこれらから以下のように神話を定義している。

.....

「神話とは、我々の心の底に沈澱して、我々の意識の表層を決定するエ

.....

ピステメ（認識）の膜のようなものである。……（すなわち）……意

.....

識の表層で因果関係、説明体系のモデルが存在しない時、世界を認識す

..... イメージ .....  
.....

るために人間が潜在的にもつ、像やストーリーの束をたよりにして構築

.....

されたモデルである。」<sup>36)</sup>

このように考えれば神話は、C. Lévi-Straussの定義同様、未開社会の人にだけあるものでないことが明らかで、現代において神話に焦点を当ててすることで、人間の深層的、潜在的な思考の枠組が理解できることになる。

#### ⑤吉田敦彦から<sup>37)</sup>

吉田敦彦は、神話とはそれが属する文化の中で人々が共通して合理的理解を超えた絶対的つまり神的な真実と信じてそれに従って生きているものの世界観を体系的に表現した話であるとする。

そして「過去の文化の中では、人間の実存の根本に関して（ひとつの共通の）答をあたえていたようだが、現代人はそれぞれが『異なる答』を持って異なる答を『生きている』ように少なくとも表面的には見える。

しかしそれは、ただ意識のレベルでだけそうであると思いこんでいるにすぎないのであって、実は自分でははっきりと意識していないけれども、  
.....  
深いところで何か共通する〈神話〉を『生きている』のではないか。」  
と述べ、神話が世界観を表示する文化の深層に潜んでいるものと考えている。

以上、神話の概念は多く、様々に考えられている。しかしながら、C. Lévi-Straussの人間に普遍的な神話的思考が存在するという主張は、神話が単に超自然的なものを畏敬するために神聖な物語の形で確立されているという論理だけでなく、潜在的にある世界認識のための思考の枠組——モデルが、文化において伝達されていると考えることを可能にするものである。

### （３）文化的パフォーマンス、見世物と神話

C. Lévi-Strauss及び山口昌男の神話的思考への注目により、神話は、  
イメージ  
像やストーリーの束から構築された我々の意識の表層を決定するための思考の枠組——モデルであることが理解できよう。このような思考の枠組、意味の体系をシンボリックに伝達し、表現してきたのが、人間の文化的営為としての儀式や見世物などであるということは、本章の 1. 本論文の視点——その思想の系譜——でふれたとおりである。

ここにおいて、V. Turnerが「我々が日常生活でどう生きなければならないのかということは、日常生活の同じ土俵の上では理解することは困難であり、古くから儀礼や物語としての神話によって（メタ言語あるいは、非言語的なものが媒介となり）シンボリックに表現されてきた。そうすることで我々は、自分が一体何者であるのかということを知る以上



に共同体の文脈を探り、目前の可視的なものを規定し、様々な可能性を導き出す不可視の構造を理解するのである。それは日常と異なった時・空間と秩序のもとで、通常の思考、体の動きにおいては気づかなかった  
.....  
隠れた意味をパフォーマンスによって引き出し、表現することで、人間  
.....  
の多様性、可能性を認識することができる。この不可視の構造を理解す  
.....  
る言語以外のもの、つまりパフォーマンスに儀礼、舞台劇、カーニバル、人類学のモノグラフ、絵画の展示、映画といった様々な文化の象徴的行動や形態がある。」<sup>18)</sup>と述べているように、思考の潜在的な枠組を形成するための神話を象徴的に伝達するものがパフォーマンスであるとい  
.....  
える。さらに、V. Turner一派のJ. J. MacAloonは、「文化的パフォーマンスは、単なる娯楽や教訓ないし、説得の定式やまた放縦な憂さ晴らしなどを越えるもので、一個の文化あるいは、一個の社会として我々が自らを鏡に映し出し、自らを定義し、その集合的神話と歴史を劇化し……」<sup>19)</sup>と  
.....  
いっているように、共同体における神話を文化的パフォーマンスがシンボリックに表現し、我々の神話的思考の基盤となっていることがわかる。

このように文化的パフォーマンスがシンボリックに神話を伝達するという考え方は、見世物についてもあてはまる。

山口昌男は、見世物について以下のように述べている。「見世物とか、娯楽はそれ以外の空間で起こることの極めて強度に圧縮された暗喩（メタファー）としての性格をもっている。実際に携わっている人には、真剣な闘いであっても、競技が見世物としての性格を持つのは競技の当事  
.....  
者の技芸、知力、フォームが鑑賞の対象になる外に、競技が人生の闘い  
.....  
の再構成だからである。」<sup>20)</sup>すなわち、演じる側と見る側の分離の中で、見る者は、日常の人生の再構成、メタファーとして競技を見るとい

うのである。見世物としてのスポーツが人生のシンボルとなっており、  
見る者は自分の人生に沿って解釈するというわけだ。このような視点から、中沢新一は、見世物芸を特異な「言語活動」としてとらえその分節構造、統辞法、意味論、修辭法などを吟味しつつ、見世物芸が演じられる場合は、観客が下位コード群を複雑に組み合わせた芸のメッセージを、  
観客と芸人が共有するコードを使って、解読している「コミュニケーション行動」であるとする。<sup>11)</sup> 中沢は、メッセージを構成する芸を、視覚、聴覚、嗅覚などと共に、i) 言語メッセージ(チラシ、看板に書かれたもの、呼び込み、口上) ii) 演者の社会的行動(舞台に上がってくる時、演技の最中、退場の際に見せる会釈や笑いのようなしぐさ) iii) 演者の着る衣装 iv) 小道具類 v) 演者が芸の最中に行う技術的行動(アクロバットや軽業) vi) 伴奏音楽 vii) 照明効果の構成要素、から慎重に選択し組み合わせたものであるという。<sup>12)</sup> そして見世物芸は、一般に「テキスト」とよばれているもの — 口頭や文字が伝達する自然言語によるメッセージが構成するもの — と同一の形式的特性を備えており、メッセージの表層的構造の背後に、その一貫性と理解の可能性を支えている深層の関係システムが存在し、この深層のシステムが、具体的な事物によって構成される表層構造よりも抽象的な性格をもっているとする。<sup>13)</sup>

この点「サーカス演芸は、大衆がいだいている世界観の体系をまるごと表現する傾向があり、私たちがそれを通して世界を有意味な体系として了解するすべての基本的カテゴリーを、さまざまな方法で具体化してみせるのです。サーカスを宇宙論的にみれば、芸の構成要素は基本的カテゴリーのクラスの象徴または記号であり、観客がそれを認めること自体、既にコード解読過程の重要な部分をになっているのです。サーカス



の演芸は即座に理解できます。というのも、それが私たちの文化を一定の方法で反復表現しているからです。サーカスは限定された時間と空間  
 . . . . .  
 の中で、文化の全体像の把握を可能にしているために、人々に満足感を与えることができるのです。」<sup>44)</sup> と P. Bouissac が述べているのは重要である。見世物芸は、観客にどんな意味を伝達しているのか。それはなぜ観客に衝撃や快楽を与えることができるのか。という問いに対して見世物が、言語の象徴システムと同じようにそのコンテクストをつくる社会・文化システムを支えている意味論 — 統辞法 — としての論理の諸関係を自在に操作し、組織的な変形を加える記号論的テキストであり、社会・文化システムに対して「二次的システム」を形づくると考えられるとする。そして見世物芸が注目されるのは、このように人々の「リアリティ」を基礎づけている文化的構造に組織的な変形を加えることによって「観客と文化との安定した関係を危機に陥れる」ような侵犯性を秘めているからだ」と結んでいることは、見世物芸の位置づけと共に、その分析視点を明確にしている点で参考になる。<sup>45)</sup>

Roberto Da Matta などは、見世物、演劇性をもったものとしてスポーツを分析しているが、それについては次節 3. スポーツ・シンボリズム論にゆずる。しかしながら、文化的パフォーマンスとしてスポーツを  
 . . . . .  
 捉え、ここから思考の枠組を供与すべく神話を把握できることはこの R. Da Matta そして V. Turner<sup>46)</sup> から明らかである。

#### (4) 現代社会における神話研究 — 方法としての記号学を含めて考える —

儀式や物語としての神話が未開民族の中で営まれ、育まれる中で、人間が生きるべき基準や思考の枠組を学習してきたことは、文化人類学の

研究から明らかである。この流れの中で、本研究が依拠する立場は、C. Lévi-Straussに始まる神話的思考として、物語の神話に限らず思考の枠組、意味の体系を形作るべく神話が、文化的パフォーマンスや見世物によって、シンボリックに伝達されてきているというところにある。

ここにおいて、神話は常に物語として未開民族の中に存在するだけでなく、現代社会の人間においても普遍的な思考としてとらえることができる。こうした点で、神話を分析する際、山口昌男は記号学の有効性を次のように述べている。

山口昌男は、文化における中心部分ではない周縁部分すなわち、社会的規範に反し、混沌とした行為をヤン・ムカジョフスキー（チェコ構造美学の理論的指導者）の言葉をかりて、美的機能といった。<sup>17)</sup>そして

「神話はより根源的に美的機能が表面化しているために神話的思考を分析することは、社会及び文化の深層を理解できることになる。……このシステムの中では、社会的効用のレベルや論理一貫性といった閉じた記号系列の中の整合性を圧倒しているため、日常生活の中では結びつかないような、2つのかけ離れたもの、対立している項が結びつくことが可能になるのであって、人間は美的機能のそうした働きを想像力というのである。」<sup>18)</sup>とした上で、「行為の主体が、特定の現象の様々な特性を明らかにし、利用するために、環境をどのように要素に還元して、どのような枠組で理解するのかというモデルの構成を行うのが、（美的）機能であり、それは行為の主体に対して様々な形で、潜在的に存在する。」<sup>19)</sup>といている。つまり美的機能を持つ神話が重層性を持って様々な表現されるというのである。そして一方、記号の論理において、「ラングとして主導的な立場、秩序、ヒエラルキーを構成する構造（デ



ィスクール)の構成単位である記号を考えると、人が意識的に記号を利用する際に与える定義による意味作用だけでなく、形態そのものの  
.....  
快・不快を含めた選択の原理を経た主体の意識とのかかわり合い方としての意味作用のあることに注意を喚起しようとしている。」<sup>51)</sup>と述べ、  
.....  
このようなレベルでの意味作用が表層的な意識よりも、下意識の反応に  
.....  
よって生じる場合が多いことを指摘している。山口昌男はさらに、ムカ  
ジョフスキーの語を引用して「個人の意識の基礎はその最も内奥の諸層  
.....  
に至るまで、集団意識に属する諸内容の刻印を受けていることがますます明瞭になってきている。それゆえ記号と意味の諸問題がますます緊急  
.....  
となってくる。なぜなら個人の意識の限界を越えている精神内容はすべて、それが伝達可能であるという単なる事実によってもう既に、記号と  
.....  
いう性格を獲得する。」<sup>52)</sup>という。集団意識に属する諸内容の刻印を受けた個人の意識を越えたものが記号によって表現されているというのである。

以上のような美的機能の多重性と記号の潜在的なレベルをも表現する働きは、美的機能(神話)と記号の論理を結びつける。「美的機能が作動しうるのは、記号の持つそうした重層的現実への関係性の故である。  
.....  
記号は、それが本来持つ多義性の受容可能の性質において、多重的機能の担い手たり得るのである。それはとりもなおさず記号が規範に対する  
.....  
外的な侵犯の受け入れの媒体になり得る条件にもなる。記号は、その多  
.....  
義性によって記号を使用する主体が、本来意図していない意味作用を沈  
.....  
澱させる。一定の意味作用が潜在的に形成された結果、潜在的な意味作用が関連し合って、更に明確な記号を求めるに至る。」<sup>53)</sup>と述べ、人間の意識以前の感情のレベルをも含めて、潜在的な意味作用としての美的機能(神話)を記号が表出することを言明している。

この記号学によって神話を捉えるアプローチから、フランスの記号学者であるRoland Barthesは現代における神話を記号学から次のように定義している。

R. Barthes は、記号学のデノテーション/コノテーション図式から、  
.....  
神話を、「自然化されたコノテーション」とし、人間の共同体において  
.....  
言語的言表を同じやり方で解釈し、反復され、固まって存在する意味濃  
.....  
度のある言説、事物であると定義している。<sup>53)</sup> すなわち、ある事物の  
意味を、固定化し、限定されたコードで意味解釈することによって、意  
味の複数性に眼を向けないで、その意味が「自然のものだ」として解釈  
されるものを神話と呼ぶのである。（詳しくは、第2章 1. 本研究の  
方法論的根拠 — 方法としてのRoland Barthesで述べる）

こうしたことから、神話は、<sup>イメージ</sup>像やストーリーの束から構成された、我々の意識の表層を決定するための思考の枠組 — モデルであって、ひとつの共同体においてその集団意識の中で、「固定化」したコノテーションとして、共通の解釈を呼び起こす作用を持つものであるといえる。

本研究では、これらから以下のように語を定義して、神話の概念を明確にする。

・シンボリズム；様々なイメージ、心情、価値、ステレオタイプを内包したある事象・事物が別の事象・事物で表現されていることをいい、人々の共通の関心と価値を体現しているもの。社会の道徳的秩序を個人に理解させるための媒介物と考えられる。<sup>54)</sup>

・文化的パフォーマンス；日常と異なった時・空間と秩序のもとで、一個の文化あるいは、一個の社会として我々が自らを鏡に映し出し、自らを定義し、その集合的神話と歴史を劇化し、様々な代替（オル



タナティヴ)案を自らに提示するもの。<sup>55)</sup> 通常の思考、体の動きにおいては気づかなかった隠れた意味を引き出し、表現するものである。<sup>56)</sup> 特に、V. Turnerは、「儀礼、祝宴、カーニバル、祝祭でのゲーム、見世物、パレード、スポーツ・イベントが感情移入、共感、友情、愛といったものを人間に表現させ、そこから世界認識を可能にする。」<sup>57)</sup> と述べている。

- ・見世物；競技の当事者の技芸、智力、フォルムが鑑賞の対象となることに加えて、人生の再構成として日常空間で起こることの強度に圧縮された暗喩（メタファー）であるもの。従って見る者は、自分の人生に沿って行為を解釈していることになり、世界観がそこから認識できる。<sup>58)</sup>

- ・神話；<sup>イメージ</sup>像やストーリーの束から構成された、我々の意識の表層を決定するための思考の枠組 — モデルであって、ひとつの共同体においてその集団意識の中で、「固定化」したコノテーションとして、共通の解釈を呼び起こす作用を持つものである。

以上から神話は、文化的パフォーマンス、見世物の文化的営為を通して、シンボリックに我々人間に伝達され、思考の枠組を構築する媒体であるといえる。文化的パフォーマンスとしてスポーツ・イベント（甲子園野球）も考えられ、それらに多くの人々が釘付けにされるのは、神話が伝達されているからだという仮説がここに成立するわけである。

次節では、このような視点からスポーツをひとつの文化的パフォーマンスまたは見世物と考え、シンボリックに神話を伝達させるという認識

に立つ先行研究を考察する。

### 3. スポーツ・シンボリズム論 — スポーツにおける文化的パフォーマンス、見世物、神話論 —

ほとんどの研究は、なぜそのスポーツがその国や地域で行われており、人々を熱狂させるのかという根本的な問題に基づいている。そこでは、基本的にスポーツをシンボルとしてとらえ、社会構造とのかかわりの上でコスモロジーを表現した見世物、儀礼、文化的パフォーマンスとしてスポーツを考えることが支配的である。どれも、スポーツが社会的・文化的な価値等の意味の伝達と解釈の過程を含んでおり、儀礼の特徴をふまえて検討しているもの、または演劇性（ドラマティゼーション）から考察しているものである。

#### (1) Clifford Geertz: Deep Play: Notes on the Balinese Cock-fight<sup>89)</sup>

Geertzは、バリ島の闘鶏が社会において中心的な感情の爆発、階級闘争、哲学的ドラマを象徴的に表現し、バリ人が何なのかを明らかにできるものであるという見地にたって、闘鶏を分析した。通常動物をきらい、残虐にさえ扱うバリ人が、闘鶏においてその飼い主の象徴的表現が鶏であると考えていることから、Geertzは闘鶏が、神—人間—動物といったコスモロジーの転倒であり、バリ社会を象徴的に照らし出すとする。そして、賭けの構造が社会構造の反映であり、コスモスの再秩序化が闘鶏によってなされると述べている。注1)

#### (2) Roberto Da Matta: 社会の〈内なる〉スポーツ 国民劇・国民祭としてのフットボール<sup>90)</sup>



Robertto Da Matta は、Victor Turner, Max Gluckman の日常生活のルーティンでは明確に抽出され得ない関係性、価値、思想などに注意を向けさせる性質をもつドラマティゼーション（演劇形式化）の概念を用いて、演劇的形態としてフットボール及びスポーツ一般を研究し、さらに Clifford Geertz の(1)に掲げた論文を参考にして、フットボールがブラジル社会の独特な社会制度を成員に感知させるための特別の媒体であるとしている。根本問題としてスポーツを実践したり、スポーツについて思いをめぐらせているときに我々は一体何を語っているのかを考えることで、スポーツと社会との関係性と意味を見い出すことができるとする。具体的には、フットボールの競技で何故これほどまでに一体感を我々は持つことができるのか、という疑問を呈している。結論としては、ブラジルにおけるフットボールは、社会的宇宙の一連のドラマティゼーション（演劇形式化）の場を提供するものであって、我々の注意を魅きつけ特定の社会制度の中に滞在し、通常目に見えない一定の価値基準、理念といったものを顕在化させ、繰り返し提示し、その発見を容易ならしめる機能をもち、フットボールがブラジルの社会的宇宙における生の意味、運命処世術の役割といったことに関するメッセージを運ぶ有意義な媒体であるとする。そして、非日常的な時・空間での①フットボールにおける運と偶然性から運命を、②即興性と個人技から自己表出、個人的に傑出しようとする志向を、③国旗や国歌のもとに集結する集団志向性、④固定的かつ不可侵のルール of 平等性から、ブラジル社会の階層や個人間の差異を隠蔽するという意味がコミュニケーションされていると述べている。

(3) 山口昌男；相撲の宇宙論<sup>61)</sup>

山口昌男は、相撲の儀礼、記号論的側面、組織は、近代化以前の村落レベルでの儀礼、コスモロジー、あるいは民俗儀礼、歌舞伎における演技と共通のルーツにたどりつける要素の組み合わせではないかという問題意識から相撲を記号論的に分析し、そのコスモロジーを明らかにしている。ヘア・スタイルとしての鬘、褌及び化粧廻し、横綱などは近代の均質的時間の流れを止める作用を果たしているとし、また土俵は能と共通点をもつある意味で、演劇の舞台の延長であると言及しながら、屋根から下がった四つの房の意味を考察している。そして、相撲が日本の民俗レベルでの想像力において河童という幻想的動物と深く結びついているところから河童の民俗的宇宙における位置を山地(冬) — 水界(春)、出産 — 破壊という対立構造で説明した後に、相撲のもつ対立の構造(東 — 西、山 — 川、天 — 地など)は、民俗的想像力の中の有効な  
.....  
枠組として、文化の中の現実の様々なレベルで潜在的に存在する様々の  
.....  
対立する要素を記号化し、表面化し、遊戯の世界に組み込むための枠組を提供していると結んでいる。

(4) Victor Turner; Liminal to Liminoid, in Play, Flow and  
Ritual: An Essay in Comparative Symbolism <sup>62)</sup>

V. Turnerは、van Gennepによる通過儀礼における三つの局面(分離、過渡、統合)への分離から、過渡の儀礼がどっちつかずの期間と地域性をもち、前後の社会的地位や文化的属性が乏しいある種の社会的中間状態(social limbo)であると把握した。そしてこのリミナリティの状態は、個人が社会的に獲得した役割や地位や位置のひとつのシステムから構成される社会秩序の枠組であるところの「構造」 — 日常的な社会秩序 — に対する「反省作用」をもち、社会「構造」に対する「反構造」



の世界（社会的な義務、拘束から解放され、全体が同質化し、差異が消滅する世界）であり、本質的な人間のきずなが確認されるコミュニタス——コスモロジーの原則が動くところ——であるとする。このコスモロジーの原則こそが社会の「構造」に影響を及ぼす原構造システム(proto-structural system)であるという。このようなコスモロジーは産業革命以前の社会において儀礼、神話、民話といったもので把握できたが、産業革命以後の社会では、演劇、詩、小説、バレエ、映画、スポーツ、芸術、ポップアート、クラシックミュージックなどレジャーの領域（リミノイド）で体现されていると述べている。現代社会におけるスポーツの位置をリミノイドにおき、世俗的な現実の逆転や社会的・文化的モレスや政治的秩序の支持・強化などの働きをなすといったどっちつかずのものと言及している点は、シンボルとしてのスポーツを考える上でも参考になる。

(5) Susan Birrell: Sport as Ritual: Interpretations from  
Durkheim to Goffman<sup>(3)</sup>

S. Birrell は、スポーツが社会的に重要な現象であるのは、それが儀礼としての付帯的な意味をもっているからだとし、以下のように儀礼としてスポーツを考える理由を上げている。①今日のスポーツが、豊饒の  
.....  
まつりや宗教的セレモニーに起源をおき、宗教的意味は失われているが、  
.....  
その形態が残って新しい意味を帯びていること。②スポーツの儀礼的な  
力、スポーツを通じて得られる個人の満足とコミュニティーの社会的  
ニードの両方に注目することから強調されること。③社会学、人類学、  
社会心理学における儀礼の性質と意味の研究の適用ができること。

そして儀礼としてのスポーツが、



①個人がお互いにコミュニケーションする行為に従事する社会的状況において、彼らのおかれている場での役割、価値、役割期待をスポーツの場で  
．．．．．  
象徴的に表現されること。

．．．．．  
②社会的セレモニーとして構造的にシンボリックリーダーの創造、英雄  
．．．．．  
的な行為のディスプレイのための場として提供されることで、スポーツ  
が宗教的セレモニーの社会的機能を満たすこと。

の2つの側面から検討される必要性を示す。そして、①については、  
Goffmanのふるまい (demeanor) と服従 (deference) の概念から社会的  
．．．．．  
役割を演じる自己と他者との相互作用が道徳的秩序の重要な価値を再確  
認する視点で、②についてはDurkheimのコミュニティーの道徳的秩序と  
そのメンバーとしての個人を媒介するものとしてのシンボルの概念で、  
それぞれ理論づけしている。そして日常の相互作用における観念化され  
た役割パフォーマンスの代表として、又セレモニーにおける聖なる人物  
．．．．．  
として、ヒーロー (=アスリート) が表出し、社会の重要な価値である  
．．．．．  
勇気、不撓不屈の精神、誠実さ、そして落ちつきを提示する意味のある  
社会的人物であるとした。

スポーツを社会の道徳的秩序と個人を媒介するシンボルとしての儀礼  
ととらえ、社会的役割の代表であるヒーローが重要な価値を提示する  
というこのS. Birrell の考え方は、V. Turnerのリミノイド状況に位置づけ  
られるスポーツの位置と異なるが、重要な価値をシンボリックに示す  
という点で参考になる。

(6) Alyce Taylor Cheska; Sports Spectacular: The Social  
Ritual of Power <sup>64)</sup>

A. T. Cheskaは、現代における見世物としてのスポーツ (例として元旦

のRose Bowl, バスケットボールトーナメントのMarch Madness, 南アメリカのサッカーの試合、オリンピックなどを挙げている）が、儀礼と同様に物的な媒介物（objective vehicle）によって人間の力を表現し、  
コミュニケーションする場であるにとらえ、儀礼のメッセージが個人的、主観的に個人によって理解され、共有されると考える。そして①見世物としてのスポーツを儀礼と考えられるか？②イベントが伝達するシンボリズムとしてのメッセージは何か？③見世物としてのスポーツの形態は現代人にとって神聖なる儀礼としてのコムニタスか？という問題を提起している。そして、以下のように語の定義をしながらまとめている。

儀礼としてのスポーツ：スポーツの要素である「アゴン」が儀礼のルールとしてあり、不均衡な関係 — 差異 — を生み出す点は、儀礼とスポーツどちらにも共通する。また、スポーツイベントは力を表現し、プレーヤーの身体的性質や操作、そして他者の抑制をすること、さらに善 — 悪、秩序 — 無秩序、男 — 女という二項対立が表現されるという点でも儀礼と共通する。

見世物（Spectacular）もしくは、スペクタクル（Spectacle）：大規模な公的ショーもしくはディスプレイであり、ドラマチックな大胆さとスリルがあること。多くの人の感情的な伝染は、スペクテイターとしての群衆の肉体的な伝染（bodily contagion）である。

見世物としてのスポーツ：スペクタクルやスペクテイターは、スポーツ・イベントで考えられるとき、ファン（fan）として用いられ、それはローマ時代、神殿（fane）で神感を受けたことでその人々が「狂信的になった（fanatic）」ことに由来する。すなわち、周期的なスポーツ・イベントは、大規模な感動的な公的ショーもしくはディスプレイと考えられ、見世物そして社会的儀礼と呼ぶにふさわしいものだ。



そして、次に儀礼の特性を明確にした上で、それとスポーツ・イベントとの特徴の類似点を指摘する。

儀礼の特性 (Klapp から) : 現実的な儀礼もしくは儀礼の形態は、言葉で言い表せない社会的価値の情緒的な経験を規定し、伝達する際に重要な機能をもつ。つまり、儀礼はそれらに含まれている通常の解釈されている意味をコミュニケーションするシンボリックなメッセージを運ぶのである。この点シンボリックなメッセージを運ぶ見世物としてのスポーツは、儀礼の要素をもつとする。そして、儀礼の要素は①反復性②規則正しさ③情緒的であること④ドラマ⑤シンボリズムであり、スポーツイベントはこれらの要素をもっていることを具体的事例を挙げて説明している。

伝達されるメッセージとしては、消費力、性的差異、ヒエラルキー的社会、そして総合的な人間の力をあげており、特にマス・メディア(テレビ)の影響によってその見世物性がますます顕著に示され、シンボリックなメッセージや文化的コードが強調されてコミュニケーションされるという。さらに、V. Turnerが産業革命後の社会において芸術、スポーツ、ゲーム、余暇の時間に儀礼的な統合の感情(コミュニタス)が経験できるといっていることを取り上げ、儀礼とスポーツイベントとの類似性を述べている。

見世物としての現代のスポーツが、儀礼として考えられ、社会的価値をシンボリックに伝達するといっている点は、彼の語の定義共々重要である。

(7) Mary Jo Deegan, Michael Stein; American Drama and Ritual:

Nebraska Football 65)



M. J. DeeganとM. Stein は、なぜネブラスカ州の人々がフットボールに熱狂するのかを考える時、フットボールがそこに住む人々の自己を確立する儀礼であるにとらえ、V. Turnerのリミナルとコミュニタスの概念をして、E. Goffman のドラマツルギーのパースペクティブを結合することから理解しようとしている。

彼らは、E. Goffman の理論を、社会における人間の相互作用は常に自己と他者との対立の関係と解し、人々の相互作用は絶えず強いキャラクターとそれに犠牲になるキャラクターが存在し、差異ができるとする。しかしこれに対してV. Turnerは日常とは別の人間の結合された部分がリミナリティ状況においてみられるとし、人間の本質的なつながりが表現されるコミュニタスがスポーツにおいて存在するという。

M. J. DeeganとM. Stein は、社会のシンボルとしてのフットボールは、上記のふたつの理論が結合して人間の本質的なきずなの回復の側面と、相互作用において差異がみられるという側面の両方のシンボル性がある  
.....  
としている。そして、フットボールがアメリカの価値 — 勝利、バイオ  
.....  
レンス、官僚主義、性差別、商業主義、愛国心 — をもたらすという。

ここでも、儀礼としてのスポーツイベントが特別テレビによって操作されている点を強調している。

(8) Margaret Carlisle Duncan ; The Symbolic Dementions of  
Spectator Sport <sup>66)</sup>

M. C. Duncanは、スペクテイター・スポーツが以下の6つのことをシンボリックに表現しており、このことからスペクテイター・スポーツが人々にとってどのような意味をもたらすかをさぐろうとしており、以下の6つの特徴を挙げている。①人生、生活の投射であり、ドラマチック

なモデルであること。②人間の限界性の超越 — スーパースターである競技者と自己との同一視。③産業化社会への抵抗 — 現代の非人間的な社会の圧政に対するシンボリックな抵抗。④美的経験の象徴的アピール — 他の領域で欠如している美しさ、正確さ、調和への欲求の充足。⑤宗教的な付随的意味。⑥政治的要素 — 政治的なイデオロギー、宣伝の手段。しかしながら、これらについての具体例、方法についてはいっさい触れられていない。

(9) Richard Lipsky ; Toward a Political Theory of American Sports Symbolism <sup>61)</sup>

R. Lipskyは、スポーツが政治的、社会的環境における価値のシンボリックな表現であり、現代社会において資本主義のエトスー競争、協同、平等主義ーがスポーツにおけるフェアプレイ、スポーツマンシップ、民主的ルール、勝負に反映しているとする。また反面、スポーツは、理想的領域であり、現実世界とはかけ離れているが、人々は現代社会の合理化、機械化の波にのまれ、人間間の絆が次々と切られていく中で、それと対照的で審美的・道徳的なスポーツの世界に理想を求め、スポーツイデオロギーの中のチームワークや協同の価値に逃避し、より人間的で共同体としての絆を深められる世界としてのスポーツを求めると言う。従ってスポーツの世界は非日常的世界において本質的な価値を見い出すことができ、シンボリックな表現の場であるというのである。

(10) Scotto Kilmer ; Sport As Ritual: A Theoretical Approach <sup>62)</sup>

S. Kilmerは、儀礼を、①型にはまった崇拜であり、②神聖な祭典で、偉大なる不思議な力をもった神聖な行為である。そして③儀礼的なイベ



ントで遂行される行為は様式化され、反復的なものであると特徴づけた上で、「コミュニティーのもっとも意図された感情は、儀礼において解き放たれ、心の奥底の要求や苦しみ、そして集団的な意志の必要性と結びついて適当な言葉で言い表せない思考を行為によって表現する」(E. O. James, 1933)としている。すなわち儀礼は、④通常的、日常生活のシンボリックな思考としての行為から成り立つという性質を帯びていることになる。一方、神話は、①文化的な信念や経験の確認と正当化を行い、それ故②人間の信念体系にとって基本的なものとして重要な文化的経験を確認するものである。そしてさらに③思考の無意識的な側面のものがある。と定義されている。次に、儀礼と神話について、神話の本質的な真実は感情的な意味としての状況、そしてそれ以上に、繰り返される性質としての状況を具体化し、その状況を提示する儀礼の反復を要求すると述べ、神話と儀礼が分離されないことを言及している。その上で、儀礼は、神話的なテーマとして扱われ、集団の形態を表現するもので、神話に表現されている多くの思考を、社会的イベントとして提示するという。

これらのことより、大規模なスポーツイベントが儀礼の装いをもち神話のテーマを表現しており、ドラマチックで感情的な状況で行われるとしている。Huizingaは、スポーツの世界を聖なる世界として“magic circle”と呼んだが儀礼が非日常の時・空間で様式化され、反復するものであるのと同様の性質をスポーツが持っていることは確認できる。そしてアリーナは、パラダイムが、メタファーやシンボルに変わる具体化した状況であり、アリーナでのすべての行為はシンボリックな意味をもつととらえた上で、「見世物としてのスポーツは、神話の精巧なページメントであり、基本的な文化的倫理を示し、国家的、共同体的な無宗教



者の儀礼として強調され、昇華されたものである」という。

以上、スポーツにおけるコスモロジー、シンボリズム、見世物についての先行研究を概観したわけであるが、(表1-1. 先行研究のまとめ 参照) スポーツをどのようにとらえるかについて若干の相違がみられる。すなわちV. Turnerのリミノイド状況 — 現実とは異なる「反構造」を提示し、現実を逆転し、グロテスクで実験的な組み合わせをする反面、社会的文化的モーレスや政治的規則の支持、強化、正当化をするという両義的性質をもつもの — でどっちつかずの性格をもった過程ととらえること。もうひとつは、まったくの社会構造のドラマチックな反映(もちろん社会構造をここから批判的にとらえられる)として、深層的、潜在的メッセージが表現されていることである。しかしながら、このどちらもが、スポーツは非日常的な時・空間でドラマとして、儀礼として、社会のシンボリックなメッセージ=神話を伝達するものであるといえよう。そして、この非日常的な時・空間としてのスポーツ・イベントにおける神話の伝達によって、特別、テレビの影響力が大きなものであることが明確であり、スポーツのテレビ中継における神話の側面からのアプローチは意義あるものと考えられる。また、C. Geertzが闘鶏の象徴的意味をフィールドワークから「厚い記述」を行い、それによって明らかにしたことは、シンボルの意味解釈の実証方法として貴重なものであり、また、山口昌男が、相撲について記号学と歴史からその意味作用を述べたことは、視点及び方法論として有効と考えられる。

表1-1. 先行研究のまとめ

author	C. Geertz (1983)	R. M. J. J. (1983)	山口昌男 (1983)	V. Turner (1983)		E. Lipky (1983)	S. Kilmor (1979)
Key word	コスモロジー	ドラマティゼーション コスモロジー	コスモロジー	リミナリティー リミノイド	ミ ニ マ リ ス ト	シンボルとしての スポーツの位置	儀礼としてのスポーツ 神話と儀礼の関係
theoretical framework method	参与観察 ↓ バリ社会の コスモロジーを 解明する	V. Turner H. Gluckmanの ドラマティゼーション の理論 ↓ C. Geertzのバリ島の コスモロジー理論 ↓ ブラジル社会の ドラマティゼーション としての フットボール	記号学における 二項対立的な コスモロジー の解明 ↓ 国家に 社会の構造をみる	動的過程として の社会の 捉え方  リミナリティーで コスモロジーが 把握できるとする  今日、リミノイド = レジャー領域 (スポーツ、芸術 演劇等) で 社会構造と異なら ず「反構造」どっち つかずの性質が みられる。	ミ ニ マ リ ス ト E. M. I.	スポーツが 非日常の世界で 現実を投影する こと。	見聞物としてのスポーツは、 神話の精巧なバージョン であり、基本的な文化的論理を 示す儀礼である。  神話は儀礼において表現される。
symbolic message (myth)		①運と偶然性 →運命 ②即興性と個人性 →自己表現、個人性 の表現 ③集団志向性、平等 不可侵のルール →階級、個人間の 差異の隠蔽			① ② ③ ④	資本主義の エトス=競争、平等 、協同のシンボリック な表現としての スポーツ	

さて、以上の先行研究の問題点をあげてみれば、ひとつは、神話が儀礼としてのスポーツから見い出されるとしているにもかかわらずどのようなメカニズムで成立しているのかについて触れられていないことである。そして、実際にスポーツ・イベントを見ている人がどのようなコンテキストにおいて解釈をしているのかについての実証研究がC. Geertzの他に行われていない点があげられる。そして、そのスポーツ・イベントが歴史的に形成してきたものをふまえて解釈されることも考慮すると、これらの先行研究には、そのスポーツ・イベントについての歴史的考察も欠けていることになる。

以上の先行研究をふまえて、スポーツ・イベントの神話について分析する際、その神話の生成・解釈のメカニズムを探究することを目的として、まず歴史的な神話性を踏まえた上で、神話生成に重大な影響を及ぼすところのテレビ・スポーツについて分析し、さらに、神話の解釈を踏まえてコンテキストにおいて人間とそのスポーツ・イベントとのかかわりを実証的に行うといった3つの側面からのアプローチが必要であるといえる。そこで、3つの側面の中で、スポーツ研究の中でこれまで行われてきた、テレビ・スポーツと神話についての先行研究を次節で、検討してみることにする。



#### 4. テレビ・スポーツと神話

ここでは、特に以下の5つの研究が参考になると思われる。橋本純一、R. H. Prisuta、A. ClarkeとJ. Clarkeは神話の概念を用いていないが、文化的規範として視聴者に認められているテーマをマス・メディアが選択的に提供し、補強するという主張にもとづくものである。

- ・橋本純一……スポーツ紙、テレビによって搬送されるスポーツの意味と構造を分析し、支配的な価値やイデオロギーが伝達されたとする。<sup>60)</sup>
- ・R. H. Prisuta ……テレビ・スポーツへの接触が保守主義・権威主義・ナショナリズム等の政治的価値を伝達、補強しているということを調査で明らかにしている。<sup>70)</sup>
- ・A. Clarke, J. Clarke……テレビ・スポーツへの接触が競争を伴う個人主義、能率・生産性、社会的アイデンティティ、性役割といった価値を補強するという。<sup>11)</sup>
- ・M. R. Real……アメリカン・フットボールのスーパーボウルをテレビ中継することは、神話をつくり上げるとし、スーパーボウルの内的構造からも分析している。<sup>12)</sup>
- ・H. Himmelstein ……なぜ、テレビ・スポーツが価値システムを表すのかについて現代アメリカの神話から考察している。<sup>13)</sup>

この中から以下で、橋本純一、M. R. RealそしてH. Himmelsteinの研究を取り上げて検討することで神話研究の動向と問題点を明らかにし、本論文の分析枠組構築のための一助とする。

(1) 橋本純一；メディア・スポーツに関する研究Ⅱ — 記号論的研

研究の目的として、①メディア・スポーツのための記号論的パースペクティブの提示②方法論的な認識モデルの提供③そのモデルのメディア・スポーツへの適用をかかげている。そして、記号論の特性と現代における重要性を①文化科学 (Clutural Science) として、量的分析の限界から必然的相互補完的に要請される質的分析であること。②本来境界不明瞭な文化的社会的現象に対して、学問領域を越えた科学 (Meta-disciplinary Science) として全体的統合的な分析が必要なこと。③量的に測定不能な文化的社会的現象の深層的究極的次元の意味を、意味分析 (Semantic Analysis) として質的な分析が可能になること。と述べている。

実際には、大相撲のテレビ中継を図1-1.のような表現素分類で検討した後、Roland Barthesの意味作用の構造モデルにあてはめている。



図1-1. テレビ・スポーツにおける表現素分類

結果として、大相撲のテレビ中継は日本における支配的価値やイデオロギー、「ストイックな鍛練」「地域的アイデンティティ」「忍耐・根



性」「権力者への盲従」が特に音声によって示されるとする。

以上のような橋本の研究は、テレビ中継の表現素分類をした点で評価できるが、①テレビの内容についてのカテゴリー分類と量的分析を加えればもっと明確な結果が出たであろうこと。②意味作用について視聴者に関する具体的な分析、考察がないこと。などの問題点が指摘できよう。

## (2) Michael R. Real; The Super Bowl: Mythic Spectacle<sup>75)</sup>

この論文は、①なぜ、スーパーボウルは、8500万人のアメリカ人に見られ、もっとも人気のあるスポーツなのか？②メディア・スポーツはどのような点で古代の神話的儀礼と似ているのか？③スーパーボウルは、どのように現代の神話的儀礼の機能を果たすのか？④アメリカン・フットボールの内的構造はどのようなものであり、どのようにアメリカ社会の構造と対応するのか？⑤どのようにして、スーパーボウルがアメリカに特有の支配的な価値を伝達するのか？といった点を明らかにするためのものである。これらのうち、最終的に①の問題を解明しようとしている。メディアとアメリカの文化そして神話的儀礼の関係をみようというのである。

方法としては、1974年スーパーボウルⅧのテレビ放送のビデオテープを分析している。

結果としてはまずメディア・スポーツの神話的機能を以下のように述べる。

スポーツをメディアで媒介することで、現実世界では重要性のない世俗的なイベントを強力で、疑似神聖的な神話と儀礼的な性質を持つスペクタクルの地位へ上昇させ、生活よりも大きなドラマの感じを与えると



する。そして哲学者や人類学者の神話の機能に関する理論をあげ、スーパーボウルの解釈をしている。①Ernst Cassirerが、社会における6つの基本的シンボルシステムにおいて神話が位置づけられるといったこと。②Mircea Eliadeが、神話と儀礼の役割を、時・空間的な経験によって「聖」と「俗」に分離し、模範的なヒーローと同一視させるとしたこと。③C. Lévi-Straussが普遍的な神話的思考について述べていること。④Roy Rappaport のフィールド研究から、環境との調和をはかりながら生きるために、規則的、直接的なメカニズムとして神話の生態学的機能が明らかにされたこと。以上の理論から、スーパーボウルの経験は、「口頭での経験」である神話から生まれる儀礼的行為に参加することで集合的なエネルギーの解放を見、聞き、そして感じるという原始民族の踊りの輪と同様、集合的、神話的そしてより深層に存在する部族的な意識を解き放つものであるとする。そしてさらに、何百万人ものメンバーの伴う神話のスペクタクルは人間のより大きな生態系にとって重要な機能を果たすと述べる。また、個人的なストレスや不安を解消し、支配的な成功の価値を正当化し強化するといった「社会的鎮痛剤」の効果をスポーツがもつという。カラフルな映像、同時的な弁舌と音響の効果を基盤にして筋書きのない、予測のつかないドラマチックなものとして放送されるスーパーボウルは神話的儀礼としての特徴をもつのである。

次にスーパーボウルの神話的儀礼の機能について①個人的な同一化②ヒーロー的祖型 (Heroic Archetypes) ③共同体の中心 — スーパーボウルに集団的に参加しているのだという感情、スーパーボウルの話を様々な場所ですること、新聞や広告にスーパーボウルに関する記事が多く掲載されることなどスーパーボウルですべての人が様々な場所で結びついていることを自覚する。E. Cassirerなどが指摘するように、神話的信

念と儀礼的行為の本質は、集合的な参加の感情の中にあり、個人的な人間の潜在能力を超えた関心や力を共有する点にある。④時間と空間を定めること — アメリカ人は、神話的時間の聖なるサイクルがスポーツによって規定され、儀礼によって古代の人々が確認していた季節や時間をスポーツによって確認する。また「世俗的」な経験から逃避するためにスーパーボウルという「聖なる」イベントを必要とし、そこで聖なる世界を感じる。⑤生態学的な規則的メカニズム (Ecologically Regulatory Mechanisms) — 神話的な儀礼のサイクルは、輪作、狩猟の分割、人口、戦争、取り引き、部族の人々の環境とのかかわりをすべて規定するが、スーパーボウルは現代社会の経済システムでの商品の売買を規定する。(様々なコマーシャル、広告が資本主義の経済パターンを支持する。) といった5つのことを上げている。スーパーボウルは儀礼(神話的)として考えられた上に、以上のような機能をもつというのである。

そして、アメリカン・フットボールの特徴を挙げつつ、スーパーボウルがアメリカの社会や文化についての制度的、イデオロギカルな構造に相当するという。すなわち、アメリカン・フットボールは個人の経済的な躍進のための財産つまり金を独占するために、暴力とテクノロジーの両方を用いた男性の間で戦われる攻撃的で、厳しい規則をもったチームゲームであり、性的差別、人種差別、権威主義を含むまさに社会の構造と対応したものなのである。

M. R. Realは、以上のことをふまえて社会の構造と対応した内的構造をもつアメリカン・フットボールのゲームが神話的なスペクタクルのレベルに上昇することで、個人の生活意識を集団的な感情に転化し、支配的  
.....  
な価値を流布し、強化されとされている。フットボールの内的構造、そ  
.....  
こに含まれる社会や文化の支配的価値、神話的儀礼としての機能、メデ



.....  
ィア・スポーツの神話的功能から説明できると論じており、スーパーボ  
ウルは、文化的なそしてシンボリックな意味を持つ、コミュニケーション  
のイベントであるから何万人もの人を集めることができるというので  
ある。

この研究については、①神話的儀礼の機能を言及し、その類似性から  
スーパーボウルが神話的儀礼の特徴をもつとするが、儀礼と深く関係す  
る神話の定義がなされていないこと。②テレビの内容分析（映像・音声）  
をせず、具体的なデータなしにテレビの神話的儀礼を演出する効果を論  
じていること。③視聴者が実際にスーパーボウルをどのように意味解釈  
したのかについて論じていないこと。などが問題点としてあげられよう。

### （3）Hal Himmelstein; Live TV Sport and the TV Event<sup>16)</sup>

H. Himmelstein は、支配的なメディアを通して表現される日常の不公  
平な社会関係の根本的な事実（資本主義者と労働者との階級間格差など）  
をおおい隠し、支配的な資本主義制度固有の基本的価値を流布する神話  
を暴露することを目的とする。そのために、テレビが様々なジャンルで  
どのような意味を送っているのかをつきとめ分析し、我々が現実だと思  
い込む（思い込まれる）現実の描写について構造化された性質をあば  
こうとしている。

この論文では、イデオロギーと神話との関係を述べ、また人類学での  
神話の研究を概観した上でそれをもとに、現代の神話（といっても資本  
主義的イデオロギーを存続させるためのものだと言っているのだが）に  
ついて論じていること、さらにはテレビが作り出す神話についての分析  
視点を提示している点で参考になる。スポーツのテレビ中継における神  
話伝達を考察しているので、以下に概要を述べ検討したい。



H. Himmelstein は、イデオロギーを経済的政治的そして社会的現実を説明し、階級、集団（支配的集団）の集団的目標を確立する、ひとつのつくられた信念体系であるとし、神話はイデオロギー的な常識を文化的なプロセスにおける聖なる領域すなわち永遠の真実に変化させるものであると言う。従って神話は、現実としての社会関係をありのままに見せようとする反対のイデオロギーの効果を弱め、安定した世界を存続させるために機能すると論じている。（資本主義イデオロギー維持のための利益（金）第一主義、効率重視など）

次に人類学の視点から、神話はある社会の文化遺産のアウトラインを提供するいくつかのものごとを描いた歴史的あるいはたぶん歴史的なできごとから生じたものであって、繰り返されるテーマをもつ物語の形式として、また儀礼的パフォーマンスを表す文学作品やビジュアルアートの形で示されたものであるとした。そしてこれまでの神話が、「たいてい超自然的な人々、行為もしくは出来事を含み、そして自然もしくは歴史的な現象についての一般的な考えを具体化しているまったく架空の話」  
と定義されてきたことを批判し、神話は社会の起源を説明し、現実社会の制度、秩序などすなわち人間の行動モデルを提供する、生活に対する意味と価値を与えるまさしくその社会を表す現実だという。そして日常生活を切り離された時間の枠組にある儀礼や儀式を通して体験されるものだと述べる。

H. Himmelstein は、現代の神話が支配的イデオロギーを「自然なもの」として人々に受け入れさせる働きをもっているとして、神話を暴露することで社会的な現実の本当の姿を明らかにしようとする。この視角から、テレビ・スポーツについても分析されており、そこでのヒーローの創出、名声の賛美は、社会において支配的な価値である競争、勝利、永久的な

・・・・・・・・

進歩そして成功のみを取り扱い、誰もがスター選手になって富と権力を得られるということは神話だという。(給与を上げるよう現実に選手が組合を作り、交渉していることなどを例にあげる)そして、これらの神話がスポーツジャーナリスト、スポーツキャスターによって大げさに言われることで益々現実をおおい隠すという。また、オリンピックが政治と大企業のマーケティング戦略に用いられていることで、富や成功を得られるアメリカン・ドリームと大企業の力が特にテレビで賛美され、強調されているとする。

神話の暴露のためには①テレビのメッセージの構造を考えること。②メッセージの中に隠れている社会的、政治的、経済的な特質を検討すること。③視聴者の立場を考えること。④利潤追求と政治的な策略を計る特徴をもつ制度としてのテレビ局について考察すること。といった問題の解決が必要と言うが、これは提示するにとどまっている。

この研究については、①テレビ・スポーツがどのような内容で放送されており、どんな神話が作り出されているのか、具体的なデータを用いた実証がないこと。②神話暴露のための課題は提示されているが、立証されていないこと。といった問題点がある。



## 5. 先行研究にみられる視点と諸問題

以上のような先行研究の検討から本研究の視点がえられる。前提となる考え方は、スポーツ・イベントを文化的パフォーマンスとして捉えるというV. Turner及びJ. J. MacAloonの理論である。パフォーマンスの定義にもあるように、日常とは異なった時・空間と秩序のもとで、一個の文化あるいは一個の社会として我々が自ら鏡に映し出し、自らを定義し、その集合的神話と歴史を劇化し、様々な代替（オルタナティブ）案を自らに提示するものとしてスポーツ・イベントをとらえる。そして、山口昌男がいうような潜在的にある世界認識のための思考の枠組み — モデル — をそこで表現し、そこから解釈されるのである。これらから、文化的パフォーマンスとして考えられるスポーツ・イベントが神話を伝達するメカニズムを分析しようという本研究の理論的根拠が得られる。

スポーツ・イベントの神話伝達機能については、先行研究からテレビの影響が強いことがわかる。テレビ局が神話を作り、それを見て神話としてのメッセージを解釈するのである。この点について具体的な内容の質的、量的分析はなされておらず、その必要性が認識できる。そして、この量的分析を踏まえて、甲子園野球のテレビ中継を橋本純一の記号論的分析の理論とその枠組に沿いながら質的に分析していく必要があるだろう。

また、スポーツにおける神話のシンボリックな伝達と意味の解釈についてコンテキストに基づいた分析がなされておらず、解釈の場へのアプローチすることが重要である。フィールド・ワークの理論、解釈人類学からのアプローチが必要だろう。

そして、これらに加えて、スポーツ・イベントそのものが、これまで神話を歴史的に生成し、我々に解釈の基盤となるような枠組を作ってきた



たことを踏まえると、歴史的な分析が必要になる。

以上から、甲子園野球における我々が魅了されるのは、そこに何らかの神話伝達 — 解釈の一連のメカニズムがあるからだという研究の前提としての仮説のもとに、

1) 日本人がこれまで野球とどのようにかかわり合い、それをどのように享受してきたかといったような歴史的な流れを踏まえることで、現代の甲子園野球の神話の古層ともいえるような歴史的な神話形成に注目する。この野球 — 特別、旧制中等学校、高等学校の野球 — と日本人との歴史的なかかわりを考えることは、大正4年(1915)に創始した全国中等学校優勝野球大会(後の全国高等学校野球選手権大会)開催にいたるプロセスそしてそこで神話を生成した人々たちについての分析をすることになり、甲子園野球の歴史的な神話性について考察することになる。

2) 現代社会において、全国高等学校野球選手権大会のテレビ中継は、どのような神話作用を持つのか。

3) テレビによる神話作用を踏まえながら実際、生活の場で生活者が甲子園野球をどのように解釈しつつ、ひとつの「思考の枠組」として深層において甲子園とどうつながっているのか。まさに、文化的な脈絡(cultural context)において甲子園野球というひとつの文化的パフォーマンスとその地域の人間、生活者のつながりを考える。

以上のように、甲子園野球に我々が魅了されるメカニズムについて本論文では、以上の3つの側面から分析していく。歴史的に形成されてきた日本における野球についての解釈の古層、それを基盤にしながら現代におけるテレビの神話作用に影響されつつ、コンテクストで甲子園野球

は生活者にどのような意味をもたらしているのでしょうか。歴史、記号学、文化人類学におけるフィールドワークを方法論にしながら明らかにする。

文化的パフォーマンスとしてのスポーツ・イベントにおいて以上の点から、細かに実証されたものは今までのスポーツ研究の中にはなく、事実と直面しながら、具体的にデータを収集し、分析していく点が本論文の独自性になるう。

注【】Geertzは、闘鶏の賭けの構造を以下のように示している。（図は著者による。）

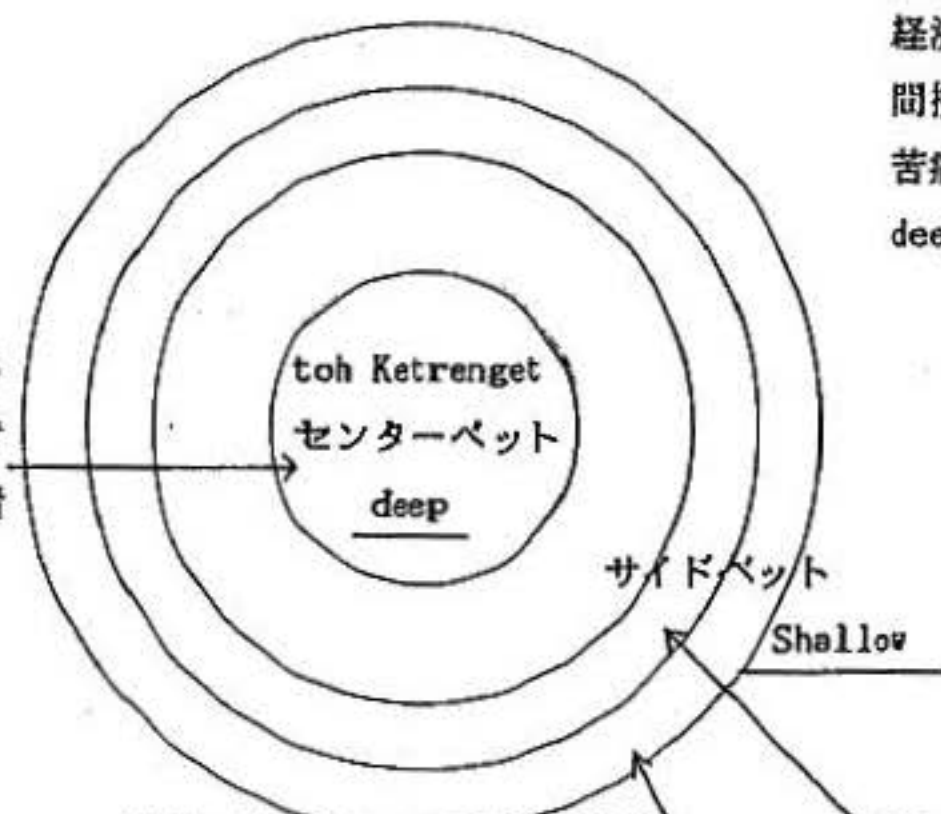
賭け金が多い。

コミュニティーの重要で裕福なメンバーすなわち村の中心的で信頼のおける人が大きな額のファイトで自分の鶏を戦わせたり、賭けることができる。

ここで試合をし、賭けることができる

のは、社会を支配する人々のみで、名誉あることである。

→Status gamble  
ともいわれる所以



経済的利害にかかわらず間接的に下される侮辱、苦痛がバリ人を楽しませdeepにさせる。

場外では、女・子どもなど闘鶏に参加していない人が、ルーレットやダイスで非常に小さな額で賭けをする。

中または少規模の額を賭けて行う人々。自分の鶏を出せる。が大きな額のファイトには賭ける資格がない。小さな額の賭けをする人々自分の鶏は、戦わせない  
→Money gamble



## 第1章 引用文献

- 1) 梶原景昭; 象徴論, 綾部恒男編; 文化人類学15の理論, 中央公論社, 1984, p. p. 205-207.
- 2) James G. Frazer; The Golden Bough, A Study in Magic and Religion, Abridged Edition, Macmillan, 1925.
- 3) Emile Durkheim; 古野清人訳; 宗教生活の原初形態(上)(下), 岩波書店, 1975.
- 4) Sigmund Freud; 高橋義孝, 下坂幸三訳; 精神分析入門(上)(下), 新潮社, 1977.
- 5) B. K. Malinowski, 寺田和夫, 増田義郎訳; 西太平洋の遠洋航海者, 中央公論社, 1967, p. p. 338-339.
- 6) 同上書, p. 340.
- 7) 同上書, p. p. 339-340.
- 8) M. Mauss, 有地亨ら訳; 社会学と人類学 I, II, 弘文堂, 1976.
- 9) C. Geertz, 吉田禎吾ら訳; 文化の解釈学 I, 岩波書店, 1987, p. 24.
- 10) E. Leach, 青木保, 宮坂敬造訳; 文化とコミュニケーション, 紀國屋書店, 1981, p. 9.
- 11) V. Turner, 今福龍太訳; リミナリティとパフォーマンスのジャンル, J. J. MacAloon編; 世界を映す鏡, 平凡社, 1988, p. p. 38-39.
- 12) J. J. MacAloon, 光延明洋訳; 文化的パフォーマンス, 文化理論, J. J. MacAloon編; 世界を映す鏡, 平凡社, 1988, p. p. 11-12.
- 13) 同上書, p. p. 28-29.
- 14) V. Turner, 大橋洋一訳; パフォーマンスとしての人類学, 現代思想, Vol. 9-12, p. p. 79-80, 1981.
- 15) 山口昌男; 見世物の人類学へ, 見世物の人類学, 三省堂, 1983,

p. 145.

- 16) Roger Caillois, 久米博訳 ; 神話と人間, せりか書房, 1983, p. p. 9-36.
- 17) Erich Fromm, 外村大作訳 ; 夢の精神分析 — 忘れられた言語 — , 東京創元社, 1971, p. p. 9-29, p. 203.
- 18) Victor Turner ; Myth and Symbol, International Encyclopedia of the Social Sciences 10, Crowell Collier and Macmillan, 1968, p. 578.
- 19) 同上書, p. 578.
- 20) 同上書, p. 579.
- 21) 同上書, p. 579.
- 22) 同上書, p. 579.
- 23) 同上書, p. 578.
- 24) 同上書, p. 578.
- 25) B. K. Malinowski, 国分敬治訳 ; 神話と社会, 創元社, 1941, p. p. 26-44.
- 26) 同上書, p. p. 154-155.
- 27) 同上書, p. p. 154-155.
- 28) V. Turner ; Myth and Symbol, International Encyclopedia of the Social Sciences 10, Crowell Collier and Macmillan, 1968, p. 578.
- 29) 松村武雄 ; 神話学言論 上巻, 培風館, 1940, p. p. 1-28.
- 30) C. Lévi-Strauss, 仲沢紀雄訳 ; 今日のトーテミスム, みすず書房, 1970, p. 166.
- 31) 同上書, p. 167.
- 32) V. Turner ; Myth and Symbol, International Encyclopedia of the



- Social Sciences 10, Crowell Collier and Macmillan, 1968, p.579.
- 33) C. Lévi-Strauss, 大橋保夫訳 ; 野生の思考, みすず書房, 1976,  
p. p. 21-27.
- 34) 同上書, p. 22.
- 35) 山口昌男 ; 神話の語るもの, 文化人類学の視角, 岩波書店, 1986,  
p. p. 134-157.
- 36) 山口昌男 ; 神話的始原児トロッキー, 歴史・祝祭・神話, 中公文庫,  
1978, p. p. 174-176.
- 37) 吉田敦彦 + 山崎賞選考委員会 ; 神話学の知と現代, 河出書房新社,  
1984, p. p. 30-40.
- 38) V. Turner, 今福龍太訳 ; リミナリティとパフォーマンスのジャンル,  
J. J. MacAloon編 ; 世界を写す鏡, 平凡社, 1988, p. p. 38-39.
- 39) J. J. MacAloon, 光延明洋訳 ; 文化的パフォーマンス, 文化理論, J.  
J. MacAloon編 ; 世界を写す鏡, 平凡社, 1988, p. p. 11-12.
- 40) 山口昌男 ; 見世物の人類学へ, ヴィクター・ターナー, 山口昌男編,  
見世物の人類学, 三省堂, 1983, p. 145.
- 41) 中沢新一 ; 街路の詩学, 思想, 1977年10月号, No. 640, 岩波書房,  
p. 127, 1977.
- 42) 同上書, p. 125.
- 43) 同上書, p. 128.
- 44) P. Bouissac, 中沢新一訳 ; サーカス — アクロバットと動物芸の記  
号論, せりか書房, 1984, p. p. 19-20.
- 45) 前掲書41), p. p. 136-137.
- 46) V. Turner, 大橋洋一訳 ; パフォーマンスとしての人類学, 現代思想,  
Vol. 9-12, p. p. 79-80, 1981.

- 47) 山口昌男；神話と想像力，知の祝祭，青土社，1977，p. 234.
- 48) 同上書，p. 234.
- 49) 同上書，p. 239.
- 50) 同上書，p. 240.
- 51) 同上書，p. 240.
- 52) 同上書，p. 241.
- 53) 花輪光；ロラン・バルト，みすず書房，1985，p. p. 122-123.
- 54) V. Turner，梶原景昭訳；象徴と社会，紀伊國屋書店，1981，p. p. 15-207.
- 55) J. J. MacAloon，光延明洋訳；文化的パフォーマンス，文化理論，  
J. J. MacAloon編；世界を写す鏡，平凡社，1988，p. p. 11-12.
- 56) V. Turner，今福龍太訳；リミナリティとパフォーマンスのジャンル，  
J. J. MacAloon編；世界を写す鏡，平凡社，1988，p. p. 38-39.
- 57) V. Turner，大橋洋一訳；パフォーマンスとしての人類学，現代思想，  
Vol. 9-12，p. p. 79-81，1981.
- 58) 山口昌男；見世物の人類学へ，V. Turner，山口昌男編；見世物の人類学，三省堂，1983，p. 145.
- 59) Clifford Geertz；Deep Play：Notes on the Balinese Cockfight，  
edit. by J. Harris and R. J. Park；Play, Games & Sports in  
Cultural contexts, Human Kinetics, 1983, p. p. 39-77.
- 60) Roberto Da Matta；社会の＜内なる＞スポーツ | 国民劇・国民  
祭としてのフットボール，Victor Turner，山口昌男編，見世物の  
人類学，三省堂，1983，p. p. 246-287.
- 61) 山口昌男；相撲の宇宙論，Victor Turner，山口昌男編，見世物の  
人類学，三省堂，1983，p. p. 317-326.



- 62) Victor Turner; Liminal to Liminoid, in play, Flow and Ritual :  
An Essay in Comparative Symbology, in Play, Games & Sports,  
Human Kinetics, 1983, p.p. 123-164.
- 63) Susan Birrell, Sport as Ritual ; Interpretations from Durkheim  
to Goffman, in Social Forces, Vol 60-2, 1981, p.p. 354-376.
- 64) Alyce Taylor Cheska ; Sports Spectacular : The Social Ritual  
of Power, Marie Hart and Susan Birrell ; Sport in the Socio-  
Cultural Process 3rd. Edition, Wm. C. Brown Company Pub., 1981,  
p. p. 368-383.
- 65) Mary Jo Deegan, Michael Stein ; American Drama and Ritual :  
Nebraska Football, International Review of Sport Sociology,  
Vol. 13-3, 1978, p. p. 31-44.
- 66) Margaret Carlisle Duncan ; The Symbolic Dimensions of Spectator  
Sport, Quest Vol. 35, 1983, p.p. 29-36.
- 67) Richard Lipsky ; Toward a Political Theory of American Sports  
Symbolism, Edit. by J. C. Harris and R. J. Park ; Play, Games &  
Sports, in cultural contexts, Human Kinetics, 1983, p. p. 79-92.
- 68) Scotto Kilmer ; Sport As Ritual : A Theoretical Approach,  
Association for the Anthropological Study of Play, The Study  
of Play : Problems and Prospects, Leisure Press, 1977, p. p.  
44-49.
- 69) 橋本純一 ; メディア・スポーツに関する研究Ⅱ, 筑波大学体育科学  
系紀要 Vol 19, 1986, p. p. 43-52.
- 70) R. H. Prisuta ; Televised Sport and Political Values, Journal  
of Communication Vol 29-1, 1979, p. p. 94-102.

- 71) A. Clarke, J. Clarke : Highlights and action replays-Ideology, sports and the media, Edit. by J.Hargreaves ; Sport, Culture and Ideology, 1982, p.p.62-87.
- 72) Michael R. Real ; The Super Bowl : Mythic Spectacle, in Mass-Mediated Culture, Prentice-Hall.Inc., 1977, p. p.90-117.
- 73) Hal Himmelstein ; Television Myth and The American Mind, Live TV Sports and the TV Event, in Television Myth and the American Mind, Praeger, 1984, p.p.1-8, p. p. 233-252.
- 74) 前掲書69) .
- 75) 前掲書72) , p. p.90-117.
- 76) 前掲書73) , p. p.233-252.



## 第2章 研究の方法及び分析枠組の提示

### 1. 本研究の方法論的根拠 — 方法としてのRoland Barthes —

前章の先行研究から、甲子園野球が、人々を魅了するのは、文化的パフォーマンスとして何らかの神話を伝達しているからだという理論的前提が導き出せる。そして、その神話がどのように作られ、どんなメカニズムで伝達され、実際、我々がそれをどう解釈しているのかについて具体的に実証していくことが必要であることが明らかになった。そして、このような命題について、先行研究の検証から、1) 甲子園野球の神話を形成するに至った歴史 2) 現代におけるテレビの神話作用 3) 実際の文化的脈絡（コンテクスト）での解釈といった3つの側面からアプローチすることが不可欠であるという認識を得た。

この節では、まず2) テレビの神話作用分析 — 方法としての記号学から — 3) 実際の文化的脈絡（コンテクスト）での解釈 — 方法としてのコンテクスト分析から — についての方法論的根拠をRoland Barthesの理論から示す。

R. Barthes は、記号学のデノテーション/コノテーション図式（図2

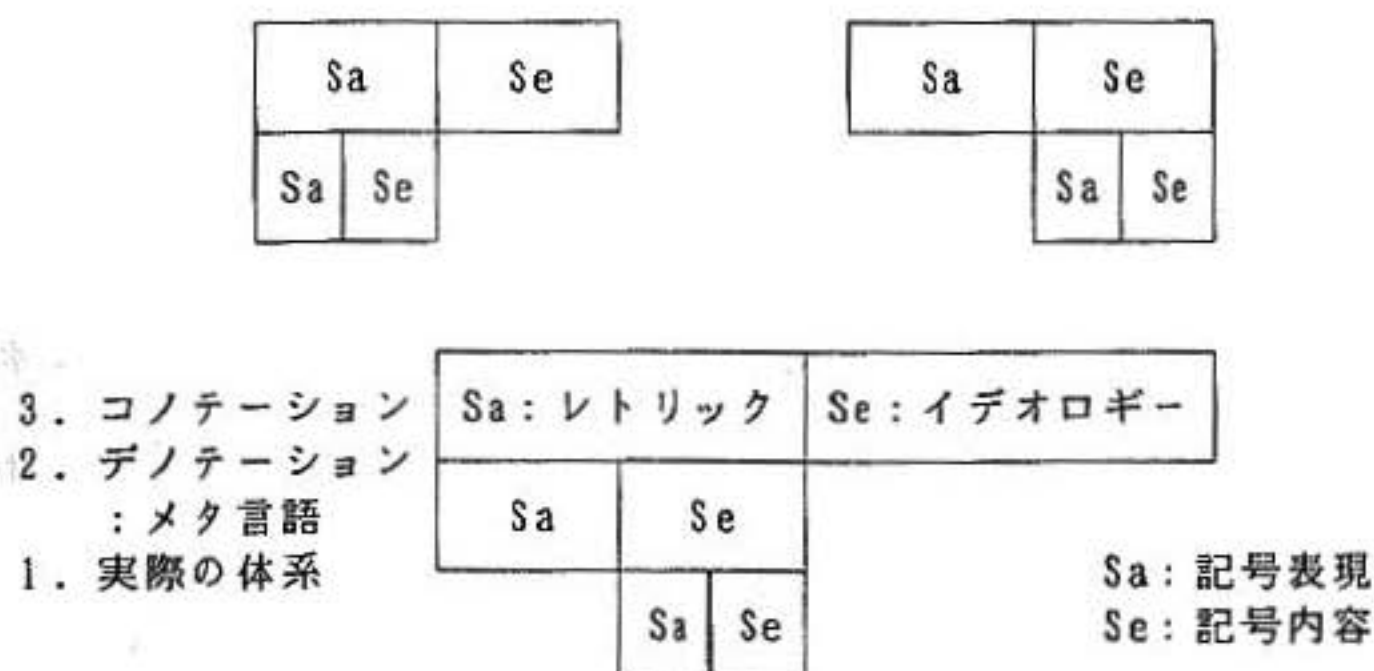


図2-1. デノテーション/コノテーション図式

ー 1. )<sup>1)</sup> から神話を「自然化されたコノテーション」とし、人間の共同体において言語的言表を同じやり方で解釈し、反復され、固まって存在する意味濃度のある言説、事物を神話と定義している。<sup>2)</sup> ある事物の意味を固定化し、限定されたコードで意味解釈することによって、意味の複数性に眼を向けないで、その意味が「自然のものだ」として解釈させるものを「神話」と呼ぶのである。「自然化され」固定化された高校野球＝青春＝汗と涙……やスポーツ＝すがすがしさ……といった意味解釈の図式がR. Barthesのいう「神話」といえる。そして、彼は図 2-1. 記号学の図式から神話のモデルを構築し、それによって神話を暴露したのであるが、実際に生きている人間が、共同体の場でその神話をどう解釈し、日常生活でどうそれと関わり、意味づけているのかについて、神話のモデルにあてはめるだけでは分析できないことがわかる。ここに、記号学ではとらえきれない神話分析の方法が必要になるわけだが、R. Barthes が記号学からテキスト分析へと転位していったことことを踏まえ、本研究でも記号学そしてテキスト分析を方法論としてとる。

以下、R. Barthes の神話学から記号学、テキスト分析、道徳性、ロマネスクといった転位をみながら、本研究の方法の依拠する立場を明確にする。

#### (1) コノテーションによる神話学

R. Barthesの著述は、表 2-1. のBarthesの分類をみてわかるように社会的神話学から、科学的記号学の時代、そしてテキストの時代、さらにモラリテ、ロマネスク時代へと転位していく。



表 2-1. バルトの分類  
(花輪光; ロラン・バルト, みすず書房, 1985, p. p. 42-43.)

テキストとして	ジャンル	作 品
サルトル マルクス ブレヒト	社会的神話学	『零度のエクリチュール』(1953) 『神話作用』(1957, 1970)
ソシュール	記 号 学	『記号学の原理』(1965) 『モードの体系』(1967)
ソレルス ジュリヤ・クリステヴァ デリダ, ラカン	テキスト性	『S/Z』(1970) 『記号の帝国』(1970) 『サド, フーリエ, ロヨラ』(1971)
(ニーチェ)	モラル 道 徳 性	『テキストの快楽』(1973) 『ロラン・バルト』(1975)
(ブルースト)	ロマネスク	『恋愛のディスクール・断章』(1977) 『明るい部屋』(1980)

R. Barthes は「あらゆる社会関係」を言語関係としてとらえた。<sup>4)</sup>すなわち「ある事実がそこに導入されなければならない。」<sup>5)</sup>「事実」と「意味」は同時に与えられたものだ。事実なるものは存在しない。あるのはただ解釈だけである。<sup>6)</sup>として、人間が事物を解釈する言語の意味に絶対的価値をおく。この言語至上主義といえる発想は、R. Barthes が権力について語る時でも徹底している。Barthes にとって「権力」とは、何よりも「言語」の「権力」であった。言語に寄生するものとしての「権力=奴隷性」であった。言語(文法)と言説(修辞)のレベルの相違を問わず、いたるところに見い出される「複数の権力」、「規則や拘束や強制や抑圧であり、社会関係のあらゆるレベル、きわめて些細な機構のうちにも潜んでいる「支配欲」である。」<sup>7)</sup>だから、彼は文学や講義の形式でさえ、ある一定の意味が固まってしまう、秩序化されてしまうことに極端に嫌悪感を抱いた。たえず、意味解釈が「固まらず」「固ま

ったものを粉碎すること」、意味を「はぐらかすこと」が「快楽」だったのだ。言語の規則性や意味の拘束性にいつも疑問の目を向けていたといえる。

従って、『神話作用』においてブチブルジョワジーの神話の告発、イデオロギー批判を記号学（コノテーション）で展開したのも当然である。Barthes にとっては、「イデオロギー」とは、少なくとも「ステレオタイプ」である。それは「反復される」ものであり、「固まって存在する」ものである。<sup>91</sup>（「イデオロギーの体系」は、彼によればすべて「異常に固まった言語活動」である。<sup>91</sup>）そして、神話を以下のように定義し、社会、文化を言葉すなわち意味の世界ととらえながら、社会的神話と権力について述べていく。

彼によれば、「神話」とは、「自然化されたコノテーション」と見ることができる。「神話的言説」とは「濃度のある言語活動」のことであって、「慣習、反復、ステレオタイプ」等々でおりなされた濃密な言語活動である。（「ある言語共同体、つまりあらゆる言語的言表を同じやり方で解釈するある人間集団の言語活動」といえる「集団言語」は、最も神話的な言語活動<sup>101</sup>）なのである。）Barthesは、「神話」は、人為的に生み出された「ステレオタイプ」が社会の欺瞞によって「自然化され」「本来の意味」となったものであって、それは恣意的（人為的）でありながら、強制されていく<sup>111</sup> ところに権力を見、その神話を明るみに出し、破壊することに目標をおいたのだ。そして、「イデオロギー的なもの」を、「自然なもの」としてしまふ、つまり「言表のまったく偶発的な根拠」が「良識」、「規範」、「世論」として通用することになってしまふ「自然化作用」を「神話作用」と呼んだ。<sup>121</sup>

それでは、この神話作用はどのような方法で分析が可能になるのか。



R. Barthes は記号学から論じている。以下に詳しくみてみよう。

C. Lévi-Strauss 及び Saussure の影響を受けて、Roland Barthes は、記号論的視点から以下の要領で神話を定義している。

L. Hjelmslev は、すべての記号体系は「外形 (Expression)」と「内容 (Contenu)」を持ち、これらふたつの間の「関係 (Relation)」が意味作用に相当するとし、それぞれを E, C, R とあらわした。そしてこの E C R という体系が今度はもうひとつの体系の単なる要素となり、第 1 の体系が第 2 の体系にはめこまれる場合を考えると、ふたつの完全に異なった形で起こるふたつの対立した集合体が生じる<sup>13)</sup> これらふたつの体系が「入れ子」体系である。(図 2-2. 参照)

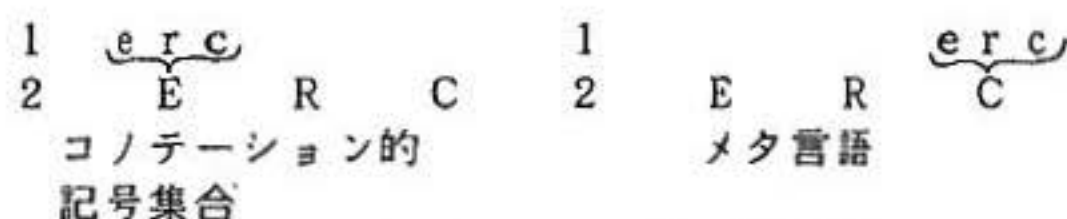


図 2-2. Hjelmslev の入れ子体系



図 2-3. R. Barthes の意味作用のモデル

そして、R. Barthes は、Saussure の記号表現と記号内容の概念をこれに適用して図 2-3. のように意味作用の構造をモデル化した。コノテーション的記号集合とは、外形の面がひとつの意味作用の体系によって作られた体系であり、メタ言語は内容の面がひとつの意味作用の体系である。<sup>14)</sup>

すなわち、神話とは、図 2-4. で示すように第 2 の意味の体系、す

なわちコノテーションである。つまり、現実に行っていることの表面的意味を、言語学—言語体系のレベルを総体化して、その最終要素が第2の体系の能記となり、第2の意味作用が形成されるレベルのことである。<sup>15)</sup>

そして、神話作用とは、神話をつくり出し、それを伝達する媒体の働きなのである。

Sa 1	Se 1	
Sa 2		Se 2
Sa 3	レトリック・修辞	Se 3 イデオロギー・観念形態

図2-4. 神話のモデル

## (2) コノテーションからテキスト分析へ

デノテーション／コノテーションの図式を用いて、ブルジョワジーのイデオロギー批判を行い、権力化への抵抗を記号学的に分析し、暴露してきたBarthesは、1968年5月革命以後、あらゆる「メタ言語」に疑問を呈し、言語学の支配下にある「静態的な構造主義」から抜け出して、いわゆる「テキスト理論」のほうに向かう。68年前後の「知的社会」では、イデオロギー批判そのものが、ひとつの「神話」となり「イデオロギー」となってしまったことが第一の要因である。「ある（生活の、思考の、消費の）形式がもつブルジョワ的ないし、プチブルジョワ的性格を告発しない学生は今やひとりもない」<sup>16)</sup> という状況になり、「権力は、権力に異議を唱えようとする解放の動きの中にさえ存在する」<sup>17)</sup> といった危機感が現実のものとなってしまったのである。第二の要因としては、コノテーション／デノテーションの図式において、言説をモデル化し、その構造にはめこんでしまうことが、解釈を固定化してしまう



ことにつながるという点に Barthes が気づいたということが挙げられよう。ひとつひとつの事実、事物にそれぞれ「唯一絶対的な意味」を認めることは、言語の規則に従うことになるというのである。<sup>18)</sup>

Barthes は、C. Lévi-Strauss に記号学が物語という 1 個の文学的対象に本格的に適用できる可能性を見、J. Kristeva に記号学におけるパラダイム性とテクスト相互連関性という新しい概念を見い出す。<sup>19)</sup> そこから、構造化した枠組においてひとつの固定化した意味を生み出すコノテーションの記号学を越えて、「無限の（循環的な）《書き替え可能性》<sup>20)</sup>を保持でき、各辞項の果てしない相互関連と相互引用を主体が実践していく。世界は、様々な言語活動が変遷回帰し、様々な意味体系の戦いが繰り広げられる 1 個のテクスト以外のものとしては考えられない」<sup>21)</sup> というようになる。すなわち、「あらゆる記号表現は他の記号表現に送り返す、記号の過程（セミオーシス）が無限に続く。」<sup>22)</sup> というのである。ひとつの事象・事物をデノテーション／コノテーション図式を構造化したモデルにあてはめ、意味を固定化してしまう記号学から、事象・事物をひとつのテクスト（Barthes は、テクストを非常に些細な出来事にも注目し、見えないようなネットワークから編み出されたような、果てしない相互関連と相互引用の結果、記号表現の織物として、最も表層のところにあるものと定義した。そして、様々な主体が、様々な意味をそこから解釈し、テクストを無限に脱構築していく実践を「テクスト理論」として示したのである。）からとらえ、主体によって意味がいくつにも複数生成されるその場へ焦点を当てることになったのである。

以上のことは、清水が全国高等学校野球選手権大会のテレビ中継をコノテーションの構造化されたモデルの中で意味解釈したものが、静的で、固定化してしまう限界性を持つということを認識させる。（テレビの画

面や音声の内容からモデル（図2-4、参照）に従って「一所懸命さ」「努力」「友情」「郷土意識」という意味を理解できても、そのように解釈が生成する要因を深く探れずに終わってしまう。）従って、「意味生成の場」といえるような主体自身の解釈の無限の可能性とその現場にアプローチしなければならないのである。

### （3）社会をテキストとして捉えること — コンテクスチュアリズムの可能性 —

テキストは、古典的意味において、ただひとつの安定した意味を読みとらせるよう配列した、語の織物、文学作品の現象的な表面と定義されてきた。テキストは、作品の中にあって①記載されたものの安定性と永続性が、記憶のもろさと不明確さを補う役目を持ち、②他方では、作品の作者が意図的に作品にこめた意味の否定しえない、消しえない痕跡と考える合法性を持つ文章なのである。<sup>23)</sup> すなわち、この意味でテキストは、時間や忘却に対する武器として、また歴史的に無数の制度つまり法律、「教会」、文学、教育などと密接に結びついて、<sup>24)</sup> ひとつの歴史的事実と出来事が、記号（字句、パラグラフ、章）の媒介によって分析、解明された唯一真実と考えられるものなのである。

しかし、R. Barthesは、B.A.W. Russell, L. Wittgensteinの論理学が、真実のひとつではなく個々人で異なるという個人の心的把握（現象学）に注目したこと、そしてプラハ学派、R. Jakobsonの仕事から、言説の伝統的分類区分が修正され、文学が詩学の名のもとにそっくり言語学に移行したこと、さらにF. Saussureが記号学を確立していく上で、文を構成する諸要素（連辞、形態素、音素）から、文すなわちパラグラフを越えて、一冊の本ともいえるような全体としてのイメージにまで解釈の範囲



を拡大したことに影響を受け、新たな「テキスト理論」を確立するに至った。文のひとつひとつを取り上げて解釈することよりもその文脈、物語の構造から意味解釈を考えるものである。

ここで重要なのは、以上のBarthesのテキスト理論を、文学、言語学でのみ適用するのではなく、社会をひとつのテキストとして読み取っていくことである。この視点によればテキスト理論は、ひとつの文化的、社会的出来事、事実（人間の営為）を直接的、表層的な情報のみで考えるのではなく、それ以前または同時期の様々な人間のネットワークや出来事に関係づけながら、それまで捉えられていなかった人間の営みを浮かび上がらせ、文化、社会、歴史の定説的、固定的解釈を再編成する実践である。といってよいだろう。テキストはその語源をtextureすなわち織物という意味があるように、社会の様々な人間の営為、常識、共同幻想、神話を編み上げたものと考えられる。テキスト分析は、社会におけるこの編み目、ネットワークを文脈から把握するものといってよい。Barthesは、J.Kristevaのテキスト理論を参考にしながら、その主要概念を以下のように述べている。①記号表意的実践 — テキストは記号表意的実践であること。主体と「他者」との葛藤、社会的コンテキストが同時に一挙に投入されたある労働によって意味作用が生産される実践である。②生産性 — テキストは、テキスト生産者と読み手による生産行為である。既に書かれている（固定されている）言語に働きかけ、新たな言語を再構築する。③意味形成性（シニフィアンス） — テキストは、いくつもの可能な意味が交錯する多義的空間と見なすことができる。この意味形成性（シニフィアンス）においてテキスト《主体》は、エゴ=コギト（われ=思う）の理論を逃れ、他の論理に巻き込まれ、意味と格闘し、自己を解体していく（《自己を見失ってゆく》）ひとつの過程で

ある。④表層テキストと深層テキスト — 表層テキストは、《具体的な言表の構造の中に出現するとおりの言語現象》であるのに対し、深層テキストは、《表層テキストを構造化する、言表行為を表出する人間の営為における主体の構成に固有の論理的操作の示される場である。（表層テキストの意味形成を行う場なのだ。）》⑤テキスト相互関連性 — テキストはすべてそのテキストの周りに既に存在したかまたは現に存在し、最終的にはそのテキストの中に存在する他のテキストやテキストの断片を換位する相互関連性を持つ。<sup>201</sup>

これらのことから、社会をテキストとして見る場合、我々は主体によってテキストの意味解釈は複数あり、絶えず新たな意味が生成され、また既に存在する他のテキストとの相互関連性を考えなければならないことを示唆される。そして、表層テキストでは見えない、深層テキストにおける構造化の論理を考えることが必要だということがわかる。

R. Barthes がコノテーションの神話学からテキストへとその焦点が転位していったことを見ると、先にも述べたように甲子園野球の神話分析としてテレビ中継された映像と音声の内容をコノテーション・モデルにそって記号論的に分析、考察することが、静的で固定化した意味解釈しかできない限界を持つという認識が得られよう。また、意味解釈は、まさにテキスト理論で示したように、主体によって様々であり、その社会的テキストの相互関連性によって異なることから、意味解釈の現場へアプローチする必要性が出てくる。

そこで、甲子園野球のテレビによる「神話」生成の記号学的考察の限界性を踏まえ、甲子園とつながりの深い地域に赴き、その地域の深層のコスロジを捉えながら、生活者の甲子園野球の意味解釈を分析するといった方法をとるに至る。



こうしたことから、神話の記号学的分析とテキストとしてのフィールドワーク — 解釈の現場への注目 — との両方にスポットを当てることが神話作用を分析する際必要であることの根拠が理解できよう。

これらを踏まえた上で、次節では本論文の方法について述べる。

## 2. 本研究の方法

本節では、甲子園野球の神話がどのように作られ、どんなメカニズムで伝達され、実際我々がそれをどう解釈しているのかについて具体的に実証していくに際して、先行研究の検討ならびに R. Barthes の理論から得られた3つの側面でのアプローチ、すなわち、1) 甲子園野球の神話を形成するに至った歴史 2) 現代におけるテレビの神話作用 3) 文化的コンテクストの地平における神話作用の実証のそれぞれについての方法論を述べる。

### (1) 甲子園野球の歴史的な神話形成について

甲子園野球の現在ある神話を分析するに際し、その神話の端緒となる歴史に眼を向けなければならないことは先行研究の検討からも明らかである。この点について、C. Lévi-Strauss は、「神話的思考は器用人<sup>フリコマン</sup>であって、出来事、いやむしろ出来事の残片を組み合わせて構造を作り上げる」<sup>26)</sup> とし、通時態を踏まえて共時態 — 構造が作られることを述べている。これは、現在の神話的思考あるいは神話解釈の基盤として、通時性に眼を向けることの必然性を言及しているものといえる。

このように考えると、甲子園野球の共時的に持つ神話を形成するに至った歴史については、過去において日本人が野球（特に、中等学校（高等学校）の野球）をどのような思考と観念のもとに行っていたのかに焦点を当てるのが、現在、我々が甲子園野球の集合意識、共通の解釈といった思考の枠組としての神話分析にとって有効であるといえる。

その点、菊幸一は、特定個人の持つ「信念」、特定集団の持つ「信条」を踏まえて、「ある程度理念的に整序されているところの観念の形態及



びその体系」をイデオロギーと捉え、この視点からプロ野球の成立過程について歴史区分を行い、歴史社会学的に分析している。<sup>17)</sup> 本研究は、この菊の歴史社会学的分析を踏まえて、以下のような方法と枠組で分析する。

- 1) 全国中等学校優勝野球大会開催に至るまで、特別、中等学校野球界において中心となった学校の野球に対する観念を分析しながら、移入期からの野球観を考察すること。
- 2) 全国大会を主催するようになった朝日新聞社及び全国中等学校野球連盟の理念を明らかにすること。
- 3) さらに、その理念をめぐって、今日まで行われてきた全国中等学校優勝野球大会史及び全国高等学校野球選手権大会史における神話生成のプロセスについての分析すること。

甲子園野球の神話について、このような分析枠組で通時的に分析することで、神話形成のプロセスが理解できよう。

## (2) テレビによる神話作用の分析について

ここでは、マス・メディアの理論を概観した後、具体的な分析枠組を提示しながら方法論を述べる。

### ① マス・メディア理論と神話分析

マス・メディアの理論は、今日 Denis McQuail がメディア理論マップで示している<sup>18)</sup> ような観点から論じられ、(図2-5. 参照) メディアと社会(政治、経済、法律、教育、宗教、文化など)、メディアの制度と組織、メディアの内容、メディアの受け手と効果といった側面で研究がなされている。

そしてD. McQuailは、アプローチの仕方として、

- 1) 「全体的」、「トップダウン」といわれるアプローチ。メディアの「システム」としての一貫性ないし統一性を前提とするもの。様々な知識を生産・組織する制度としてのメディアの源泉や決定因としての「社会」に対して目を向けるもの。これは、マクロ・アプローチと考えられ i) 大衆社会論 ii) 経済学的メディア理論 iii) 「ヘゲモニー」理論 iv) フランクフルト学派の理論などが示される。
- 2) メディアの内容すなわちメディアによって典型的に、あるいは最も頻繁に提示されるテキストと意味の世界に焦点を当てたアプローチ。  
— 単なる内容分析にとどまらず、視覚的あるいは視聴覚的な要素を含むメディアの「テキスト」を分析し、解釈するための手段として急速に発展している。メッセージの内容も重要であるが、内容の持つ意味は、その受容と利用の社会的・文化的な背景に基づいて解釈される場合が多いため「社会文化的」研究として重要であるとする。
- 3) メディア理論マップに表された相互関係と諸要素の複合体としてのメディアに対して、公衆の選択、選好、動機づけ、利用について注目するアプローチ。



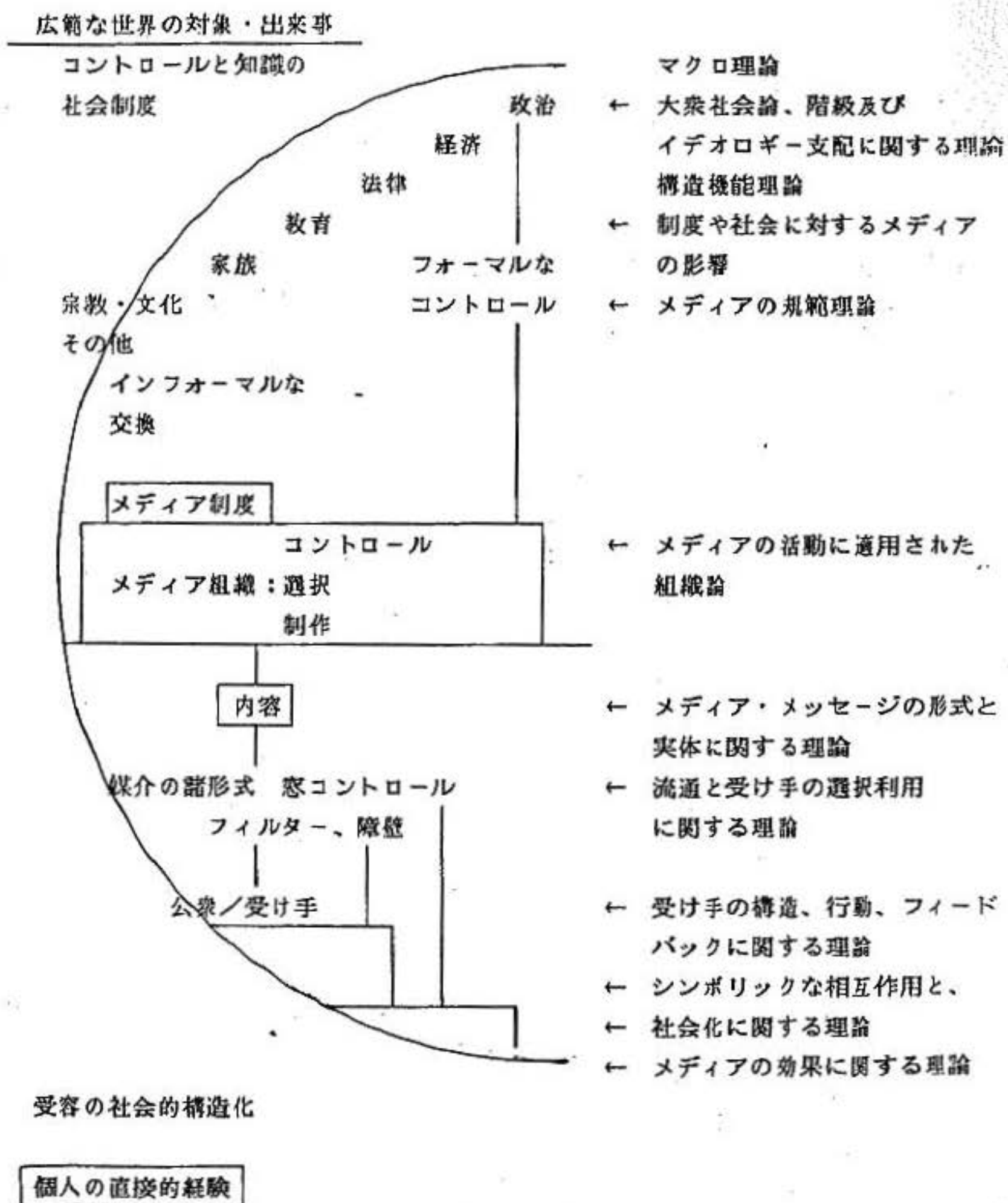


図 2-5. メディア理論マップ

の3つを上げている。本論文では、社会的・文化的な背景に基づくメディア内容の意味作用 — 神話 — について考察するため特にメディア内容の分析とその手法について更に詳しく D. McQuail の理論を検討する。

メッセージすなわち内容に焦点を合わせた理論は、その中心テーマとして、・メッセージそれ自体を明らかにすること。・メッセージの内部構造と意味作用の手段を明らかにすること。・文化全体に対するメッセージの関係を明らかにすること。を持ち、マス・コミュニケーションの一要素だけに関係するものではなく、実際にはメッセージの源泉となった社会に関する我々の知識を明らかにするため3つのアプローチの中で最も重要であると D. McQuail は述べている。<sup>29)</sup>そして、マス・コミュニケーション過程における最も具体的かつ明快で、また最も研究に対して開かれている要素は「テキスト」それ自体であるとし、「テキスト」を用いたメディア研究の基礎となる記号学の理論について、Roland Barthes と Umberto Eco を上げて言及している。その理論の基礎は、「ある言語の規則は、そのもとになっている文化の内部構造により決定され、制約されるから、任意の与えられたテキストは、それなりの『好ましい読み方』を提供している。従って、我々がその文化についてよく知ることができるならば、我々はその意味を理解することができる。」<sup>30)</sup> という考え方であり、以下に挙げる3つの特徴がある。

- 1) メディアの「テキスト」についての細心の研究から読み取れる「意味」は、必ずしも製作者によって意図された、あるいは受け手から  
・・・・・・・・・・・・・・・・  
引き出されたものとは、一致しない。それは、シンボル体系の論理から導き出される、所与の客観的意味だと仮定されていること。
- 2) このアプローチは、テキストの持つ顕在的、表面的、あるいは字義どおりの意味を扱うものではなく、主として意図された、あるいは



.....  
意図されなかった潜在的、内包的な意味を扱うものである。

- 3) このアプローチは、書かれた言葉の分析だけに限定されるものではなく、写真、音声、身振りなど、意味を運ぶために意識的に利用されるすべての手段にまで拡張される。<sup>31)</sup>

本論文では、テレビ中継における神話を分析するが、その際記号論を用いることは、潜在的な意味やシンボルそして書かれた言葉だけでなく写真や音声、身振りまで意味解釈できるという上記の特徴からしても妥当性、有効性を持つといえよう。

では、次に具体的なメディアの内容分析の手法について触れよう。メディアの内容分析は、大きく分けてふたつの手法があり、ひとつは、B. Berelsonを代表とする伝統的な内容分析といわれもので、もうひとつは、R. Barthesを代表とする先ほどから述べている記号論的分析である。D. McQuailのこれについての記述をまとめると以下のようなになる。

伝統的な内容分析は、コミュニケーションの明示的内容を、客観的・体系的及び量的に記述するための研究技法であり、基本的なアプローチの仕方は以下のとおりである。

- 1) 内容の母集団やサンプルを選ぶ。
- 2) 研究目的に適合した外的指示者のカテゴリー枠組を設定する。
- 3) 内容から「分析単位」を選ぶ。(単語、文、項目、記事、写真、シーケンスなど)
- 4) 選んだ内容の単位ごとに、カテゴリー枠組の諸項目への言及の頻度を計数し、それによって内容とカテゴリーの枠組とを対応させる。
- 5) 追求対象である指示物の出現頻度が、母集団やサンプル全体でどう分布しているかという形で結果を提示する。

しかしながら、このアプローチにはいくつかの限界が示されている。

ひとつは、この方法を用いる前に、カテゴリー・システムを構築しなければならないが、その際研究者が内容からカテゴリーを「取り出す」のではなく、自分自身の意味システムをあてはめてしまう危険性があること。第二には、出現頻度が顕出性や意味の唯一の指標ではないこと。言及の文脈の側面もかなり重要であること。第三に、信頼性及び明示的な意味が本当に明示的なものであるという仮定に関する問題が数多くあることである。<sup>32)</sup>

更にD. McQuail は続けて、このような問題点を克服すべく、記号論的分析は、伝統的な内容分析と比較すれば以下のような特徴を持つという。それは、

- . . . . .
- 1) 記号論的分析は、量的ではない。数えるという方法で、意味に到達し得るという考え方には批判的ですからある。意味とは、関係や対比や文脈に由来するものであり、言及量とは関係のないものと考えられるからである。

. . . . .

  - 2) 記号論的分析は、顕在的な内容よりも潜在的な内容に注意が向けられており、潜在的な意味の方が、実質的な重要度は高いと見なされていること。
  - 3) 記号論的分析は、サンプルの手続きに重きを置かず、また伝統的な内容分析の場合のように、すべて内容「単位」を同等に扱うべきだという考えや、同一の手続きが異なるテキストにも同じように適用可能だという考えはとらない。
  - 4) 記号論的分析は、社会的・文化的「現実」の世界、メッセージ、受け手が持つ基本的な意味システムがすべて同一であるという仮定はとらない。社会的現実、数の多少から互いに独立した意味作用より成り立っており、各々は別個に説明する必要がある。



という点である。<sup>33)</sup>

最後に、記号論的分析が、神話の解明に役立つことを次のように述べている。「原理的には、聴覚映像（記号表現）と記号内容とを持っているものはすべて記号として作用する。個々の記号は、その意味をひとつには、言語学や記号システムのコードで規定された体系的な差異、比較、選択から、またふたつには、文化と記号システムの規則が与えるところの（正や負の）価値づけから、それぞれ得ている。記号論は、これまで文法や統語の規則を超えて、テキストの複合的・潜在的・文化依存的な意味を規定している記号システムの性質を探究してきた。そのため、  
.....  
直示的意味（denotative meaning）と同様、内包的意味（connotative  
.....  
meaning） — 記号の特定の用法や組み合わせによって喚起され、表現される連想やイメージ — にも焦点を当てなければならない。こうしたことは、文化に起因し、コミュニケーションにより伝承されてきた、古  
.....  
来からの何らかの価値を帯びた観念集合である神話の認識にも応用される。」<sup>34)</sup>

以上のような記号論的分析を、マス・コミュニケーションの研究領域で行うことで、その多くは、標準化し、反復的なものであり、かつある種の慣例やコードに基づいて組み立てられる隠れた神話をあばき出すことができるのである。

テレビにおいて潜在的な意味作用をもたらす神話が記号論によって捉えられることは以上から理解できよう。それでは、次に、テレビにおいて神話を取り扱った研究を検討する。

② Myles Breen, Farrel Corcoran : Myth In The Television

Discourse <sup>35)</sup>

M. Breen と F. Corcoran は、神話についての多くの分析が、文化とコミュニケーションの間の関係を明らかにするとした上で、神話の役割に注目することで、現代社会でイデオロギーが生まれそして消滅する方法を明らかにすることができるという。神話については、「信念を表し、儀礼を定義し、そして社会的な規則のチャートとして働くひとつの文化としてまとめられた叙述体である。」と定義した後、その機能を以下のよう  
に仮定し、テレビと関係づけて述べている。

#### 1) 知覚システムを作ること

社会的相互作用を組織する基本的な信念、価値、行動における関係をつくるのを助けるため、神話は新しい社会的状況に関する共通の社会的理解を生み出す。そこにおいてテレビは、その高い親密性と真実性の両方を持つひとつの媒体である故に、知覚に関する文化の支配的なモードをすべてのメッセージの中に作り上げる。

#### 2) 典型的なモデルの確立

社会にとっての典型的なモデルを作り上げ、構造化するためのパターンを確立する。映像メディアは、ヒーロー、ヒロインを創出し、そうすることで権力を持った人間のイメージに焦点を合わせる。テレビは新しいヒーロー的人物が登場することを求められながら、視聴者が同一視できるような、分有された大衆のイメージとしてヒーローを作り上げる。

#### 3) 争いの提示と仲裁

神話は、文化の中での又は文化間の争いを抑える力を与える。神話の原則的なキャラクターや比喩的描写が大抵お互いの主たる対立的関係の代役をし、そしてこの対立が一連の仲裁的キャラクターにより解決されるという構造を神話は持つ。テレビ番組も同様の構造を持つ。

#### 4) 文化の具象化



継続的で自由な歴史的経験を、明瞭なパターンに類別させること。重要な出来事についての意味作用を伝達し、文化における現実を部分的に構成したものが神話である。

M. Breen らは、テレビが以上4つの神話の機能を持つことで、現代の社会・経済システムを維持する特定のイデオロギーが広められると言う。それは、テレビが現実に関わったことを支配的な階級の一連の叙述的慣習に基礎を置いた語り方で、人工的に再構成されたフィクションであるという事実を隠して、無批判的な視聴者に提供されるからである。神話を一般化させる隠れた文化的メカニズムを解明することが現代社会においてイデオロギカルな力の暴露になるというのである。

まとめると、テレビが権力側の政治的イデオロギーを視聴者が無意識のうちに伝達し、強化されていることを暴くために神話研究が必要であるとして、神話の機能を挙げながらテレビの特徴を述べているといえる。

以上、テレビが生成する神話作用についての先行研究を踏まえて、事項では、具体的に本研究におけるテレビ・スポーツの分析枠組を提示する。

### ③甲子園野球のテレビ中継におけるテレビの神話作用についての分析枠組

第1章第4節で提示したテレビ・スポーツの神話作用に関する研究についての枠組から、テレビの内容分析と視聴者の神話の解釈に焦点を当てる分析枠組を考えると図2-6. のようになる。

LXVII.

Metallifodina.



Die Erzgrube.

Metal-

Metallifossor 1  
ingrediuntur  
puteum

fodina, 2

bacillo, 3

sive gradibus, 4

eum lucernis, 5  
& effodiunt  
ligone, 6

terram metallicam 7  
quæ  
impõsita corbis

extrahitur fune 8

ope machine tracto-  
(ria, 9  
& defertur

in ustrinam, 10  
ubi igne urgetur,

ut profluat  
metallum. 12 n. 2.

Scoria 11  
seorsim abijciuntur.

Die Bergknappen, 1  
lassen sich  
in den Schacht

des Bergwercks, 2

auf dem Knebel, 3

oder auf den Stufen, 4

mit dem Licht, 5  
und hauen  
mit der Beilhauen, 6

das Erz, 7  
welches  
in Körbe gefasset

mit einem Seil herausge-  
(zogen 8

durch Hülfs des Haspels, 9

und in die Brennhütten

(10) gebracht wird /

da es im Feuer geschmel-

(zet wird /

daß davon stiesse

das Metall. 12

Die Schlacken 11

werden besonders geschüt-

(tet,

Metallifossor, m. 3.  
der Bergknapp.  
Puteus, m. 2. der  
Schacht.

Fodina, f. 1. das  
Bergwerck.

Bacillus, m. 2. um, n. 2.  
der Knebel.

Gradus, m. 4. die  
Stufte.

Lucerna, f. 1. das  
Licht.

Ligo, m. 3. die Reib-  
hau.

Terra metallica, f. 2.  
das Erz.

Corbis, m. & f. 3. der  
Korb.

Funis, m. 3. das Seil.

Machina tractoria, f. 1.  
der Haspel.

Ustrina, f. 1. die  
Brennhütte.

Ignis, m. 3. das Feuer.

Scoria, f. 1. die  
Schlacke.



#### ④分析枠組に伴う方法

##### 1) 視聴者の特徴 — 甲子園スタンドでの観戦者との比較から — に 関して

視聴者の印象分析を行う前に、視聴者が甲子園スタンドで実際に見ているのとどのように異なり、どんな特徴を持っているのかについて明らかにしておく必要がある。

この点について、第68回全国高等学校野球選手権大会(1986. 8. 8-8. 21)において以下の試合についてスタンドでの観戦者(3塁側特別自由席)と、テレビ視聴者各2名もしくは3名の表情、しぐさなどを試合開始から終了までビデオカメラで撮影し、比較した。

表2-2. 被験者としての視聴者と甲子園スタンドでの観客者数

試 合 名	視 聴 者 数	甲子園スタンド での観戦者数
決 勝 戦 (第14日)	2	2
準 決 勝 戦 第13日第2試合)	2	2
2 回 戦 (第9日第3試合)	3	3
2 回 戦 (第10日第1試合)	3	2

時間的に同じ場面で比較せねばならないため、甲子園スタンドでは筆者が試合の実況を録音させながら撮影した。

##### 2) テレビ中継における映像・音声の内容分析に関して

第68回全国高等学校野球選手権大会において、準決勝戦第2試合及び決勝戦のNHKによるテレビ中継をビデオで収録し、図2-6. テレビ中継の内容分析の要素にそって、映像の内容そして音声の内容をそれぞれ時間から量的に分析する。

映像の内容については、画面の切り替え、もしくはカメラのズームアップ等においてその中心的事象を、試合展開にそってカテゴリーに分けた。

また、音声の内容については、アナウンサー、解説者、リポーターなど中心的人物もしくはその他の音声を筆記し、試合展開にそってその意味からカテゴリーに分類した。

時間については、映像・音声とも各画面もしくは話していることからの内容ごとにストップウォッチで測定した。

### 3) 視聴者の印象分析に関して

視聴者が、テレビ中継を見てどのような印象を持ったかについて、第68回全国高等学校野球選手権大会の準決勝第2試合及び決勝戦のNHKによるテレビ中継を視聴してもらいアンケート調査を行った。

試合前にあらかじめ郵送し、準決勝戦については、73名、決勝戦については78名が回収され分析した。

また、視聴者に行ったのと同様の調査を同じ試合、甲子園スタンドで観戦していた人(3塁側特別自由席)にも行い、これについてこのデータと比較しながら、テレビの神話作用について検討していく。

質問紙は、次ページ以降に示すとおりである。



全国高校野球選手権大会準決勝観戦者に関するアンケート

下記の質問は高校野球をスタンドからどのように見ているのかについて調査するためのものです。回答についてはすべて統計処理されますので御自分の思われるままのことを、テレビ、ラジオ、新聞などを御覧にならずにお答えください。お答えになられましたら、お手数ではございますが9月5日までに御投函願います。何卒御協力くださいますようお願い申し上げます。

筑波大学 スポーツ社会学研究室  
桑野 豊 教授  
院生 清水 諭

\* 必要事項について記入もしくは丸印をしてください。

年 齡 \_\_\_\_\_ 性 別    男      女                  職 業 \_\_\_\_\_

   府 県                          市 区

住 所 \_\_\_\_\_                          都 道                          郡

<1>あなたはなぜこの試合を甲子園球場に見に来たのですか？ 次のうちひとつに丸印をつけてください。

1 どちらかのチームのファンである      2 チームのファンというよりも高校野球が好きだから      3 ただなんとなく  
4 その他（                                  ）

<2>この試合を見る目的は何でしたか？次のうちひとつに丸印をつけてください。

1 勝敗      2 高校生のプレー      3 スター選手を見る  
4 その他（                  ）      5 特になし

＜3＞これまでに何回高校野球を見に甲子園球場に来ましたか？

1 10回以上      2 4-9回      3 1-3回      4 はじめて

＜4＞今年の大会期間中はこれまでに何回来ましたか？

1 4回以上      2 1-3回      3 はじめて

<5>スタンドから見ていて、試合の内容に関して印象に残っている場面はどんなところですか？いくつかお書きください。（例：ホームラン）

\*

\*

\*

\*

<6>スタンドから見ていて、試合の内容以外で印象に残っているのはどんなことですか？（例：応援の華やかさ、球場の広さなど）

\*

\*

\*

<7>テレビで見ていた時のイメージとスタンドで実際に観戦したイメージとではどのような点が違うと思いますか？

\*

\*

\*

<8>あなたは高校野球が好きですか？

1 はい            2 いいえ

理由（

）

御協力ありがとうございました。



全国高校野球選手権大会決勝観戦者に関するアンケート

下記の質問は高校野球をスタンドからどのように見ているのかについて調査するためのものです。回答についてはすべて統計処理されますので御自分の思われるままのことを、テレビ、ラジオ、新聞などを御覧にならずにお答えください。お答えになられましたら、お手数ではございますが9月5日までに御投函願います。何卒御協力くださいますようお願い申し上げます。

筑波大学 スポーツ社会学研究室  
桑野 豊 教授  
院生 清水 諭

\* 必要事項について記入もしくは丸印をしてください。

年齢 \_\_\_\_\_ 性別 男 女 職業 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_ 府県 \_\_\_\_\_ 市区 \_\_\_\_\_  
 住所 \_\_\_\_\_ 都道 \_\_\_\_\_ 郡 \_\_\_\_\_

＜1＞あなたはなぜこの試合を甲子園球場に見に来たのですか？次のうちひとつに丸印をつけてください。

- 1 どちらかのチームのファンである      2 チームのファンというよりも高校野球が好きだから      3 ただなんとなく  
4 その他（                                  ）

＜2＞この試合を見る目的は何でしたか？次のうちひとつに丸印をつけてください。

- 1 勝敗      2 高校生のプレー      3 スター選手を見る  
4 その他( )      5 特になし

＜3＞これまでに何回高校野球を見に甲子園球場に来ましたか？

- 1 10回以上      2 4-9回      3 1-3回      4 はじめて

＜4＞今年の大会期間中はこれまでに何回来ましたか？

- 1 4回以上      2 1-3回      3 はじめて

<5>スタンドから見ていて、試合の内容に関して印象に残っている場面はどんなところですか？いくつかお書きください。（例：ホームラン）

\*

\*

\*

\*

<6>スタンドから見ていて、試合の内容以外で印象に残っているのはどんなことですか？（例：応援の華やかさ、球場の広さなど）

\*

\*

\*

<7>テレビで見ていた時のイメージとスタンドで実際に観戦したイメージとではどのような点が違うと思いますか？

\*

\*

\*

<8>あなたは高校野球が好きですか？

1 はい

2 いいえ

理由（

）

御協力ありがとうございました。



## 全国高校野球選手権大会テレビ観戦者に関するアンケート

下記の質問は高校野球をテレビで見てどのように思ったかを調査するためのものです。回答についてはすべて統計処理されますので御自分の思われるままのことをテレビのニュースや新聞などを御覧にならずにお答えください。お答えになりましたら、お手数ではございますが9月5日までに御投函願います。何卒御協力くださりますようお願い申し上げます。

筑波大学スポーツ社会学研究室

教授 桑野 豊

院生 清水 諭

\* 必要事項について記入もしくは丸印をしてください。

年齢 \_\_\_\_\_ 性別 男 女 職業 \_\_\_\_\_  
府県 \_\_\_\_\_ 市区 \_\_\_\_\_  
住所 \_\_\_\_\_ 都道 \_\_\_\_\_ 郡 \_\_\_\_\_

<1> あなたはテレビで全国高校野球選手権大会をどの程度見ますか？

- 1 毎試合見る      2 ほとんど毎試合見る      3 時々見る  
4 あまり見ない      5 まったく見ない

<2> あなたは高校野球が好きですか？

- 1 はい      2 いいえ

理由 ( \_\_\_\_\_ )

<3> 準決勝第2試合のテレビ中継をどのチャンネルで見ましたか？

- 1 NHK総合      2 NHK教育      3 その他 (放送局名: \_\_\_\_\_)

<4> 準決勝第2試合の試合内容に関して印象に残っているシーンはどんなところですか？その時のアナウンサー、解説者の声が印象に残っている場合はそれについてもお書きください。(例：ホームラン、スライディング アナウンサー「若さあふれるプレーです。」)

\*

\*

\*

\*

<5>準決勝第2試合テレビ中継で試合内容以外で印象に残っているシーンはどこですか？その時のアナウンサー、解説者の声が印象に残っている場合はそれについてもお書きください。（例：学生服の応援団、アナウンサー「高校生らしい懸命な応援です。」）

\*

\*

\*

\*

<6>決勝のテレビ中継をどのチャンネルで見ましたか？

1 NHK総合    2 NHK教育    3 その他（放送局名：                      ）

<7>決勝の試合内容に関して印象に残っているシーンはどんなところですか？その時のアナウンサー、解説者の声が印象に残っている場合はそれについてもお書きください。

\*

\*

\*

\*

<8>決勝のテレビ中継で試合内容以外で印象に残っているシーンはどこですか？その時のアナウンサー、解説者の声が印象に残っている場合はそ



れについてもお書きください。

\*

\*

\*

\*

<9>あなたは、甲子園球場に実際行って高校野球をみたことがありますか？

1 ある      2 ない

<10> <9>で1 あると答えたかたにお聞きします。球場で見るのとテレビでみるのとではどこが違いますか？

\*

\*

\*

### （３）文化的コンテクストの地平における神話作用の実証について

甲子園野球の神話が、現実の社会、コンテクストにおいてどのように生きている人間に影響を与え、シンボリックに解釈されているのかについて、第１章 先行研究の検討から、現地でフィールドワークし、民族誌を書くことでバリ島の闘鶏が社会をシンボリックに映し出していることを描いたC. Geertz有効であるといえる。ここでは、そのC. Geertzの手法について述べた後、本研究の課題を実証する具体的な方法について記していく。

C. Geertzは、「意味の象徴的体系としての文化がコンテクスト（脈絡）において民族誌によって記述される。」<sup>36)</sup> とした後、民族誌的記述について以下のように述べている。

「長期の主として質的な、また現実の生活によく参与した。しかも、限られた地域における、しつこいほどに綿密な現地調査」<sup>37)</sup> といった特殊性と脈絡性において広範囲に様々なことを解釈し、記述することを数多く積み重ねていくことが民族誌的記述であるとした上で、民族誌学者は、「現地の人びとやその仲間が行っていることについての彼ら自ら  
・・・  
の解釈（彼らの文化）に関する我々（民族誌学者）自身（二次的、三次的）解釈を記述すること」<sup>38)</sup> が重要であるとする。そして、「民族誌学者にとって重要なのは、ひとつの人類学的解釈がどこにあるかを示すことにある。それは社会的対話の流れを追跡すること、それを吟味のできる形におくことにある。民族誌学者は社会的対話を「書きしるす」。  
・・・・・・  
それを書きとめるのである。こうすることによって、ある時点においてのみ起こった一つのできごとを、記録の中で見ることのできる記事にするのである。」<sup>39)</sup> という。

すなわち、フィールドワークは、民族誌学者が共同体と一貫してかか



わり、様々な人々にインタビューし、情報を体系的に集める「参与観察」であり、民族誌家自身が、現地の共同体に巻き込まれ、巻き込まれることで現地の人々の価値や観念や経験を「共有し」、行為の意味を解釈するのである。

本研究のコンテクストにおける神話作用について、このようなC. Geertzの手法をもとに、民族誌家が現地の人々の生活の流れの中に入り込み、社会的流れを追跡し、書きしるし、自らの経験によって解釈するこの民族誌的記述によって実証することができよう。そして、甲子園に出場し、歴史的に神話を作り上げてきたと思われる徳島県立池田高校野球部とそれを取り込む池田町をフィールドとして選定する。そこでは、昭和46年（1971）に初めて全国高等学校野球選手権大会に出場して以来、選抜大会あるいは、選手権で優勝する中で、醸成されてきた池田高校野球部の神話を明らかにしながら、池田町の人々がどのようにそれを解釈し、生きているのかについて、池田町に赴き、観察し、対話をしながら、民族誌を編み上げ、それによって甲子園野球がコンテクストにおいて人々とどうシンボリックに関われるのかを明らかにすることができるだろうからである。

そして、以下のように2回の調査から民族誌的記述を行う。第1回調査は、昭和63年（1988）7月28日～8月15日に行い、徳島県立池田高等学校が、第70回全国高等学校野球選手権大会に出場を決定した予選大会から全国大会で敗退するまで、池田町に滞在しながら参与観察し、記述する。さらに、第2回調査（平成元年（1989）11月18日～11月25日）では、第1回調査を踏まえて、より深く池田町民と甲子園との関わりについて調査する。これらの方法によって、甲子園野球の神話と共同体に生活する人々との関わりが描き出せよう。（第5章 文化的コンテクス

トの地平における神話作用の実証 — 池田町でのフィールドワークから  
— に、方法論を含め民族誌として記述している。）

### 3. 本研究の分析枠組の提示

本研究は、文化的パフォーマンスとしての甲子園野球がどのような神話を持ち、どのようなメカニズムでそれが伝達され、解釈されているのかを分析しながら、実際の脈絡（コンテクスト）で人間がいかに神話と関わって生きているのかを明らかにするものである。

第1章 先行研究の検討及び前節の方法論から、以下のように本研究の分析枠組が構築できる。

#### （1）甲子園野球の歴史的な神話形成

次のような点に焦点を当てることで、甲子園野球の神話が歴史的に形成されてきたプロセスを解明する。

- ①明治初期に野球が日本に伝播されてから全国中等学校優勝野球大会開催に至るまでの日本人の野球観。
- ②全国中等学校優勝野球大会開催に向けてのプロセス — 特に、朝日新聞社が当初より抱いていた理念。
- ③全国中等学校優勝野球大会史及び全国高等学校野球選手権大会史における神話生成。

#### （2）現代においてテレビが生成する甲子園野球の神話

- ①量的分析
- ②質的分析 — 記号学

#### （3）コンテクストの地平における甲子園野球神話の解釈

— 池田町でのフィールドワークによる民族誌的記述

- ①池田町における生活者のコスモロジー
- ②池田町民と甲子園野球
- ③監督、コーチと神話
- ④テレビの神話作用



## ⑤ 甲子園野球のシンボリックな解釈

以上のような枠組の中で、甲子園野球神話に魅せられる我々を照射し、甲子園野球のシンボリックな意味作用を明らかにする。

## 第2章 引用文献

- 1) R. Barthes, 沢村昂一訳 ; 記号学の原理, 零度のエクリチュール, みすず書房, 1971, p. p. 195-201.
- 2) 花輪光 ; ロラン・バルト, みすず書房, 1985, p. p. 122-123.
- 3) 清水諭 ; スポーツの神話作用に関する研究 — 全国高校野球選手権大会テレビ中継におけるテレビの神話作用について —, 体育・スポーツ社会学研究 6, 道和書院, p. p. 215-232, 1987.
- 4) R. Barthes ; Roland Barthes par roland barthes, Seuil, 1975, p. 170.
- 5) 同上書, p. 164.
- 6) R. Barthes, 沢崎浩平訳 ; テクストの快楽, みすず書房, 1977, p. p. 86-87.
- 7) R. Barthes, 花輪光訳 ; 文学の記号学, みすず書房, 1981, p. 37.
- 8) 前掲書 4) , p. 108.
- 9) 前掲書 6) , p. 53.
- 10) 前掲書 2) , p. p. 121-122.
- 11) 前掲書 2) , p. p. 123.
- 12) 前掲書 2) , p. p. 123.
- 13) R. Barthes, 沢村昂一訳 ; 記号学の原理, 零度のエクリチュール, みすず書房, 1971, p. p. 195-196.
- 14) 同上書, p. p. 196-197.
- 15) R. Barthes ; Mythologies, Editions du Seuil, 1957, p. p. 199-200.
- 16) 前掲書 2) , p. 108.
- 17) 前掲書 7) , p. 11.
- 18) R. Barthes, 沢崎浩平訳 ; S/Z, みすず書房, 1978, p. 10.

- 19) 前掲書 7) , p. 11.
- 20) 前掲書 18) , p. 141.
- 21) 前掲書 4) , p. 161.
- 22) 前掲書 2) , p. 117.
- 23) R. Barthes, 花輪光訳, テクストその理論, 現代思想Vol. 9-7, 青土社, p. 77, 1981.
- 24) 同上書, p. 77.
- 25) 同上書, p. p. 80-85.
- 26) C. Lévi-Strauss, 大橋保夫訳; 野生の思考, みすず書房, 1976, p. 28.
- 27) 菊幸一; 近代日本におけるプロフェッショナル・スポーツの成立形態とその社会的条件に関する研究 — プロ野球の成立を中心にして — , 教育学博士論文, 筑波大学, 1988.
- 28) Denis McQuail, 竹内郁郎, 三上俊治, 竹下俊郎, 水野博介訳; マスコミュニケーションの理論, 新曜社, 1985, p. 53.
- 29) 同上書, p. 56-58.
- 30) 同上書, p. 68-69.
- 31) 同上書, p. 68-69.
- 32) 同上書, p. p. 145-146.
- 33) 同上書, p. 150.
- 34) 同上書, p. 148.
- 35) Myles Breen, Farrel Corcoran; Myth In The Television Discourse, in Communication Monographs, Vol. 49-2, 1982, p. p. 127-136.
- 36) C. Greertz, 吉田禎吾ら訳; 文化の解釈学 [I] , 岩波書店, 1987,



p. 24.

37) 同上書, p. 40.

38) 同上書, p. 14及びp. 26.

39) 同上書, p. 32.

### 第3章 甲子園野球の歴史的な神話形成

#### ―場としての「甲子園」の歴史性―

本章では、甲子園野球が歴史的に我々日本人にどのような神話的解釈の基盤を築いてきたかを明らかにしていく。すなわち、1. 日本に野球が移入されてから全国中等学校優勝野球大会が開催されるに到るまで、野球はどのような観念のもとで行われてきたのか、2. 全国中等学校優勝野球大会開催にあたって、その当初から神話が生成されるプロセスを考察すること、3. 全国中等学校優勝野球大会及び全国高等学校野球選手権大会といった甲子園野球がその大会史においてどのような神話性を持つに至ったかの3つの点から歴史的に分析していく。

#### 1. 日本人と野球―移入期から全国中等学校優勝野球大会開催前まで

本説の目的は、日本において野球がその移入期から全国中等学校優勝野球大会開催まで、どのような精神的基盤を持って行われてきたかを歴史的に明らかにすることである。そこにおいて、特別、中等学校、高等学校で野球がどのように行われ、全国大会にまで発展していったかを分析することを主眼とする。

(1) 移入期(明治5年(1872)～明治14年(1881)頃) 日本人が初めて野球(注1参照)を始めたのは明治6年とされている。お雇い外人教師が、学校で生徒を相手に野球をプレイしたのがはじまりである。その当時、どんな人間が、どのような観念を持って野球をしたのであろうか。野球草創時代について、昭和6年(1917)に出版されている『六大学野球全集』は以下のようにその様子を表している。「アブナ・ダブルデーに

遅るゝ約三十五年、明治6年（1873年）の頃、今の帝国大学が開成校といつて東京一ツ橋外、高等商業前にあつた頃、同校教師にウイルソン及び同校予備門の教師にマヂエツトといふ二米人があつて、初めてベースボールなるものを同校の学生に教へた。これが恐らく我国の空中にベースボールの球が飛んだ最初であらう。…當時のウイルソン及びマヂエツトの直傳

の弟子は、理學博士<sup>くりはらかつも</sup>久原躬弦（前京都大學總長）、中澤工學博士（前京都高等工藝學校長）、工學博士青木元五郎（内務省技官）、石堂工學博士（元宇治火藥製造所に奉職）、織田顯次郎（前京都大學理工科教授）、理學士高須<sup>らくろう</sup>祿郎等で、大分熱を上げかけてゐる時分に、アメリカから歸朝した（當時舊姓<sup>くりはら</sup>栗原氏を名乗つてゐた）木戸孝正侯や現内大臣（當時舊姓大久保氏を名乗つてゐた）牧野<sup>しんけん</sup>伸顯伯等が同校に入學し、大いに通<sup>ふりまは</sup>を振廻したので、丁度燃えさかる薪に油を<sup>もき</sup>灑いだ如く野球熱は炎々たる勢ひで勃興して來たのである。」<sup>1)</sup>この開成校は後、明治10年（1877）4月に東京大学予備門に改称され、さらに明治19年（1886）4月に工科予備門と法科予備門のベースボール会が合併してまさしく野球部を創造する。そして、明治23年（1890）には寄宿舎の制度を設けて「一高時代」を築いていく基盤となるものである。

さて、「バットでボールを叩き、打球を学生にとらせるのが最大の楽しみであつた」<sup>2)</sup>とするその當時の野球は、この開成校の他に、明治6年にプレイをしていた学校として東京芝の増上寺境内に校舎のあつた開拓使假学校（札幌農学校の前身）があり、A. ベーツ教師が熱心に野球を行っているだけであつた。

この當時のプレイは、すべて素手で行われ、数少ない道具に対する愛着心も次のような史実が示すとおり並々ならないものだったようだ。



「アメリカから日本にボールを持って来たのは、木戸孝正であるが、その一つの大切なボールが破れ始めた。幾度となく縫<sup>はこ</sup>ひては縫<sup>は</sup>ひ縫<sup>は</sup>ひては縫<sup>は</sup>ひしたものだ。試合中など若し縫<sup>も</sup>ひでもすると「おい！ちょっと待った」で試合を暫<sup>ざんじ</sup>時中止して、丹念に修繕をしたものであつた。しかし大切なボールが、割<sup>は</sup>頭<sup>とう</sup>修繕が利かなくなつたので開成校チームでは全く途方に暮れ、一同合議の上中を切開してみる事になった。…（中略）…

ボールの構造は分かつたが、さあ、これを作る段になると一仕事だ。當時消しゴムは頗<sup>すこ</sup>る高<sup>ハイ</sup>級<sup>カウ</sup>者<sup>リョウ</sup>流<sup>リョウ</sup>が使用するものであつて頗<sup>た</sup>る高<sup>ニ</sup>価<sup>ン</sup>な貴重品として取扱はれた時代なので、とてもこれを買求めることは出来ない。そこでいろいろ考えた末、友人の古い護謄靴を買つてきて、その護謄布の中から一々ゴムの糸を抜取り、それを丸めて中心丈は出来た。所がこれに巻く毛糸がまた頗<sup>た</sup>る安くないので又一思案の末、皆んなの捨てた靴下、を拾ひ集めて毛糸を解き、これを巻き付けて漸<sup>やうや</sup>く内<sup>なか</sup>味<sup>み</sup>だけは出来た。しかし素人の悲しさ、此後はどうにもすることが出来ず、結局學校に出入りする靴屋と相談し、軟<sup>やわ</sup>かい皮を探しだして、これを靴を縫ふのと同じ方法で縫はせ、まあ曲がりなりにも一個のボールが製造された。しかしそのボールたるや、球<sup>マダ</sup>は歪<sup>か</sup>んで、縫目は凹凸だらけで、實に現今の人に見せると度<sup>ど</sup>膽<sup>ど</sup>を抜かす代物であるが、これも當時は大得意であつた。」

3)と貴重なボールを製造することに熱を入れたことがよくわかる。また、開拓使假學校においてベーツ教師秘蔵のボール3個とバット1本があつたとされ、「そのうち2個のボールが破れたため、残る1個が非常に大切なものになって来た。ところが或日の練習中に米園帰りの一人が大飛球を打ち上げ、打球は柵を越え場外へ飛出してしまった。さあ大変である。「唯一のボールを失つては」というわけで、打つた当人は勿論、全員が青くなつての大捜査である。やっと捜し当てたときの嬉しさ、一同

トキの声をあげたことはいうまでもない。」<sup>4)</sup>とアメリカからもたらされた貴重なボールを喪失する事なく大切に使おうという気概が理解できる。

そして、明治10年頃になると開成校にF. M. ストレンジというアメリカ人教師が現れ、「球遊び」から、ルールを適用した野球を伝えるにいたる。当時の学生たちの野球に対する考え方こそ、アメリカのベースボール文化そのものではなく、日本独特の文化受容といえるもので、「「野球」は「スポーツ」とか「體育運動」の範囲ではなく、またさう云はれる時代でもなく、實に「西洋の武藝十八番」だと思はれてゐた。弓や蹴<sup>けり</sup>毬<sup>まり</sup>と同じ種類のもので、ボールをぶつゝける事や狙<sup>ねら</sup>ひを<sup>たが</sup>えぬ事が特に主眼だとさへ云はれてゐた。」<sup>5)</sup>と述べられているように、野球は西洋の武芸十八番だと考えられ、さらに、「當時の練習は現今とは到底比較にならないほど猛烈で、風が吹かうが、雨が降らうが、更に頓着なく、日が暮れて夜になつても月明りや星明りで見當をつけてやつたといふから驚くの外はない。さらに大暴風雨の日などは、一同揃って蓑笠を着けて脚絆草鞋<sup>きつぱんわらしじ</sup>穿<sup>は</sup>きで、雨風と戦いつつボールを投げたに至つては、現在から考へれば正に狂氣の沙汰である。」<sup>6)</sup>と練習風景もアメリカ帰りのベースボールを知っている者とちがって我武者羅<sup>がししゃら</sup>で随分乱暴であつたようだ。

開成校、開拓使假学校において、お雇い外人教師さらには、米国帰りの学生によって日本での野球が始まったわけだが、既に後の蕃風のはしりともいふべき、日本の野球文化の受容に対する特徴的な点がみられる。その中で、明治10年アメリカから帰国した平岡熙とその周辺の人々の野球に対する考え方は、2つの学校とは幾分異なっている。

平岡熙は、帰国後、明治11年(1878)に新橋鉄道局に就任し、すぐさ



ま職員を集めてその名も新橋クラブ（ニックネームはアスレックスとする）というチームを組織した。そして我が国において最初の野球グラウンド、ユニフォーム、マスクを作った。これについて「即ち明治十五年（1882）新橋倶楽部は驛近く（品川八つ山車庫）にグラウンドを新設し、これを「保健場」と名附けたが、その名前が振<sup>ふ</sup>ってゐるではないか。従業が終わると此處で練習をし、「保健」の道を講ずる意圖<sup>いとう</sup>であつたらしい。一説には、米国によくある「レクリエーション・パーク」にヒントを得たともいはれてゐる。これこそ日本に於ける最初の野球グラウンドであつた。また當時ユニフォームなどといふものはなく、これまでは氣の利いた處で襦袢<sup>じゅばん</sup>か襯衣<sup>しんい</sup>一枚、ひどいものになると、暑い時には素裸體<sup>すっぴん</sup>に六尺禪一本、朴<sup>はつ</sup>齒<sup>ぎ</sup>の下駄<sup>げだ</sup>といふ珍無類<sup>ちんも</sup>の扮装<sup>いでたち</sup>もあれば、寒いときには、羽織袴<sup>はori</sup>に下駄<sup>げだ</sup>を穿いて平氣なものであつた。かうした時代に新橋倶楽部が決然！とユニフォームを作ったのである。上下同柄<sup>おなじがら</sup>のフланネル<sup>しよじ</sup>の縞<sup>しま</sup>地で、上衣は頭からスツボリと冠<sup>かぶ</sup>るもので、パンツは膝小僧<sup>かひ</sup>の遙か上までしかない極端に短いものであつた。現今の人が見れば噴き出すやうな珍無類のスタイルであつたが、それでも當時は非常なハイカラで一同得意満面たるものであつた。マスクは、當時横濱の外人団と試合をしてみると、みんな捕手がお面<sup>かぶ</sup>を冠<sup>かぶ</sup>つてゐる。よしこつちも負けてはなるものかと、日本全國探したがそんなものゝある筈<sup>はず</sup>がない。いろいろ思案の末、策を案じて、芝の日蔭町にあつた撃劍道具屋へ走つた。

…（中略）まあ、これで型こそ変だが、外人の使用してゐるマスクに酷<sup>こ</sup>似したものが出来た。さあ、一同大得意、これをもつて横濱の外人団と試合をすると、外人連驚いて「一體どうして作りました」と質問を連発する始末。「なアに、野球の道具なら日本の方が以前から進歩してゐたんですよ。ただ若い者は使はなかつたばかりさ…」と吹くこと吹くこと。」



7)とある。グラウンド、そしてその名称としての「保健場 (recreation park)」、ユニフォーム、マスクなどを、西欧文化の進取の精神を先取りしようとする気概すなわち、ハイカラの風を好んでとり入れようとする当時の人々の考え方が理解できる。

この新橋倶楽部に遅れて(明治13年(1880))三田にヘリクレス・クラブが誕生した。その盟主である徳川達孝伯は、平岡熙との関係から野球にこり出し、ついには邸の築山や泉水をこわし、数千坪の運動場を設けた<sup>8)</sup>のをはじめ数々のエピソードは彼が相当の凝り性で、ハイカラ好みであったことを裏付ける。例えば、チーム名をつける際、先の新橋アスレチックス・クラブの「アスレチックス」というニックネームを意識して、これよりはるかに高級なニックネームとして「ヘリクレス」と命名させたり、バットに凝って檜と朴の木をない交ぜたバットや征目の美しい桐の軽いバットをわざわざ作らせたりという具合である。<sup>9)</sup>

この様に明治初期に野球を受け入れた人々は、学生であれ社会人であれ、その当時の形態的西欧化の風潮を背景に、ものめずらしさや西欧のものなら何でもやってみようという進取の精神から野球を行っていたようである。彼らにとって野球を行っているという事実は、彼らの見栄や誇りを高め、ハイカラを好む気風を助長したと考えられるのである。<sup>10)</sup>しかし、この移入期から開成校などを中心とした学校での野球は、「西洋の武藝十八番」とされ、練習もその服装も「我武者羅さ」や「乱暴さ」が特徴として表れていたようである。このような特徴は、この後の時代である群雄割拠時代になるにつれ徐々に明確になる。

## (2) 群雄割拠時代(明治15年(1882)～明治22年(1889)頃)

移入期には、開成校やその予備門、そして開拓使假学校さらに、新橋

アスレチックス・クラブ（平岡熙が明治20年に辞職した後は、熱が冷め、明治23年解散）や徳川ヘリクレス・クラブが誕生したにとどまったが、第一高等中学校が校舎を本郷向が岡に移して、いわゆる「一高時代」といわれる以前までの明治15年から22年頃までには、様々のチームが学校を中心に創設され、群雄割拠時代が訪れる。

以下その主なチームをまとめる。

<明治15、16年以前から>

- ・開成校チーム
- ・開成校予備門チーム
- ・新橋アスレチックス・クラブ
- ・徳川ヘリクレス・クラブ
- ・横浜や築地の外人チーム

<明治15年頃>

- ・駒場農学校チーム

<明治16年>

- ・工部大学ベースボール会

<明治18年>

- ・白金クラブ（後の明治学院大学の前身である<sup>ポロ</sup>波羅大学の同好会）
- ・青山英語学校（後の青山学院の同好会）チーム
- ・旧東京大学法学部ベースボール会
- ・セントボール・クラブ（立教大学の同好会）
- ・溜池クラブ（明治20年赤坂クラブと東京クラブに分派）

<明治19年>

- ・第一高等中学校ベースボール会（工部大学と旧東京法学部の併合の際、法学部に勤務していたF.W.ストレンジによりベースボール会を組織）

<明治21年頃>

- ・東京商業学校チーム



この時代においても当初は、「唯一のパーティーとなって心から相楽しむだけ、語を換えていえば、心のそこにマークを飾っていたとでもいうか、ボールを通していつしか刎頸の交わり」<sup>11)</sup>を深めていくというような、野球好き同士の同好の志が楽しんでプレイしていたようである。その中で明治18年(1885)に創設された溜池クラブは、次第にその勢力を伸ばした。その練習よりは「忽ち皆がその人数によって部署についてノックの球を取ったり、又代り代り打つ。そして一渡りやると手桶の側へ来て柄杓から一杯づつ水を飲んで語り合ふ。それが何度も繰返されて水がなくなると…(中略)多いときには手桶の水を十杯も取換へて飲んだ位である。そして集まれば毎日黄昏る、頃まで熱心にやった」<sup>12)</sup>とされている。

そして、明治15年(1882)に新橋クラブと駒場農学校チームが日本最初の対抗試合をして以来、各学校、クラブチーム同士の対抗意識が芽生えてくると、野球をする姿勢もかわり、明治18年誕生以来力をもった溜池倶楽部に対して、他のチームが挑戦するようになる。「全市、各学校チームと溜池クラブは、暫く相対峙して戦雲頻りに動いた。『戦はん哉機熟する矣』さうした言葉が誰云いもなく起こる。練習は猛烈になり人員は加はる。『好敵手來れよ』溜池倶楽部生まれて半歳後には雄飛の第一場面が展開されんとした」<sup>13)</sup>のである。こうなると、次第にハイカラの中でも乱暴で、バンカラ風という意味での蛮風が目立ってくる。当時「技倆があつて戦鬪的精神が横溢してゐた」<sup>14)</sup>駒場農学校には、町田一平がいたが、彼はそのころ、「剛情我優の士で素面素小手でデレクトキャッチをやって驚かした」といわれている。<sup>15)</sup>又、東京の明治学院(波羅大学)から東北学院に転任した押川春浪によってできた東北学院の野球チームなどはまさに蛮風が東京から地方に伝播した形をみせてい



る。押川春浪は、後、早稲田大学野球部創設期に活躍する押川清の兄で日本野球界において後々野球についての神話を形成するべくスポーツ・ジャーナリズムの一員としての文士の位置を占める人物である。彼は、「明治学院においては野球部員として活躍し過ぎて二年連続して落第するの名誉をにない、厳父が管理していた東北学院に田舎落ちしたのであった。そして、こりずに野球部を創設した。厳父は膝下において厳重監督するつもりだったが、そこは快男子のことだから、野良犬を殺し、その肉を教室で食べて教師や同級生を驚倒させたりして、漸次生徒間に確固たる勢力を植えつけながら野球部をつくりあげた。」<sup>16)</sup>と東京の蛮風を東北に持ち込み、野球をやる際の風体をも伝播したと考えられる。そのチームの服装は、「投手押川…白シャツに猿股、捕手某…ワラジばき、一塁手某…裸体に猿股、二塁手石塚…猿股にヘコ帯、三塁手吉村…白シャツに猿股、遊撃手矢部…裸体にハカマを着用、外野手某…頭に白鉢巻、腰に越中フンドシ。下半身は猿股一枚にせよ、上に白シャツを着用していたのは押川と吉村だけであった。押川春浪は明治学院、吉村は正則中学出身とそれぞれ東京の空気をかいで来ていた。他の連中は、ほとんどが上半身裸体であり、なかんずく外野手某は越中フンドシ一枚で外野狭しと走りまわって、相手チームを唖然とさせた。遊撃手矢野がハカマを着用していたことは、チーム随一の礼儀正しい選手と相手チームから評価されていたが、何ぞ図らん、これはゴロを後逸するのを防ぐための自衛服装であった。」<sup>17)</sup>と示されるとおり、バンカラをよく表している。このような蛮風は、学校間の対抗試合になると一段とその気概を高め、学校のプライドをかけて応援に、プレイに熱を入れるようになる。これが、激しくなるのが、明治23年からの「一高時代」である。この群雄割拠時代は、「まさに技量があって戦闘的精神が横溢していた時

代であった。また、野球を積極的に取り入れた一般の人々や学生にとって、野球を行うことは彼らのプライドでもあり、自分たちの社会的地位を象徴するという意味をもっていた。つまり、上流階層に所属するものとして、あるいはその子弟として、また選ばれた学士として野球を行うこと、そしてその技量に秀でることは、彼らの身体的能力の卓越性を誇示すると同時に、時代を先取りしているという意識、すなわち後進国日本の中で彼らだけが欧米先進諸国の文化を担っている存在であるという意識を満足させたに違いないのである。」<sup>18)</sup> とその特徴をいえるだろう。しかし、この時期において、移入期のハイカラ風から徐々に蛮風が野球文化の中で芽生え、さらに、学校間や学校対クラブの対抗試合においてその競争心が高揚することで、さらにその蛮風の気が広がったと考えられる。しかしながら、当時大学に入学できる、もしくは高い用具代を払ってクラブで野球ができる者は、注2)でもわかるようにエリート中のエリートであって、日本の野球は、上流階層の社会的地位とその身体的能力を誇示し、欧米文化を先取りしているという非常に高いプライド意識の中で国内に広まっていったといえる。そしてその中で、蛮風、バンカラ風が、他のチームとの対抗意識と相俟って浸透していったのである。

### (3) 一高時代(明治23年(1890)～明治36年(1903)頃)

明治6年(1873)開拓使假学校と共に野球が初めて日本で行われたとされる開成校は、明治10年4月東京大学予備門に改称され、さらに明治19年(1886)4月に工科予備門と法科予備門が合併し、第一高等中学校に改められていく中で、ベースボール会すなわち野球部も他の学校やクラブ共々プレイを続けた。しかしながら、明治20年頃覇権を握っていたのは、



平岡熙の新橋アスレチック・クラブ（明治23年解散）、溜池クラブ（明治20年赤坂クラブと東京クラブに分派）、駒場農学校チーム、青山英語学校チーム、白金クラブ（後の明治学院大学の前身である波羅大学の同好会）であった。<sup>19)</sup>当時の第一高等中学校について、その部誌には以下のように記してある。「…当時吾部の技たる、未だ世目を引くに足らず、特にノックを催し、或は試合を挙行するも、運動を愛する士は大率ボートに勉め、ことに商業校との競漕は益々佳境に入り、又ストレンジ氏の紹介によりて、横浜の外人と競漕し、或は遠く東京湾内の周航を試み、我校風の幾分は已に此等諸士の間には発生し、墨水は既に校旗の横行を許せり、然れども、野球は未だ校友の普知する所とならず二十一年<sup>はじ</sup>甫めて新入生を<sup>しつ</sup>悉めて入舎せしめ、舎庭に於て常に棒を以て球を打ちしと雖、素より練習と称すべきにあらず、されば此年始めて波羅大学と仕合の事あるや、一中的抱負向不見を走り方に用いて、見事勝を制しが、其技にいたりては未だしかりしなり、…」<sup>20)</sup>というように学内のスポーツとしては、ボート会に押され気味でかつ技術的にも未熟なものであったのである。しかしながら、明治22年（1889）に本郷向が岡に校舎を移し、明治23年3月から寄宿舎が完成して、学生が皆、入寮するようになると大挙して野球部に加加入するようになる。この頃のことについて第一高等学校野球部史は、「…二十三年三月に至りて開寮せしを以て、会員は皆<sup>よも</sup>蓄つて入寮し、東寮の<sup>ていてい</sup>前庭を以て<sup>てうき</sup>朝夕ノック場とし、球場を昼食後のノック及び試合場とし、土手下を以て投げ合の場所と定め、球棒の聲、日夕運動場に絶えず。また全技を<sup>しうどう</sup>奨励するに足らざりしも、<sup>すて</sup>已に寄宿舎内を<sup>しうり</sup>風靡し、毎夕のノックを傍観するもの頗る多く、ついに<sup>はくし・くわん</sup>拍手歡呼の一群を生ずるに至れり。この一群こそ後來試合に活氣を添へし「彌次隊」の起源なれ、…」<sup>21)</sup>と寄宿舎における野球熱の高揚と試合に対しての猛



練習、さらにそれを応援する応援団の前身ともいえるべき「彌次隊」が発生し、校内での野球に対する熱の入れようが並々ならぬものとなってきたことをあらわしている。そして、明治23年4月中旬の対商業校戦に30点の大差をつけて勝った後、同5月17日向が岡校庭において明治学院を迎えて試合をする。その当日の様相について野球部史は、「…一中（一高）の軍容甚だ奮はずして、第六回に於て已に六點を輸せり。この日校の柔道部も亦た大會を催し、恰も終りしを以て悉く球場に來會し、我が軍の敗勢をみて切齒憤慨しつゝ、控へ居けるに、たまたま一洋人あり、校庭の垣根を越えて場内に侵入し來る、衆其無禮を怒りて詰責せんとし、柔道部の健兒先づこれに走り、寮生之につづいて將に談判せんとし、紛擾の際に血氣の者或は石を飛ばすものありて、外人の面部に負傷せしめたり。…（中略）…この洋人は北米の神學博士インブリー氏にして、傳道の為に派遣されたる人なりし。後、彼我數回の往復にて、我も當日の為に派遣されたる人なりし。後、彼我數回の往復にて、我も當日の輕舉を謝し、彼よりも垣を越えたる疎忽を謝し、事もなくして局を統べしが、當日の試合はこの混亂のために一時勢いを失ひ、且つ白金は自家の教員の出來事に氣を失ひ、其選手村山氏亦た不幸にして右掌に負傷せしより遂に、中止することに決し、四時ならざるに散會せり。」<sup>22)</sup>とある。一中野球が、野球部のみならずここにでてくる柔道部を例として、校内の多くの学生の応援を背に戦うようになっていたこと、また、勝つということに対して異常なぐらいの執念をもつように至っていたことをこの「インブリー事件」の記述は物語っている。また、これは一高のいわゆる籠城主義（詳しくは後述）による禁制の垣を踏み越して闖入した者に対して一高生のプライドが許さなかったということにもなる。そして、このインブリー事件をきっかけにして打倒明治学院、また、

学校挙げての応援と猛練習が行われていくのである。「此夜会員は、今日の試合は全敗に非るも、稍敗軍に類せりとなし、悉く謹慎し、予日雪辱をなさんことを誓ひけり、此敗軍以後のベースボール会は、球を弄するが為に非ずして、奮勃たる胸中一片の気を、球に託して外に表示するの具となれり、而して校友は大挙して是れが後援となり、ベースボールは已に校技に進み、我が校風はベースボールを仮つて、其奇氣を吐かんとせるの時なりしを以て、我が部の覚悟は曩日の比にあらず、従って其責任亦重きを致し、練習頗る莽猛を極めたり…。」<sup>23)</sup>と野球部誌に記されているように誇るべき学校の名誉を傷つけたことや敗北の屈辱に対する臥薪嘗胆の念が明確に表れている。

その後、同23年11月 8日向が岡校庭に明治学院を迎いて試合を行い26対 2で大勝、「満校拍手喊声の裡に、我選手は初めて二十四点の大勝なるを知り、驚喜相持して涕泣せり、…」<sup>24)</sup>と猛練習が報われ、勝利したことを大変喜び、抱き合って涙した。そして、この結果はすぐにも都下の他の野球チームにも伝わり、11月23日には、各学校の有志を集め、老練な選手の多い溜池クラブと対戦、そして32対 5で大勝する。一中の選手、応援団は練習につぐ練習の激しさ、それを連日声援し、全校あげての見学をしてきたことを思い、感激して抱き合って泣いたとされる。<sup>25)</sup>一中は、これで都下の名門明治学院と溜池倶楽部の両方を破ったのであるが、治まらない両チームは、その連合チームを作って一中に挑戦するに至る。一中は、挑戦を受け、「是に於て我部は死力を悉して覇を争はんとし、練習朝より夕に及ぶ…」<sup>26)</sup>と猛練習を繰り返した。そして、明治24年 4月 2日、一中は明治学院・溜池倶楽部連合チームを10対 4で破る。ここにおいて一中の「覇業が確立」したのである。



このような「覇業の確立」、それにつづく「一高時代」は、第一高等中学校という名称だったときの、明治23年3月に寄宿舎制度ができ、寄宿する学生が大挙して野球部に加入すると共に、籠城主義による学生の校風発揚のために野球など運動に学校すべてが力を注ぎ、対外試合や練習を声援し、応援したことが基盤となっている。対外試合に学生が大挙して押しかけ勝利するや選手と抱き合って涙を流して感激したり、選手も対外試合で恥をみせんがために日々努力精進して猛練習を繰り返したのである。これらの精神の背景は、どこにあったのだろうか。

明治21年（1888）第一高等中学校教頭に就任した木下広次は、その就任の演説で次のように述べた。「現時我日本は諸人自重自敬の精神に乏しく卑猥無作法の風習諸君の身近を圍繞せる世の中なれば此間に在て諸君が心を正しく身を修むると云うことは誠に困難な事業にして諸君の苦心も推察さるるなり、就ては茲に諸君の決心肝要なり、夫れは他に非ず校外一步皆敵高等中学校は籠城なりとの覚悟を偏に冀望するなり」<sup>27)</sup>つまり、木下は、高等中学校学生を取り巻く日本が「自重自敬の精神に乏しく卑猥無作法」の世の中であって、「心を正しく身を修むる」為に学生は「校外一步皆敵」との認識をもつ必要ありとしたのである。そして、籠城主義を掲げて、明治23年より全寮制を実施したのであった。木下は、これら高等中学校は、「…上流の人にして、官吏なれば、高等官、商業者なれば理事者、学者なれば學術專攻者の如き社会多数の人々の思想を左右するに足るべきものを養成する所なり」<sup>28)</sup>という森有礼の考え方を踏襲して、社会の中のエリートを養成するために、徳育中心の教育を前面に出し、寮生活もまさにその教育の一環として考えたのであった。このような、エリート養成のために優秀な学生を籠城させ教育する寮は、「…必ずや諸子が地位と責任とを思い自ら治めんとする精進を奮



起し、朋友の間、相切磨して互に警戒する所あるに由らざる可からざるなり」<sup>29)</sup>と学生たちの自治と責任の上に成り立つもので、寮は学生たちにとって精神修養の場であり、教育の一環として重大な場であると考えたのであった。この全寮制の基盤の上に、明治23年9月には、「本校生徒間に運動部弁論部雑誌部等を網羅せる校友会なるものを組織せよとの議起こり、23年9月、時の校長木下広次先生の賛成を得」<sup>30)</sup>各部ばらばらに活動していたものを「校友会」の名のもとに全学生の活動が組織化されたのである。そしてこの校友会の目的は、「全校の団結と文武にわたる諸武芸を錬磨する。つまり学科諸課程の学習以外に全人間的修練を志すこと、そしてひいては校風を築きあげるに役立てようということ」<sup>31)</sup>であり、全人間的修練を志すという目標のもとに全校が一丸となって各部を応援し、ひいては校風を築きあげることを主眼としたのであった。

以上から、一中の覇業確立は、木下広次教頭（後、校長）をイデオログとして後々エリートになるべき学生が「心を正しく身を修むる」といった精神修養の場としての全寮制を基盤とし、「全校の団結と文武に渡る諸武芸を錬磨」し、「全人間的修練を志し、」ひいては、「校風を築きあげる」ために野球という運動に全校あげて力を注いだ状況の下に成り立ったのである。そして、インブリー事件後に野球が、「球を弄するが為に非ずして、鬱勃たる胸中一片の気を、球に託して外に表示するの具となれり」といわれたように、単なる遊びでなく、元氣の精神たる校風の発揚の場として野球を行い、猛練習による勝利によってそれが顕在化することを一中の精神的中核にすえていたといえよう。

さてこのような一中の野球は、どのような練習を行っていたのであろうか。明治23年11月8日対明治学院との雪辱戦で一番打者だった中馬庚は次のように表している。「凍雲四方ニ塞カリ時ニ飛霰ノ迸ルヲ見ルニ窓

下ニ投ケ合ヲ催セハ指頭龜ンテ直伸セス兩掌凍結シテ感覺ナシ第一球受クレバ塔然、聲アリ石ヲ打ツカ如ク痛ノ何ノ邊ニアルヲ知ヲス第二球ヲ受クレバ奇痛全身ニ徹ス兩人息ヲ吹テ凍掌ヲ暖メ三球四球稍掌ニ熟ス第十球ニ至リテ投球漸ク猛烈トナリ全身漸ク生氣アリ第二十球ニ至リテハ即チ眞ノ奮闘トナリ滿身ノ力ヲ加フレハ熱球疾キコト矢ノ如ク見ヲ抽シテ、是ヲ受クレバ兩掌ニ一種ノ痒味ヲ生ス痒味ヲ生スレハ体温已ニ上リ全身已ニ慣熟セルノ徴ナリ何ヲ為シテカ成ラザン受ケテハ返シ返シテハ受クルニ随ツテ兩腋汗ヲ生シ吐息蒸氣ノ如ク初メニハ上衣ヲ脱シ終リニハ…（中略）…人ハ皆外套ヲ纏ヘルニ我唯兩人ノ裸体ニシテ滿身ノ發汗虹ニ似タリ相對スルコト一時間…（中略）…投ケ合ニモ復タ仕合ト稱スル者アリ」<sup>32)</sup> すなわち、どんな冬の寒いときでも素手で投げ合い、石を打つような痛みや奇痛を経て、一種の痒味を覚えるようになり、体も暖まって、「仕合」ともいえるような投げ合いを1時間続けるというのである。

こうした練習は、その後一高式練習として後々まで伝えられるのである。校風の発揚のために何としても勝つという勝利至上主義とそのための鍛錬主義が脈々と流れていることがわかる。これらの精神性は、その後の一中・一高の野球史において醸成されていった。

明治24年（1891）4月2日に明治学院・溜池倶楽部連合チームを破って「覇業を確立」して後、一中野球部は、24年2戦2勝、25年1戦1勝、26年1勝1敗と少ない試合数の中でひたすら練習に励んだ。27年5月には、「年々1回行はれて今に及べる府下聯合大会の濫觴なり、…」<sup>33)</sup>とされる混合試合を慶応義塾、高輪倶楽部、正則予備校、赤坂倶楽部、青山英和学校、学習院から計10名の参加者を得て行ってはいるものの、同年7月の高等学校令により第一高等学校に改称された後も外部との試



合はあまり行われなかった。<sup>34)</sup> しながら、練習は、あくまで厳しく「天下広しといえども、恐らくはかかる苦しきトレーニングはあらざるべし。これ何の故ぞ。いわく責任これなり。まことにこの特異なる一高式修練はその戦勝史の因をなすものなり。またわが部また一刻も進歩と改善を練習の伴侶とするを忘るるべからず。」<sup>35)</sup> とあるように鍛錬に鍛錬を重ねて、必ずや勝利しようという精神があらわれている。これは、明治29年5月に行われた初の国際試合に投手として活躍した青井鉄男の練習にもいえることで、「(外人使用のボールは)日本人の手には重すぎるし大きすぎると考え、それを克服する方法として彼は特に重さ5.5オンス(約156グラム)、周囲9.5インチ(約24センチ)のボールを造らせ、これを日常の練習用とし、肩ならしと同時に腕や指の力をつけることを考えて毎日このボールを投げ、雨が降れば廊下にネットを張って投げつづけた。またバットは重さ35オンス(約992グラム)以内という当時の規定のところを40オンス(約1,134グラム)乃至45オンス(約1,276グラム)のものを造らせて毎晩ねる前に千本振りをやる。」<sup>36)</sup> といった練習をしたのである。注3)

このような勝利至上主義、鍛錬主義の一高野球の精神は、明治29年(1896)5月23日に横浜公園にて横浜外人チームと一高野球部が初めて国際試合を行い、29対4で一高が大勝すると日本のナショナリズムの高揚といった意味が付加され、日本の武士道精神の延長上に野球の精神が位置づけられるようになる。そのことについて、試合当日、横浜外人チームに勝利して

帰校した選手及び応援団に対して学生総代の<sup>もりずみ</sup>守随啓四郎は、「今日の勝単に我校の勝ならず、<sup>いささか</sup>聊もって邦人の勝と称するを得べし、…」<sup>37)</sup> と日本人としての勝利を強調しており、また、野球部長松田も「国名を賭

すること実に守随氏の言の如し、而して我不肖部長の任に当たり、憂慮寝食を忘るゝ者数日、幸ひに諸子の手に藉りて以て部名を辱めざるを得たり、<sup>いささか</sup>聊選手の労を謝す」<sup>38)</sup>と一高野球部の名誉を傷つけることなく勝利したことを讃えている。そして、幾多の電報の中で木下広次前校長の手簡が読まれ、「部員たる者宜しく心肝に銘して、其望に副はんことを勉む可きなり、」<sup>39)</sup>と部誌に表されているように部員たちはその電報を深く心に刻んだ。その電報の内容は、「一、臨戦尚不失礼、勝而不慢敗而不挫は、日本武士道の本意にして、第一高等学校の夙に特色とする処なることを、 1、吾人少壮青年者は、独り技術の点のみならず、智識の点に於ても、同く光輝ある全勝を博するの責務あるを記憶されんことを、」というもので、日本の武士道の精神の上に野球を捉え、学生の志気昂揚、校風の作興、そして、全人間的な成長をする青年像を野球及び野球選手に託していたことが理解できる。このような武士道の精神は、その後一層強化され、一高野球部の特徴となるものになった。そのことは、明治35年の野球部史に「我部の抱懐」としてまとめられている。

「(一) 修養と我部

(略) 然るに人多くは野球を解して単に技巧の妙を説き猛球魔球を学ぶものなりとし、曰く、西洋伝来の球技の如きは<sup>いささか</sup>勝も精神修養に資せざるものなりと。果して然るか、然らば野球の効何れにあるや。野球は勿論我国古有の技に有らずして、其西洋臭味を帯ぶるは事実なりと雖、然れども此技一度邦人の手に学ばれんか、我第一高等学校の校技とならんか、野球の面目茲に一変して精神を主とし修養に資し品性を研ぐの具となるなり。

洋人の野球の利を説くを聞くに、曰(一)判断を明確敏活ならしむ、(二)頭腦を明爽快明ならしむ、(三)身軀を強健ならしむ、(四)共



同の風にならしむ云々と、これもとより可なり、然れども我部は是のみを以て満足す可きに非ず、さらに二三の着眼点を要す、質素儉約の風これなり、剛健勇武の気これなり、直往邁進の慨、これなり、これがある故に我部は校風発揚の大任を負ひ、自治寮は我部の精神を養育する所となり、二者相輔けて甘美を濟んとす、実に我第一高等学校野球部は精神修養を以て標榜するものなり。」<sup>40)</sup> すなわち、西洋の野球も日本においては、精神修養と品性を磨くものであること。さらに野球が、日本においては、①質素儉約の風があること、②剛健勇武の気のあること、③直往邁進の慨のあることが利点としてあげられ、このために一高野球部が校風発揚のため自治寮を基盤に精神修養を中核にして活動しなければならないというのである。さらにつづけて、その野球部史は、

#### 「…（二）我部と対外仕合

…礼儀は我部のもっとも重んずる所なり、正々たり其容、堂々たり其儀、戦いをバットの間に交へ、勝負をボールに争ふと雖、其心や即ち光風明月洒々落々たらざる可からず、勇<sup>い</sup>以て戦<sup>いく</sup>ひ、礼<sup>れい</sup>以て制<sup>せい</sup>す、これ我部の面目たり。

#### …（五）我部の主義

…举止優雅にして外見浮華なるは吾部の業にあらず、熱球風を起し疾球砂を捲くも、軀を以て之れが障となし、健腕伸べて之を獲まば、何ぞ巧拙を論ずるの余地あらんと、…（中略）…已に此意あり加ふるに練習万般の事一に武士的素養を待つ、…（中略）…吾人は誇るが為に一高的と呼び健男児と云ふに非ず、依て以て自ら恥るなきの修養を加へ、冀<sup>ねが</sup>くば延て他を化するの実を挙げん事を是期するものなり、…」<sup>41)</sup> と、礼の精神、体を張る武士的素養、恥を知る精神など武士道的精神が一高野球部の中心に据えられていることを表している。

以上のように一高時代は、その前時代である群雄割拠時代に比べて、学校の運動部がその名誉を賭けて日々精進努力し、試合において絶対勝とうとプレイし、それを全校挙げて応援するようになった時代である。後の、早慶時代は大学にその覇権が移っていくのであるが、この一高の精神は、以後、一高対三高の定期戦をはじめとして、地方における中等学校野球とその連合大会、ひいては、大正4年(1915)にはじまる全国中等学校優勝野球大会における試合の精神といったものの基盤となるものである。

ここにまとめておくと、一高の野球の特徴は、①「一高式練習」といわれる日々の猛烈なる練習、鍛錬主義、②試合は、元気の精神たる校風発揚の場であり、母校の名誉を賭けて必ずや勝利すべきものであるとすること、③全校挙げて応援し、熱狂すること、といえる。その思想的基盤は、明治21年に教頭に就任した木下広次の挨拶にわかるように、「卑猥無作法な」世の中に於てエリートたる一中生が「心を正しく身を修むる」ために「校外一步皆敵」との認識のもとに籠城主義を掲げたことにある。そして、明治23年3月に始まる寄宿舎は、「自治と責任」、「精神修養」の場であり、まさに中学生らしく心身を修養するために生活するところなのである。こうした中で、同年9月には、「全校の団結と文武にわたる諸武芸を錬磨する。全人間的修練を志さず、そしてひいては、校風を築きあげる。」といった目的のもとに「校友会」が創設される。ここにおいて、試合は、元気の精神たる校風発揚の場であり、母校の名誉を賭けて必勝するものであるとの考えが確かなものとなる。これは、日本男子また野球部員として「負けたら恥」という勝利至上主義精神や、精神修養、鍛錬主義といった日本武士道を深層にもつものであり、木下広次が、横浜での初の国際試合に勝利した際電報で記してあったように、



全人間的な資質をもつ人間としての学生を武士道の精神から標榜していたことのあらわれである。こうした精神は、校庭で朝夕ノックしている選手を「傍観し、拍手歓呼する」一群としての「彌次隊」に起源を有する応援団の熱心な声援にもあらわれている。明治23年の「インブリー事件」での熱狂や、29年横浜外人チームとの試合に400余人が集まったり、試合に出発する際の壮行会そして、後の一高対三高の定期戦での旗や太鼓を持参しての応援が現在の応援風景の原型として存在していたのである。注4)

この一高時代の精神は、早慶時代に入り大学に覇権が移った後も、中等学校野球部に伝播し、全国中等学校優勝野球大会の神話を形成することに多大な影響を及ぼしたのである。

#### (4) 早慶時代以降(明治37年(1904)以降)

##### ① 当時の中等学校野球界

一高が、東都野球界の覇権を握っていた明治23年(1890)から明治37年6月1日に早稲田大学に、翌年6月2日に慶応大学に破れるまでの間、野球は一高野球の精神と共に中等学校や倶楽部を中心に、全国に広まった。東京では、明治27年に行われた混合試合(東京府下の野球チームが混成チームをつくり一高に挑戦する形式をとっていた)が発端となって、毎年連合大会が、府下の野球チームを集めて向ヶ岡の一高グラウンドで行われたことや、一高の胸を借り、野球を教示してもらおうという形での練習試合(一高は、覇権を握っているという確固たるプライドから横浜外人チームなどとの国際試合以外は正選手によって対抗試合を行わなかった。練習試合は、補欠の若手選手に主要守備位置を数名の正選手で囲め、打撃オーダーもピッチャー、キャッチャー、一塁手というようにボ

ジション順で編成されていた。)によって数々の中学校が野球を行うに至った。特に、郁文館中学校、正則中学校、東京高師付属中学校、独乙協会中学校は、学習院、明治学院、慶応義塾、青山学院の伝統ある学校チームと共に野球をさかんに行っていた。まさに、「二十九年以来、吾邦の野球界や氣運一時に豹変し、世をして、野球の技たる氣鋭勇往なる日本人に好適せるもの、誠に男子の技たる可きを知らしむるに至らしめたり…」<sup>42)</sup>といわれる時代になったのである。そして、明治30年(1897)に郁文館中学チームは一高に対し、2戦して2勝するなど力をつけていった。

東京府下以外の関東地方や東北地方そして関西地方などにも一高野球部の選手が、出身中学に帰省した際、指導するなどして、一高野球の精神と共に野球は広まった。少し長くなるが、明治30年の一高野球部誌から引用すると、

「鑑みれば野球の氣運開けしより、各後進者の優進目覚しきものあり、野球倶楽部の設立頻々として、顯れ又諸学校野球部の日に蠢起するを見る、技倆に至ては未だ全然首肯す可らずと雖、間々出藍の資を有し、挺進時に老士を追逐し、交りて翔翔するに至りし者なきに非ず、然り而して球熟已に四方に伝播し、関東最盛にして漸次関西に延く、就中栃木、茨城兩中学の如きは最盛況を呈し、栃木中学は我青井を師とし、茨城中学は我戸村に学び、昨秋已に対抗仕合を行ひ、今歳十月、再び七対八の活劇を演ぜり、横浜商業学校亦静岡中学と争ひ、青井を聘して大に技を修むれば、静岡は後年藤井を師として之に当り、関係今に及び尚絶えず、関西の兩管領として戈を交へしは、山口高等学校、第五高等学校なり、互に福岡県福岡に出で、相戦ひ、山高敗るゝや、我宮口、井原、森脇等其郷里の故を以て、続々山口に至り大に誘掖する処ありき、而して北鎮



の驕名高き第二高等学校に至りては、近来頗に頭角を表はし、近く吾部を窺はんと欲すと聞く、野球海の氾濫は実に此時に在りとす、…」<sup>43)</sup>とある。一高の選手である青井、戸村、藤井、宮口、井原、森脇らが、指導者として、また郷里の先輩として地方の中学校に出向き野球に対する考え方、練習方法、戦術などを伝授したことはこのことから明らかであろう。上記にあるように、栃木中学校、茨城中学校、第五高等学校、第二高等学校のほか、関西では、神戸第一中学校、神戸商業学校、同志社、第三高等学校などが、神戸の在留外人やキリスト教宣教師によって、野球を行うようになった。

そのような中で、愛知県立第一中学校は明治26年(1893)11月の秋季運動会にすでにクラス対抗の野球試合を行っており、中等学校野球大会の嚆矢である東海五県連合中学野球大会を開催した東海地方の雄であった。この愛知一中は、運動家であり、マラソン王の名を持つ日比野寛を、明治32年に迎えて設備が充実し、明治34年にはアメリカ、ミシガン大学で捕手をしていたD.レーマン(名古屋英和学校に赴任)をコーチにして活況を呈していたのである。明治34年(1901)4月30日に、関西遠征中の慶応大学に11対6で勝って以来明治42年11月14日の対岐阜師範学校戦までに108戦して78勝22敗8引き分けの好成績を残している。その中で、明治39年4月の東京遠征では、単独中学校チームにして四強チームと対戦、早大、慶大、一高に敗れたが学習院に勝利している。<sup>44)</sup>また、愛知一中校友会は、明治38年に当時選手であった安田量之輔を中心に『野球使用』という書物を出版しているが、その中で「一校ヲ代表シテ選手タルモノ熱心ト忍耐トヲ以テ、銳意校名ヲ擧グル為メニ、孜々トシテ練習セバ、征テ對校仕合ニ勝利ヲ得ル事多ク…(中略)…選手タルモノハ、固ヨリ自己一人ノ安楽ヲ貪リ等ノ事ナク、亦決シテ倦怠ノ風ヲ示ス勿レ。

且謙譲ノ美德ヲ在シテ、決シテ、傲慢ノ振舞アルベカラズ…」<sup>45)</sup>と、熱心と忍耐のもとでの猛練習によって試合で勝つことが校名を挙げることになるのだという「精神」の重要性を強調している。また、愛知一中には、一高系のコーチがいて、日々の練習も「精神的に」行われ、一高精神が実際の場面においても伝播されていたという。<sup>46)</sup> このように一地方中学校の野球部においても一高の精神たる武士的な勝利至上主義志向と武士道的な修養・鍛錬の精神が明確に伝播されているのである。

これまででわかるとおり明治末期、各中学校、高校はその地方、地域で適当な相手をみつけ試合を申し込み、負けたチームは復讐戦を申し入れるといったような挑戦形式の試合を不定期かつ個別的に行っていたのである。こうした中で早慶時代になると学校野球部そして学校間での組織化が進み出し、定期的な試合を行うための取り決めや協定が結ばれるようになる。<sup>47)</sup> そして、明治39年(1906)4月第三高等学校から第一高等学校への挑戦に始まった一高対三高の定期戦を皮切りに各高等学校及び中学校や大学で定期戦を行うようになった。(一高対三高の定期戦は以後昭和23年(1948)8月8日の最終戦まで37回、18勝18敗1引分の記録が残されている。<sup>48)</sup>以下に記すと、

● 五高対七高戦(明治39年)

● 横浜高校対横浜商工戦(明治後期、正確な年次不詳)

● 早慶戦(明治36年)

● 三田・稲門戦(明治42年)

● 東京高師附属中学対学習院中等部

● 市岡中学対北野中学

● 仙台一中対仙台二中(明治33年)

が代表的な定期戦としてあげられる。特別、一高対三高の定期戦は、



「弊衣破帽、朴齒の高下駄という当時の高校生風俗は、夢多い中学生にとってはあこがれの的となっていた」のであって全国の中学生の野球熱を極度にあおったとされている。<sup>49)</sup>

そして、このような定期戦は徐々に連盟（リーグ戦）や大会を運営するようなものに規模や範囲を拡大していった。新聞社や上級のナンバー・スクールによる主催、後援で中等学校の野球大会はより活発化するのである。表3-1. をみればわかるとおり各地方ごとに数校ずつではあるが、大会が催されている。当然ながらこれらの定期戦は、母校の名誉を賭け必ずや勝利すべしと猛烈な練習を積み、全校挙げて応援し、熱狂したことはいうまでもない。応援団の編成も含めて一高精神といわれているものがこの定期戦や野球大会で広がっていったのである。

このような、定期戦、野球大会を通じて中学校野球界に一高精神が伝播したのであるが、明治37年（1904）以来、一高にかわって覇権を握った早稲田、慶応の野球部には、精神修養をふまえた鍛錬としての猛練習はあったものの、一高時代からあった「負けたら恥」「絶対勝たねばならぬ」といった勝利至上主義の武士的精神よりも「正々堂々、男らしくベストを尽くす」ことを重視する野球観が芽ばえてくる。従来の精神修養、勝利至上主義の精神性の上に、「フェアプレイ」「スポーツマンシップ」といった倫理観が形成されていくのである。これは早稲田大学野球部を創部から支えた安部磯雄の観念が早稲田野球部が覇権を握るに従って支配的になっていったためである。従来の一高精神に加えて、フェアプレイやスポーツマンシップといった観念は早・慶の両大学が野球界の中心的位置を占め、中学・高校野球部に、コーチとして指導したり、早慶戦の華やかなる歴史の中で中等学校野球に影響した。そして、大正4年に始まる全国中等学校優勝野球大会において、その神話的イメージを

形成していくメディアの側に早稲田大学野球部卒業生あるいはその関係者がいて、新聞や雑誌などを通して、中等野球の神話を形成するようになるのである。次節では、まず早稲田大学の野球部を歴史的に追いながら現役選手、安部磯雄そしてその関係者の野球観をみていく。

表 3-1. 明治期における中等学校野球大会

地方	年	大会
関東地方	明治37年 明治43年	茨城県内中学野球連合大会 (5校) 東京での中学野球大会 (8校)
東海地方	明治35年 明治35年	東海五県大会 (5校) 三高主催、関西野球大会 (3校)
中国地方	明治40年	六高主催、近県連合野球大会
山陰地方	明治39年	山陰野球大会 (5校)
北陸地方	明治44年 明治34年	四高主催、北陸関西野球大会 新潟県大会 (4校) 長野県大会
九州地方	明治36年	五高主催、中等野球大会 (4校) 明治専門主催の大会
東北地方	明治33年 明治44年	秋田県下中等野球大会 二高主催の大会 (7校)

( ) 内は参加校の数である

[菊幸一：近代日本におけるプロフェッショナル・スポーツの成立形態とその社会的条件に関する研究  
—プロ野球の成立を中心にして—教育学博士論文，筑波大学、1988、P.55より]



## ②早稲田大学野球部の略史と野球観

慶応義塾大学が、明治18年(1885)「慶応倶楽部」として野球を始めたのに対し、早稲田大学で野球が開始されたのは明治34年(1901)とされる。①当時の中等学校野球界に述べてあるように明治29年以降、東京府下及び関東、東北さらに関西の中学校において野球は盛んに行われるようになり、一高対三高の定期戦をはじめとして学校間での組織化が進み、定期的な試合や数校による大会が催されるようになっていった。東京府下でも郁文館、正則、東京高師附属、独乙協会、明治学院、慶応義塾、青山学院の各中学校は一高をその頂点とした野球界でしのぎを削っていたのである。そのような状況下、明治34年、東京専門学校を翌年に、早稲田大学と改称する準備として高等予科の新入生を募集したところ、新入生の中にすでに郁文館中学校野球部で名を馳せていた大橋武太郎がいた。このほか、丸山二郎(麻布中)、西尾牧太郎(青山学院)、藤岡好春(府立一中)、遠藤市次(水戸中)、鈴木豊(水戸中)、河端広益(城北中)、清水春雄(神戸一中)などいずれも中学で野球をやっていた選手がおり、大橋武太郎を中心にして「チャップル倶楽部」という集まりをつくって野球をやりだしたのがはじめである。<sup>50)</sup>当初、「早稲田中學の少年たちと戦ひ、毎度十餘點差で敗北する所から、中學生は「専門學校の弱助弱助」と冷笑した」<sup>51)</sup> くらいの野球の技術であったものの明治34年の秋10月にははじめて中学校以上の学校との対抗試合として「當時一高を除いては最も實力をもった強チームであった」<sup>52)</sup> 学習院と対戦、7対6で勝利する。この結果をふまえ当初からチャップル倶楽部の練習や試合をよく見に行ったり、会合にも参加し、事実上世話役のような立場であった安部磯雄は、マネージャー役の弓館芳夫(号を小鰐)と共に明治35年8月に早稲田大学野球部を創部、安部磯雄は野球

部部長に就任したのである。安部は、同志社大学卒業後同志社大学で教師をした後、岡山教会での牧師を経て、アメリカのハードボード神学校に学び、ロンドンでは社会制度を研究、ドイツのベルリン大学での留学を経て、同志社大学の教師に復帰、そして明治32年（1899）東京専門学校（現早稲田大学）の講師に招聘されていた青年教授であった。彼は、米国留学中庭球に熱中していたため、野球部部長に就任する前には、柔道、剣道、弓道、庭球の各部を統括する運動部長に推されてもいた。<sup>53)</sup>

学習院を破り、早稲田大学として、野球部の強化にとりかかろうとした安部磯雄は、大隅総長に渡米して国際競技として野球の試合をしたい旨と、運動場創設について大隅総長に依頼している。「…明治三十四年の秋、学習院を破って大いに気炎をあげた野球部には、まだこれという運動場がなかった。私は、いろいろ考慮の末、大隅総長の助力をこう外はないと考えた。当時、総長は邸宅の付近にある所有の田地を埋め立てておられたので、私は一日総長を誘うて墓地の一部を野球運動場として貸与されんことを申し込んだ。それと同時に私は外国における国際競技の有様を詳述し、もし早稲田野球団が将来覇権を握る日來たらば米国遠征を試みて年来の理想を実現したいという希望のあることを熱心に説明した。総長は大いに喜んで、必ずその目的達行のために助力すべきことと運動場の新設についても学校当局者と協議すべきことを快諾された。これがため、私は確信をもって選手たちに米国遠征を約束することができたのである。…」<sup>54)</sup> と、運動場を建設して、真に野球に力を入れていこうと決意したこと、さらに野球部が覇権を握った後、海外遠征をして国際試合を行う計画を持っていることを明らかにしている。このように野球部強化に本腰を入れはじめた安部磯雄は、明治34年の冬休みを利用して、鎌倉師範の校庭を借りて初のスプリング・キャンプを行った。



このとき、郁文館中学校学生押川清と青山学院の橋戸信と知り合い早稲田大学に入学し野球部に入部するよう話をしている。<sup>55)</sup>そしてこのふたりが創部間もない早稲田大学野球部の精神的支柱となり、また橋戸は万朝報、朝日新聞に入社して全国中等学校優勝野球大会をはじめ、学生野球、社会人野球さらにはプロ野球に到るまで野球についてメディアの側から言及した人物である。また押川清の兄は武俠小説家、冒険小説家である押川方存（号を春浪）で、この後、野球について多くの言説で野球界に影響を及ぼした人物である。橋戸信、押川清のほか、明治35年には、郁文館中学卒業の戸塚真、水戸中学卒業の柏信次さらに早稲田中学からの太田保などそれぞれ各中学校で盛んにおこなってきた者たちが入学した。<sup>56)</sup>

早稲田大学野球部が創部したばかりのこの頃は、手本として一高をおいていた。例えば、明治35年10月に東京専門学校から早稲田大学に改称する際、様々な記念行事が開かれ、野球部は新しいグラウンドの創設と名実ともに安部磯雄を部長として野球部が創部したことを記念して野球大会を行った際、紅白試合の審判に一高から小林弥之助を招聘するなど一高式の野球を見習っていたのであり、野球観も類似するものが多かったと想像できよう。またこの後、学習院との試合でも一高出身の森山恒太郎に審判をまかせるなど一高流の野球を手本としていたのである。<sup>57)</sup>

早稲田大学は、この学習院戦後、11月に独乙協会中学戦を行い、鎌倉師範学校校庭での冬期練習さらに明治36年に入り夏季休暇には浜松中学校校庭で合同練習をし、そこで浜松中学や東海五県連合中学大会に出場していた強豪愛知一中と対戦し、勝利するなど着々と力をつけていった。さらに、10月10日の横浜アマチュア倶楽部に9対7で勝利するなど創部3年にして長足の進歩を遂げた。そして、11月20日第1回の早慶戦が行わ

れるに至るのである。その経緯について庄野義信編著の『六大学野球全集 上巻』には、次のように書いてある。少し長いが引用する。

「戦機熟すると共に、官學一高が嚴然と斯界に君臨することは、球界のため、後進のため、決して面白いことではないという不満が、私學の人々の間に實を結んできた。野球を私學の手に移し、もっと民衆的なもの、もっと大衆的なものにしたいといふ野望が、漸く識者の間に燃えてきた。特に自由を奠ぶことに厚かった早稲田に於いて、これが甚だしかった。しかしさうするには私學の覇者慶應と握手し、戦いを交へるに如くはない。若しこの私學の二大權威が相搏つに至らば、天下の興味と熱狂は翕然<sup>きふぜん</sup>として二つに集まり、野球は大衆と共に圓滑なる進歩發達を遂げるであらう。かゝる見地の下に、早大野球部の慈父安部磯雄氏は、慶應に挑戦することを快諾され、ここにその使者として橋戸信、押川清の二人が三田山上の萬來舎へ慶應の主将宮原清を訪ねたのであった。當時橋戸信は芝に居住して、休日などには三田のグラウンドでノックバットなどしてゐた関係者から個人的にも私交があり、この歴史的會見は少しも四角張らずに、寧ろ雑談的に進められ、慶應方でも即座に快諾した。第一回戦を慶應方のグラウンドに於て舉行し、其後はグラウンドを交代にして、毎年春秋二回に催し、審判は一高若しくは學習院などの第三者から選ぶ規定の下に、本邦野球有史以來の意義ある握手は結ばれた。<sup>ナンバ</sup>覇者を除いたものであるから、まづ都下第二流同志の試合であつたとはいへ、後年滿天下の好球家を早慶いづれかに折半する熱狂的野球戦の幼芽は、既にこの時に植ゑられたのである。」<sup>58)</sup>ここにみられるように、特に早稲田大学は、官學一高のもとにある覇權に対し私學の早慶兩大学が定期戦をし、大衆と共に野球の進歩、發達を遂げることを目指して早稲田大学が慶應に挑戦するという形で早慶戦を催すにいたつたのである。



この一戦は11対 9で慶応に凱歌があがったが、早稲田は益々実力を高めていった。そして翌明治37年5月27日に学習院に14対 7で勝利した後、6月 1日には一高に 9対 6で勝ち、その3日後の 6月 4日の第 2回早慶戦で13対 7の勝利を得ていよいよ早稲田は球界の覇権を握ったのである。(その後の学習院との復讐戦は、7月20日に行われたが、3対 2で早稲田が勝ち、又、秋、10月30日の第3回早慶戦も12対 8で早稲田が勝利し、その覇権を確固たるものにした。)<sup>59)</sup>

このような早稲田大学野球部の覇業確立の底に流れていた精神は、何だったのだろうか。ひとつには、一高野球に範をとった一高精神である。マネージャーの弓館小罌は、明治37年8月いっぱい夏季キャンプを行った茨城県竜ヶ崎中学校校庭での練習を次のように記している。「意気軒昂たる選手はますます練習に努力し、炎天の下に自ら運動場の草をむしり、土をならすほどの熱心さをもって奮励した。もちろん夏休みにも大抵郷里に帰らず、昼ごろからテクテク運動場に出かけ、時々土手の上にこしらえたよしず張りの日避所に入っては休み休み、驚くべき練習をした」<sup>60)</sup> ここにあるように早稲田大学野球部発展の中心には、猛練習があったことがわかる。そしてこのような猛練習を支えた中心的な支柱はやはり、一高精神にみられる修養・鍛錬の精神と、勝利のための猛練習の野球観である。平野正朝(明治38~42年)は、「野球を以て玩弄的一遊戯とせず、またこれに職業的傾注を与えず、常に心志の鍛錬を励み、気品の高潔を計るの具となし、以て純粹なる日本的野球を祖述せざるべからず」<sup>61)</sup>と述べているし、伊勢田剛(明治40~44年)は、「健全なる精神は健全なる體軀に宿る…(中略)…享樂的性質の殆んど全體を覆ふものは競技的性質にはかならないのである。…(中略)…野球の生命は男らしさの外に求めることはできない。…(中略)…要する

にその終極とするところは吾等が品性の完全なる發展に外ならない…

(中略)…一切の男らしさ真面目さは元より、發瀾たる青年の元氣、不撓不屈の意志、吾等の品性に無限の光輝を放たしむべき…(中略)…如可なる場合に於ても吾等が青年であること、而も修養の途にある青年であることを忘却してはならぬ」<sup>62)</sup>と述べている。ここには、修養途中の青年が、男らしく、元氣と不撓不屈の意志で野球を行うことを重視する考え方がみてとれよう。早稲田大学野球部にあって、特に現役選手達は、前時代の一高式野球の「精神」—元氣の精神たる校風発揚の場として野球を行い、精神修養を踏まえた鍛錬としての猛練習をする—を引き継ぎ、球界での覇権獲得のため猛練習していたといえるのである。しかしながら、「何が何でも勝つ」あるいは、「負けたら恥」といった言説は、現役選手にあっても見あたらない。これは次にあげる安部磯雄の思想に由来するものと思われる。

では、早稲田大学野球部を創部時から部長として支えてきた安部磯雄はどのような野球観、スポーツ観をもっていたのであろうか。安部磯雄は明治34年(1901)創部したばかりの野球部が学習院を破ったとき即座に大隈総長に国内で覇権を握ったら渡米して国際競技を実現したい旨を打ち明けていることは前に述べたとおりだが、これは前時代の一高精神における「必ず勝たねばならない」とか「負けたら恥」といった勝利至上主義の観念からでてこない発想である。アメリカ、イギリス、ドイツで留学をしていた際この国際競技について感じたことを次のように述べている。「余が米國の滞在を終りて英國に渡りロンドンに到着したのは明治廿七年七月十二日であつた。…(中略)…其の年に於てはエール大學が合衆國東部に於ける諸大學の中のチャンピオンとなつたので終に大



西洋を越えてオックスフォード大學と試合をなすに至ったのである。余は深く其壯舉に感動されて何時かは日本に於いても斯の如きことをやってみたいと思ふに…（中略）…先ず西洋人と競技の出来得るものは野球…（中略）…其處で余は早くも野球に依って對外試合の目的を達したいと思ふた。…（中略）…對外競技は勝敗そのものよりも競技其自身に少なからぬ価値があると余は信じている。今日は何事でも萬国的に經營していかなばならぬ。…（中略）…若し早稲田の選手の渡米が、幾分でも斯の如き膨張的精神の澆揚に資する所があるならば、余の目的は達したのである…」<sup>63)</sup> ここからは、合衆国のエール大学と英国オックスフォード大学との対抗試合に深く感動したことで自分も野球により国際競技大会を開催したいと思ったこと、さらに安部が野球の試合において勝敗そのものよりも競技それ自身に価値をおいていたことがわかる。この「勝敗そのものよりも競技それ自身に価値をおく」という考え方は、彼がクリスチャンであり、国際平和主義思想をもっていたことに起因している。彼は、『国際競技会の意義』と題して雑誌『運動界』で次のように述べている。「国際運動競技は、最も意義深き国際的接触である。世界の各国民は今日尚ほ言語や習慣を異にして居るけれども、運動競技に於いては完全に共通点を見出すことができる。音楽は或程度人類共通の言語であると言ひ得るかも知れぬ。然しこれを運動競技に比すれば同日の論ではない。運動競技はその共通性に於て殆どエスペラント語に比すべきものである。野球にしても庭球にしても兎に角其競技の規則を呑み込みさえすれば、それが同国人たると否とを問わず充分にこれを享受することが出来る。人種を異にして言語を異とすれば必ず兩者の間に多少の偏見が生ずるのである。日常の交際に於ては充分解けている如くに見えても、尚ほ其の間に打破ることの出来ぬ障壁があることは何人もこれ

を拒むわけにはいくまい。要するに何れの国民も多少に関わらず優越感を有しているのであるから、他の国民を幾分か侮蔑する傾向を有している。これらは確かに国際平和の実現を妨害する大きな原因ではないかと思う。然るに国際競技は此偏見を打破するのに最も有力である…」<sup>64)</sup> ここには、国際競技が共通の言語として各国間の偏見を打破し、国際平和の実現のために非常なる貢献をするという安部の認識がみられる。早稲田大学野球部が覇権を握った後、米国遠征しようと考えた安部の思想＝「国際競技というものには外人の技術を学ぶ、外国の風光、人情に接する、人種的偏見をなくし、排日感情を徹廃し世界平和に役立つといった利益がある」<sup>65)</sup> という国際平和主義の思想は、すでに明治41年(1908)からあり、「若し世界各国が武力の競争を止めて運動競技に力瘤を入れるようになれば人類の幸福は如何に促進されることであろう」<sup>66)</sup> と国際平和に貢献する運動競技に大きな期待をもっていたのである。

こういった国際平和を希求する運動競技の実現といった思想の上には、「必ずや勝たねばならない」といった勝利至上主義の考え方は生まれえなかった。安部は、野球における勝敗観について次のように述べている。「勝敗は、勿論競技運動の要素ならんと雖も、運動の面白味は技術の巧妙にありて、必ずしも勝敗にあらず」<sup>67)</sup> とした上で「因襲的に生ずるところの勝負の観念を少し薄からしむるの要がある。」<sup>68)</sup> と一高時代以降勝負にとらわれすぎる野球の試合に対する観念を戒めようとしている。この考え方は、安部がスポーツ全体についても抱いているものであり、「運動家は敗けても不名誉ではない。むしろ審判への不服とか、敗けたあと負け惜しみをいうといったことの方が男子の恥辱である。選手も、またそれを応援する学生もあまりに勝敗にこだわりすぎる。技術の巧妙を見て楽しむという余裕がない」<sup>69)</sup> と述べていること、さらに



「選手制度というものは自然に伴うものであるが、競技運動は趣味が大切であり、勝敗にばかり心を勞してはならぬ。全力を尽くして勝敗を争うべきであるが、日本では結果はどうでもよいという道徳思想が欠落している。」<sup>70)</sup> といった言説にも勝敗にこだわりすぎる日本の思想に対する抵抗がある。安部は、勝敗に固執すること以上に、スポーツにおいてフェアプレイの倫理と運動家としての品性や人間性を尊重した。彼は、「公平なる競技」と題して雑誌『運動界』上で「何人もスポーツに関して第1に気付くことはフェア・プレイということがその中心思想になっているということである。私はかりにこれを公平なる競技と訳してみたが、まだなんとなく物足りないような気がする。英国のフェアは、卑劣とか下品とかいうことと正反対である。公平なる競技という場合には、晴れ晴れしい（晴天というがごとき）とか上品とかいう意味をも併せ含んでいるものと解してもらいたい。公平なる競技ということは単に競技者個人の一挙一動のみではなく、競技団体はもちろん応援団にまでも及ぶ問題である。

スポーツの原則は実力の競争ということにあらねばならぬ。故に実力以外の手段によりて勝敗を争うがごときは全然公平なる競技の精神に違反するものである。運動家の中には今日なお応援団の必要を信じているもののあることは実に驚くべきことではないかと思う。負けた者は更に一層の努力をすればよろしいのであって、勝敗など眼中におく必要はない。ただ自ずから堂々として公平なる競技をやったか否かを考えればよろしいのである。フェア・プレイの精神は社会生活の全部に適用すべきものであるから、運動家はまず自らこれを体験し、これを全生涯に実現しなければならぬ。」<sup>71)</sup> と述べ、フェア・プレイの精神、堂々と公平なる競技をすることが勝敗以上に重要であり、かつ、運動家は品行方

正であり、不節制をせず、品性をもつ人格として社会的に認められることを重視するのである。「医者の不養生ということがあるが、これと相並んで運動家の不節制ということがある。病気を治療する医者が不養生をやり、健康増進を目的の一として居るべき筈の運動家が暴飲暴食を平気であると言うのは、あたかも宗教や道徳を説く者が不品行をやるのと同じく非常な矛盾である…」<sup>72)</sup>と述べたり、また、「私は野球選手が優秀なる技量を修練するためには単に品行方正であるのみならず、禁酒禁煙の実行者たらんことを勧告する。」<sup>73)</sup>と述べているように競技している際のフェア・プレイの精神と同様スポーツマンは生活全般、生涯にわたり品性をもたなければならないとする。このような安部勝敗観、倫理観について当の安部磯雄自身は、日本の武士道の精神と同じものだと考えていた。安部は、「武士道の精神から言えば、倒れたる武士が起き上がるのを見て始めて仕合を継続すべきである。フェア・プレイの精神も之に他ならぬ」<sup>74)</sup>とし、「英米人の所謂フェアプレイなる語も歸着する所は我武士道と異なる所はない」<sup>75)</sup>とするのである。従って、「必ずしも勝敗にあらず」という野球観を持っていたのであるが、フェア・プレイや運動家としての品性や人格を日本武士道とのアナロジーで考え、それらを獲得すべく精神修養のために野球があると主張したのである。この点について安部は『野球の三徳』として次のように述べている。「體育が精神修養に大いなる感化を及ぼすことは誰も疑ふことは出来まい…（中略）…體育の極致を言へば必ず知育及び徳育と併立すべきもので學問に鈍きものや品行の修らぬものが第一流の運動家になれる筈がない。…（中略）…運動に忠實なるものが品性の修養に注意すべきことは勿論のことである。…（中略）…野球部の三徳といふことに就いて少し詳しく陳べて見たい。若し支那的にいえば野球は吾人に智仁勇



の三徳を教ゆるものである。…（中略）…身體の作用が少々鈍くても心が敏捷に働けば、<sup>たしかに</sup>己が缺點を補ふことが出来る。…（中略）…身を殺して仁を為すといふことが最も美<sup>うる</sup>はしき道德であるとすれば野球も亦吾人に仁を教ゆるものと言ふべきである。…（中略）…野球に勇氣を要することは非常である。遊戯中に負傷することは度々あるがこれはさほど恐るるには足らない。…（中略）…余は數年來野球選手に精神修養の大切なことを話して置いた。其要點は二つであつて、第一は競技中最後に至るまで同一の熱心を持って戦ふべきこと換言すれば形勢我に不利なる場合にも決してヤケにならぬこと。第二は勝敗に餘り重きを置かぬこと即ち敗北したる場合に悔し涙を流すとか非常に塞ぎ込むとかいうことをしないことであつた。…（中略）…要するに平常の心掛けが宜しければ野球は精神修養に非常なる効力がある。若し此遊戯の眞精神を學ばずして唯其未技にのみ耽<sup>ひた</sup>る人があらばその人は決して野球の妙手となることが出来ないのみならず或は劣等なる品性の人となるかも知れぬ。」<sup>76)</sup>という。

安部磯雄は、勝利至上主義の思想にとらわれず、自分の海外留学の経験などからフェア・プレイや運動家としての品性、人格を第一に考えるに至ったが、この精神を武士道とのアナロジーで考え、修養の場として野球をとらえているのである。この考え方は、早稲田大学野球部の現役選手たちにも見てとれるし、後に記述する慶応義塾大学野球部の選手たちの言説にも「正々堂々」「ベストを尽くす」といった言葉が見られるようになる。また、初期の頃から早稲田野球部の世話をしていたこの安部の思想は、その野球観を核とした選手が卒業後、全国中等学校優勝野球大会の大会運営、競技方法、試合の批評、中等学校、後の高等学校野球界のあるべき姿等を記事にし新聞や雑誌に掲載して、高校野球につい

ての神話形成の中核的存在を担うようになるのである。橋戸信（号は頑鉄）は、「早大を卒業するとそのまま北米の加州サンノゼに飛び、そこから、アメリカの拳闘の原稿やら、ロンドン・オリンピックの原稿などを送って、当時スポーツ紙の色のあった冒険世界や武侠世界などにのせたり、スポーツ通信の草分けともいえるべき人である。」<sup>77)</sup>とされ、その後も万朝報、そして朝日新聞が全国中等学校優勝野球大会を計画すると招かれて朝日の記者となって大会運営や中等野球について神話を形成する存在となっている。このように、スポーツ記者としてスポーツ・ジャーナリズムの側に位置し、まさに、日本における野球の神話を形成したといえる者には、上記の橋戸の他、マネージャー役の弓館芳夫（号を小鰐）（明治38～大正7年まで万朝報記者であり社会部の編集に従事しながら運動部記事を担当、その後、東京日日新聞運動課長）や、明治40年から42年まで早稲田野球部に席を置いた飛田忠順（号を穂洲といい、博文館の『中学世界』、『運動世界』さらに報知新聞社でスポーツ記事を書き、その後押川清の兄押川春浪が主幹していた『武侠世界』の編集長を経て、大正7年（1918）読売新聞社に入社し、日本の野球界の中心的人物として、野球及びスポーツの社会的イメージをメディアの側から形成した）などがいた。これらは大正4年（1915）に始まる全国中等学校優勝野球大会の神話をメディアの側から形成していったのである。さてそれでは、慶応義塾大学野球部の野球観はどのようなものであったか、若干の歴史を踏まえながら記していこう。



### ③慶応義塾大学野球部の略史と野球観

早稲田大学よりかなり前の明治18年(1885)頃、慶応義塾大学は、村尾次郎氏らの熱心な斡旋と努力で新橋倶楽部の指導を得つつ、溜池倶楽部に出入りしながら何人かの同好の士が三田山上の稲荷山グラウンドで野球を始めている。この「慶応倶楽部」は、明治26年(1893)慶応義塾に初めて慶応体育部が生まれるや、ボート部、柔道部、撃剣部などと共に学校に公認され、費用も多少ではあるが(一ヶ月僅か4円)慶応義塾大学野球部として正式に発足した。初代の選手は、石川安吉、藤田敏夫、三上敬長、平沼亮三らであり、その後宮内多一郎、源川英太郎、石田篤太郎らの新入を加えて、正則中学、独逸協会、明治学院、青山学院などと接戦し、当時覇権を握っていた一高を明治26年に一度敗ったが、すぐ次の一戦であえなく復讐されてしまったとある。<sup>18)</sup> だが、当時の状況は「その頃からさしも文化的であった三田も、漸く泥まみれのシャツで猛練習を開始し、ねぢり鉢巻、脚絆草鞋いてたもの扮装で横濱外人團と試合をするやうな有様であった。——かくてチームは着々と底力を備へ、一高にこそ勝てなかったが、當時の私學野球團を牛耳り、隆々たる勃興の氣運を抑へつゝあった。」<sup>19)</sup> というような私学中学、高校の野球部を相手にしてその猛練習の成果を見せ、一高に次いで、一高を頂点とする野球界に存在していたといえるのである。こうした中、明治34年(1901)には、東海道遠征を行い、横浜外人アマチュア倶楽部、静岡や名古屋の各中学チーム、そして最後に愛知一中とも対戦している。一高は当時その覇権を握っていた自信のためあまり対抗試合をせず、他の学校が「練習あまだくくだされたく試合許諾報下度」という欺願書を提出し、野球を教えてくれる先生に対する弟子の礼をもって対以しなければその練習試合さえできなかった状況にあった。<sup>20)</sup> こうした中で、一高を倒さんとする府下の中学、高校

に混じり、また野球の盛んで一高の精神を受け継いでいた愛知一中などのある東海地方にも遠征した慶応義塾も、他校と同様、猛練習の一高精神とその底に武士道の精神が確立していたのである。慶大の名選手櫻井  
彌一郎（上田中学出身、明治35～39年）は、野球は「体智徳の三者の修  
養に大いに貢献する。一致団結の徳、自己を犠牲にして他を利する徳、  
公衆の前に立って正々堂々の襟度を養成する大和民族の精華ともいうべ  
き武士道を具備している。国家の振興、国民の元気、校風の振興がその  
運動場よりくる。対抗試合といえは校風と校風の競争であるから選手た  
るものは技術以前にもまた堂々たるところがなくてはならぬ。選手は実  
に自校の名のために奮戦するもので、一度事ある時に当たっては全校を  
傾けて選手のために後援せねばならぬ。地方の中学では選手に対して冷  
々たる、態度をとる教師が往々見られるが、なぜ学業と同時に体育を推  
奨し、全校の志気を鼓舞し、校風を振興することに努めぬのだろうか。  
試合に臨んだら勝つ、負けるものかの概をもって戦わねばならぬ。而し  
て試合を通じて最も必要なるは執拗と冷静である。これらをもって自分  
のベストを尽くして戦わねばならぬ。例え技量の上、得点の上で敗れた  
りするも正々堂々自己の取るべきところを取り、爲すべきところを爲し  
たとすれば即ち、もっと価値ある何物かを得たものといわねばならぬ、  
諸君これが真正の勝利であるまいか。平常の練習をなす時の心掛けには、  
熱心ということが最も必要条件である。真面目にせねばならぬ。」<sup>11)</sup>  
と述べているし、青木泰一（大垣中学出身、明治35～39年）や神吉英三  
（慶応普通部出身、明治38～42年）も次のように日本固有の武士道の精  
神や精神修養としての野球を強調している。「勝敗を考えてはいけぬと  
いうのは偽善者の真っ赤な嘘である。やれバントだサクリフェイスだと  
研究する、ピッチング、バッティングと頭をひねる。これ皆、野球術のた



めだ、修養のためだというものの、その実試合して勝ちたいためである。  
.....  
もしこれが日本固有の武道試合のように正々堂々と男らしく勝って誇ら  
.....  
ず敗ればますますその武を練り、……（オックスフォードやケンブリッ  
.....  
ジのように）学校を代表して紳士らしく試合をしたならば、（学校の）  
.....  
良好な気風を養うにいかに力あるか」<sup>81)</sup>と青木泰一は、日本の武道に  
見られる正々堂々男らしく戦い、武を練ることで精進し、気風を養うこ  
との重要性を強調している。また神吉英三も、「……はなはだ寒心すべ  
きことは、（野球が）驚くほど華美になって、プレーヤーが軽佻浮薄に  
.....  
なったことである。（野球は）精神教育が主であるので技術が末で気が  
.....  
本である。ベースボールで本当に遊ぶという心掛けとそれから自分の学  
.....  
校の責任をも思わなければならぬ。故にどこまでも正々堂々と最後まで、  
.....  
即ちもう負けるということはわかっていても、男らしくベストを尽くし  
.....  
て（学校を傷つけ恥ずかしめないよう）行わなければならない。審判官  
は神にして犯すべからず。日本人の癖として、ナニそんなのは少し負け  
てやれなどと間違いがあっても妙なところに俠気を出しがちであるが、  
それは武士道でも悪いところであろうし、またかえって先方に対し失礼  
に当たることである。」<sup>82)</sup>と精神修養の場として野球を捉え、武士道  
のごとく男らしくベストを尽くして戦うこと、気持ちが必要であると説  
いている。

以上のように、慶応義塾大学においても早稲田大学と同様、一高の  
精神野球を下敷きにして、「正々堂々」「男らしく」「元気」に戦う  
「気」、「精神」を「修養」する「武士道」として野球を行うという観  
念がみられる。ここには、一高時代にあった「負けたら恥」「何がなん  
でも勝つ」という勝利至上主義よりも「ベストを尽くす」「紳士らしく」  
「男らしく」「正々堂々」と戦うことが、「真正の勝利」であるとする

価値観に重きが置かれている。

このような、早慶両大学の気質は、地方の中学校へもコーチを派遣することで広まったと考えられる。表3-2. は明治42年（1909）の早慶両大学の地方中学への野球コーチ割であるが、各大学選手の故郷にある中学などを中心にかなり広い範囲で大学チームの選手が指導を行っていたことがわかる。

表3-2. 明治42年早慶両大学の地方中学への野球コーチ割

早稲田大学	新発田、龍ヶ崎中学	飛田、大井
	札幌、松本、会津中学	伊勢田
	会津、盛岡中学	薮子内
	浜松、山陰中学	山陽、松田
	三重第二中学	深堀
	岐阜中学	小川、長屋
	盛岡中学	西尾、野々村
	愛知一中	中野
	長崎中学	三神
	柳川中学	石橋
慶応大学	安積、下妻中学	高浜、亀山、大橋
	前橋、庄内中学	亀山
	信越方面	高浜
	大館、秋田、小樽中学	佐々木、菅瀬
	松江、飯田、諏訪中学	阿部
	津、上田中学	小山、町野
	木更津、佐原、宮津、岡崎、広島中学	村上、箕輪
	野沢、飯山中学	奈良崎、沢原
	浜田中学	神吉、肥後
	久留米中学、久留米商業、新潟、長岡中学	肥後

〔横井春野；日本野球戦史，日本書院，1932，p. p. 126-128.〕

#### ④早稲田大学野球部の周縁

これまでに見たように、早稲田大学、慶応義塾大学野球部の現役選手並びに早稲田大学野球部を当初より支えた安部磯雄の精神は中等学校野球界に影響を与え、全国大会開催にあたってその大会のイメージ、神話を作り上げる重要なファクターとなった。しかしながら以上のほか、早



稲田野球部の初期において中心的存在であった押川清の兄、方存（号を<sup>まさあり</sup>春浪）のように日本武士道<sup>しうど</sup>の精神による野球の発展を唱え、執筆によって野球界のあり方を説いていったものもある。押川春浪は、明治38年（1905）に出版された橋戸信著の『最近野球術』の序文で、「特に思ふ、日本は武の國也、古來武を以て國を建つ、今日柔弱なる似非文明の風吹きすさぶとも、焉んぞ建國の精神を没却すべけんや。……（中略）……世界に比無き日本武士道は、一面に於いては精神修養の産物也、一面に於いては練武鍛勇の産物也。實に練武鍛勇の業は、當世の黄金崇拜者流の眼には、如何とも馬鹿らしく見ゆるならんも、武を練って而して體力を鍛え、體力を鍛えて而して精神を修養す、之れに智力を加へば、天下又た何者をか恐れん、日本武士道の由來する處茲に在り。徒らに練武鍛勇の業を嗤ふは、日本武士道の由來を嗤ふ所以と知らずや。……（中略）……」

……此技一たび日本に來る、我等眞に日本武士的精神を以て此技に對せば、其體力を練り精神を鍛ふるの點に於いて、日本古來の武技に多く遜色あるを見ず。特にベースボールに至つては、之れ實に文明的武技にして、又た武士的競技也。剛猛にして果敢、活達にして敏捷、機智を要し、奇謀を要し、遠識を要し、膽勇を要す。技其の奥妙に至れば、恰も劍客、電光影裏春風を斬るに異ならず。」<sup>44</sup>と述べ、野球が日本武士道の精神修養や練武鍛勇の心掛けで行うものだと考えていたことがわかる。そして『月刊ベースボール』創刊号には、「大日本的ベースボール」として、「野球は元來米國の國技であるが、……（中略）……一旦その技に交渉すれば其すべての物を咀嚼し分析し、自家藥蘊中のものと爲し、再び之を外界に示すに、全然其の趣を異にせる、所謂日本人式なるものとして現し得る、……。我輩は斯くして期年ならず、我邦野球術が全然舊態を脱し、純日本武士道的野球術が、遂に世界の覇者たらんことを期



待するのである。……」<sup>15)</sup> と、日本武士道を基底にした日本独自の野球の創造、発展を期している。更に、押川春浪は、『野球を武道とせよ』と題し、「余輩は彼の勇壮なる野球をば一遊戯と目する能はず、外國に於いては如何に取扱ふかは知らねど、日本に來りし以上は、日本武士的精神を以て之れを同化し一の武道として見ざる可からずと思考す。……

(中略) ……野球を爲すは何んの爲か、強壮なる身體と勇健なる精神を養わんが爲に外ならざるべし。何んの爲に強壮なる身體と勇健なる精神を養ふか、外なし、將來國家に貢獻せんが爲なる事を思はざる可からず。……」<sup>16)</sup> と述べており、ここでも日本の野球が独自の武士的精神で行われ、強い身体と勇健なる精神を養って、将来國家に貢獻すべきであるのだと主張している。押川春浪は、東京専門学校を卒業後、武俠小説家や冒険小説家として活躍していたが、野球を主としたスポーツに多大なる関心を与せ、『冒険世界』（明治41年、1908、博文館発刊）や『武俠世界』（明治45年、1912、武俠世界社発刊、押川春浪自らが主幹し、飛田穂洲のほか早稲田大学庭球部で飛田が水戸から出てきたとき下宿で同室だった針重敬喜、中沢臨川らもスポーツについて執筆していた）の雑誌において多くのスポーツ記事を掲載していた。彼はまた中沢臨川（工學博士、評論家）と共に「早稲田系のスポーツマンを中心とした極めて豪放快濶、楽天安だろいの自由でロマンチックな集まり」<sup>17)</sup> とされた「天狩俱樂部」を組織し、早稲田大学野球部を卒業した押川清や橋戸信ほかOBたちが顔を揃え、野球部を中心とした早稲田運動部OB会のような雰囲気を持った集団を形成する。そして、同俱樂部は、「（早慶戦が応援団の過剰な応援と行動で社会的に問題となり）明治三十九年の早慶戦中止から四十三、四年ごろの野球界というものは、実に一大危機に瀕していた。平生応援団問題に手こずっていた各地方の中学校長などは、



早慶戦中止をいい口実にして盛んに野球抑圧をやり出し、対抗試合の禁止、連合大会の廃止など至るところにこれを見るありさまとなった。

そのまま学生野球の元祖たる一高の校長新渡部稲造が、野球反対論を唱えたのもその前後である。……」<sup>81)</sup> という時期に様々な野球を中心としたスポーツ界活性化の計画を次々に打ち出していったのである。以後、飛田穂洲の『野球生活の思い出』から抜粋していくと、<sup>82)</sup> 第一に、早慶試合の復活の前提に、これに準すべき大試合を行って野球熱を昂進せしめんとした。これが東京倶楽部対慶応大学（早慶戦中止後、天狩倶楽部を中心とした早稲田、慶応の野球部OBが東京倶楽部を組織し、様々なチームと対抗試合を企てており、この対慶応戦は往年の早稲田の選手をずらりと揃えていて、「ともかくも早慶戦を思わせるようなゲームを仕組んだのであるから人気も沸き、場内も殺気立った。」<sup>83)</sup> の試合となって現れ、明治42年（1909）4月25日満都の人気を羽田に吸収するに至ったこと。第二は、頑迷な中学校長の啓蒙を策し筆に口に野球反対校長を痛罵し、中学野球大会の範を示すべく東京府下連合大会を開催したこと。（武俠世界社主催で明治43年（1910）東京府下中学野球大会を開催している）この大会を契機に、天狩倶楽部の大村花和尚の尽力で東京中学連盟が創設され、昭和3年（1928）4月19日にはリーグ5周年記念会を青年会館にて開催し、集まった中学野球選手は約200名に達するに至っている。第三は、日本運動倶楽部を組織し、当時の内閣諸大臣を始め、その他朝野の名士数百名を名誉会員として大いに野球の宣伝を行いながらスポーツ界全体の発展に貢献したことである。日本運動倶楽部会長には、押川、中沢が尾崎行雄を推し、交渉して承諾を得、副会長には法学博士の和田垣謙三を推挙し、この運動倶楽部が中心となってストックホルム・オリンピック選手選定競技会を羽田のトラックに催し、三

島弥彦、金栗四三を選出したのである。単に野球に限らず、日本のスポーツ界が国際舞台に出ていこうとする礎をスポーツ選手として活躍していたわけではない文士押川春浪と中沢臨川が早慶両大学の野球部のOB達と連帯して自主的な倶楽部の形から創造していったわけで、野球にかかわらず、スポーツ界全体における早稲田野球部の精神、そこに流れる精神が、武士道の精神の影響を少なからず考えることができよう。そして、第四には、羽田に野球のグラウンドを設け、何人にも自由に使用させて、野球の興隆を図ったことである。「明治年代において、一電車会社が運動場を経営するなどとは思ひもよらぬことであつた。これは臨川居士と春浪漁史が京浜電車の幹部を説伏して設置を急いだもので、よほど口説き落とすまでには骨が折れたことであろう。」<sup>91)</sup>と後に飛田穂洲が言っているように、押川、中沢の営利を越えたスポーツ界全体を見通した計画、実行力を裏付けるものである。

このように、押川春浪、中沢臨川らが中心となった「天狩倶楽部」が早稲田大学あるいは慶応義塾大学の野球部その他運動部のOB達を集めて、自主的、自発的な集いの中で様々なスポーツの企画を打ち出していたのである。明治40年代初期の早慶戦中止、学生野球反対論議に対し、当時の早稲田、慶応義塾両大学のOBが中心となりその野球観を踏まえつつ、東京府下中学野球大会を開催し、スポーツ界全体を広く考慮しながら野球界に影響を与えていたのである。

以上、早慶時代において、前時代の一高精神を引き継いでいたものの、「負けたら恥」、「何がなんでも勝つ」といった勝利至上主義よりも、品行方正で、節制を持ち、品性がある、社会的にも人格として認められることを重視するといった、ファインプレイや運動家としての品性、人間性を尊重する精神が、安部磯雄をその中核として生み出され、



広まった。そしてこのような精神を修養するために現役選手は猛練習を続けたのである。こうした精神性は、早慶両大学のコーチ派遣、あるいは、早慶OBが押川春浪、中沢臨川を中心とした「天狩倶楽部」のスポーツ界での動きに同調し、東京府下野球大会を開催したことなどから中学野球界にも影響を与えた。また、こうした精神を身体にしみ込ませた選手たちは、卒業後マス・メディアの側で仕事をしていく中で、全国中等学校優勝野球大会の神話生成にかかわっていくのである。次節では、全国中等学校優勝野球大会開催にあたってどのような神話生成のプロセスがあったかを述べていく。

## 2. 全国中等学校優勝野球大会開催に向けての神話形成のプロセス

明治37年以降野球界の覇権は、早稲田、慶応の両大学に移ったものの、一高対三高の定期戦を初めとして、東海五県連合中学野球大会、東京府下中学野球大会など定期戦あるいは、上級のナンバースクールや新聞社が主催または後援する大会が開かれ地方ごとに野球熱は高まっていった。しかしながら「當時各大学専門学校を初め野球技は可なり普及してゐたが、まだ權威ある邦文の野球規則さへ制定されてゐない有様で、殊に中等学校の野球界は全然地方的であり、其處に何等の連絡交渉を有せざる状態であつた。」<sup>92)</sup>とあるように各地方ごとに分かれて野球の試合が行われ、遠征試合はわずかしかな行われていなかったのである。

このような状況で、全国的な規模で野球大会をしかも、中学生の大会を開催しようとしたのはなぜだろうか。そして、朝日新聞社が明治44年(1911)『野球と其害毒』と題して学生野球反対の論議を繰り広げたにもかかわらず、主催者として大会開催を行うようになったのはどのような経過によるものなのか。また、朝日新聞社は、この全国中等学校優勝野球大会をどのような意図をもって開催したのか。この節では、現在までの甲子園野球の歴史的な神話性をその誕生の経緯とそこにかかわった人々の思考、観念にスポットを当てて分析する。

### (1) 全国的規模での中等学校野球大会の発案

全国大会を発案したのは、誰がどのような経緯からなのか、その点について、朝日新聞社『朝日新聞の九十年』は以下のように記している。「この大会は、大正四年春、当時優勢を誇った京都二中の先輩、小西作太郎(のち本社入社、印刷局長・取締役・社友)と、高山義三(のち京



都市長・弁護士）らが京都通信部の一花健蔵記者に申し込んだのを機に、販売課長小西勝一・社会課長長谷川万次郎（号を如是閑）らが積極的に村山・上野両社長を動かした。……」<sup>90)</sup> とその経緯を簡単に述べているが、このことについて高山義三は、次のように詳述している。「大正四年の櫻散る、四月の末だったと記憶する。洛南烏羽四塚の母校（京都二中）の一隅で芝生の上に寝ころび乍ら、新選手の練習を見るのに餘念もない時であった。僕は突然「今年の二中は強い。磯野、大原（後の明大選手）の黄金時代までは行かずとも京都の何處にも負けはすまい。一つ今年から京都のリーグ戦でやつて正式に覇者を決めてはどうだ」といひ出した。小西君（小西作太郎）は僕の提議に直ちに賛成した。そこで……（中略）……當時の好敵手京都一中及同志社の二校に先づ交渉を開始して見た。此時京都一中から先輩で代表者として出たのが目下満鐵に居る折田君であり、同志社から出たのは新渡戸博士の秘書として國際聯盟に使した原田君であつたと思ふ。其後間もなく吾等四名の間で大體爭覇戦の下相談も出来た頃であつた。誰れ言ふことなく東海五縣聯合大會にならつて新聞社から優勝旗を寄附して貰ひ、更に他府縣の代表者（當時東海には愛知一中、西には市岡中學や關西學院が光つて居た）とやる試合の仲介をして貰つてはどうだとの意見が出た。そこで僕が交渉の任に當る事になり、先づ僕は最初京都の大毎（大阪毎日）支局に吾等の計畫を持つて出かける事になつた。此時特に僕が大朝（大阪朝日）より大毎を先にした所以は、當時京都の運動界殊に野球に對しては大毎の方がより多く理解がある様に見えたからであつた。ところが意外にも、時の京都支局長花岡敏隆氏の態度は極めて吾等の此計畫に氣乗りがせぬ風に見受けられたので僕は遂に交渉を半ばにして斷然大毎に見切りをつけ、今度は大朝と渡りをつける事にした。

當時大朝は目下本社で校閲部長をして居る一花君（一花健蔵）が京都の運動記者をやつて居られたので、早速同君に話し、同君から更に本社に話して貰つた。處が數日ならずして本社から本社運動記者田村君（田村省三、号を木国）（今は大毎記者）が態々僕々に會ひに來られて、話は急轉直下、單なる優勝旗の寄附だけに止まらず、京都の爭覇戦を朝日が主催し、而も之を全國的に擴大し地方代表者の大々的決勝をやらうといふ事に進む事となり、全く僕等は朝日の意外な乘氣に驚いたが又實に思わぬ拾物をする事になつたのであつた。……」<sup>91)</sup>、少々長い引用になつたが、この高山義三の記述からは、當時、京都で一番の力を持つようになった母校京都二中のために、小西作太郎と共に京都の中学校野球リーグ戦を開こうとし、京都一中、同志社と交渉する。その経緯の中で朝日新聞社の主催で京都大会、更にはその勝者が全国大会に出場して覇を争うというようになったことがわかる。運動記者であつた一花健蔵に高山らが大会の話を持っていったのが朝日新聞社主催の全国大会誕生のきっかけとなつたわけだ。それでは、朝日新聞社側は、この話の後、どのように全国大会開催を決定したのであろうか。高山義三の記述の中に出てくる田村省三は、朝日新聞社が全国大会開催を決定してから中心になつて大会を作り上げた人物であるが、彼は、次のように當時の様子を語っている。「……まことに日に盛んなる野球界の姿を見ている中に、私はいつとはなしに、東海野球大会や大阪の関西野球大会（美津濃主催）のような各地の優勝校を集めて全国大会をやれば面白いだろうと思うようになった。しかし、漠然とただそれだけのことで、どうして実現させるかなどと格別そんなものは考えもしなかつた。盛んになつたといつてもまだまだ幼稚な球界の実情、それにばう大な経費を思うと夢だつた。」<sup>92)</sup> とうっすらと全国的規模での野球大会開催への興味を持って



いたことを明らかにしている。そして、「……阪急電鐵經營の豊中グラウンド（今はない）が出来た丁度大正四年七月初め、當時の阪急のその方面の係りをしてゐた吉岡重三郎君（現寶塚新温泉經營部長）が一日私を大朝社に訪ねて來た、そうして「折角立派な（當時としては確かにそのとおり）豊中グラウンドが出来たのだから、一つこの夏に何かやつて貰へまいか」といふのであつた。

そこで實は私はその以前から多少考へてゐたので「各地の強いチームを選抜して、それを豊中に集めて野球大會をやれば面白いだらう」と答へた……」<sup>96)</sup>と述べている。ここには、京都二中の先輩である高山義三、小西作太郎更に運動記者の一花健蔵らの名前は出てこない。それにかわつて、阪急の吉岡重三郎が、豊中グラウンドを開設し、新聞社に何らかのイベントを開いてくれるよう頼みにきた状況がうかがえる。すなわち、京都で覇を争う大会の話を持ち込んだ一花と阪急電鉄（当時箕面電車）が「阪急の香櫨園、京阪の香里園の後を受けて」<sup>97)</sup>運動が活況を呈するようになった当時、イベント開催のために大阪朝日新聞社を訪ねたのが同じ大正四年初夏の頃であつて、それをかねてから全国大会の構想をうっすらとではあつたが持っていた田村省三が結実させ朝日新聞社の幹部に相談し、決定したのである。田村は、このことについて、更に続けて、「その日、私はすぐ社會部長の長谷川如是閑君に前記の話をして、計畫、概算など私の腹案を詳しく述べた。そこで長谷川部長は早速最高幹部に相談して呉れたが、實をいふと私は經費があまりに膨大——その當時の新聞社として一催し物に一萬圓近くを投ずるといふことは眞に空前であつた——であるため多分相談は纏まるまいと内心考へてゐたのである、ところが思ひきや、三十分の後には「違らう!!」といふことになつた、……」<sup>98)</sup>としており、長谷川如是閑社會部長、村山龍

平、井上精一の両社長が全国大会開催に即座に賛成した様子を見てとれる。しかしながら、朝日新聞社は、東京朝日新聞社が明治44年（1911）に『野球と其害毒』を特集し、学生野球反対の論議を繰り広げていた。これにもかかわらず、急転直下、全国中等学校優勝野球大会を主催することを決めたのはどうしてなのか、次項で分析する。

## （2）朝日新聞社『野球と其害毒』と全国中等学校優勝野球大会の開催

野球害毒論争は、東京朝日新聞社が、明治44年（1911）8月29日より9月19日に至るまで、22回（毎回見開き半ページ）にわたって『野球と其害毒』と題して、野球が有害であると説いたことに起因する。当時既に述べたように新渡来稲造の野球反対論、明治39年秋以降、応援団問題に端を発する早慶戦の中止、各地方の中学校長の野球抑圧論議が盛んになされ、対抗試合の禁止、連合大会の廃止が起こっていた時である。

このような状況下、当時の東京朝日新聞は資料3-1.のような記事を掲載している。<sup>\*)</sup> そこで、野球の弊害について多くの識者の意見を連載すると同時に広く全国中学校及びそれ以上の学校長に対して野球が教育上どのような利害があるかを聞き、144通の回答の結果、野球部の設置のない学校 — 38校、野球部があっても創部間もないものでまだ利害があるかどうか分からない学校 — 9校、これら47校を除いた98校（現文のまま）について以下のように分類している。

利害両方あってどちらともいえないもの — 11校

害あって利なしとするもの — 9校

弊害の方が大きいもの — 64校

利益があるというもの — 7校



これを踏まえて、記事は、「不幸にして吾人が先づ感じた如く、現在に行はれつゝある野球の教育上に及ぼす弊害は、其利益よりも多大である事を確實に證據立つ事に至つたのである。」とした上、有利論と有害論のそれぞれの意見をまとめ、結局、野球は品行学業の点で不良なる者をつくっており、「健全なる身體は健全なる頭腦を造ると云ふ、運動の本旨と全然相反した結果を現はしてゐる。」と結論づけている。

東京朝日新聞のこのような野球有害論を指摘した記事に対し、安部磯

資料 3-1. 『野球と其害毒』

問題の  
害毒論一

### 野 球 と 其 害 毒

（前略）従に本誌は、野球の害毒に就いて、公平なる讀者の意見を聞いて連載すると同時に、又廣く全中學及同僚以上の學校長諸氏に對し、其の経験せられたる教育上の利害に關して數項に別ちて其意見を訊した。

（中略）

併にして既に百四十四通（九月十八日迄の調査）の回答を得て、其中の數者は既に紙上に發表したが、更に其回答の全部に依つて統計的に研究の結果、不幸にして吾人が先づ感じた如く、現在に行はれつゝある野球の教育上に及ぼす弊害は、其利益よりも多大である事を確實に證據立つ事に至つたのである。即ち回答總數の中、運動場の都合、學校の方針にて野球部の設置なきもの三十八校、野球部あるも創立日尚浅くして未だ其利益の程度を知る能はざるもの九校、都合四十七校を省き、残り九十八校に就て之を見るに

<p>利害共に在り其比較程度不明 十一</p> <p>害ありて利なし 九</p> <p>利害利より更に大なり 六十</p> <p>利ある者 三七</p>	<p>大略右の如くに分類される。</p> <p>▲有害論 更に是を細目して見ると、野球に利ありとする論者の類なる者は、第一に運動場として利便なきこと、他の諸設備に於ける事、第二に野球部として適當なる事、第三に校庭なる行事と體操の目的に自らを犠牲にする事等を論ずる事等である。</p> <p>▲有害論 弊害を論ずる論者の説は、第一に大の時間と場所を要するの缺點ある事、第二に學業ある生徒申し及ぶ、従つて學業の成績不良に赴く事、是は各自所屬の學生の成績に徴して明かなる事、第三に學業に於ける成績に於ける品性劣等傾向に類く傾向ある事、第四に數の選手に依りて廣く運動場を占有され、一般學生の運動を妨害する事、第五に近時流行の悪習の如きも、一般學生をして不規則不紅面目に陥らしむる事、第六に身體の發育に不利なる事等、且つ對校試合に當つては一般其弊害が多い、要するに學生の多數として多大の弊害を伴ふと同時に、學校運動としては第一、第四の如き缺點ある事を以つてしてゐる。</p> <p>▲有利論者も轉むる者 野球に利益多しと云ふ論者も、弊害の中成績品行の低下は、是を十分に認識して居る人が多いので回答中</p> <p>品行學業不良 四十七</p> <p>成績品行不良 七十一</p> <p>變化を認めず 七十一</p> <p>と云ふ風に野球を好む結果、健全なる身體は健全なる頭腦を造ると云ふ、運動の本旨と全然相反した結果を現はしてゐる。（後略）</p>
--	---

雄、押川春浪、中沢臨川、河野安通志らは、東京日日新聞誌上で、約半月にわたり對抗し、9月16日には、神田青年館において読売新聞主催で、「野球問題演説会」を開催し、野球の健全性、身体発達に対する必要性

など説いている。また9月23日には天狩倶楽部主催の演説会が開かれ、河野安通志、「弥次將軍」吉岡信敬、飛田忠順、中沢臨川らによって、野球擁護の熱弁が振るわれている。更に10月28日には、廣文堂から安部磯雄、押川春浪が『野球と学生』なる冊子まで出版して野球発達を懸命に説いたのである。<sup>100)</sup>

以上のような野球害毒論争の4年後に全国中等学校優勝野球大会が大阪朝日新聞社を中心として開催されるに至るのであるが、野球有害論を唱えた朝日新聞はどのような解釈をつけて全国的規模の大会を開いたのであろうか。この点について、朝日新聞社は、「運動競技界における最も必要なことは、よき鞭撻であり、監視であり、更によき指導者である……（中略）……明治末年から大正の初頭にかけて、目ざましき勃興の機運に向かひつゝあつたわが運動競技界の實状に鑑み、我が社が事實の報道といふ在來の新聞使命から一步を進めて、積極的に各種の競技會を自ら計畫して又は後援するやうになったのもこの精神から出發したものに外ならぬ……」<sup>101)</sup>と述べ、運動競技の事實報道から一步進んで、運動界の鞭撻、監視、指導役として、運動界を健全なる方向へ導くことを使命とする点を明確にしている。このことは、大会開催にあたって、「……本社はこの大会によって全国的に統一ある野球技の発達普及を計……と共に、技よりも寧ろ精神を主として進むべき学生野球の真価を発揮せしめんと企てたのである。」<sup>102)</sup>というように、『野球と其害毒』の論争で学生野球有害論を唱えていたことに対し、学生野球の精神を大切にし、それを監視、指導する立場で全国的規模の大会を開くに至ったというのである。こうして全国中等学校優勝野球大会は、当初から、朝日新聞社の学生野球における「精神」を中核にして大会が創造されていくのである。野球反対論を唱えていた朝日が、学生野球の精神を尊重し、



その精神に沿って弊害を生じない学生野球界を作っていくことに援助と監視、指導をしようという、いうなれば、大義名文を唱えたのである。

したがって、この「精神」が、後々まで中等野球、高校野球の神話を形成するファクターとなるわけである。それではその「精神」とは何か。

当時全国大会開催に向けて田村省三と共に企画推進役をしていた中尾済は次のように述べている。「……本大会の標語も『凡てを正しく、模範的に』の一語であったが、これは主として本社長村山龍平氏を初め現在の本社専務上野精一氏及び大会創始当時の社会部長長谷川萬次郎氏から我等に興へられた精神で、爾來十四年間、幸にして一貫せるこの意氣と信条とは失はずに終始し得たつもりである。」<sup>103)</sup>ここからは、『凡てを正しく、模範的に』行うことが第一であると本社幹部から申し渡されていたことがわかる。更に、上野精一は、大会誕生当時を振り返って次のように述べている。「……本社が大正四年の夏、初めて全國中等學校優勝野球大会の開催を計畫した時には、計畫者としてこの野球大会將來の隆盛に大きな期待と希望をかけたことはいふまでもないことであるが、  
．．．．．  
それはこの希望を裏付ける強い理想があつたのである。われわれは單に一年に一回開催する野球大会そのものゝ盛行ばかりを願つたのではない。將來野球の競技が広く一般社會に普及すべきこと期待し、これを實現することは、一般青少年の肉體的健康と精神的健全とを併せて獲得する一つの重要な基礎的訓練の方法であると信じたのである、即ちさうあるべきを信じたと同時に、さうあつてほしいと願つたのである。」<sup>104)</sup>ここからわかるように、朝日新聞社は、中等野球に「凡てを正しく、模範的な」青少年の肉體的健康と精神的健全とを獲得する方法であるという意味づけをし、こうあるべきだと信じ、またそうあつてほしいと願いを込めて大会を創造したのである。

野球の一度わが國に來りてより、幾何なるに、今日の如き隆盛を現るに至れるは同族の男性的にして、しかもその興味とその技術とが、著しくわが國民性と一致せるによるものなるべし。殊に中學時代の學生間に最も普く行われつつありて、東海五縣大会、関西大会などをはじめとして、各地にその連合大会の華を見ざるなきに至れり。しかし未だ全國の代表的健児が一場に會して、競ひたる妙技を競う全國大会の能しあるを見ず。本社はこれを遺憾として、ここに左の條件により暑中休暇の八月中旬を以て、全國各地の中等学校中よりその代表野球隊、即ち各地方を代表せりと認むべき野球大会における最優勝校を大阪に招し、豊中グラウンドにおいて、全國中等学校野球大会を行い、以てその選手権を争はしめんとす。

一、参加校の資格はその地方を代表せる各府県連合大会における優勝校たること。

一、優勝校は本年大会において優勝権を得たるものなること。

一、選手は往復汽車または汽船賃は主催者において負担すること。

大正四年七月一日

大阪朝日新聞社

### (3) 全国中等学校優勝野球大会の発足

このような経緯で、田村省三は、大会開催の社告を書き、大正4年7月1日、朝日新聞に掲載された。その社告は、以下のようなものである。<sup>105)</sup>

ここからは、中等学校の学生の大会は、  
「男性的」な野球が「潑刺たる妙技」と  
「地方の代表」としての心意気により繰  
り広げられるというメッセージが読み取  
れる。すなわち、朝日新聞は、全国中等  
学校優勝野球大会開催当初から、「青少  
年の肉体的健康精神的健全を願って大会  
を創り、「純な少年選手の搏撃によって  
のみ醸し出される一種獨特の雰囲気」に共  
鳴せざるはなく、その感激を覺えると同  
時に、これ等の試合をその場限りのもの  
とせず、もつと廣く相手を作つて、より  
高き標準の覇權を争はせたならば、見る

者の興味は勿論、學生野球としての効果も更に高まるに相違ない……」

<sup>106)</sup>と当時、田村省三と共に朝日で大会運営に携わった中尾清が回顧しているように青少年たる中学生の野球として「純粹さ」「潑刺たるところ」を「地方の代表」として見せてくれる全国中等学校優勝野球大会という神話を伝達したのである。

このような朝日新聞主催の全国大会はその後歴史的にどのような神話を生成していったのか、次節で考えていく。



### 3. 全国中等学校優勝野球大会史及び全国高等学校野球選手権大会 史における神話形成

この節では、全国中等学校優勝野球大会及び全国高等学校野球選手権大会すなわち甲子園野球がその大会の歴史においてどのような神話を形成してきたのかを見ていく。その中で、特別、主催者である朝日新聞社や、高校野球連盟がどのように神話を作ってきたかを分析する。

#### (1) 舞台・儀式・「野球大会の歌」

全国大会の舞台となる球場は、初めから甲子園に決まっていたのではなかった。「甲子園」球場が、高校球児あるいは高校野球を観る者に特別の意味を与えているが、その大会の舞台となる球場の歴史を振り返ってみよう。

第一回大会は、豊中球場で行われた。前節で述べたとおり、箕面有馬電車（現、阪急電鉄）側から豊中グラウンドを創設したのでイベント開催を朝日新聞社に依頼してきたいきさつのある球場である。ここで中等野球が行われたことは、箕面有馬電車の創始者たる小林一三が、宝塚歌劇団と並んで、潑刺たるプレイをみせる青少年たちの戦いの場として豊中球場を提供したことになるわけである。しかしながら、この豊中球場は、「せいぜい六〇〇〇坪という狭い敷地で、ネット裏の本都席はテント張りだったが、一塁と三塁にはよしず張りの屋根の木造スタンドがグラウンドと縄張り一本で仕切られ、この収容力はわずか四〇〇～五〇〇名。他は外野で立ち見するというものだ。観衆は七〇〇～八〇〇名ぐらい集まる程度で六日間を通じての観衆は五〇〇〇名内外だった」<sup>10)</sup>といわれており、とても見世物としての野球を観るという舞台装置とはい

えなかった。この豊中球場は、大正6年(1917)第三回大会時に敗者復活制をとったため、5日間で15試合を消化するのにふたつのグラウンドが必要となったことで、わずか2回で中等野球と訣別する。<sup>100)</sup>このことは、小林一三率いる現在でいえば阪急電鉄が中等野球から手を引き、阪神電鉄がその舞台を提供することで象徴的地位を獲得していくことにつながるのである。

第三回大会から第九回まで行われた鳴尾球場は、阪神電鉄沿線にあり、「公式の野球グラウンドはなく、公認競馬場だったが、場内に広い空地があり木造のスタンドもあったので、便宜上野球グラウンドに利用した」<sup>101)</sup>ものであった。しかしこの球場も多数のファンを収容し得る大きな観客席は設けられておらず、「遂にこの第九回大会の准優勝戦の日に至つて、愈よ鳴尾運動場に別れを告げるべく決心しなければならぬ事態が起つた。」<sup>110)</sup>のである。「その日は午前十時から試合を開始するはずであるのに、その二時間も前から観覧席はギツシリ満員となり、殊に右翼後方の隅の邊は、後から来る人に押されて絶えず大波のうねりのやうな動揺を續けてゐたが、時々二三十人づゝ場内に押し出されては来る人は係員が他の場所に案内して整理するといふ風で、兎も角も甲陽中學對立命館中學の試合を開始したところ、その試合の第一回も終わらぬうちに、どうしても支へ切れなくなり、何千人といふ多数の人がドツとばかりに場内に崩れ込んで試合の繼續は全然不可能の状態に陥つて了つた。」<sup>111)</sup>と記録されている。このことから、大正13年(1924)第十回大会より5万5千人収容の大スタンドを持つ甲子園球場に場所を移すのである。

このように球場が変遷してきた歴史は、全国大会が見る者で行う者との分離を押し進め、見世物としてパフォーマンス化していく過程をその

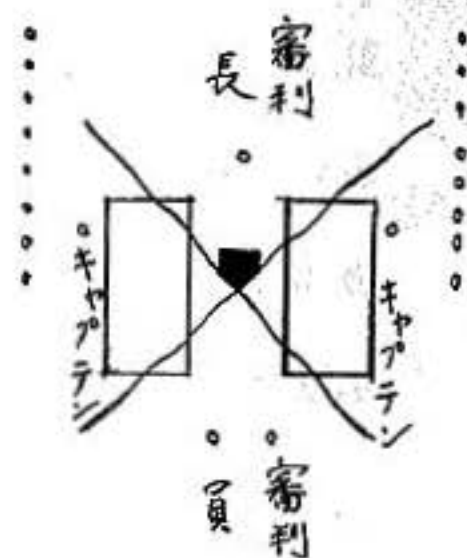


まま映し出している。そのことは、より大きなスタンドを設置していったことに加え、甲子園球場に移った大会から指定席券を発行し、入場料金を徴収するに至ったことで明確になる。全国中等学校優勝野球大会及び全国高等学校野球選手権大会は、たくさんの人を集め、青少年たちが、朝日新聞社の作る神話的形象の中において甲子園という舞台上でブレイや儀式を一所懸命行い、見せるものになったのである。その後大会は、戦後復活第一回大会（通算28回）時、甲子園球場が進駐軍により占有されていたため阪急電鉄沿線の西宮球場で行われたが、次の年には甲子園を再び舞台としている。甲子園球場は、阪神電鉄との関係を含めてその土地の神話ともいえるべき意味を持つが、それ以上に大観衆を収容でき、見世物性を高めるパフォーマンスの舞台としての意味合いが非常に強いのである。

この舞台上でプレイを繰り広げるのであるが、野球のプレイもさることながら、その儀式性にこそ着目しなければならない。我々がごく当たり前のこととして見ている試合の前後に両チームの選手が本塁を挟んで審判を中心に相対し、互いに挨拶を行う光景は、今や日本の球場更にあらゆるスポーツの場面で見られるが、大正4年の大会開催にあたっての「野球規則」制定に伴う申し合わせで生まれたものである。これは、  
「スポーツマンシップと日本古来の武士道とは精神において全く同一のものであり、しかして本大会の試合は職業化せる米國野球の直譯ではなくて、武士道的精神を基調とする日本の野球を奨励し普及せしめるための試合であるから、禮に始まって禮に終るべき我が國の學生野球には當然附随すべき儀禮であると云ふ趣旨のもとに規定されたのであった。」<sup>112)</sup>と中尾清が回顧の中で述べているように、フェアプレイとスポーツマンシップが武士道の精神とのアナロジーで考えられ、試合はそ

うした精神の修養の場であると野球界において捉えられていた当時の観念の表れといえよう。（なお、当時の礼式の配置図は下に示すように現在とは異なっている。）

更に、第三回大会（大正6年、1917）からの入場式がある。これは、同年5月東京芝浦で行われた第三回極東競技大会の開会式で、日中比の三国代表選手団がそれぞれ国旗を捧げて入場したことにヒントを得たものである。元早稲田大学野球部で活躍した橋戸信（大正4年秋より朝日新聞社に入社し、野球審判協会を設け、「野球規則」作成



に携わった）が発案者で、彼が入場式を我が国で初めて野球大会で実行したのである。<sup>113)</sup>手の振りとは足並みを揃えて、すべての選手が大会歌に合わせて一糸乱れず行進する入場式は、軍隊の行進とだぶらせながら、青少年のそして高校野球のイメージを、見ている者、行っている者の中に醸成していると考えられよう。

また、優勝したチームすなわち日本一のチームに贈られる優勝旗は、甲子園野球にとって不可欠のものであるが、この旗は、当時の天皇旗と同じ生地（皇国織）である。「中等野球大会などに『錦の御旗』と同じ生地で優勝旗を織ったことが世間にわかっては大問題となることが必至だったろう」<sup>114)</sup>と久保田がいうように、日本国民にとって大きな意味があったに違いない。そして、現在も各県の代表チームが皇国織の優勝旗を手にするために戦い、日本中でただ一校が故郷に持ち帰り、それを先頭にパレードしている現実は何を物語るのだろうか。甲子園野球が、単に日常生活における思考の枠組としての神話をシンボリックに伝達していることにとどまらず、もっと深い地平の神話論的考察に値する問題が



あるといえる。

以上の他、シンボリックに中等野球のイメージを示しているものに朝日新聞が大正15年（1926）第十二回大会時に制定した「野球大会の歌」がある。福武周夫作詞、信時潔作曲のこの歌には（次ページ参照）多くの神話的メッセージが散りばめられている。「若き生命を真に捧げ、正しく強く力に生きん。」「若き誇りを血潮にもりて、雄々しく純くつとめて勝たん。」「相搏つ意氣」「男の子のいさほし斃れてやまん、名をこそ惜しめますらを我等。」この歌は、朝日新聞社が全国中等学校優勝野球大会を主催することを決めた時から不可欠の精神である「凡てを正しく、模範的に」「純粹に」「激進としたプレイ」を行い「地方代表」としての心意気を見せるといったものと重なり、朝日新聞社が甲子園野球の神話として形成したものである。

全国中等学校野球大会の歌

福武周夫 作  
信時潔 作曲

青雲のたなびくきはみ東ゆ西ゆ、  
勝ちて驕らず大旗のもと集ひし我等。  
若き生命を眞理に捧げ、  
正しく強く力に生きん。  
見よやむらたつ峰雲の輝き、  
時こそ來つれいざ戦はん。  
守れ！と叫ぶは心のひびき、  
憂さ響くは力のさけび、  
群がるつはもの打ちてしやまん、  
名をこそ惜しめますらを我等。  
――  
青山の向伏すかざり南ゆ北ゆ、  
勝ちて驕らず大旗のもと集ひし我等。  
若き誇りを血潮にもりて、  
雄々しく純くつとめて勝たん。  
見よや射返す大地のきらめき、  
時こそ來つれいざ戦はん。  
相搏つ意氣に火も進れ、  
うち勝つものに永久の榮あれ、  
男の子のいさほし踏れてやまん、  
名をこそ惜しめますらを我等。

朝日新聞社；全国中等学校野球大会史，朝日新聞社，1929，序。

(2) 全国中等学校優勝野球大会における組織の単独性

大正4年7月1日付けで朝日新聞社が主催として全国中等学校優勝野球大会の開催を告げてから、全国中等野球連盟をバックにして全国大会を行ってきた。他の競技種目と共に大会を開き、何らかの目的を共有するというのではなく、野球が独自の方法で大会をとり行ってきたのである。しかし、昭和15年（1926）以降、第二次世界大戦へと日本の政府が向かっていくにつれて野球組織の単独性、独自性は消えていく。この歴史的事実から逆に、中等学校野球連盟や朝日新聞主催の全国野球大会の持つ意味が明らかになる。



昭和15年第二十六回大会は、紀元2600年の慶祝行事が国を挙げて行われた時で、全日本中等学校体育競技総力大会の一部門として野球、陸上、水上、体操、硬式及び軟式庭球、籠球、排球など8種目、参加2200余名の選手が、甲子園を中心として同時開催された。<sup>113)</sup>

更に、昭和17年になると春の選抜中等野球大会、夏の全国中等野球大会も文部省の指令で中止される。そして、全国中等学校優勝野球大会は、新たに文部省及び大日本学徒体育大会に総合され、各種目の競技大会の一部門として行われることとなる。朝日新聞は7月22日付けで以下（本ページ参照）のような論調で報じている。<sup>114)</sup>

「昭和17年度以降は中等学校生徒の全国的野球大会は毎年1回とし、

#### 本社 主催 全国中等野球大会 終止

本社主催全国中等学校優勝野球大会は、大正四年地方部奨励の野球界を全国的に統制しつつ、青少年の体位向上と質実剛健なる気風の涵養を旨として、大阪郊外豊中球場に第一回大会を開催してより最も英熱のもと若人が國魂を燃やし体力を鍛り、盛夏の全国的行事として各方面の支援をうけつつ二十余年二十六回の歴史を築き、第一回十地方七十三校参加の大会は、回を重ねて逐年盛全なる発展をなし、第十七回大会以来、参加六百数十校の多きを算し、無統制の球界に整然たる体制を与え、野球道の確立に寄与し來ったが、大日本学徒体育委員会が中等学校総合競技会の中にこれを一目目として包括するに至り、ここに歴史ある我社の全国中等学校野球大会は終焉を告ぐるに至った。

文部省が大日本学徒体育委員会を結成し、もって学徒の体育を一元的に統制指導せんとするその根本方針に至っては、時局下の政策として吾人の賛同を寄さぬところであるが、ただその換取に當り「昭和十七年度以降は中等学校生徒の全国的野球大会は毎年一回とし、これを本省もしくは大日本学徒体育委員会主催の下に別途の形式により開催致すことと相成たるを以て」という一片の通牒のほか何等委曲を尽すことなかりし当局の態度に対しては、遺憾を禁ぜざるものがある。

然に全国中等学校野球大会を終止するに當り、その経過を述べて大会関係者ならびに創始以來熱誠なる支援を賜りたる江湖各位の御意承を請う次第である。

朝日新聞社

これを本省もしくは大日本学徒体育振興会主催の下に別途の形式により開催致すことと相成たるを以て」という一片の通牒のほかに何等委曲を尽くすことなかりし当局の態度に対しては、遺憾を禁ぜざるものがある。」として強い抵抗を示している。昭和16年の夏は文部省文部次官通牒により全国競技会はいっせいに中止となったが、17年は文部省自身がその外廓団体の大日本学徒体育振興会を動かし、銃後鍛練と士気昂揚をスローガンとして、各種目のスポーツ競技会の音頭を取り、開催したのである。<sup>117)</sup>

この昭和17年の大会は、全国中等学校野球連盟の公認大会ではなかったため、現在でもその記録は正式に残されておらず、文部省の戦時体育訓練実施要項の制定に伴い、大日本学徒体育振興会主催のこの年の全国大会は、大正4年から開かれている全国中等野球大会とは別のものであるという解釈が成り立っているのである。このように全国中等学校優勝野球大会は、文部省統轄のものではなく、朝日新聞と全国中等学校野球連盟が独自に開催しているものだということが改めてわかる。現在、全国高等学校体育連盟と別に全国高等学校野球連盟が独立して存在し、また各都道府県でも高野連と高体連が並立しているのは、このような歴史的背景があるためである。甲子園野球は、このように朝日新聞社と全国高等学校野球連盟によって組織だてられ、それによって神話が形成されているといっていよい。

さて、前記のような大会中止の後、朝日新聞社は、昭和21(1946)1月21日付けで、全国中等学校優勝野球大会の復活開催を発表した。<sup>118)</sup>

「……惨烈なる今次戦争によって、歪められた若き心をスポーツによって本然の姿に立ち返らせると共に、野球を通じて民主主義精神の育成を助長し、併せて明朗潤達なる気風を醸成せしめ、将来新生日本の各分野



に活躍すべき青少年の輩出を期するにあります。炎天酷暑のもと、純真  
潑刺たる青少年が伝統の誇りをかけて、若さと意気をフェアプレイの一  
球一打に傾注するところ、スポーツ日本の再建に資するところ少なから  
ざるを信じて疑わぬもの

であります。」という文  
章は、昭和16年大会の中  
止、そして17年大会が大  
日本学徒体育振興会によ  
って「上から」の手で行  
われたことに対して、真  
のスポーツの精神 — 自  
主、独立、民主主義 —  
と教育としての理想から  
復活することを記してい  
る。大正4年の社告や野  
球大会の歌さらにこの復  
活に向けての文章は、中  
等野球さらには現在に至

る高校野球の神話の源として、しかも明文化されたものとして重要であ  
る。「男らしさ」「国民性との一致」

「潑刺たる妙技」「地方の代表」といった社告での神話メッセージ。野  
球大会の歌での「雄々しさ」「純粹さ」「勝つこと」「男らしさ」「氣  
力」「全力でぶつかること」といった言葉。さらにこの復活の開催を呼  
び掛ける文面での「若き心」「民主主義精神」「明朗潤達」「スポーツ」  
「純真潑刺たる青少年」「伝統の誇り」「若さと意気」「フェアプレイ」

朝日新聞社主催全国中等学校優勝野球大会は、昭和十七年第二十七回大会予選半ばで中止されたまま今日に至りましたが、終戦以来すでに五箇月、スポーツ復興への迫りし機運とともに、本社では今夏を期し、「全国中等学校優勝野球大会」を復活開催することに決定しました。  
衣、食、住、社会生活全般にわたる窮乏、殊に食糧事情の極端なる窮乏に加えて、スポーツ用具並びに各種資材の甚だしき欠乏、さらに青少年学徒が数年にわたって、スポーツから隔離されていた懸念の数は、大会再開上多大の困難を伴うことは申すまでもありません。しかし本社が以上の懸念を押して大会を復活する所以のものは、偉烈なる今次戦争によって、萎められた若き心をスポーツによって本来の姿に立ちかえらせるとともに、野球を通じて民主主義精神の育成を助長し、併せて明朗潤達なる氣風を醸成せしめ、将来新生日本の各分野に活躍すべき青少年の輩出を期するにあります。炎天酷暑のもと、純真潑刺たる青少年が伝統の誇りをかけて、若さと意気をフェアプレイの一球一打に傾注するところ、スポーツ日本の再建に資するところ少なからざるを信じて疑わぬものであります。各方面に於かれても倍旧の御後援を賜わらんことを。

「一球一打への傾注」「スポーツ日本」といったメッセージ。これらすべて甲子園野球の歴史において主催者である朝日新聞が源として歴史の節目ごとに人々に伝達しようとした神話である。

この復活開催に備えて、朝日新聞は全国中等学校野球連盟の再建を図った。昭和21年2月25日、大阪に各地代表者が集まり、顧問に中沢良夫、会長に朝日新聞社主上野精一、副会長に佐伯遼夫を推し、全国中等学校野球連盟が全国中等学校優勝野球大会に全面的に協力し、同大会の主催団体となること、未組織各府県中等学校野球連盟支部の結成促進に協力することを決議して、全国中等学校野球連盟は再建されたのである。<sup>11)</sup> この席上「野球連盟は野球人の手で」という申し合わせを行い、末端組織の各府県連盟も、他の各種競技団体を包含している既設の全国中等学校体育連盟各府県支部とは別個の支部組織を結成するように指令している。

### (3) 神話生成の仕掛けとしての処分

昭和23年(1948)春に学制改革により6・3・3制がしかれたため全国中等学校野球連盟は全国高等学校野球連盟へと組織が変わり、大会名は、「全国高等学校野球選手権大会」と改称された。そして、昭和23年8月13日から第三十回大会が甲子園で開催されたのである。この翌年、昭和24年1月22日に、日本学生野球憲章が制定され、施行されるようになる。高校野球に関する各文は以下のとおりであるが、この文章により高校野球の神話がより強化されていくのである。第四章付則第二十条にある「学生野球の本義に違背し、又は虞れあるときは、日本学生野球協会は、審議室の議を経て、当該野球選手又は当該選手所属の学校野球部に対して、警告、謹慎、出場禁止又は当該野球部除名の処置をなし得



### 第三章

第十五条 高等学校の野球は、全国高等学校野球連盟が、日本学生野球協会の指導下に、各都道府県の高等学校野球連盟を通じて、これを監督する。

第十六条 各都道府県の高等学校野球連盟に加入し得る学校は、学校教育法第四章に定めるものに限る。

第十七条 高等学校野球チームの参加し得る試合は左記により開催せられるものに限る。

イ 全国大会は全国高等学校野球連盟の主催したもの。

ロ 地方大会（近接せる二都道府県又は数都道府県に互るもの）は関係都道府県高等学校野球連盟の主催したもの。

ハ 都道府県大会は都道府県高等学校野球連盟の主催したもの。

ニ 都道府県を異にする二校の試合は各々の関係都道府県高等学校野球連盟の承認を得たもの。

ホ 同一都道府県内に存する二校間の試合は双方学校長の責任の下に行われるもの。

第十八条 高等学校の野球試合に入場料を徴集する場合には、左の事項を遵守しなければならない。

イ 全国大会にあつては、日本学生野球協会の承認を得ること。

ロ 地方大会、一都道府県内の大会にあつては、全国高等学校野球連盟の承認を得ること。

ハ 一都道府県内の試合にあつては、都道府県高等学校野球連盟の承認を得ること。

ニ 大会又は試合を終了後、入場料徴集の承認を得た協会又は連盟に速かに収支決算を提出すること。

ホ 入場料の使途は、大会又は試合を開催するに必要な経費及び参加学校における体育の普及増進に必要な経費の充実に限定せらるべきこと。

### 第四章 附 則

第二十条 学生野球の本規則に違反し、又は違反あるときは、日本学生野球協会は、審判員の議を経て、当該野球選手又は当該選手所属の学校野球部に対して、警告、謹慎、出場禁止又は当該野球部除名の処置をなし得る。

本罰則に違反した場合、亦同じ。

第二十一条 学生又は生徒の組織する応援団は、常にその本分に基いて行動し、団員の行動に付いては、その学校が一切責任を任ずる。

応援団が学生又は生徒の本分に反する行為をなした場合には、日本学生野球協会は第二十条に準じて、当該学校野球部に罰金を加えることができる。

る。」<sup>110)</sup> という条文は、まさに高校野球らしさという神話を逸脱した時に、学生野球協会で裁定、処分することを明確に唱ったものである。

このような組織と規定により、歴史的に様々な中等学校及び高等学校野球らしくない行為を処分また、警告を発してきた。このような行為は、甲子園野球の神話に対抗する現実として考えられ、真正なる神話を強化していく仕掛けとしての機能があるものである。以下に代表的な事例を挙げる。

#### ①アンフェアなプレイ

大正7年第4回大会の四国予選決勝において（丸亀中学対今治中学）

選手が故意にスパイクするという事件が表面化、香川県当局は丸亀中学の出場を差し止め、今治中学の不戦勝ちとなった。そして香川県下の全チームは大会参加禁止となり、翌々年大正9年ようやく禁止令が解かれた。<sup>111)</sup>

## ②性、暴力、恐喝、盗み、交通違反

野球選手やその学校は、品行方正で高校生らしいことが必要条件となっている。高校野球が聖域として考えられ、教育の場と認識されているからである。性、暴力、恐喝、盗みといった犯罪行為は高校野球にとっては決して認められないものであって、これを表立って処分することによって、一種の見せしめ効果を出し、高校野球神話を強化する仕掛けとなっている。(注5 参照)

## ③スカウト、金品の授与

歴史的に見てこの問題が表面化したのは3度ある。1回目は、昭和7年(1932)9月1日に実施された「学生野球統制令」の時に見られる。当時主に球場を所有する電鉄会社や地方新聞社が、純然たる営利目的で、中学チームの野球試合を頻繁に開催して、電鉄会社は旅客収入を増やそうとし、新聞社は自社の宣伝に努めた。交通費や宿泊費は主催者側が負担し、全品も必要以上に授与されていたし、また優秀な技量を持った小学生選手の争奪が度を越し大きな問題となっていたのである。このような弊害を是正しようとしたのが統制令である。昭和9年京都商業が沢村栄治によって甲子園に登場した際は、慶応野球部監督だった腰本寿がユニフォームを着て京都商業ベンチに座り、コーチをしていた。各中学の有力投手を物色し、入部させようと各地をコーチして回ったときに沢村



が目にとまったのである。(腰本は、沢村が京都商業卒業後慶応へ入学させようとしていたが、その秋読売新聞社がゲーリック一行の全米チーム編成の必要性があったため、沢村は中途退学、翌10年読売巨人軍誕生と共に巨人軍へ入団した。)<sup>122)</sup>

上記のようなプロ球団の強引な勧誘はしばしば問題になったが、昭和30年「佐伯通達」が出されることで明確になる。高校野球ハワイ遠征チームが30年9月12日に帰国するに先立って全国高校野球連盟副会長佐伯達夫がプロ野球のスカウトの目に余る暗躍に対し一行選手の在籍している各学校長に対して注意書を発送した。(次ページ参照)<sup>123)</sup>

ここでも高校野球が「野球を通じて将来日本のために役立つ立派な人間を作る意外には何もない……」のであって「……余りにも物資欲に走り過ぎて、高校生の純真な気持ちを傷つけないようお願いしたい……」と記して純真さを持ち、金銭に怪く動かされない人間を理想としていることがわかる。

このことは、プロ野球側にも影響を及ぼし、プロとノンプロの協約を結ぶ端緒となった。そして全国高校野球連盟の理事会を12月3日大阪で開催し、高校野球選手のプロ球団入団について協議し、資料のような申し合わせを行い、発効した。<sup>124)</sup> また学校当事者には、野球のための養子縁組とか、野球のために遠隔地から連れて来る選手などの問題について、その後注意を喚起している。

なおプロ球団側も、12月14日プロ野球実行委員会(議長鈴木龍二氏)で高校選手に対する問題を検討、以下のことを決めている。(次ページ参照)<sup>125)</sup>

これらは、当初から朝日新聞社、及び全国中等学校野球連盟によって形成されてきた「純真」で「正しく」「模範的」な青少年らしい人間で

(前略)……出発に際しての東京滞在中は、無自制的な一部プロ球団関係者の暗躍がかなり多かったように見受けられました。中には選手の父兄が某プロ球団に関係ある新聞社の自動車に乗せられて得々と羽田空港に送られた裏に心外な場面も見せつけられました。

私は高校の野球選手がプロ球団に入団してはいけないというわけではありません。しかし、私どもがやっている高校野球は、決してプロ選手を養成するのが目的ではありません。野球を通じて将来日本のために役立つ立派な人間をつくる以外には何もものもないのであります。プロ球団の口車に乗せられて軽率妄動することは誠に悔しむべきではないかと思えます。

今回渡布しました十七人の選手は、高校野球界における花影揃いであり、いずれもプロ球団の待遇の的でもあると存じます。私は今回の借しが如何に大きな成果をあげ得たとしても、その選手のはほとんどがプロ球団に入団するような結果を招来することになれば、それは高校野球界のためにはなほだ堪えに堪えないことと私考いたします。

前後の見さかしくもなく、目先の誘惑にまどわされてプロ選手となるような者が続出するようでは、私どもが骨身を惜しまず高校野球のために努力している意義は金くないのであります。家庭のためとか、その他の事情も考えられないこともないのでありますが、余りにも物質欲に走り過ぎて、高校生の純真な気持を傷つけないようお願いしたいと思えます。もうそろそろ一千万や二千万の金を目先に見せつけられてもどくともしない、立派な選手が三人や五人出てきてよいのではないかと思えます。

選手諸君が帰国すればまたまたプロ球団のスカウト達が血眼になって活躍することと推察いたします。実に高校野球界のためににがにがしい極みといわねばなりません。……(後略)

学校長殿

全国高校野球連盟 副会長 佐伯 達夫

あるという神話に反するもの — 対抗神話を作りだす事実 — であって、  
高校野球連盟は、その除去に力を入れることで真の神話を強化するのである。



一 プロ野球のテストを受ける選手は野球部から一応退部の上、受験すること。

また受験後は高校野球選手としての資格を失う。

二 プロ野球の練習に参加したものは、アマチュアの資格を失うので、野球部を退部せねばならない。従ってこの項に該当するものは、在学中に学校を代表するチームと試合および練習を行うことは出来ない。

三 プロ野球と正式な契約を結んだものは直ちにプロと見做し、高校野球選手としての資格を失う。

四 正式契約でなくても書類により本人若しくは親権者がプロ球団に入団の約束をした時は、直ちにプロ野球選手とは見做さないが、約束と同時に高校野球選手としての資格を失う。

五 たとえ口約であつても金品を伴った時はプロ選手と見做し、高校野球選手としての資格を失う。

六 学校選手は名目のいかなるを問わず、プロ球団またはその関係者より直接間接に一切の金品を受けてはならない。

一 高校生につき、(1) 契約はいつから始めたらよいか、(2) 契約締結を発表する時期、(3) 契約金、

品物などはいづから出したらいかなどについて全国高校野球連盟に申入れをする。

二 研修生制度 一九五七年度からプロ入りをする高校生は研修生として、この期間中は十試合だけしかベナント・レースに参加出来ない。研修期間は一年。これによると例えば今年プロと契約した板崎、前岡らのような超高校級の選手がいたとしても、十試合をのぞいて一年間は出場出来ないことになる。

三 高校、大学ならびにノンプロ(プロ野球に初めての経験者)を新しく採用する場合の給料の最高限度を設ける。制限額は毎年実行委員会決定する。

#### 佐伯達夫よりの注意書

#### 12月14日プロ野球 実行委員会決議

#### ④参加資格問題と野球留学

大正11年(1922)第八回大会の頃になると、全国大会への予選参加校数も229校を数え(注6参照)るようになった。「ところがその後野球は愈よ普及して本大会も年一年盛になるにつれ、いろいろ面白くない實例が見え初めて来た。」<sup>126)</sup>のである。そして……かゝる學校では未だ世故に長けず血の氣の多い選手、先輩、校友會の若き人たちが、ただ勝つことの歡喜に浸らんがために、ツイ無理をしても強くなろう、強い選手を自校に集めようとつとめる傾向に陥りやすいことはいふまでもない。

即ち本大會に見え初めた好ましからざる兆しといふのも要するにその現  
 れで、それも極めて稀に見る事實に過ぎなかったが、除くべき雑草なら  
 ば萌芽のうちにするがよい、遂に思ひ切つて落第生と餘りに新しい編入  
 生とを認めざることにしたのである。」<sup>127)</sup>と回顧されているように参  
 加資格の制限を加えている。実際、朝日新聞社は、「その年の三月に進  
 級しなかったもの、及び轉校編入後滿二學期を經過せざる生徒は本大會  
 の選手として認めず、又各選手は校醫の診斷によつて健康を保證さるゝ  
 ことを要し、且つその保證あるものでも、大會中本社の醫員が診察して  
 危険と認めた不時の傷病者は、競技から除外を要求するといふ規定を作  
 った」<sup>128)</sup>のである。大正11年に既に規定を作らなければならないほどの  
 状況に中等学校野球界がなっていたことも驚きであるが、主催者たる朝  
 日新聞社がいかに中等学校野球の神話を守ろうとしたかが理解できよう。

この資格制限決定の68年後の平成2年(1990)5月24日、中学生の勧  
 誘いわゆる「野球留学」について日本高校野球連盟が初めて通達を出し  
 ている。<sup>129)</sup>『健全な高校野球を育てるために』と題した通達は以下の  
 とおりであるが、そこには、

1. 高校側の指導者や関係者が中学生の家庭を訪問したり、勧誘した  
 りしている事実
2. 高校のOB(会)や後援会が高校とは別に中学生を勧誘している  
 事実
3. 中学生の進路担当教師と共に、中学野球や少年野球関係者から高  
 校入学について打診や相談がある事実
4. 入学以前に中学生を対象とした、いわゆるセレクションや練習参  
 加がある事実
5. 高校が中学生(または少年野球)の試合を主催または幹旋したり、



がはっきりあることがわかる。

## 「野球留学」で通達

高野連 中学生の勧誘禁じる

日本高校野球連盟（教野連盟）

は、

会長は二十四日、「健全な高  
校野球を育てるために」として  
野球留学問題についての通達を  
全国の都道府県野球連盟に発送

した。  
この野球留学は最近、各地で  
いろいろな問題点が指摘され、  
高校野球をゆがめている、との  
声が出始め、四月二十七日に

は、衆議文教委員会でも取り上  
げられた。日本高野連として  
は、これまでも問題が起るた  
びに指導し、一方では、各都道  
府県野球連盟に実態調査を依頼

するなど対処、検討してきた。  
しかし、国会で論議されたこと  
などから、この機会に改めて高  
校野球の健全な姿を守るため、  
特に問題となる「中学生の勧  
誘」についての通達となった。

家庭を訪問したり、勧誘するな  
どの行為をしてはならない。  
二、高校のOB（会）や後援  
会が学校とは別の動きをし、結  
果的には高校の代替役を果たし  
て勧誘に回っているケースが見  
受けられる。従って、こうした

者から入学についての打診や相  
談には、はっきりと二線を画  
し、当該生徒の進路指導は、あ  
くまでも中学校の進路担当教師  
との間で、正しく進められるよ  
うに留意すること。

日本高野連が、野球留学問題  
で通達を出したのは初めて。  
「健全な高校野球を育てるた  
めに」の通達は次の通り。  
一、いかなる場合でも、高校  
側の指導者や関係者が中学生の

周囲の動きには特に留意し、少  
しでもこのような動きを察知す  
れば直ちに自粛、自戒する措置  
をとること。  
三、中学野球や少年野球関係

四、「高校新入生徒の練習参  
加に関する規定」の通り、入学  
以前に中学生を対象とした、い  
わゆるセレクションを行った  
り、練習に参加させたりしては  
ならない。

五、高校が中学校（または少  
年野球）の試合を主催したり、  
試合をあつせんしたりしてはな  
らない。また、高校が地域の中  
学野球や少年野球に理解を招く  
ための寄付をしたり、野球の指  
導を行ってはならない。

現在の高校野球の実態については、第5章の池田高校のフィールドワ  
ークで述べることにして、ここでは、教育としての野球という理念を掲  
げてきた甲子園野球において、現実的にそれが様々な事実で崩されてお  
り、それに対抗する事実や、神話がこのような形で生まれていることを  
記しておく。

全国中等学校優勝野球大会及び全国高等学校野球選手権大会の歴史は、  
朝日新聞社と日本高校野球連盟による当初からの神話を守り、その神話  
に対抗する事実に対して様々な規制や処分に対処してきた歴史といっ  
てよいだろう。「純真で」「男らしく」すべてに「正しく、模範的な」  
「青少年」が「スポーツマンシップ」と「フェアプレイ」の「精神」で  
「地方の代表」として「激刺たる妙技」を見せるという甲子園野球の歴  
史的に醸成されてきた神話と様々なそれに反する現実＝「そうではない

のじゃないか」という対抗神話を作りあげる事実との競合の歴史なのである。

#### (4) メディアの側からの甲子園神話の強化

##### — 早稲田大学野球部OB飛田穂洲の言説 —

これまで見てきたとおり、甲子園野球は「純真で」「男らしく」「すべてに正しく、模範的な」「青少年」が「スポーツマンシップ」と「フェアプレイ」の「精神」で「地方の代表」として「潑刺たる妙技」を見せるという神話が、大会当初から主催者たる朝日新聞と全国中等学校（高等学校）野球連盟そして日本高校野球連盟の規則や処分といった仕掛けの機能をも含めて形成されてきた歴史であるといえてよい。しかし、前時代に見られる早稲田大学野球部やその部長安部磯雄の精神を引き継ぐ卒業生が新聞社に入社して記事を書くことによって甲子園野球の神話を強化したこともひとつの要素としてある。この頃では、早稲田大学野球部OBで新聞社に入社し、甲子園野球神話の強化に作用した人々にスポットを当てる。

早稲田大学卒業後、新聞社に入社した人物は、早大初期に活躍した橋戸信（号を頑鉄、万朝報→東京朝日新聞→東京日日新聞）、弓館芳夫（小鰐、東京日日新聞）、市岡忠（読売新聞）、飛田忠順（穂洲、報知新聞→読売新聞→東京朝日新聞）らがいる。これらの人物達は、中等野球、大学野球の戦記や批評を書き、スポーツ・ジャーナリズムの嚆矢とされている。前述したように全国中等学校優勝野球大会において、試合前後のホームプレートを挟んでの挨拶を申し合わせ事項とした「野球規則」の制定にかかわり、第三回大会からの入場式を提案した橋戸信は、朝日新聞に入社して全国大会の運営を先頭に立って行った人物である。



この橋戸や弓館、市岡らには多くの記事があるが、中等学校及び高校の野球について限っていえば新聞に多数執筆したのは、飛田である。

水戸中学時代から野球の練習に明け暮れた飛田は、中学時代の野球生活を以下のように記している。「(水戸中学が下妻中学に1対5で敗れた後)私は水府城の坂を光栄に包まれながら下りていく下妻軍を見下ろしながら、無念の熱い涙を落としたのである。私は本当にそのころ感激性に富んだ少年であったかもしれない。私が私の心にひそか誓ったのは下妻復讐の大願であった。私は翌日からその首途にのぼった。私は真剣になって練習した。玄関で靴の紐を解きながら眠ったことが幾度あったかもしれない。器用でないものが人並みになろうとするには人知れぬ苦勞がある。……(中略)……ボールの姿が目映らなくなるまで私は級友の柏徳と二人で練習した。」<sup>130)</sup>このような猛練習で中学時代を過ごした後、明治40年(1907)4月、早稲田大学に入学野球部に入部する。そこで、安部磯雄と出会い、飛田の野球観が形成されていくのである。ここでは、飛田がいかに安部の野球観に影響され、その後、記者として中等野球の批評、理念の提示——すなわちメディア側による神話形成——に深く関係していったかを見ていく。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「人生の修業としての野球、こうしたことをいうと多くの人に笑われると思うが、人間というものは動物とか植物とか、それと大して変わりが無いようだ。そこに変わりがあるとすれば、私の恩師安部磯雄が口癖にいった「知識は学問から、人格はスポーツから」という言葉だと思う。

恩師安部磯雄は昭和二十四年二月十日、東京江戸川アパートの一室でこの世を去ったが、これこそ明治、大正、昭和の三代にかけての聖人であり、私の記録からすれば、この人八十五年ノーエラーであった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

野球は単なる遊びごとであってはならない。野球から一つの人生をつ

．．．．．  
かむ。そこに一球洗心とか一打入魂とかいう言葉が生まれるわけなのだ  
．．．．．  
が、やはり野球にも行儀作法があり、行儀の悪い野球をすると多くの人  
々に喜ばれない。試合には負けたが北陸の滑川、信越の伊那北、九州の  
．．．．．  
済済費、全精力をかけたあの試合、本当にうれしいと思う。

．．．．．  
野球を単なる勝負事のように考える前に、心を洗う修練こそ高校野球  
の本質であろう。品格のあるチームには甲子園の声援も集まり、勝た  
してやりたくもある。「来年も来い」はグラウンド・マナーのノーエラ  
．．．．．  
ーをたたえる負けたチームへの心の優勝旗であると思う。」<sup>1211</sup>ここ  
からは安部磯雄の全人間としての品位、人格＝スポーツマンシップやフ  
ェアプレイ精神を修養する場として野球があるという観念をもとに、野  
球において、行儀作法、心を洗う修練、品格、一球洗心、一打入魂とい  
った人生をかけたプレイを賞賛し、批評していることがわかる。この朝  
日新聞における記事のほか、「日本の野球の父安部磯雄先生は、かつて  
筆者に「スポーツは戦争にとってかわって全世界を支配しなければなら  
ない。スポーツなら人間の持つ闘争性を満足させるに十分だし、いっさ  
い血を流さずにすむではないか」と説かれた。……そして先生が叫ばれ  
た戦争にかわるべきスポーツの時代は、先生の在世中には開けてこなか  
ったし、世界のスポーツ熱は戦後急速に高められたけれども、世界の有  
識者はまだ戦争にかわるべき唯一無二の安全な道をスポーツの上に求め  
ようとしていない。

これを思うと、朝日新聞が今から四十余年前全国中等学校優勝野球大  
会を主催したことは、すこぶる卓見といわなければならなかった。もち  
ろん当時の朝日がこれを平和運動の一部と考えたり、反戦運動の一部と  
して利用しようとしたのではなく、その趣旨としてうたわれたものは青  
少年の肉体的健康と精神的安全に寄与せんとしたにすぎないであろうが、



今になって考えてみると、大きく世界に平和運動の一部として呼び掛け  
たものといってもこじつけでないような気がする。……（中略）……甲  
子園の大会は平和のシンボルであり、この大平和運動が全世界に拡がっ  
て、人間同士の殺し合い、争奪の醜態が抹殺される日まで、この世界的  
行事は清く美しく勇ましい少年の独壇場として残らねばならない。」<sup>132)</sup>

という言説からは、平和主義者安部磯雄の理念に立って「清く美しく勇  
ましい少年の独壇場」としての甲子園を平和のシンボルとして永久に残  
していくものとする考えが飛田にあることを理解できよう。

このように安部磯雄の考えを吸収しながら中等野球に対する飛田の観  
念は確固たるものとなっていくのである。様々な飛田の言説の中で、  
『少年球児に与う』と題する随筆は彼の考えを代表したものである。

「（中等野球）は単なる技倆の高下に左右されるものではなくして、試  
合そのものからにじみ出る純情の香気にある。中等野球の生命は、表面  
に現れるところの技倆の巧拙ではない。裏面に潜む清浄さにある。その  
清浄にして無垢なる魂こそ、少年野球軍の宝であり、日本野球道の誇示  
でもある。これを失うことによって野球の本道は誤られ、中等野球の本  
体は亡滅する。……（中略）……全国各地の少年野球軍は敗れたるも勝  
ちたるも、それぞれ心身の鍛練に常善をつくし、その間なんら遺憾なか  
りしことと思われる。……つまり試合は単なる優勝を目標として行われ  
るものではなく、鍛練の必要を痛感してともに血戦の舞台に昇るもので  
あり、野球試合は優勝旗の争奪のみが目的ではない。練習に鍛練した魂  
を、さらに精練強化するためにしのぎをけずるのであるから、一回より  
も二回がよく、二回よりも三回、五回と回を重ねるところに効果がある。  
……われらはそのうえ、平素の練習を特に尊重している。試合が公衆の  
面前に野球正道を表現し曰ごろの鍛練の良否を試みるものとするれば練習

.....  
は人なきグラウンドに忍苦の修練をして野球選手の人格を養成する。両  
.....  
者実は一連の修業にしてその一を失えば野球鍛練の、成果は求めがたい。  
.....  
……（中略）……日本式野球は技の末業を論ずるものではない。野球精  
神を説くにある。その野球精神は一言にしていえば、死の練習によって  
つちかわれる。野球部愛、母校愛を強調することはとりもなおさず国家  
.....  
愛を教うるものであり、一致団結の団体精神は、一丸となって敵に当た  
.....  
るの心意気を示唆し、犠牲的精神は、喜んで困難に殉ずべき暗示を与え  
.....  
るものに外ならぬ。智仁勇は日本式野球における競技の約束であって、  
いまさら贅言を要するまでもない。……」<sup>123)</sup> 安部磯雄の野球における

「智仁勇」を競技の約束として底辺におき、勝敗よりも常日頃練習で鍛  
練した魂、人格を磨くために野球の試合があり、その魂の精錬強化をす  
るために何試合も行うのだという。そして一致団結の団体精神や犠牲的  
精神は、一丸となって敵に当たる気概や困難に当たって殉ずべき人格を  
養成するというのである。

こうした中等野球に対する飛田の理想は、東京朝日新聞誌上でも明確  
に表されている。昭和11年（1936）3月15日から18日まで4回にわたっ  
て連載された『興行野球と学生野球』と題する特集には、興行野球と比  
較しながら学生野球のあり方が飛田によって示されている。昭和11年  
（1936）3月16日の朝日新聞では、「日本の野球を今日あるものとした  
吾等が愛敬する先人球士の精神といふものは洵に眞摯そのものであつて  
.....  
血を涙を汗をその球心に注ぎ込んでゐる。實に氣魄の凡てを入れ込んで  
日本武士道に混和せしめ今日いふところの野球道を開拓した。その吐血  
的足跡を思ふならば、決してこれを玩弄視し見世物視してはならないと  
思ふ。……（中略）……正統日本野球即ちアマチュア野球であり、特に  
學生野球であらねばならない。……吾等はそれ等の是非を論ずる必要よ



.....

りも素人野球殊に青少年教育に少なからぬ關聯をもつ學生野球精神を擁護せねばならない。」<sup>134)</sup>とし、翌日3月17日には、その學生野球の精

.....

神について「勝利主義を清算し質實剛健たるもの」<sup>135)</sup>と述べ、選手の修養の達成が重要であることを繰り返し言及している。このように新聞社に入社した野球選手たちは、自分の培った精神を土台にして中等野球、高校野球の神話をメディアの側から形成していったのである。

注1) 野球という用語は、明治37年7月30日に発行された中馬庚著『野球』に用いられたのが最初であり、この当時は明治18年8月4日に出版された『戸外遊戯法』に記されているように「ベースボール」という用語が使用されている。本論文では、日本で行われてきたベースボールをすべて野球と表すことにする。

注2) 野球を取り入れた学校の生徒がいずれもエリートであったことは、下の表の尋常小学卒業者のうちで、より上級の学校に進学した者の割合を見ても明らかである。(単位%)

	中学へ	家業へ	師範へ(高師)	専門へ	大学へ
明治25年	0.8			0.6	0.07
明治33年	3.7	0.7		0.7	0.2
明治41年	4.0		0.4 (0.02)	1.2	0.3
大正2年	3.9		0.4 (0.03)	1.1	0.3
大正8年	4.3	1.9	0.4 (0.03)	1.3	0.3
大正15年	8.3	4.1	0.6 (0.04)	1.8	1.3
昭和5年	7.8	4.8	0.5 (0.04)	2.0	1.6
昭和10年	6.9	5.3	0.2 (0.03)	2.0	1.4

(菊幸一; 近代日本におけるプロフェッショナル・スポーツの成立形態とその社会的条件に関する研究 — プロ野球の成立を中心にして —, 教育学博士論文, 筑波大学, 1988, p. 309. より)

注3) この他にも、一高の選手の中には、猛練習をした史実が多く残されている。そのひとりに守山恒太郎がいる。明治34年5月2日横浜アマチュア倶楽部に5対6で敗れた投手守山は、雪辱を期して、毎日練習に次ぐ練習を重ねた。そして彼は、野球部倉庫の煉瓦壁



が一尺四方にわたり破壊されて深い穴を開けるくらい毎夜コントロールをつけるためにピッチング練習をした。そして練習しすぎて左腕が彎曲し、それを伸ばそうと桜の枝に左腕1本でぶら下がり、そしてまた投球練習をするといったことを繰り返した。守山はその後、その猛練習が実り、35年5月10日の対横浜アマチュア倶楽部戦で4対0の完封勝利を収め、「大投手守山」の名を挙げた。<sup>134)</sup>

注4) 明治32年3月、一高は二高(仙台)から挑戦状を受け、野球と柔道の対抗試合をすることになった。以下、大和球士の『野球百年』によると、「……一高は受けて立ち、盛大な壮行会を開いた。四月七日、校庭に六〇〇の学生集まり、声援隊が先登に選手を中にして後部に送別隊が続き、上野不忍池畔から隊伍を組んで上野駅に向かった。歩武肅然、

— 送第一高等学校選手ノ遠征 —

<sup>ちやうりやう</sup>の長流が朝風にひるがえる。西郷銅像前の送別式には学生代表塩<sup>しお</sup>谷温が悲壮な口調で北征をおくった。野球部万歳、柔道部万歳の声は上野の山をゆるがすばかり。」<sup>135)</sup>とある。駅まで選手、応援団に送別する者が同行し、送別の辞と万歳で見送る壮行会は現在の甲子園球場に向かう高校チームとそれを見送る学校、地元の人々にも同じ光景である。

さらに、明治39年(1906)に開始された一高対三高の定期戦における応援団の熱狂はすさまじいものがあったとされる。当時の一高選手君島一郎(明治41年卒)と三高選手木下道雄(明治41年卒)は、三高同窓会誌で対談を行い、その応援について以下のよ

うに語っているので抜粋してみる。

「木下 ……一高の応援は、竹竿を持ち出して地面を叩き、砂埃  
りを起こしてわれわれの邪魔をしたけれど、……」

「君島 一高の応援団は一塁側に小さく閉じ込められて、まわり  
はみんな三高の赤旗、半鐘、鉦、太鼓、銅鑼、喇叭にチ  
ャルメラおよそ音の出る器物は何でも持ち込まれたが、  
なかには石油の空き缶を絶え間なくたたきつづけたもの  
がいる。試合開始前からの怒声、罵声、ウウォーという  
関の声。そのやかましいこと騒々しいこと。捕手のうし  
ろにいる三笠アンパイヤーの判定が外野に聞こえないか  
ら、二塁手の僕がリレーして、外野へ向かって、いちい  
ちボールボール、またストライクストライク。」<sup>128)</sup>

一高、三高両校ともこの定期戦で、母校の名誉を賭けての応援  
はすさまじいものであった。竹竿、旗、手鐘、鉦、太鼓、銅鑼、  
ラッパなど音の出る物をすべて持ち込み試合中絶え間なくそれら  
の音と、怒声、罵声が空びかったことが想像できる。時代は、下  
るが、幾つかの写真にもその熱狂ぶりをみることができる。<sup>129)</sup>



写真1) 大正7年(第11回戦)  
の一高(大正7年、  
三高校庭)

城戸四郎先輩に引率され、中  
松主将を先頭に、場を圧して  
堂々と入場する一高ナイン

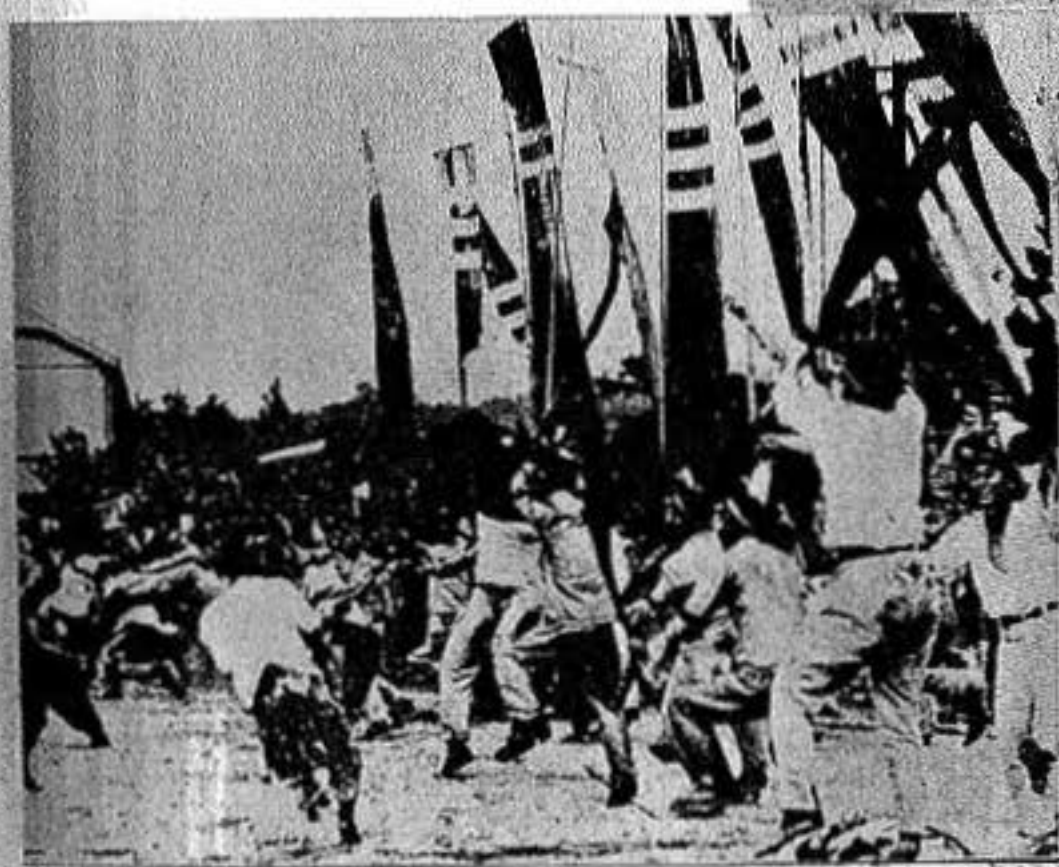
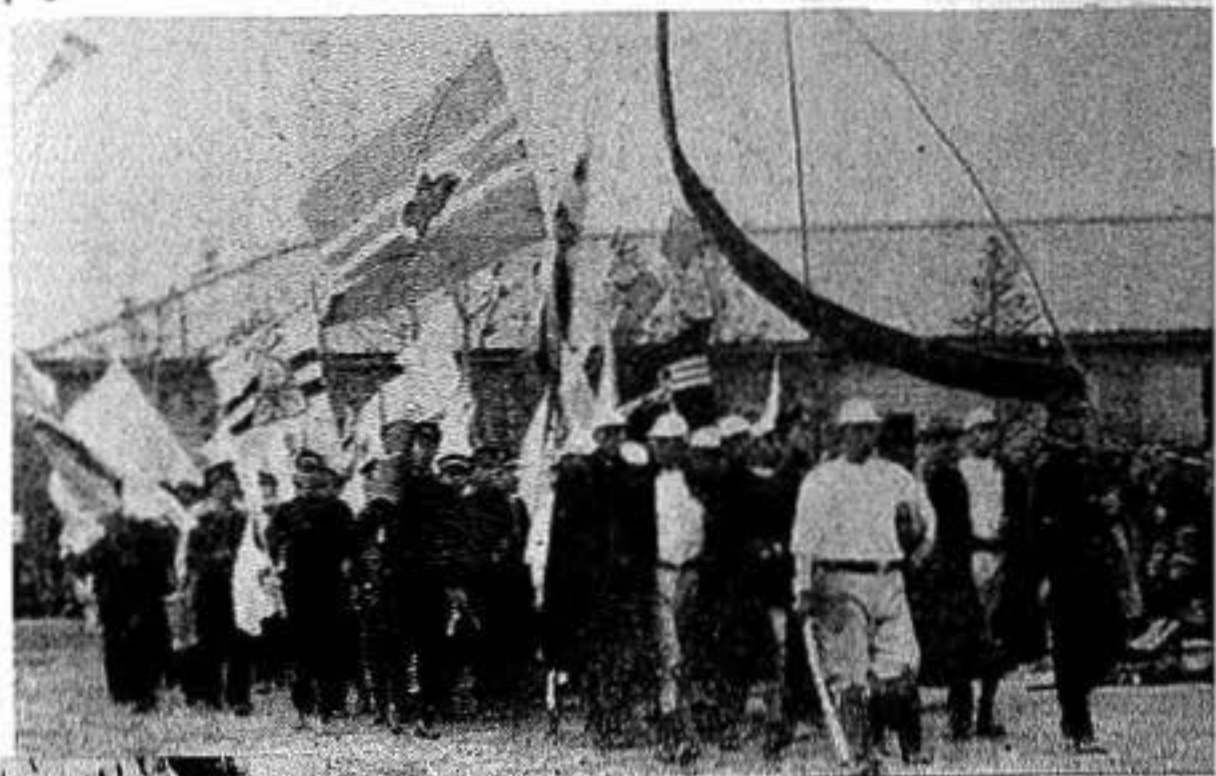


写真2) 狂気乱舞の三高応援  
団(大正10年、1月  
6日、第14回戦、三  
高校庭)



写真3) 三高の応援  
対一高戦風景(於 向  
ヶ丘球場、明治末期)

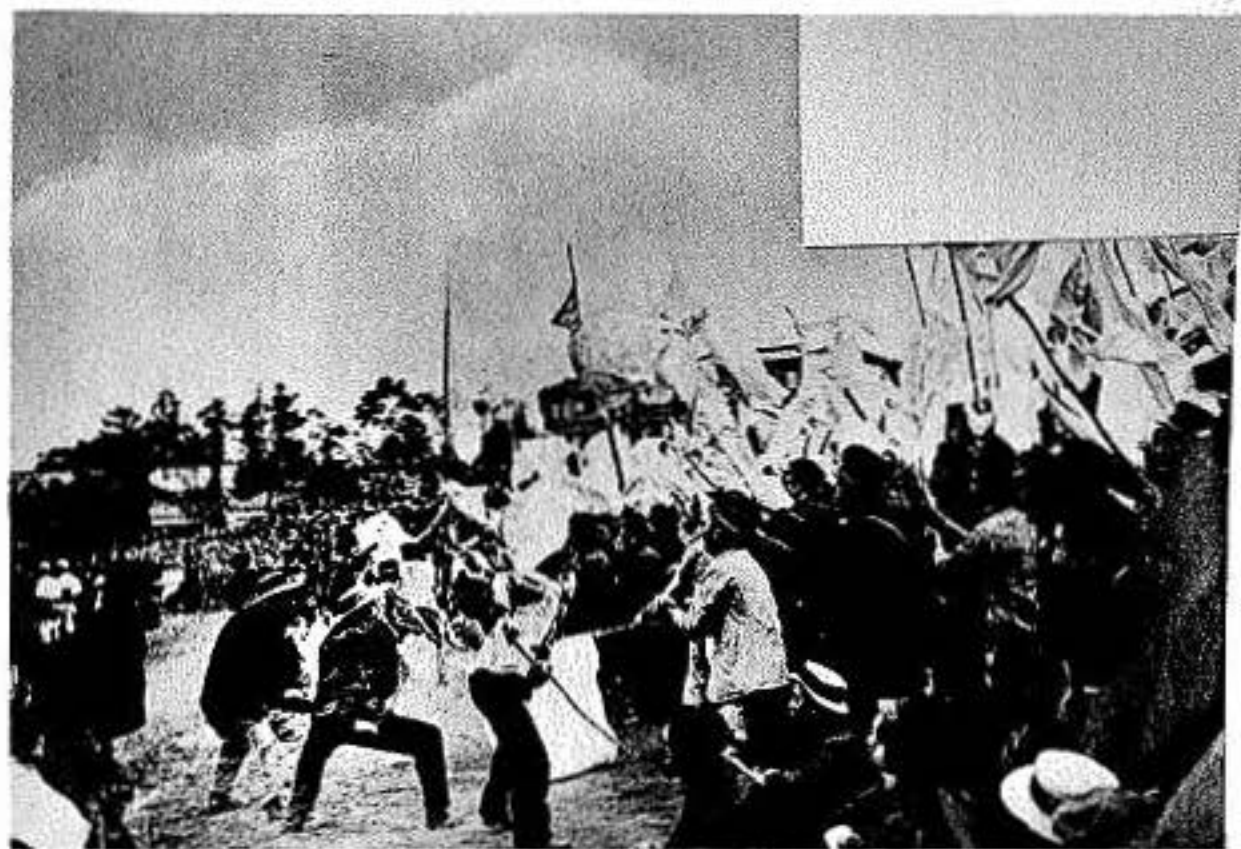


写真 4) 一高の決死的応援ぶり  
 白い布は何でも棒の先につけて、敷布まで旗に化けての応援である。  
 対早大戦（於 戸塚球場、大正初期）

注 5) 昭和50年（1975）より平成元年（1989）までの15年間に、日本学生野球協会の審査室が、対外試合禁止あるいは、警告、謹慎といった処分を決定した事例は以下のようにまとめられる。（数字は対外試合禁止、警告、謹慎の別なく表示している。）このような高校生らしくない行為に対する処分の他に、部長、監督、コーチの不正な行為に対しても処分が下されることは、高校野球の神話を一層強化する働きを持つといえよう。



日本学生野球協会審査室会議の決定による処分

事 由 \ 年 度	7 5	7 6	7 7	7 8	7 9	8 0	8 1
部 員 の 暴 力 事 件 (部内での集団制裁等)	2	3	3	9	7	7	1
万 引 き		1	1	1	2	2	
窃 盗				2	1	1	
恐 喝				2	1		
傷 害	1						
強 盗 傷 害							
売 春				1			
婦 女 暴 行			1				
婦 女 暴 行 未 遂							
女 児 い た ず ら							
飲 酒		1			1		
喫 煙					1		
自 動 車 に 関 わ る も の (無免許運転、自動車窃盗、飲酒運転、事故等)		1	1		2	1	
バ イ ク に 関 わ る も の (無免許運転、バイク窃盗、暴走行為、事故等)							
不正乗車							
プロ入団等の規定違反							
不正入試とセレクション 中学生の入部テスト							
そ の 他	1	2		1	1	3	

日本学生野球協会審査室会議の決定に

事 由 \ 年 度	7 5	7 6	7 7	7 8	7 9
部 員 の 暴 力 事 件 (部内での集団制裁等)	2	3	3	9	7
万 引 き		1	1	1	2
窃 盗				2	1
恐 喝				2	1
傷 害	1				
強 盗 傷 害					
売 春				1	
婦 女 暴 行			1		
婦 女 暴 行 未 遂					
女 児 い た ず ら					
飲 酒		1			1
喫 煙					1
自 動 車 に 関 わ る も の (無免許運転、自動車窃盗、飲酒運転、事故等)		1	1		2
バ イ ク に 関 わ る も の (無免許運転、バイク窃盗、暴走行為、事故等)					
不 正 乗 車					
プ ロ 入 団 等 の 規 定 違 反					
不正入試とセレクション 中学生の入部テスト					
そ の 他	1	2		1	1



日本学生野球協会審査室会議の決定による処分（朝日新聞）

事 由 \ 年 度	7 5	7 6	7 7	7 8	7 9	8 0	8 1	8 2
部 員 の 暴 力 事 件 (部内での集団制裁等)	2	3	3	9	7	7	14	7
万 引 き		1	1	1	2	2	9	8
窃 盗				2	1	1	4	2
恐 喝				2	1		1	
傷 害	1						1	
強 盗 傷 害								
売 春				1				
婦 女 暴 行			1					
婦 女 暴 行 未 遂								1
女 児 い た ず ら							1	
飲 酒		1			1		3	1
喫 煙					1			1
自 動 車 に 関 わ る も の (無免許運転、自動車窃盗、 飲酒運転、事故等)		1	1		2	1	5	1
バ イ ク に 関 わ る も の (無免許運転、バイク窃盗、 暴走行為、事故等)							1	1
不正乗車							1	
プロ入団等の規定違反								
不正入試とセレクション 中学生の入部テスト								
そ の 他	1	2		1	1	3	6	5

(朝日新聞社；朝日新聞，縮刷版より)

1	8 2	8 3	8 4	8 5	8 6	8 7	8 8	8 9	計
4	7	1 2	5	1 6	1 1	1 3	1 0	1 0	1 2 9
9	8	3	1	3	2	1		3	3 7
4	2	2	1	5	1	4		2	2 5
1		1	1			1		3	1 0
1									2
		1					1		2
									1
			1						2
	1		1						2
1									1
3	1	2	1	3		1	4	2	1 9
	1					1		1	4
5	1		1	2	1		2	5	2 2
1	1	3		1		2	1	6	1 5
1									1
		2							2
		1							1
6	5	3	1	3	2		1	2	3 1



注6)

朝日新聞社主催 全国中等学校優勝野球大会への参加状況

年	回	北海道	奥羽	東北	北関東	南関東	東京	甲信越	神奈川	北陸	東海	京浜	大阪	紀州	兵庫	山陰	山陽	四国	北九州	南九州	台湾	朝鮮	満州	計	全国 小学校数	備考
大正4年	第1回			3		8					7	11	8		7	6	6	8	8					72 校	321 校	参加校には師範学校なども含まれているために 正確な参加率を求めることはできない
～ 5年	第2回			9		16				9	8	14	10	5	8	8	8	10	10					150 校	325 校	
～ 6年	第3回			9		16	京浜			10	11	12	9	5	10	7	6	10	13					180 校	329 校	
～ 7年	第4回			7	6	16	9			12	10	12	12	4	11	6	6	14	12					(137 校)	337 校	
～ 8年	第5回			11	7	16	9			9	10	14	10	3	13	6	7	4	15					134 校	345 校	
～ 9年	第6回	5		7	11	16	10			6	13	15	11	5	12	7	11	16	12					157 校	368 校	
～ 10年	第7回	11		12	17	16	14			13	19	17	11	6	14	7	10	12	21			4	3	207 校	385 校	
～ 11年	第8回	8		20	19	8	10			15	24	21	17	9	14	6	12	15	23			5	3	229 校	422 校	
～ 12年	第9回	12		23	18	7	12	10	12	21	20	19	7	18	7	14	15	13	4	8	3			243 校	468 校	
～ 13年	第10回	14		24	24	7	6	12	15	30	22	21	6	19	6	14	17	12	4	6	4			263 校	391 校	
～ 14年	第11回	16	7	19	27	10	9	7	17	28	25	24	8	19	8	14	18	12	14	4	7	1		302 校	502 校	
～ 15年	第12回	18	15	18	21		12	10	16	21	34	27	25	12	19	6	16	16	10	12	6	10	3	337 校	518 校	
昭和2年	第13回	20	10	15	24		11	9	18	23	37	27	26	18	24	8	21	20	29	17	6	13	3	389 校	531 校	
～ 3年	第14回	22	10	18	28		8	13	11	26	22	28	28	19	24	8	21	20	23	15	7	18	3	410 校	544 校	

〔菊幸一；近代日本におけるプロフェッショナル・スポーツの  
成立形態とその社会的条件に関する研究 — プロ野  
球の成立を中心にして —，教育学博士論文，筑波  
大学，1988，p. 56. より〕

### 第3章 引用文献

- 1) 庄野義信編著；六大学野球全集，上巻，改造社，1931，p.p. 5-6.
- 2) 中沢不二雄監修，浦岡偉太郎編；野球史，東京都新聞社，1957，p. 1.
- 3) 前掲書1)，p. 1.
- 4) 前掲書2)，p. 2.
- 5) 前掲書1)，p. 7.
- 6) 前掲書1)，p.p. 7-8.
- 7) 前掲書1)，p.p. 9-10.
- 8) 前掲書2)，p. 3.
- 9) 大和球士；野球五十年，時事通信社，1955，p.p. 11-12.
- 10) 菊幸一；近代日本におけるプロフェッショナル・スポーツの成立形態とその社会的条件に関する研究 — プロ野球の成立を中心にして —，教育学博士論文，筑波大学，1988，p. 75.
- 11) 田原茂作；日本野球史，原生閣書店，1929，p.p. 44-47.
- 12) 同上書，p. 47.
- 13) 同上書，p. 50.
- 14) 前掲書10)，p. 77.
- 15) 前掲書11)，p. 24.
- 16) 大和球士；野球百年，時事通信社，1976，p. 23.
- 17) 同上書，p. 24.
- 18) 前掲書10)，p.p. 46-48.
- 19) 前掲書1)，p. 17.
- 20) 第一高等学校校友会；野球部史校友会雑誌号外，1903，木村毅編；明治文化資料叢書，第10巻スポーツ編，風間書房，1972，p. 178.



- 21) 第一高等学校校友会野球部編；第一高等学校野球部史 — 明治二十四年頃まで —，庄野義信編著；六大学野球全集，上巻，改造社，1931，p.19.
- 22) 同上書，p.20.
- 23) 前掲書20)，p.179.
- 24) 前掲書20)，p.180.
- 25) 前掲書21)，p.22.
- 26) 前掲書20)，p.180.
- 27) 高橋左門；旧制高等学校研究，昭和出版，1978，p.116.
- 28) 同上書，p.106.
- 29) 同上書，p.228，及び第一高等学校寄宿寮編；向陵誌，第一高等学校寄宿寮，1930，p.3.
- 30) 同上書，p.132.
- 31) 前掲書27)，p.137.
- 32) 中馬庚；野球，前川文栄堂，1867，p.p.61-63.
- 33) 前掲書20)，p.183.
- 34) 前掲書16)，p.p.38-45.
- 35) 第一高等学校校友会編；校友会雑誌，明治28年（1895），第一高等学校校友会，1895，p.p.231-232.
- 36) 君島一郎；日本野球創世記，ベースボールマガジン社，1972，p.101.
- 37) 前掲書20)，p.189.
- 38) 前掲書20)，p.189.
- 39) 前掲書20)，p.190.
- 40) 前掲書20)，p.p.230-231.
- 41) 前掲書20)，p.p.231-232.

- 42) 前掲書20), p. 197.
- 43) 前掲書20), p. 202.
- 44) 大和球士; 高校野球五十年, 時事通信社, 1856, p. p. 13-17.
- 45) 田島龍夫; 野球使用, 愛知県立第一中学校校友会, 1905, p. p. 20-23.
- 46) 日下裕弘; 明治期における『武士的』, 『武士道』的野球信条に関する文化社会学的研究, 体育・スポーツ社会学研究会編, 体育・スポーツ社会学研究 4, 道和書院, 1985, p. 33.
- 47) 前掲書10), p. 54.
- 48) 前掲書44), p. p. 7-8.
- 49) 前掲書44), p. 8.
- 50) 五十公野清一; 日本三球人, 世界文庫, 1968, p. p. 119-120.
- 51) 前掲書1), p. 45.
- 52) 前掲書1), p. 45.
- 53) 前掲書16), p. 103.
- 54) 安部磯雄; 野球と共に三十年, 青年と理想, 岡倉書房, 1936, p. p. 300-301.
- 55) 前掲書50), p. 129.
- 56) 前掲書50), p. 135.
- 57) 前掲書50), p. p. 144-146.
- 58) 前掲書1), p. 46.
- 59) 前掲書16), p. p. 92-103.
- 60) 前掲書50), p. 190.
- 61) 平野正朝; 投手の位置(後編), 野球手報4, 1905, p. 138.
- 62) 伊勢田剛; 野球, 資永館, 1911, p. p. 1-2.



- 63) 安部磯雄 ; 早稲田大學野球選手の米國行に就いて, 萬朝報, 明治38年3月26日, 1905.
- 64) 安部磯雄 ; 國際競技の意義, 運動界, Vol.12-2, p.3, 1931.
- 65) 安部磯雄 ; 國際的競技, 運動世界6号, p.p.1-3, 1908.
- 66) 安部磯雄 ; 國際競技の序幕, 運動界, Vol.12-1, p.4, 1931.
- 67) 安部磯雄 ; 競技運動と勝敗の感念, 運動世界9号, p.3, 1908.
- 68) 安部磯雄 ; 余の野球観, 野球年報10号, p.p.293-294, 1912.
- 69) 安部磯雄 ; 競技運動と勝敗の感念, 運動世界9号, p.1, 1908.
- 70) 安部磯雄 ; 学校と運動, 運動世界16号, p.p.1-5, 1909.
- 71) 安部磯雄 ; 公平なる競技, 運動界Vol.12-4, p.p.2-5, 1931.
- 72) 安部磯雄 ; 運動家の不節制, 運動界Vol.11-8, p.p.2-5, 1930.
- 73) 安部磯雄 ; 運動家の心得べきこと, 運動界Vol.11-11, p.p.2-5, 1930.
- 74) 安部磯雄 ; 運動の精神, 北原鉄雄編 ; アルス大運動講座位置輯, アルス, 1926, p.3.
- 75) 安部磯雄 ; 武士道と運動競技, 運動世界19号, p.1, 1909.
- 76) 安部磯雄 ; 野球の三徳, 橋戸信編 ; 最近野球術, 博文館, 1905, p.p.199-211.
- 77) 前掲書50), p.140.
- 78) 前掲書1), p.p.43-44.
- 79) 前掲書1), p.44.
- 80) 前掲書1), p.44.
- 81) 櫻井彌一郎 ; 野球, 野球年報第5号, p.p.110-117, 1907.
- 82) 青木泰一 ; 勝敗は冷視すべきものか, 野球年報第5号, p.p.149-152, 1907.

- 83) 神吉英三；雑感，野球年報第8号，p. p. 179-185, 1910.
- 84) 押川春浪；最近野球術に序す，橋戸信；最近野球術，博文館，1905，  
p. p. 5-7.
- 85) 押川春浪；大日本的ベースボール，月刊ベースボールVol. 1-1, p. 3,  
1908.
- 86) 押川春浪；野球を武道とせよ，運動世界4-1, p. p. 2-4, 1911.
- 87) 前掲書50)，p. 310.
- 88) 飛田穂洲；野球生活の思い出，ベースボールマガジン社，1986，p.  
346.
- 89) 同上書，p. p. 346-353.
- 90) 同上書，p. 303.
- 91) 同上書，p. 353.
- 92) 朝日新聞社；五十年の回顧，朝日新聞社，1929，p. 256.
- 93) 朝日新聞社社史編修室；朝日新聞の九十年，朝日新聞社，1969，  
p. p. 296-297.
- 94) 高山義三；大會の由來，朝日新聞社；全國中等學校野球大會史，  
1929，p. p. 122-123.
- 95) 田村木国；誕生まで，朝日新聞社；甲子園グラフィティI，朝日新  
聞社，1984，p. 98.
- 96) 田村省三；斯くして大會は生れた第一回大會大會史，1929，p. p. 103-  
104.
- 97) 前掲書95)，p. 97.
- 98) 前掲書96)，p. 104.
- 99) 朝日新聞；野球と其害毒，庄野義信編著；六大学野球全集，上巻，  
改造社，1931，p. 142. および，朝日新聞社；朝日新聞（明治44年



8月29日より9月29日) マイクロフィルム複写コピー,

100)前掲書1), p.p. 140-143.

101)前掲書92), p. 355.

102)前掲書92), p. 256.

103)中尾濟; 十四年間の回顧, 朝日新聞社, 全國中等學校野球大會史,  
1929, p.p. 1-2.

104)上野精一; 全國中等學校野球大會第十五年を迎えて, 朝日新聞社;  
全國中等學校野球大會史, 1929, 序.

105)大阪朝日新聞社; 全國中等學校野球大會を開催す 社告, 大正4年  
7月1日, 1915, マイクロフィルム複写コピーより転載.

106)前掲書103), p. 4.

107)久保田高行; 高校野球五十年, 時事通信社, 1956, p. 30.

108)朝日新聞社; 全國中等學校野球大會史, 朝日新聞社, 1929, p.p. 21-  
22.

109)前掲書107), p.p. 41-42.

110)前掲書108), p. 53.

111)前掲書108), p. 53.

112)前掲書107), p. 8.

113)前掲書108), p. 22.

114)前掲書107), p.p. 32-33.

115)前掲書107), p.p. 197-198.

116)朝日新聞社; 昭和17年7月22日, 朝日新聞社, 1942, 久保田高行;  
高校野球五十年, 時事通信社, 1956, p. 210. より

117)前掲書107), p. 211.

118)朝日新聞社; 昭和21年1月21日, 朝日新聞社, 1946, 久保田高行;

高校野球五十年，時事通信社，1956，p. 218-219. より

119)前掲書107)，p. 219.

120)日本学生野球協会；日本学生野球憲章，日本学生野球協会，1949.

121)前掲書108)，p. 33.

122)前掲書108)，p. 156-157.

123)全国高校野球連盟；プロ野球の勧誘に関する通達，昭和30年9月，

久保田高行；高校野球五十年，時事通信社，1956，p. p. 301-302.

124)全国高校野球連盟；高校野球選手のプロ野球入団についての申し合せ事項，昭和30年12月3日，1955.

125)プロ野球実行委員会；高校選手に対する申し合せ，昭和30年12月14日，1955.

126)前掲書108)，p. 47.

127)前掲書108)，p. 47.

128)前掲書108)，p. 46.

129)朝日新聞社；朝日新聞平成2年5月25日，朝日新聞社，1990.

130)飛田穂洲；怒濤と磯節と野球，飛田穂洲；野球生活の思い出，ベースボールマガジン社，1986，p. 37.

131)飛田穂洲；一球洗心，朝日新聞昭和31年8月13日，朝日新聞社，1956.

132)飛田穂洲；平和の象徴，飛田穂洲；野球生活の思い出，ベースボールマガジン社，1986，p. p. 354-358.

133)飛田穂洲；少年球士に与う，飛田穂洲；野球生活の思い出，ベースボールマガジン社，1986，p. p. 43-54.

134)飛田穂洲；興行野球と學生野球，朝日新聞社；朝日新聞，昭和11年3月16日，1936.



- 135) 飛田穂洲；興行野球と學生野球，朝日新聞社；朝日新聞，昭和11年  
3月17日，1936.
- 136) 大和球士；野球百年，時事通信社，1976，p. p. 73-75.
- 137) 同上書，p. 66.
- 138) 君島一郎，木下道雄；濫觴・一，高三高戦，三高同窓会誌『神陵』  
昭和46年第4号，君島一郎；日本野球創世記，ベースボールマガジ  
ン社，1972，p. p. 180-183.
- 139) 服部喜久雄；一高三高野球史，旧一高，三高野球部有志，1954，の  
グラビア．及び中沢不二雄監修，浦岡偉太郎編；野球史，東京都新  
聞社，1957，グラビア，より

## 第4章 全国高等学校野球選手権大会のテレビ中継におけるテレビの 神話作用分析

### 1. 視聴者の特徴 — 甲子園スタンドでの観戦者との比較から —

決勝戦、準決勝戦、2回戦2試合について視聴者、甲子園スタンドでの観戦者それぞれについての会話、視線、しぐさなどの記録（ビデオテープによる）と、テレビ中継の映像及び音声の内容分析からは、以下のような特徴が見出せる。

スタンドでの観戦者は、主にボールを中心にして選手のプレイを追うが、マウンドからかなり遠い位置で見ているため、選手の表情などはわからない。得点経過はスコアボード、打者の名前は打順揭示ボードを、そして投球の判定は、カウント揭示ランプを自分で見て、情報を入手する。また、ヒットかエラーかの打球については、記録揭示ランプを注視する。全体的に会話は少なく、歓声や驚嘆した声が主である。

これに対して、テレビ視聴者は、選手のプレイ、表情・しぐさなどを、クローズアップされた映像で見、それに伴うアナウンサーや解説者の情報を受容する。特別、以下のような特徴がある。

.....  
①ヒット、ファインプレイ後のスローモーションを凝視する。

.....  
②回と回の間、表と裏の間のアルプススタンド応援団リポートや地元で  
.....  
応援している状況に関する映像・音声に反応する。

.....  
③打者の打撃成績の字幕、アナウンサーの記録に関する情報に鋭く反応  
.....  
し、それについて会話する。この場合、特に成績の優れている打者を  
注視する。

.....  
④選手の故障に関する事など、選手についての細かな情報を聞きなが



.....  
ら、その選手のクローズアップされた映像を凝視する。

.....  
以上から視聴者は、選手の表情を間近に見ながら記録や選手に関する  
.....  
情報を受容し、更にヒットやファインプレイのスローモーションを見る  
ことで全国高等学校野球選手権大会テレビ中継の印象を深めていると考  
.....  
えられる。そして、アルプススタンドや地元での応援に関するレポート  
.....  
や映像に注目していることがわかる。

## 2. テレビ中継における映像・音声の内容分析

### (1) 映像の内容分析

映像はその中心的事象から分類すると、キャラクターとして、ピッチャーとバッター、ピッチャーのアップ、ファインプレイの野手のアップ、ヒットを打ったランナーのアップ、ランナーの状況を示すもの、監督のアップ、ダッグアウトの様子を示すもの、応援団・地元での応援の人々のアップ、応援団・地元での応援の状況を示すもの、スタンドの人々の状況、その他となる。非キャラクターは、打球その他ボールの行方、スコアボード・打順揭示ボード、空や内野スタンドの屋根、旗などを映したもの、応援の小道具など、その他に分類できる。それぞれの時間については、表4-1. 映像の内容と時間数に示すとおりである。

それによれば、キャラクターのアップが多く、ピッチャー、バッター、野手、ファインプレイをした野手、ヒットを打ったランナーのそれぞれのアップが準決勝戦で全体の42.1%、決勝戦で39.0%を占めている。このことは、選手の顔の表情がはっきりわからない甲子園スタンドでの観戦者が、ボールの行方を中心にゲームを見ているのと異なり、明らかに選手の細かな表情やしぐさをテレビ視聴者が見ていることを示すものである。そして特別、ファインプレイをすればその後で平均13.5秒、ヒットを打てば平均8.2秒、その選手の表情やしぐさが映し出されることは、1本のヒットの後平均12.4秒のスローモーション再生が行われるのを含めて、選手のイメージを深く印象づけることになる。

また、応援に関する映像は、キャラクターのアップとその他を含めて準決勝戦6.4%決勝戦5.9%あり、打球やボールのみを映し出す映像よりも多い。選手の細かな表情・しぐさからの神話生成に加えて、応援団や



地元での応援に関する神話が生まれる根拠となろう。

表 4-1. 映像の内容と時間数

		準決勝戦		決勝戦	
		時間 (秒)	割合 (%)	時間 (秒)	割合 (%)
キ ャ ラ ク タ ー	ピッチャーとバッター	2 332	24.1	2 373	26.1
	ピッチャー (アップ)	1 539	15.9	1 450	15.9
	バッター (アップ)	1 960	20.3	1 469	16.1
	野手 (アップ)	255	2.6	370	4.1
	ファインプレーの 野手 (アップ)	13	0.1	98	1.1
	ヒットを打った ランナー (アップ)	310	3.2	160	1.8
	ランナーの状況	405	4.2	363	4.0
	監督 (アップ)	562	5.8	458	5.0
	ダッグアウトの様子	27	0.3	257	2.8
	応援団, 地元での応援 (アップ)	577	6.0	503	5.5
	応援団, 地元での応援 (アップ)	39	0.4	34	0.4
	スタンドの人々	77	0.8	121	1.3
	その他	540	5.6	501	5.5
	小 計	8 636	89.3	8 157	89.6
非 キ ャ ラ ク タ ー	打球, ボール	497	5.2	453	5.0
	スコアボード, 打撃掲示ボード	145	1.5	88	0.9
	空, 内野スタンドの 屋根, 旗	50	0.5	32	0.4
	応援に関するもの	0	0	34	0.4
	その他	19	0.2	0	0
	小 計	711	7.4	607	6.7
	スローモーション	323	3.3	337	3.7
合 計		9 670	100.0	9 101	100.0

## (2) 音声の内容分析

音声については、人の声としてアナウンサー、解説者、場内アナウンス、選手、応援、校歌にカテゴリー分けでき、また人の声以外では、拍手・歓声、応援団の声や音、その他場内の音、サイレンそしてその他がカテゴリーとしてあげられる。量的には、アナウンサー及び解説者が多く(準決勝戦57.52%、決勝戦60.16%)次いで応援の音声(同じく、32.84%、27.29%)応援団、アルプススタンドで応援している人々、地元で応援している人々へのインタビューまたはリポート(同様に、2.58%、4.08%)の順であった。アナウンサー及び解説者の言説に加えて応援についての音声の内容として多いことは、映像と共に応援に関する神話を生んでいることを示すものである。(表4-2. 参照)

更に、アナウンサー、解説者の言説の内容を検討してみると、以下のようなカテゴリーに分類できた。それは、ピッチャーの技術分析や様子・状況について、バッターの名前・成績・技術分析・情報について、ヒットの技術分析について、ヒット以外の技術分析について、ランナーの状況説明、監督紹介、作戦の予想と評価について、ゲームの展開について、スタンドの状況について、天候について、実況、そしてその他である。量的には①様々な面で、技術についてのこと(準決勝戦13.50%、決勝戦16.20%)②作戦及びゲーム展開についてのこと(同じく10.41%、7.33%)③打撃成績、記録についてのこと(同じく、5.56%、5.90%)の順である。また、特に優れている打者や、故障を持ちながら投げている投手についての細かな情報提供がなされている。(表4-3、4-4. 参照)

アナウンサー、解説者が、このような技術、成績、記録といった内容について言及している時間が、単にボールを追って選手のプレーを描写す



るだけの実況の時間よりも多いことは、全国高等学校野球選手権大会テレビ中継における神話作用に関して技術、成績、記録についての音声の内容が大きく影響すると考えられる。

また、応援の音声（ブラスバンドの音、歌声など）は、単独なものとしては先に述べた割合であるが、テレビ中継の間、ほとんど攻撃側チームの応援が聞こえるため、影響力は大きく、応援団や地元で応援している人々に関するレポートを含めると、視聴者が応援に対して持つ情報量は非常に多いといえよう。

表 4 - 2. 音声の内容と時間数

		準決勝戦		決勝戦	
		時間 (秒)	割合 (%)	時間 (秒)	割合 (%)
人の声	アナウンサー	3891	40.24	3892	42.76
	解説者	1671	17.28	1584	17.40
	場内アナウンス	153	1.59	169	1.86
	選手	2	0.02	0	0
	応援 (リポーター等)	250	2.58	371	4.08
	校歌	46	0.48	81	0.89
	小計	6013	62.19	6097	66.99
人の声以外	拍手・歓声	288	2.98	407	4.47
	応援の声・音	3176	32.84	2484	27.29
	その他場内の音	157	1.62	100	1.10
	サイレン	22	0.23	7	0.08
	その他	14	0.14	6	0.07
	小計	3657	37.81	3004	33.01
合計		9670	100.00	9101	100.00

表4-3. 音声の内容と時間数

— アナウンサー, 解説者について — (決勝戦)

	アナウンサー		解説者		リポーター他	
	時間(秒)	割合(%)	時間(秒)	割合(%)	時間(秒)	割合(%)
ピッチャーの 技術分析	150	1.65	238	2.62		
様子・状況	239	2.63	138	1.52		
バッターの 名まえ	191	2.10	0	0		
成績	375	4.12	0	0		
技術分析	68	0.75	206	2.26		
情報	100	1.10	0	0		
野手の名まえ	143	1.57	0			
技術分析	188	2.07	176	1.93		
ヒットの 技術分析	117	1.29	233	2.56		
ヒット以外の 技術分析	20	0.21	78	0.86		
ランナーの 状況	50	0.55	0	0		
監督紹介	28	0.31		0		
作戦の予想と 評価	166	1.82	199	2.19		
ゲームの展開	144	1.58	157	1.74		
記録	162	1.78	0	0		
チームの特徴	241	2.65	104	1.12		
応援	165	1.81	0	0	371	4.08
スタンドの 状況	33	0.36	0	0		
天候	34	0.37	0	0		
実況	1226	13.47	0	0		
その他	52	0.57	55	0.60		
合計	3892	47.76	1584	17.40	371	4.08



表4-4. 音声の内容と時間数

— アナウンサー, 解説者について — (準決勝戦)

	アナウンサー		解説者		リポーター他	
	時間(秒)	割合(%)	時間(秒)	割合(%)	時間(秒)	割合(%)
ピッチャーの 技術分析	276	2.85	415	4.29		
様子・状況	137	1.42	164	1.70		
バッターの 名まえ	194	2.01	0	0		
成績	243	2.51	0	0		
技術分析	144	1.49	153	1.58		
情報	101	1.04	0	0		
野手の名まえ	96	0.99	0	0		
技術分析	60	0.62	89	0.92		
ヒットの 技術分析	42	0.43	102	1.05		
ヒット以外の 技術分析	26	0.27	0	0		
ランナーの 状況	24	0.25	48	0.50		
監督紹介	0	0		0		
作戦の予想と 評価	269	2.78	329	3.40		
ゲームの展開	180	1.86	229	2.37		
記録	295	3.05	0	0		
チームの特徴	109	1.13	122	1.26		
応援	48	0.49	0	0	250	2.58
スタンドの 状況	25	0.26	0	0		
天候	120	1.24	0	0		
実況	1394	14.42	0	0		
その他	108	1.12	20	0.21		
合計	3891	40.24	1671	17.28	250	2.58

### (3) 視聴者の印象分析

視聴者の特徴は、本章第1節の比較分析からわかるとおり、アナウンサー、解説者の音声やクローズアップの映像、また応援に関するレポートに強くひきつけられるものである。そして、視聴者の受けた神話作用は、そのような特徴を顕著に示し、かつ前節で見られた映像や音声の内容に適合するものであった。

すなわち、準決勝戦においては、記録についてのアナウンサーの言説  
 .....  
 や、解説者のファインプレイに対する説明、そして応援団員や応援の生徒の映像や音声から、神話として「ヒーロー性」「一所懸命さ」「努力」「一体感」を受容している。

また、決勝戦については、ピッチャーについての情報提供、エラーについての解説、ファインプレイに対する説明、応援の映像や音声から「一所懸命さ」「努力」「一体感」「郷土意識」「友情」といった神話作用を受けている。

これらを、神話のモデルに適用すると以下のようなになる。

映像	6回裏の連続ヒット	
音声	「新記録です。」「驚異的な連続ヒット」	
		安打記録
		ヒーロー性

映像	浦和学院1塁手の怠慢なプレー	
音声	「最後まで全力で戦ってほしい」	
		試合をすてた態度
		最後まで頑張り抜く 一所懸命さ

映像	4回の裏松山商業センターの好返球	
音声	「よく鍛えられています。」	
		ファインプレー
		地道な努力

映像	6回裏浦和学院女子生徒の涙	
		懸命の応援
		一所懸命さ



映像	チアガール、応援団員		
音声	「私達も暑さに負けないで頑張りますから、 選手の皆さんもがんばってください。」		
		応援の励まし	
			一体感

映像	チアリーダーの涙しなごらの応援 汗まみれの応援団員		
		懸命の応援	
			一所懸命さ

映像	天理投手の肘をおさえる所 肘のアップ、灸の跡		
音声	「肘の痛みに耐えて投げています。」 「肘の痛みはまだ残っています。」		
		懸命の力投	
			一所懸命さ

映像	天理投手の笑顔		
音声	「表情には、明るさが見えます。」		
		痛みを忘れたかの笑顔	
			すがすがしさ

映像	4回表松山商業投手の2連続ワイルドピッチ		
音声	「4連投、ピッチャーも疲れているのでしょう。」		
		疲れからのエラー	
			一所懸命さ

映像	9回2死から天理3塁手ガッツポーズから1塁悪送球		
音声	「しめたと思ったのでしょうか。」		
		土壇場のエラー	
			油断

映像	松山商業7塁ス席の78才の表情		
音声	「若いも若きも一体となつての応援です。」		
		生徒と老人の応援	
			一体感

映像	対戦して負けた学校の帽子、うちわ、メガホン		
音声	「勝ち抜いてきたのも、各学校の力も借りて」 「各校の友情に支えられてここまで来ました」 「対戦相手が私達の分までと残していったもの」		
		応援団の友情	
			友情

映像	地元商店街「初優勝」と書かれた梅酒 明日からバーゲンセールのはし		
音声	「地元でも盛り上がっています。」		
		優勝の準備	
			郷土での盛り上がり

このことから、視聴者は、全国高等学校野球選手権大会テレビ中継において「一所懸命さ」「郷土意識」「一体感」「努力」「友情」「理想としてのヒーロー」といった神話を、映像や音声から意味解釈していることがわかる。

### 3. 全国高等学校野球選手権大会テレビ中継におけるテレビの神話作用

全国高等学校野球選手権大会テレビ中継において映像の内容として、①選手の表情やしぐさのクローズアップ②応援団、応援席の人々および地元での応援の人々の表情やしぐさのクローズアップ③ファインプレイの野手、ヒットを打った選手のアップ④スローモーション、音声の内容としては、アナウンサー、解説者の①技術②記録③作戦、ゲーム展開④選手についての情報⑤応援に関する説明などと、応援の音や声が、量的に多いことがわかった。そしてこれらの内容の量的な影響もあって、視聴者に甲子園野球の神話といえる「一所懸命さ」「郷土意識」「一体感」「努力」「理想としてのヒーロー」「友情」をもたらす。



## 第5章 文化的コンテクストの地平における神話作用の実証

### ー池田町でのフィールドワークからー

これまでの研究で、甲子園野球は、「純真で」「男らしく」「すべてに正しく、模範的な」「青少年」が「スポーツマンシップ」と「フェアプレイ」の「精神」で「地方の代表」として「澁刺たる妙技」をみせるものだという神話を、朝日新聞社や中等学校（高等学校）野球連盟によって神話に反する事実を処分するといった仕掛けを使いながら、そして飛田穂洲ら早稲田大学野球部で活躍した選手達が卒業後新聞社に入社し、メディアの側からそれらの神話を生成、強化していく働きをもった事実を含めて、歴史的に醸成してきたことを明らかにした。そして、現代において、特別、テレビ中継が量的あるいは質的に「すがすがしさ」「一所懸命さ」「友情」「一体感」「努力」「礼儀正しさ」「郷土意識」といったものを神話として伝達し、解釈していることがわかった。

本章では、こうした甲子園野球の神話が現実の社会、コンテクストにおいてどのように生きている人間ー生活者ーに影響を与え、シンボリックに解釈されているのか、甲子園に出場し、全国優勝を飾った池田高校の地元、徳島県池田町に赴いてフィールドワークしたものをモノグラフとして記す。そうすることで、甲子園野球神話と現実社会に生きる人間とのかかわりを描き出せ、なぜ、甲子園野球の神話に引き寄せられるのかをその心象のレベルから描写できるだろう。

## 1. 主題・方法・範囲

### (1) 民族誌的記述の方法

「…原住民に関する研究で、ほんとうに私の関心をひくものは、彼らの物事に対する見方、世界観、原住民が呼吸してそれによって生きていく生活と現実の息吹である。あらゆる人間の文化は、その文化をつくる者たちに、一定の世界像を与え、はっきりとした意味を示す。」 B.K. Malinowski<sup>1)</sup>

本章の主題は、甲子園野球の神話が文化的コンテクストにおいて、どのように理解されているのかを、具体的に描き出すことである。第1章

先行研究の検討 1. 本研究の系譜 ですすでに述べているように、本研究は甲子園野球がいかにシンボリックに意味解釈されているのかを研究するものであり、象徴と解釈の側面から文化研究をすすめていく学問的系譜に位置づけられる。C.Geertz は文化を「人間が自分自身ではりめぐらした意味の網」とした上で、「この意味の重なった構造をきわめて正確に表すものが民族誌である。」<sup>2)</sup>と述べた上で、「意味の象徴的体系としての文化がコンテクスト（脈絡）において民族誌によって記述される。」<sup>3)</sup>として、文化とその解釈の研究において民族誌的記述を提唱している。この民族誌的記述について彼は、「長期の主として質的な、また現実の生活によく参与した、しかも、限られた地域における、しつこいほどに綿密な現地調査」<sup>4)</sup>といった特殊性と脈絡性において広範囲に様々なことを解釈し、記述することを数多く積み重ねていく事が民族誌記述であるとした上で、民族誌学者は「現地の人びとやその仲間が行っていることについての彼ら自らの解釈（彼らの文化）に関する我々（民族誌学者）自身の（二次的、三次的）解釈を記述すること」<sup>5)</sup>が重



要であるとする。そして、「民族誌学者にとって重要なのは、ひとつの人類学的解釈がどこにあるかを示すことにある。それは社会的対話の流れを追跡すること、それを吟味のできる形におくことにある。民族誌学者は社会的対話を「書きしるす」。それを書きとめるのである。こうすることによって、ある時点においてのみ起こった一つのできごとを、記録の中で再び見ることのできる記事にするのである。」<sup>6)</sup>として、社会的対話の流れを追跡し、書きしるすことが民族誌学者の使命であると述べている。

従って、民族誌は、狭い範囲においてその脈絡の上で、現地の人々の行動、対話の意味を読みとり、記述するといった「厚み」を持つものでなければならないのである。この点について、J. L. Peacock は、「民族誌的理解が、原住民の生活と民族誌家の解釈との結合の上にたって生み出されるものならば、そのような理解は単に「X部族はYやZを行う」といったようなかたちで要約されるべき性質のものではあり得ない。人間の生活は、採集され、保存され、博物館の陳列棚や体系的な見取り図の中に並べられてしまう標本などではないのだ。解釈は、それが主体と客体の、民族誌家と他者との相互作用をえぐり出すからこそ力があるのである。」<sup>7)</sup>とした上で、「民族誌家は、彼の感受性を手掛かりにして他者（原住民）の世界観を解釈するという作業」<sup>8)</sup>であると述べる。

フィールドワークは、民族誌学者が共同体と一貫してかかわり、様々な人々にインタビューし、情報を体系的に集める「参与観察」である。民族誌家自身が、現地の共同体に巻き込まれ、巻き込まれることで現地の人々の価値や観念や経験を「共有し」、行為の意味を解釈できるのである。「民族誌家は、必然的にフィールドワークと呼ばれるさまざまなレベルでの人間との出逢いに巻き込まれる。離れた場所に立ち、対象

から超然として観察し記録するのではなく、民族誌家は現地の人々の生活の流れの中で得た彼自身の経験にもとづいて、そこから民族誌と呼ばれるものを蒸留していくのである。民族誌家と現地の人々が協力し、データと解釈とを積み上げていくことによって、はじめて民族誌という成果が生まれてくる。」<sup>9)</sup>と言えるのだ。この民族誌家の参与観察におけるデータと解釈との積み上げ、そしてその記述といった一連の民族誌の方法は、仮説 → 調査および実験 → データ → 仮説の是非の検討といった実証主義的モデルをもつ社会学者のそれとは異なる。民族誌家は、「一定の段階まではこの手続きに従うが、これほど計画性をもたず、フィールドワークにおける調査、出逢いによる体験を重視」<sup>10)</sup>し、民族誌家自身が参加することで、自分自身自らデータをつくりあげる作業にかかわり、その中で現地の人々が「ものごとをどう意味づけし、それをどういうかたちで表現しているか」という基準に注目する」<sup>11)</sup>のである。

これらの民族誌記述のためには、J. L. Peacock は、「彼ら（現地の人々）の価値や観念や経験の充満したかたまりから蒸留された形式であって、意味の「厚み」を持った表現である儀礼、セレモニー、民話、歌、原住民による哲学的な会話を逐語的に記録する」<sup>12)</sup>必要があり、「民族誌家はこのような厚みのある関係の中に自らを巻き込みながら、意味の背後に見え隠れするパターンや原理を拾いだしてゆくことで、わたしたちはその意味の豊饒な混乱をつき抜けて一つの深い理解へとたどりつくことができる。」<sup>13)</sup>と述べている。

以上でみてきたように、民族誌は、民族誌学者個人の体験として自分自身を現地人の中に見出しながら、現地人独自の体系的で厳密な思考方法や彼らの解釈を「厚く」記述するものである。そこで必要なことは、儀礼やセレモニー、原住民の会話を記録することも含めて「<sup>ホーリスティック</sup>全体論的な



視点ですべてに対して目配りする」<sup>14)</sup> ことである。J. L. Peacock がいうように、「人類学は対象に向かってシャープにというよりはむしろソフトに焦点を当てる。対象だけを狭く写しだす代りに、人類学は対象とその周辺環境とのあいだの境界をぼんやりした調子のものに変え、それによって対象とその周囲、全景や背景すべてを視野の中に収めようとする。」<sup>15)</sup> のである。この全体への視点、ソフトなフォーカスの中において民族誌家は、「本質的で基本的なものの探求への情熱と、厳しい自然状態のもとで人々の生活を詳細に観察するときに人類学者が依拠する厳密なリアリズム」<sup>16)</sup> のもとで現実をからめ取り、解釈し、民族誌を記述していくのである。そのとき C. Geertz のいう「厚い記述」をするために、「見知らぬ人びとの生活に我々を接触させる科学的想像力」<sup>17)</sup>こそが「厚い記述」をするための大きな力となるのである。

## (2) 池田町におけるフィールドワークの方法

このフィールドワークの主題は、池田町の人々が、昭和46年(1971)初めて全国高等学校野球選手権大会に出場して以来、選抜大会で優勝したり、選手権(夏の大会)で優勝を飾ったりする中で、醸成されてきた池田高校野球部のもつ甲子園神話を、コンテクストにおいて現地の人々がどのように解釈し、神話を生きてきたのか、そして生きているのかについて、池田町に赴き、観察し、対話をしながら、民族誌を編み上げ、それによって甲子園野球がコンテクストにおいて人々とどうシンボリックに関わるのかを明らかにすることである。B. K. Malinowskiが、フィールドワークについて、「いろいろな事実の具体的データを広範囲にわたって集めることが、野外調査法の一つのだいじな点である。ほんのわずかの例をあげることではなく、手のとどく範囲にある可能なかぎりたくさ

んの事例を調べあげるのが義務であり、事例を採求することにかけては、最も明確な知能の海図をもった調査者が最もよい成績を修めるだろう。しかし、調査の資料が許すかぎり、この知能の海図は現実の海図とならなければならない。」<sup>18)</sup>と述べているように、池田町民の人口や暮らしについてできるだけ多くの図表を取り入れながら、生活全体の上で、さらに池田町民が生きている世界観の中で、甲子園野球の神話をいかに解釈しているのかを自分（本論分の著者たる私）が解釈し、記述していく。

著者は、2回にわたって池田町を訪れ、フィールドワークを行っている。その概要は以下のとおりである。

#### 第1回調査 昭和63年(1988) 7月28日～ 8月15日

徳島県立池田高等学校が、第70回全国高等学校野球選手権大会に出場を決定した予選大会より全国大会で敗退するまで、池田町の人々がどのように池田高校野球部とかかわるのかについて、池田町に滞在しながら参与観察し、記述する。池田高校が甲子園大会で敗退するまでの概要は下記のとおり。

#### 7月29日

徳島県予選決勝で鳴門市立工業高校に 2対0 で勝利し、全国大会出場を決定する。

#### 7月30日

池田駅前商店街には「祝池田高校」の張り紙や「こんどは全国優勝だ」あるいは、「祝池田高校甲子園出場」の横断幕がはられる。



午後 3 時からの池田高校野球部の練習には、四国放送のカメラマン、スタッフが甲子園出場チームを紹介するテレビ番組用に練習風景を取材、収録にやってくる。

7月31日

池田高校野球部特別後援会総会開催される。

四国放送カメラマン、スタッフが池田高校野球部を取材。

8月1日

池田高校野球部特別後援会役員が寄付金集めを開始。

8月3日

全国大会に向けて、用具などを運ぶバスが先発隊として出発。

8月4日

午前7時すぎから甲子園にむけて出発するレギュラー選手、部長、監督の壮行会が阿波池田駅前で行われる。

8月6日

抽選会の結果池田高校は、6日目2回戦第3試合で浜松商業と対戦することが決まる。

8月8日

第70回全国高等学校野球選手権大会開会式。

8月14日

池田高校、浜松商業に2対3で初戦敗退。

この中で、池田高校出身者、薦文也監督、岡田康志コーチ、四国放送スタッフその他、池田町の人々にインタビューを行う。また、池田町や池田高校についての沿革や社会統計の資料収集などを行っている。

第2回調査 平成元年（1989）11月18日 ～ 11月25日

第1回調査をふまえてより深く池田町民のコスモロジー、甲子園野球の神話の解釈について、葛文也監督ほか池田町の人々にインタビューしている。

## 2. 池田町の風土・人口・産業

徳島県三好郡池田町は、東経 133度48分39秒、北緯34度 1分24秒に位置し、総面積167.79km<sup>2</sup>、北を讃岐山脈、南を四国山地にはさまれ、吉野川の流れにそった山に囲まれた土地である。土讃線琴平駅から山また山、トンネルまたトンネルを抜け、無人駅を過ぎた先に、南北を山と山に挟まれたところが、四国の交通の要と古くからいわれている阿波池田駅である。これが池田町民たちの主要駅で、甲子園大会にも壮行会后、選手達が見送られて出発するところである。駅前は、商店街であり、三百メートル四方に密集してパチンコ屋、旅館、喫茶店、果物屋、飲み屋、食堂、そして大手スーパー（ジャスコ）が並んでいる。この駅前を過ぎると上野台地があり、池田高校ほか、幼稚園、小学校、中学校がある文教地区となっている。ちょうど池田町を見降ろす位置である。（写真参照）

駅前の商店街をすぎるともう山が目の前にかぶさってくるようにあり、工場や商店、事務所といったものは見えなくなり、家屋が点々とするだけである。山と国道と吉野川が東西にずっと走っている。池田町は、表1に示すとうり、田、畑や原野をあわせると全体の70.80%を占める。

人口は昭和63年（1988）現在で、20,508人（男9,722人、女10,786人）世帯数は6,930世帯である。表2池田町の世帯数、人口の推移でわかるように人口の減少、特に男性人口の減少は著しいものになっている。





阿波池田駅より池田高校を望む



池田高校のある上野台地からみた池田町

池田町の産業は、江戸時代からのたばこ産業（注1参照）や醸造業（酒、味噌、醤油）、菓子の製造そして農業に加えて山地を利用した製材、木工業が産業の中心になっている。「四国のへそ」として古くから幹線道路の便が良いため、商業としての販売力も備わっている。しかしながら、表3、4でわかるように就業人口に変化がみられる。昭和45年の徳島新聞では、以下のような投書がみられ、産業形態の変化とそれに伴う人口減少、過疎化、高齢人口の増加の問題について心情が吐露されている。

「さびしい過疎の村 行政関係者はどう見ているのか

過疎に明け暮れる私の部落にも、本年は雪が少なく、黒い地膚がくつきりと見えてまいりました。何となく春が近づいた感じをする今とは言え、やはり六百メートルもある部落ですから、朝夕の風は膚身を通す寒さです。

私も辺地のカゲノに生まれましたが、なんとかして生きがいのある部落に、農業で食って行ける郷土にと、部落の若い者と一緒になって普及事務所の方々の力をお願いした。その青年時代はなつかしい過去の思い出となってしまい、今は若い者がだれ一人としていない部落には、唯一の換金作物である葉タバコ収納準備にいそしむ人々も婦人と老人ばかりです。私も数年前から農閑期に出かせぎに出ては農繁期に帰ってきて百姓をやるという方法でしたが、技術を身につけてと思い池田技能専門学校配管工科の生徒として実習にはげんでいます。



表 1

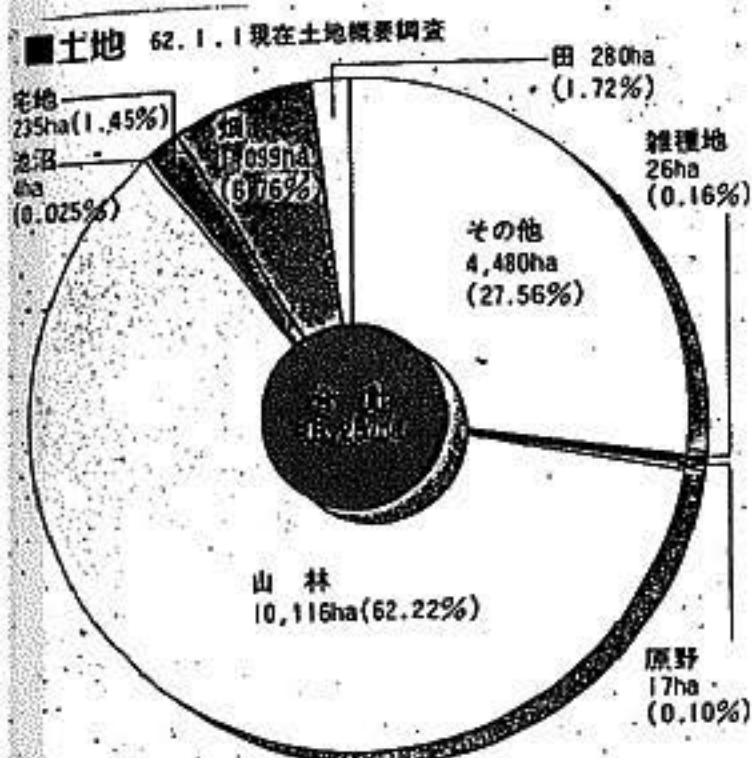


表 2 池田町の世帯数、人口の推移

年 度	世帯数	人 口			年 度	世帯数	人 口		
		総 数	男	女			総 数	男	女
昭和30	2,336	10,313	4,947	5,366	昭和51	6,643	22,568	10,671	11,897
35	6,182	28,403	13,527	14,876	52	6,644	22,255	10,532	11,723
40	6,303	26,363	12,370	13,992	53	6,660	22,072	10,510	11,565
43	6,540	24,959	11,625	13,334	54	6,691	21,951	10,487	11,464
44	6,533	24,848	11,619	13,229	55	6,737	21,856	10,440	11,416
45	6,563	24,566	11,522	13,044	56	6,756	21,710	10,363	11,347
46	6,534	23,948	11,227	12,721	57	6,779	21,550	10,252	11,298
47	6,578	23,694	11,136	12,558	58	6,824	21,448	10,198	11,250
48	6,607	23,361	10,990	12,371	59	6,833	21,281	10,123	11,158
49	6,631	23,071	10,868	12,203	60	6,842	21,121	10,059	11,062
50	6,643	22,568	10,568	11,897	61	6,840	20,918	9,946	10,972

(「住民基本台帳」より)

表 4

■産業別就業人口の推移

年 度	分類不能 2 人		
	第 1 次産業 6,079人 (46.5%)	第 2 次産業 2,289人 (17.5%)	第 3 次産業 4,700人 (36.0%)
昭和35			
40	4,582人 (38.2%)	2,499人 (20.9%)	4,893人 (40.9%)
45	3,442人 (29.4%)	2,997人 (25.6%)	5,264人 (45.0%)
50	2,027人 (19.0%)	3,471人 (32.4%)	5,173人 (48.6%)
55	1,513人 (14.4%)	3,529人 (33.6%)	5,455人 (52.0%)
60	1,287人 (13.0%)	3,306人 (33.5%)	5,264人 (53.3%)

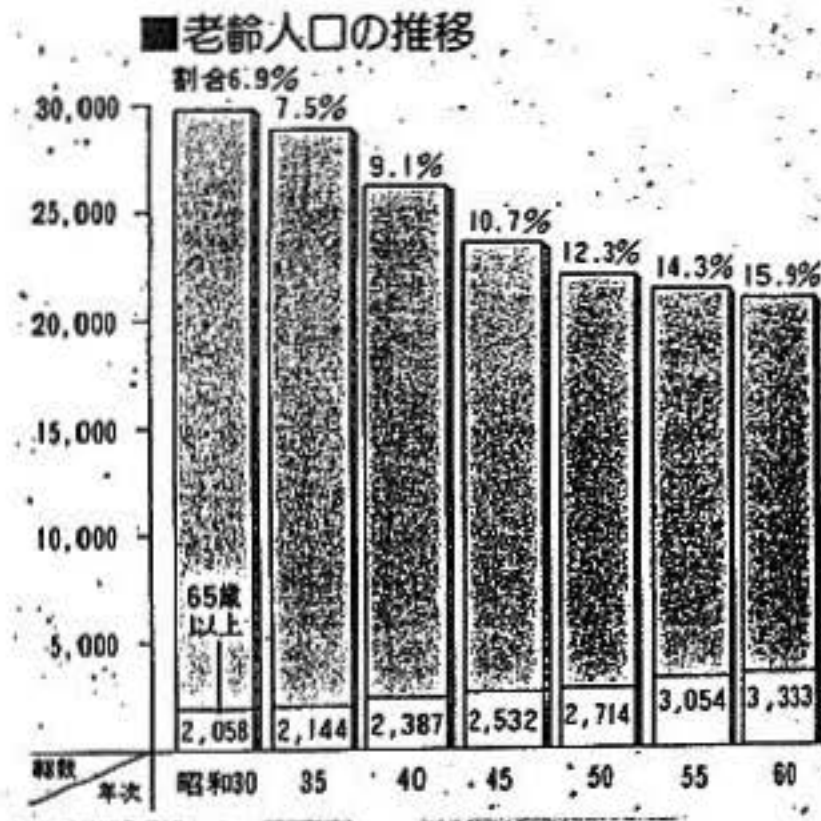
資料/国勢調査

表 3 池田町専業別自小作別農家数

年 度	農家総数	専 業 別 農 家 数			自 小 作 別 農 家 数				
		専 業	第 1 種	第 2 種	自 作	自小作	小自作	小作	その他
昭和25	363	109	254	—	188	91	43	41	—
35	2,750	772	1,219	759	2,214	332	73	131	—
40	2,458	371	985	1,102	2,093	249	62	48	6
45	2,218	257	599	1,362	—	—	—	—	—
50	1,934	235	349	1,350	—	—	—	—	—
55	1,811	287	234	1,290	—	—	—	—	—
60	1,639	347	160	1,132	1,511	89	29	6	4

(県統計課「農業センサス」より)

表 5



今日も寒さにたえて通学する道ばたの田畑もついこの間まで耕地であつたはずなのに、今は針葉樹が勢いよく育っているありさまです。果たしてこれからの山村農業はどのようなになるのであろうか、考えれば考えるほどに頭が痛い思ひです。

三月には晴れて卒業し、故郷に妻子を残して大阪に就職することになっています。生まれ故郷の繁栄を祈るが、我々の力だけではどうすることもできない山地農業、農業がしたくとも隣地に木が育つ今ではどうすることもできない姿を、行政関係者はどう見ているのでしょうか。年とともに明かりが一つ消え二つ消えて、田畑に草木が繁る全景は、農業人としてさびしくてなりません。これが本当の国の姿でしょうか。」<sup>19)</sup>



当事33才だった大黒明氏の過疎化していく土地、農業を生まれた地でしたくてもできない状況、33才にして妻子を残して大阪に就職しなければならない事情が刻明に記されている。池田町はこの当時から産業構造の変化とそれに伴う人口減少、過疎現象といった問題を抱えてきたのである。表5 高齢人口の推移でもわかるように高齢人口の割合は確実に増加している。

このような、風土、自然環境にあって、池田高校（普通科）にほとんどの町民が進学していく。次節ではこうした池田町の自然環境をふまえて町民が池田高校にどのような思いを抱き、池田高校の精神性がどのように作られたかについて述べる。

### 3. 池田高校と池田町民 —池田高校気質の醸成と自然環境—

池田高校は、大正11年(1922)4月徳島県立池田中学校として創立し、昭和23年(1948)4月に学制改革により徳島県立池田高等学校となった後、全日制の普通科、農業科、そして定時制の普通科、農業科、家庭科の設置やそれらの統廃合といった歴史をもつ。現在は、全日制普通科だけとなり、三好郡東祖谷山村に東祖谷分校—農業科をもっている。前節のような自然環境の中で、池田高校の気質はどのように醸成されてきたのか、池田高校野球部の基盤になるこの池田高校気質にスポットをあてよう。

徳島県立池田高校編集による50周年記念誌には、以下のような言説がある。前PTA会長で同校卒業生真鍋忠雄は、『純たれ！情たれ！明朗たれ！』と題して池田高校の生徒像を次のように示している。「…私は『素朴で、素直な、明るい生徒、そして思いやりがあって辛抱強い生徒』であってほしいと思う。今日という時代は、山も川も空気もあらゆるものが自然

のまま、純粹なままを破壊されつつあるだけに、自然のまま、純粹なものこそ貴重とされる傾向にある。人間もやはり、都会育ちの目先のきく小賢い人間よりも、田舎の、温かい、豊かな人情を持ち、大自然の中で朴訥と育った人間のよさが認められる時代になったと思う。…（中略）池校は、田舎で刺激がなく、都会の学校にいつも遅れをとっていると思ひこみ、ひけめを感じている生徒諸君もあるやに聞いているが、池校生は、都会の人々が憧れている大自然の清澄な空、汚されていない生き生きとした山や川に恵まれている。…なんら卑下すること、ひけめを感じることはないのである。豊かな情操を持つ、素朴な、素直な、そして根気強くて明るい人間として大きく成長してほしいと思う次第である。」

20) また同じ記念誌には、『高めよ“質実剛健”の風』<sup>21)</sup>や『池校生に期待する“質実剛健”の気風樹立』<sup>22)</sup>と題した文章や『池校の発展を祈念しつつ』というテーマの中で「…「山嶽武士の精神」といった野武士的「質実剛健」といったもの」<sup>23)</sup>を理想に掲げることの重要性を説くなど「質実剛健」の気風が池田高校に求められていることを理解させる。この「質実剛健」の精神は、池田高校の座右銘として「質実剛健を本旨としよう 生活は質素に、人間関係は誠実に、そして心も体も強くたくましい人間を育てる」という本校の校訓の現代的意義をよく理解し、自己形成に努めよう」と謳われており、「質実剛健」の精神が池田高校気質の中核にあることがわかる。このように、池田が都会と違った大自然の中であって、一方で都会に対する憧れがあることを認めながら、素朴で、素直で、明るく、根気強い人間として質実剛健の精神をもって生活することが重要だとする気質が池田高校に醸成されてきたといえよう。

こうした気質は単に学校においてだけそうあるべきと教えられるので



はない。池田町全体で池田高校生を「我が町の子ら」として見、常に池田高校生らしくあることを望んでいる。野球部のコーチで、保健体育科教諭の岡田康志は、生徒が髪型、学制服の着方等の身だしなみ、素行についてまず規則正しく、池田高校の精神にあった生活をほとんどの学生が行っていることについて、「こういう環境だと思うで。(徳島)市みたいにいろいろなものがあって、練習した後、遊ぶところがあったらな……。 (選手には)生活指導がほとんどや、池田の町の人もそうすることが普通だと思っとるんじゃないかな。」と、池田町の人々の眼を意識している。

池田の町は、小さい。誰が何をやったかはすぐにうわさとして広まってしまう。池田町において型どおりでないことをすると、すぐ人の目を引き、話の種になるのだ。池田高校出身で、現在池田町の飲食店に勤務する篠田早苗は、池田町民を称して「芸能レポーターやね。」と述べ以下のようにつづけた。「あの人はどんな人や、この人はどんな人やって、いろんな人が聞くし、聞かれるんよ。だからあの人ってどんな人かなっていう場合、3~4人、多い時は7~8人に聞いて回る。あの人はどんな人やって、小さい時から、あの子はどういう子ってみんなで聞いて話すんよ。会う前からその子のイメージをつくってしまっ、みんなからいやな奴やといわれてしまっている子とはいやな人やって思って会うんよ。悪い人のことをみんなうわさしてあの人はああだっていう。いい人は言われん。」彼女は、このような町に対して「いろいろ聞かれるやろ、それがいやなんよ。あの人どんな人やって言われて、あの人は……なんて言いたくないんよ。」と言った後、町を「出たいわ。」という。小さいなか町にあって人の関心は他人のうわさであって、ちょっと池田町のステレオタイプに合わないことをすると悪いことをしていると言わ

れる土壌なのである。「隣の方は、何をする人ぞなんていうのはまったくないわ。隣の方のことなんかよう知っとるんよ、それくらい、おせっかいなんかね。」と篠田早苗がつづけるように池田町は深い山の中の小さな世界なのである。池田高校気質を背景にして、池田高校の生徒に「らしさ」を求めるのはこのようなコスモロジーから考えられる。

そして、この池田高校の気質は、甲子園で活躍してから後、表面化し、常日頃から池田高校生らしさを強調されるようになった。池田高校東祖谷分校の教諭阿部隆（徳島県立新野高校出身）は、「池田高校、甲子園に行った池校の誇りというか、プライドはごつい（すごく）あると思うわ。生徒も（生活指導の面で）髪の毛なんか中にはへんなんもおるけどな、そろっとるし、特に女の子なんかびしっとしとるよ。靴下なんかまっ白だしな。常にみんなに見られてるって感じがあるみたいやわ。」と、池田高校が甲子園に出て、池田高校神話を持つようになるとさらに池田高校の気質を表に出しながら、池校の神話を強化しようとするのである。そして、池田町民の「我が町の子ら」という意識から篠田早苗が言うように、池田高校生、特に、野球部員は、「池田町の人にしまれる」のである。

#### 4. 池田町民と甲子園

##### （1）池田高校と甲子園

池田高校が甲子園に初出場したのは、昭和46年(1971)第53回全国高等学校野球選手権大会（ここでは以後、夏の大会という）である。昭和49年(1974)第46回選抜高校野球大会（以後センバツ大会という）で準優勝し、「さわやかイレブン」とマス・メディアで盛大に取り上げられ一躍注目を浴びるようになった。11人中8人までが池田中か池田一中（いわ



ゆる地元)出身者で町民も池田の子供達が全国で2位になったと大騒ぎした。甲子園大会に出場するために部員を100人近くもかかえ、プロのように練習に明け暮れ、加熱しすぎた高校野球の状況に、四国のいなかから11人でやってきて戦った池田高校に、忘れていた真の高校生の野球というイメージをここでメディアも見ている人も池田高校に重ねたといえる。池田高校-甲子園-「さわやかさ」の神話はまずここで作られたといってよい。

その後、昭和50年(1975)第47回センバツ大会に出場、昭和54年(1979)第61回の夏の大会では準優勝している。この準優勝時には池田町を白バイの先導で後援会長、部長、監督、選手がジープに乗ってパレードし、文字通り池田町挙げて熱狂した。(ベンチ入り15人中地元出身者3人。)そして、昭和57年(1982)第64回の夏の大会で畠山、水野、江上などを擁して初の全国制覇。つづく昭和58年第55回センバツ大会でも優勝。池田の絶頂期を迎え、全国から注目され、報道陣も全国から連日大勢詰めかける。その夏の大会では、夏・春・夏の三連覇がかかったがベスト4。しかし、この57,58年で池田高校の強者よりが全国的にメディアによってイメージ波及する。トーナメントという一敗もできない中で勝ち抜いていかなければならないこともあり、バントや精密で細かな野球を監督の管理のもとでやってきた高校野球史で、蔦氏に率いられ豪打で豪快に打ちまくって勝っていった池田高校は「さわやかで、のびのびした」また、「高校生らしい」といった神話がメディアによって生成され、また、池田町の人々もその神話を通して野球部を見ていたという。

ここでその熱が冷める不祥事(元部員を含む自動車事故)で59年センバツ大会の出場辞退に追い込まれる。「イレブン」、「夏・春制覇」と二度のフィーバーがあったが、ここで冷めたと元PTA会長氏。だが、こ

こから一段と部内での結束も強まり、昭和60年(1985)第57回センバツ大会ベスト4、61年のセンバツでは三たび全国優勝している。その夏、そして62年のセンバツ(ベスト4)と夏の大会にも出場、調査を行った63年の夏の大会出場は3年連続であった。次項では、この昭和63年(1988)夏の予選で優勝し、甲子園行きを決めてから甲子園で敗退するまでを追いつつながら、池田町の人々がどのように池田高校の野球とかかわっているのかを記述する。そしてその中で「さわやかで、のびのびした、高校生らしい池高」という池田高校の甲子園神話が、どのように池田のコンテクストの中で解釈されているのかをみていく。(池田高校がこれまで甲子園大会に出場し、それについて新聞報道されたものは、〈資料1〉を参照。)

## (2) 池田町民と甲子園 - 1988年夏 -

池田町に生まれ、山と川に囲まれながら育ち、ある者は都市に出て暮らし、またある者は、この地にとどまって働き、一生を終わる。個々別々の人生がある中で、池田町民に共通した世界観、認識の枠組みといったものが前節で少しながらみられたように存在している。この地に生まれ育つことで無意識のうちに身体にしみ込むこのようなコスモロジーに焦点をあてながら、池田高校野球部の甲子園大会出場決定から甲子園での試合終了までのプロセスを池田町で追いつつ甲子園とどうかかわり、その中で「さわやかで、のびのびした、高校生らしい池高」の神話がどう意味解釈されているのかを記述する。



### ①寄付金

昭和63年(1988)7月29日。県予選決勝は1時間40分という早い展開で、池田高校が鳴門市立工業高校を2対0で破り、全国大会出場を決めた。池田町内は、優勝決定と同時に「祝池田高校甲子園出場」や「こんどは全国優勝だ」の横断幕が張られる。3年連続、ここ10年間に春・夏あわせて10回目の甲子園出場とあってかなり慣れている。

7月31日には、池田町の郡建設センターで池田高校野球部特別後援会総会が開かれ2000万円の募金目標と応援団の派遣について決定される。この池田高校野球部特別後援会は、甲子園出場が決まった時のみ総会を開き、各地域ごとの寄付金額と集めてまわる人の決定を行う。まさに資金集めのためだけにあるものである。(池田高校野球部後援会は別にある。)名誉会長にその時の池田町長を置き、会長は大和外科病院院長大和真二氏、副会長に桜陵会(池田高校卒業生の組織)会長そして歴代PTA会長及び全国各地の桜陵会代表者を配置し、その下に世話人(各地区ごとの責任者)をおいている。(次ページ参照)

阿波池田駅前で古くから旅館を営む内田和利は、寄付金を集める組織について「地元はほとんど卒業生だし、この辺の店はずらっと(特別後援会の)世話人だね。”イレブン”(昭和49年(1974))以後、岡田くん(現在池田高校保健体育科教諭で野球部コーチの岡田康志のこと)の出た54年(この年の全国高等学校野球選手権大会で準優勝している。)から組織的になったね。10年間で14回(実際には10回)春夏合わせて出とるからね。池田は大口の企業ないでしょ。川之江(徳島県内の地名)とか大昭和なんか1000万単位で出すけど、うちは組織でちょっとずつ集める。家の誰かは、池中、池高だから。違うところから来る人はいないし、この地域に学校ひとつだからね。さりげなく、さーっとお金が集ま

## 池田高校野球部甲子園出場特別後援会

**顧問** 三好郡選出県議会議員、郡内町村長、郡議長会議長、池田町議会議員、元池田町長、元野球部後援会長、元野球部OB会長

**名誉会長** 真鍋忠雄

**会長** 大和真二

**副会長** 内田金次郎、馬宮儀一、丸浦章二、馬宮謙一郎、堀部豊重、今城康隆、坂本憲市、山下巖、河野卯一郎、藤野嘉勝、立川和雄、田鍋倭夫、笹岡正夫、水田京市

**監査** 田村徳夫、森浦吉次

**地区責任者**

1	供養地東・西、水木町	松 浦 悠	16	御幸町 東・西	相 良 幸 男
2	島西・東、堤宮下	山 本 茂 晴	17	板野、新山	新 居 勝
3	南新町 北・南・中、親愛会	真 鍋 和 三 郎	18	箸 蔵	竹 田 友 治
4	新町 東・中・西 北新町 東・西	細 田 文 雄	19	佐馬地	坂 本 憲 市
			20	三 縄	竹 国 烈 弘
5	かじや町、東町、本町	笠 井 崇 太 郎	21	三 庄	藤 野 嘉 勝
6	中通、庚申通 杉尾通、東中通	田 野 碩 良	22	加 茂	武 田 新 平
			23	三 野	河 野 卯 一 郎
7	中町、西町東部 西町本部、谷町	真 鍋 弥 太 郎	24	辻	島 尾 義 治
			25	井 内	阿 佐 光 子
8	新地東部、大通、大通西	中 村 茂 明	26	足 代	谷 藤 智
9	西町大通、大通昭和	田 村 運 見	27	昼 間	佐 野 肇
10	銀座 東・中・西	平 尾 博 亮	28	山 城	田 鍋 倭 夫
11	矢塚、西中通	山 川 泰 弘	29	三 名	堀 川 行 康
12	栄町 東・西 柳川 東・西	大 坂 正	30	東西祖谷 東 西	笹 岡 正 夫
13	池南 南・北・西、高友	松 端 康 昌			宮 城 義
14	駅前 南・北	大 山 正 夫	31	半 田	大 和 暁
15	上野大通、上野中大通 丸山 南・中・北、上野中部	松 浦 吉 次	32	貞 光	小 谷 勝 己
			33	美 馬	藤 本 頼 信

[池田高校野球部史編集委員会；連覇への道－徳島県立池田高校野球部史－，池田高校野球部後援会，1984，p.351. より]



るからね。池高はうまくいっている。ほうでしょう。」と述べている。実際、世話人をやっているこの旅館は全国大会に出場することに5万円を寄付している。

また、駅前で飲食店を経営する女主人（宮崎県出身）は、寄付金について「3千円、5千円、1万円と（寄付金額が）あるみたい。今どき、映画見に行ったら3500円くらいするやろ。5千円で2～3時間楽しませてくれるんやし。」と述べた上で、「それに、池田の先生たちもよう世話になっとるし。前の校長先生（豊岡邦太郎氏、昭和54年4月～57年3月）が九州大学出身で同郷だったこともあってよく面倒みてもらったで。つらいこともあったんやけど、校長先生がよう励ましてくれたんや。校長先生やめてタクシーの運転手やってたんやけどもう死んでしもうたけん。」と自分と池田高校との関わりを自分の人生の上で呼び起こしながら、今の自分が生きている池田町の代表たる野球部の全国的な舞台での活躍に寄付をするという行為によって余計、感情移入し熱中するのである。またその飲食店に勤める女性は（池田町出身）は、「こんな山の中のいなかやし、楽しみゆうたら野球しかないけん。こんなん住んどったらせこいことばかりやし。いうてもわからんじゃけんのう。」

と自然環境そして前節で述べたようないなか町池田町独特の人間関係といった閉鎖的な池田の状況から自分を一時的に解放させてくれる郷土の代表たる池田高校野球部に毎年、夏、期待し、寄付をし、一体化するのである。

それでは、池田高校出身者の者はどうか。池田高校出身者で現在池田町から40分程バスで揺られた山中にある東祖谷中学校で教員をしている福原勉は、「寄付金？一口3000円。兄弟3人とおじさん入れてすごい額や。一家で1万円くらい出しとるから、そりゃすごいで。（出費のこと）」

でもテレビでそれだけ楽しませてくれる。」彼の場合、母校ということもあり、また、自分自身高校在学中が昭和49年の“イレブン”の後で池田高校が注目されていたこともあって、甲子園での池田ナインを心理的に近い距離で見ているといえよう。

池田町出身者、その中でも池田高校が甲子園で活躍するようになったここ10年間に卒業した若い年代とそうでない者そして池田町出身者でない者とは、寄付金という行為自体でもそれぞれ違った意味合いをもっている。しかしながら、自分の生まれ育った池田町の自然環境やコスモロジー、そして自分と甲子園との関わりの記憶、さらに池田町と自分との関係の歴史を再確認しながら、全国民の注目する大舞台で活躍する我が郷土の代表たる選手たちに自己を投影し、一挙一動に感情移入するという行為には、共同体験として自分の生まれた池田町そして現在自分の住む池田町と自分とのつながりを再確認させる意味があるのだ。それでは、共同体験として優勝パレードや祝賀会、そして自ら甲子園に応援に行く、甲子園詣ではどう意味づけられているのだろうか。

#### ②パレード、祝賀会、甲子園詣で

前述した駅前旅館で働くゆり（高知県出身者）は、パレードや祝賀会について次のように鮮明に記憶している。「岡田先生の時（昭和54年の全国高等学校野球選手権大会準優勝）はすごいなんていうもんじゃなかった。徳島からパレードしてな。白バイ2台で先導して、ジープ4台だったかなここ通ったけん。（旅館の裏の通りの方を指して）この商店街の通りもできたばっかしやったし。一番前に大和後援会長乗って、二番目に優勝旗持ってな。」「あれからは、高校生やけん、もうやらななったわ。みんな（クラッカーを）パンパンやっとなし。岡田先生は準優や



けど、いい目しとるわ。」「祝賀会？役場でやってな。畠山ん時（昭和57年）も役場や。水野ん時（昭和58年）は学校でやったし。梶田（昭和61年）ん時も役場やな。』と優勝や準優勝した時に行われたパレードや祝賀会についてあの時は…、この時は…と非常によく記憶している。池田高校の甲子園での活躍が自分史の記憶のレファレンス・ポイントになっているかのごとくである。この点について、東祖谷中学で教員をしている池田高校出身の常村淳は、昭和57年、58年に全国優勝した時池田高校に在学していたこともあって次のように述べている。「水野ん時は、学校でも祝賀会やったし。ごっつう（選手の）みんな緊張してな。こないや。（直立不動の姿勢する）感動したね。学校以外の人もずいぶん来てくれたし。」とその当時を今そこにあったかのように表現する。そして「甲子園1回言って応援したん。ごっつう気合い入るし。」と甲子園に詣でることで自分自身が甲子園の舞台に上がり郷土の代表として選手とまさに一体化して応援した経験を語り、さらに池田高校を卒業したというプライドにもつながるという。常村はつづけて、「大学に入って、自己紹介で、徳島県立池田高校なんていうだけすごいは、そりゃ。野球部のやつなんかでも、3年間練習終わった後、窓締めの仕事し続けても、池田町の野球部っていうだけでいいから絶対やめへんで。池田というプレッシャーなんか全然（ない）。池田っていうだけでいいもん。」と甲子園という全国的に注目される舞台で、野球部が全国制覇し、そこに自分が甲子園に直接行っていたり、祝賀会に参加したりするといった体験をもっていることで、自分が池田高校出身であるということを再認識し、自己のアイデンティティ（注2参照）を明確にするのである。旅館の従業員ゆりが「この辺の人は、ほとんど甲子園に行ったよ。」というように池田町の人々は、ほとんどがこれまでに1回は甲子園に行き直

接その舞台で応援し、体験しているのだ。こうしたパレード、祝賀会、甲子園詣でといった歴史的な共同経験を個々人がそれぞれの人生の中で、印象深いものとして記憶し、あるいはそれをレファレンス・ポイントとして刻み込む。このような個々人の体験は自分と池田町のかかわり、さらに自分とは何者かというアイデンティティの再確認の場となっており、こうしたことの延長線上に寄付をする行為もあることがわかる。

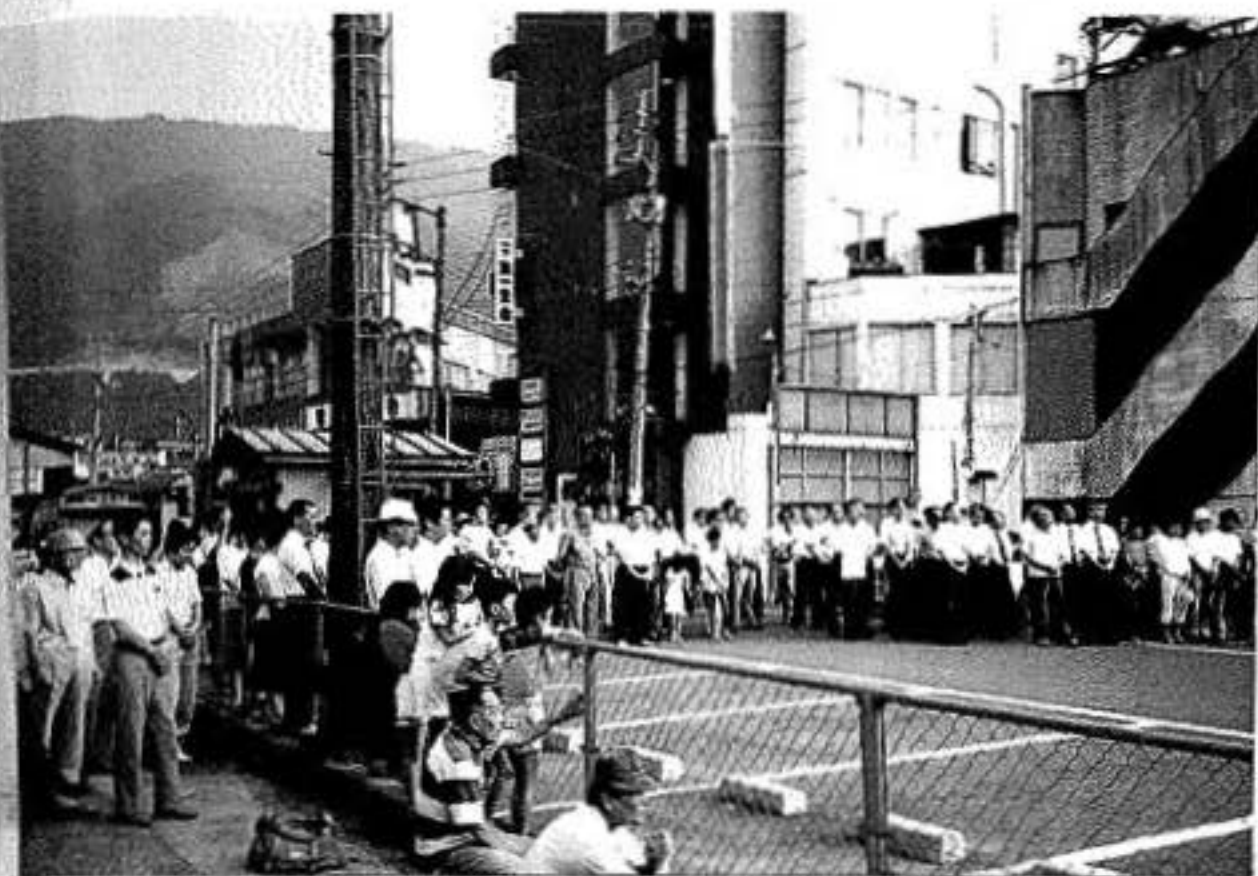
甲子園大会出場に伴う共同体験として、もうひとつ、8月4日行われた壮行会について述べよう。

### ③ 壮行会

8月4日、壮行会の朝。6時40分頃から阿波池田駅前に人が集まって来る。部長である高橋教諭はかなり前から来ていたらしく、保護者の人や特別後援会の人たちにあいさつして回っている。特別後援会の副部長ら幹部が来ると出迎えてあいさつをしている。「おめでとうございます。」と声をかけられ、「おはようございます。今日はありがとうございます。」と挨拶する高橋部長。今日は、甲子園という全国大会に出発する祝いの日なのである。6時50分、選手15名がそろって駅前に到着。すぐに壮行会々場である駅前横のいつもは駐車場になっているところへ行く。選手の保護者もその後を固まって来る。高監督もそして大和後援会長もお孫さんを連れて歩いてきた。後援会の人たちはしっかりネクタイをして参加している。7時8分、壮行会は開始される。甲子園と池田町の関わりをシンボリックに表現する儀式のはじまりだ。

徐々に見にくる人の数も増え、120人ほどになったろうか。老人そして中年男性がほとんどだが、子供達や若い女性の姿もみえる。(写真参照)

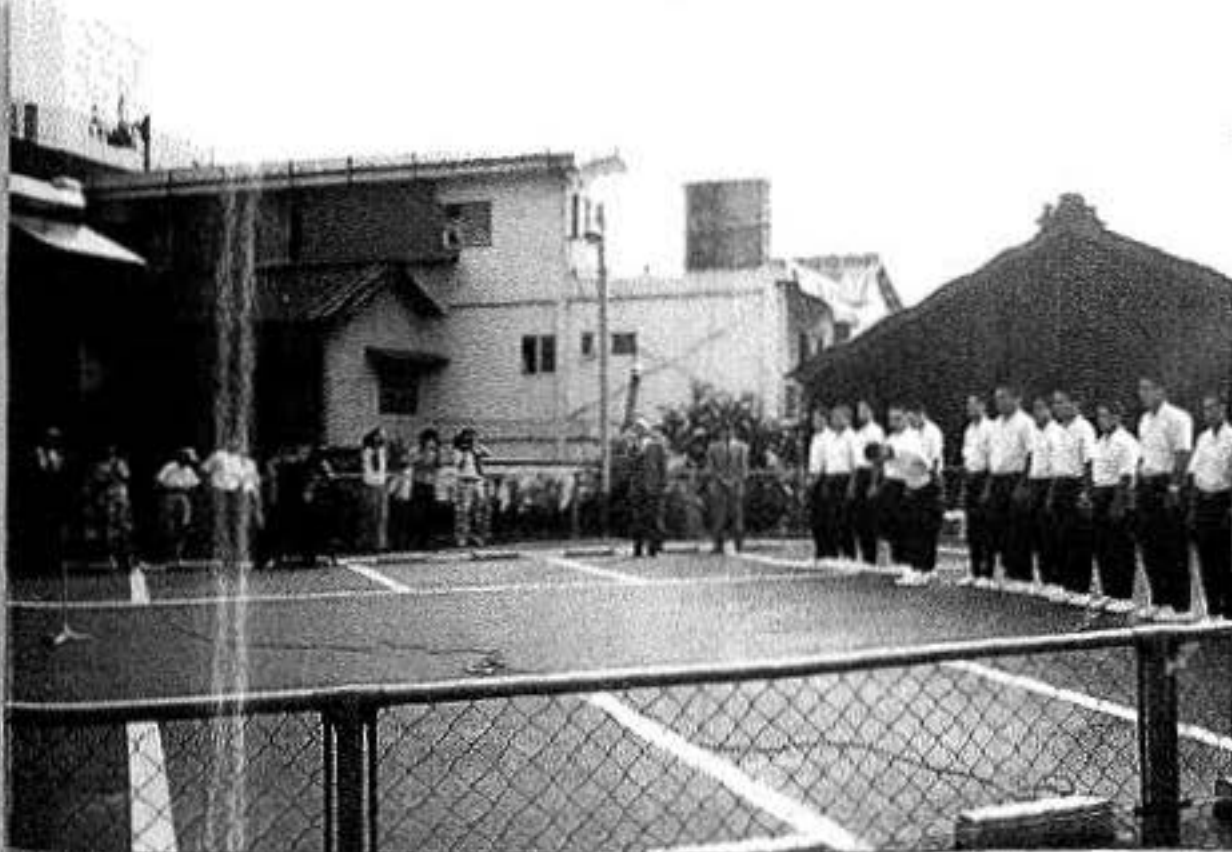


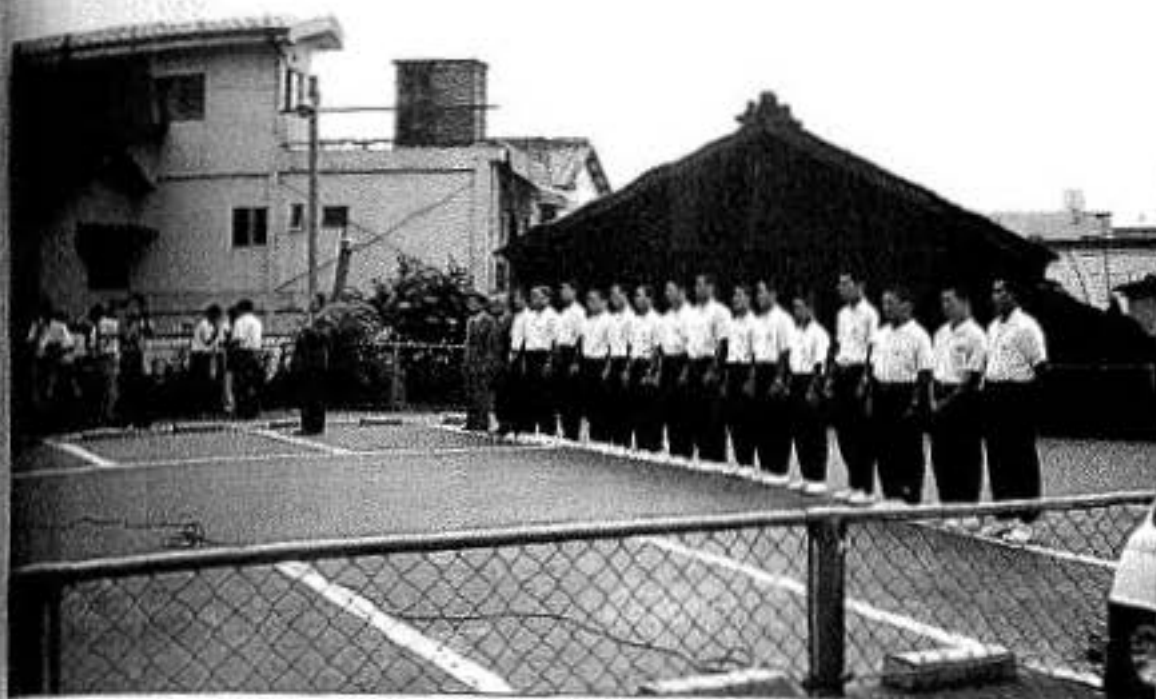


1988年8月4日早朝。  
池田高校野球部甲子園  
出発壮行会に集う池田  
町民



葛監督による選手紹介





池田高校長大西重忠氏の挨拶

万歳三唱



阿波池田駅構内で  
出発を待つ選手と葛監督



図1のように並んだ後、徳島県高等学校野球連盟井上理事長による開会の辞、そして徳島県高等学校野球連盟栗田義範会長の言葉がある。

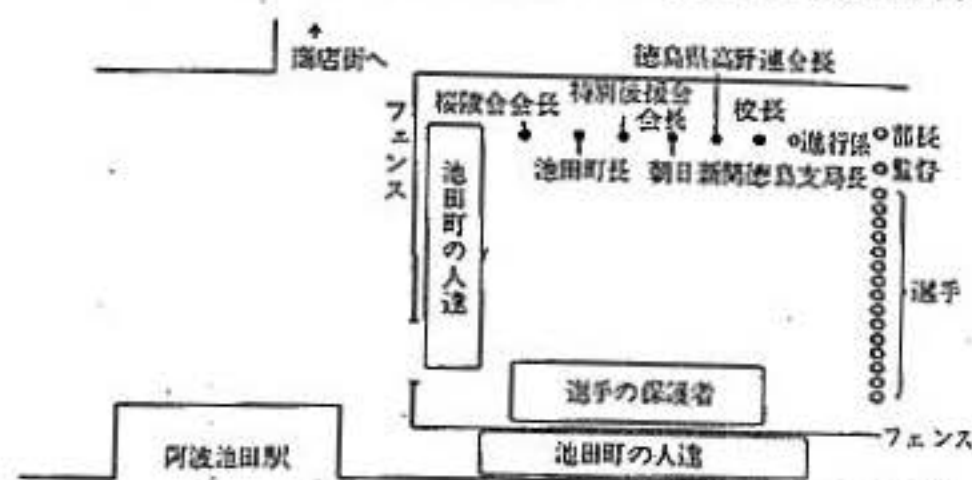


図1 1989.8.4. 池田高校野球部甲子園出発壮行会

「おはようございます。久しぶりの本当の高校野球日よりが戻ってまいりました。ここ池田町にもみなさん方が連続三たびの甲子園への夏をもぎとってきてくれました。いよいよ晴れの檜舞台であります。選手の皆さん方はひとりひとりが心に残るプレイを心がけてほしいものであります。こんなに早朝から非常にたくさんの池田高校を愛し、池田高校野球部の皆さん方を信じて支持してくださるたくさんの支持者の皆さんがお見送りにおいでいただきました。私ども主催いたしました県の高校野球連盟もこれに増したうれしさはございません。ただ皆さん方に申し上げますが、皆さん方はなるほどふるさと徳島県池田高校野球部の部員であります。もう今は日本の池高であります。どうぞ日本の池高にふさわしい活躍を心からご期待を申し上げたいと思います。どうぞ長丁場でありますので、健康には、特に御留意をされて、こんなにたくさんの御期待に応えるべく、存分の御活躍をお願い申し上げまして壮行のごあいさつに代えます。御健闘を祈ります。ありがとうございました。」

一同拍手の中、野球部長、監督は頭を下げる。ふるさと池田の代表以上に今やこれまでの甲子園での活躍から「日本の池高」という形容詞まで

ついて表現されている。

葛監督から選手の紹介がされる。「おはようございます。選手の紹介をさせていただきます。ピッチャーの桜間。（拍手）（選手は1歩前へ出て礼をする。）キャッチャーの杉本。（拍手）ファーストの和田。（拍手）セカンドの大村。（拍手）……」といったような形でベンチ入りする選手15名を紹介する。（写真参照）

この後、朝日新聞社徳島支局長梶正和氏の激励の言葉がある。

「おはようございます。徳島球場のあの感激の一瞬から早くも一週間、選手諸君には、あいさつまわりとか、練習とか、毎日忙しい日々が続きまして体調維持が大変だったろうと思います。今日ここに元気な15人の顔をみしていただいて安心いたしました。いよいよ甲子園ですけど、甲子園といっても別に蔵本球場とかわりありません。ただ大きな広い球場で観客が多いというだけです。プレーそのものはあの蔵本のすばらしい技術を発揮していただければあの大優勝旗を手にする事は、決して不可能ではない。私たちは確信しております。夏、暑い盛りでございます。水も変わります。宿舎も変わります。健康には十分注意されて平常心でどうか素晴らしいプレーを見せていただきたいと思います。健闘を祈ります。」

そして、池田町長真鍋忠雄氏の激励の言葉が続く。

「おはようございます。いよいよ出陣の朝がやってまいりました。おめでとうございます。皆さんは、それぞれ甲子園をめざして今までいく日もの間本当に血の出るような激しい練習に耐えてきて、今日のこの日を迎えたわけでございます。甲子園にまいりましたら一球一打、全精魂を込めて悔いのない試合をしていただきたいと思います。そういうことによってふたたび大優勝旗が池田町に帰ってくる。このような気がいたします。町



民を挙げて応援いたしております。どうぞ体に気をつけてがんばってください。」

スピーチの前後には拍手があり、スピーチは池田高校が甲子園でどう戦ってほしいか、どんなイメージで甲子園大会にのぞんでほしいか、そして郷土のみんなが応援しているといった期待と希望そして激励の言葉で尽くされている。次は、特別後援会長大和真二氏のスピーチである。

「おはようございます。もう皆さん方とは先だって一緒に、食事をして壮行しました時にしゃべりましたのもうしゃべることはないのですが、その後8月1日、特別後援会の役員の方々が4つのグループに分かれまして、三好郡全土にあいさつにまいりました。どこへまいりましてもよくやったぞ、待ちかねておったぞと。どうぞひとつ甲子園では大いに活躍して期待どうりのものを、成果をあげてくれという非常にうれしい言葉をいただきましたので、もうこの地元の三好郡が全部諸君らの甲子園出場に沸いているということを壮行のことばとさせていただきます。がんばってください。」

そして徳島県知事、県会議長阿川氏、県会議員杉本氏よりメッセージが届いていることが報告された後、徳島県高等学校野球連盟栗田会長から激励金が「おめでとうございます。がんばってください。」という言葉と共に、池田高校校長大西重忠氏に渡される。

その後、御礼の挨拶に移っていく。まず野球部主将桜間選手より、「今日は朝早くから僕たちのために壮行会を開いていただき、ありがとうございます。甲子園では皆さまの期待に応えられるよう精一杯がんばってきますのでよろしくお願いします。本日はありがとうございました。」という言葉があり、池田高校校長大西重忠氏よりあいさつが続く。

「一言お礼申し上げます。本日は遠方より高野連栗田会長、井上理事

長、吉崎副理事長、朝日新聞社梶支局長さんに御出席いただきまして、また、地元の皆様方に多数おいでいただきましてこのように壮行会ができますことをまず厚く御礼申し上げます。県大会で優勝できましたのは、葛監督の卓越した統率力、高橋部長、岡田コーチあるいはNTTの川原コーチのすぐれた指導力と選手の不断の努力、池高全教職員、全生徒の力一杯の応援ということが原動力と思いますが、一番我々としては第一の優勝の原動力は大和会長をはじめといたします、後援会、地元の皆様方の物心両面にわたる暖かい御協力、御支援のお陰とここにあらためて厚く御礼申し上げます。

選手一同今から出発するわけですが、甲子園は晴れの舞台という考えでなしに、あくまで練習試合の延長と考えまして日頃の練習の成果を充分に発揮するというのびのびとした、また徳島県の代表として恥ずかしくないような、いつも葛監督が言っております、一球入魂という精神でさわやかに戦ってまいりたいと思います。今後とも、相変わりがませず御協力、御支援、御声援のほどをお願いいたしまして、簡単でございますがお礼の言葉といたします。どうも本日はありがとうございました。（写真参照）

そして最後に桜陵会（池田高校卒業生の組織）会長内田金次郎氏による万歳三唱でおわる。

「おはようございます。皆さん本当にこの度はおめでとうございます。それでは甲子園にまいりましたならば、池田高等学校桜陵同窓会の会員はもちろんのこと池田町民、徳島県民、全国の皆さん方が、なつかしい池田高等学校の健闘を待ちのぞんでいることと思います。どうかあちらへまいりましたならば、健康に充分注意して諸先生方の教えをよく守って、そしてさわやかな、美しいプレーをしてくれますことを心から期待



いたしまして万歳三唱いたします。皆さん方どうかよろしく願ひしたいと思ひます。

池田高等学校野球部 万歳！（万歳！）

万歳！（万歳！）

万歳！（万歳！）

（写真参照）

壮行会はこの万歳三唱の後、徳島県高等学校野球連盟副理事長吉崎氏の閉会の辞で7時20分に終了した。

壮行会の後、選手たちはホームに入り、この朝だけは無料で見送りができるので壮行会に集まった人たちもホームに移動する。選手と約60人の池田町民がホームに入った。7時49分、岡山行き南風2号が入ってくる。選手達はグリーン車へ乗り込む。手をふる人々の中で、自然と万歳が湧きおこる。「がんばれよ。」の声も大きくなり、発射のベルが鳴るとがんばってこいよという思いで自然と胸が高鳴る。

池田町民は、ここ10年間、ほぼ毎夏このような壮行会を行い、いかにも普通のことだとしてふるまっているが、この無意識の行為のうちには、目に見えない池田町と甲子園をつなぐ糸がある。

この儀式は、部長、監督、選手を前に並べてそれらを中心にして集まっているかのようなではあるが、図1でもわかるように真の中心は池田高校校長から左に5人並ぶ儀式の長老格といえる人間である。これらの人物のスピーチこそが池田高校の甲子園神話を表出し、再生産しているのである。「日本の池高」「ふたたび大優勝旗が池田町に帰ってくる」「地元の三好郡が全部……甲子園出場に沸いている」「さわやかな美しいプレー」といった期待と希望のメッセージ、そして「のびのびとした」「一球入魂という精神でさわやかに戦う」「なつかしい池田高等学校の

健闘」といった言葉には、過去の甲子園の歴史の中で、「郷土を代表し、優勝し、日本の池高」となった事実にも増して、「さわやかで、のびのびとした」池田高校の甲子園神話が少なくともこの壮行会という儀式の長老格、特別、池田高校の学校関係者の胸の中には生きていて、その神話をもつ池高が「なつかしさ」と共に甲子園の大会で活躍してくれることを期待しているのである。

そして、ここに集まった人々は、これらの池田高校神話を表すメッセージを繰り返し聞きながら、この共同体験から、池田高校と自分との一体感を直接体験し、自分と池田高校野球部さらに自分と池田との絆を再確認しながら、自分の歴史の中にこの共同体験を刻み込むのである。

これまでにみてきたように池田高校が甲子園大会に出場し、そこで活躍することで池田町民は様々な共同体験をする。寄付金、壮行会といった毎回出るごとに行われるものから、バレード、祝賀会、甲子園詣でということまで様々な直接的な体験を池田町民はしている。このような共同体験は、自分と池田町との結びつき、そして、自分とは何者かといったアイデンティティ確認の機能をもち、これこそが池田町民と甲子園とのつながりを示すのである。こうした中で、壮行会にあつては、「さわやかで、のびのびした、高校生らしい池校」の神話が長老格の人物達のメッセージとして発せられていることがわかる。

#### ④お盆と甲子園野球

8月8日、第70回全国高等学校野球選手権大会開幕の朝。9時からの開会式が始まると駅前の商店街は一時的に静かになる。駅前の旅館で働くゆりもテレビの前を行き来しながら様子をみている。自分の地元高知商業高校が出ると、「高知商さんや、がんばりや!」と声をかける。



池田高校が行進する。じっと凝視している。そして「がんばりや。」の声。だが次の瞬間、池田高校に続いて行進する高校をカメラが映し出すと「もうええわ」といって仕事に精をだす。商店街も一時的なだけで、8月14日におこなわれた池田高校の試合の時のような静けさはない。

8月10日を過ぎると徐々に盆のため帰省する人が多くなった。汽車には家族づれが目立ち、関西や関東からみやげをもった若い女性や男性が多くみられる。お盆で帰省することと、地元代表の池田高校がこの時期に甲子園で試合をすることは、二重の意味でアイデンティティの再確認につながるようだ。そして、阿波踊り。お盆、野球、阿波踊り—自分の祖先を認識し、自分の生まれ育った場所を再確認し、野球と踊りに潜在的なエネルギーをぶつけるかのようである。

8月13日。予定されていた甲子園での池田の試合は雨のため明日に延期された。駅前商店街にただ一店舗だけある大手スーパージャスコ階にはテレビがあり、甲子園大会期間中必ずテレビ放送を映し出している。試合のないこの日は、昭和57年度(1982)に全国優勝した時のビデオを繰り返し映し出している。大差であるし結果もわかっている試合だが、たえず10人程度がテレビを観ている。夜の駅前飲食店は久しぶりに関東や関西そして徳島市から帰省し、同窓の友人たちと騒ぐ20代の若者でこみ合っている。盆に帰省しても家でくつろぐことはせず、同窓の友人と顔を合わせそして阿波踊りを踊って戻っていくのである。「明日は、甲子園と阿波踊りで大騒ぎじゃ。」と若い男女そして飲食店に勤務する篠田早苗は言う。

8月14日。今日から3日間行われる阿波踊りの音で町全体がそのリズムに揺れているかのようだ。午後0時すぎになると池田高校対浜松商業の試合が始まるということで、商店街からは徐々に人や車の数が減っ

ていく。どの店でもテレビの前に人が集まっている。池田町において、試合が行われている間、町民はテレビをどうみているのか、書き記したものは資料2に示すとおりである。試合が始まると、選手のプレイぶりそして実況される音声や映像に様々な言説を投げかけながら、本当に自分のチームとして池田高校を応援しているのがわかる。また甲子園に過去応援に行っている人がほとんどなので、甲子園との心理的距離が近く、「ワシが甲子園行かなんだら、池高すんなり勝てへんのかな。」とか、対話の中で「にいちゃん、いかんのかー。」「優勝戦になったらな。」というやりとりも聞かれる。池田高校が、ピンチになり、負けそうなところで持ちこたえたあたりの場面では、池田高校が甲子園から池田町へ帰ってくることをシンボリックに表現して、「高松まで戻って来おった。瀬戸大橋渡ったわ。首の皮一枚や。」と言うのは、甲子園に出場している池高野球部と一体化し、心象の中で甲子園への道のりが意識されていないと出てこないものである。

また、選手や監督そして応援のチアリーダーたちが自分の知っている人物とあって、「池田勝つとええな。にいさんとこの家に（選手が）いるしな。」とか「桜間いうたらどこの子？」というようにテレビに映し出される選手を自分たちに近いすぐそこにあるものとして話題にし、認識するのである。

池田町民は、葛監督がいなければ、これまで甲子園で池田高校が活躍できなかったし、「さわやかで、のびのびした、高校生らしい池高」の神話もなかったと思っている。テレビに登場する葛文也の方言丸出しの、普段とかわらぬ長舞いといった野放図な性格を許容し、甲子園ではのびのびやらせるしかないという葛文也の考え方の表れたる「攻めまくる」「打ちまくる」攻撃野球の戦法を試合では必ずそうするものと思いなが



ら、町民はテレビの前で観戦するのである。打ちまくって甲子園で勝ってきた歴史を、個々の頭の中で蘇らせながら、試合を見ているのである。「さわやかで、のびのびした、高校生らしい池高」という神話は、葛文也をその中核にして、葛自身のパーソナリティーもあって、試合のたびごとに池田町民の脳裏によみ返り、再確認されるのである。

試合は3時間37分、桜間選手の投げた216球目を左中間にサヨナラヒットされて、延長14回裏2対3で池田高校が破れて終わった。「あー！」という声と同時に「やられたー。」そして、「1回戦でございますか。」という声の後、「もう踊りだけや。」と溜息にも似た声を残してテレビの前を離れていく。

この夜は、池田の盆踊りたる阿波踊りである。先祖を認識し、自らが生まれ育った地を確認する盆は、両親や幼い頃からの友人に再会することで自分とは何者かを再認識する。この日にカオス的時・空間を創出し、生まれてから無意識のうちに自然と体にしみついた踊り、リズム、時間の流れをもつ阿波踊りで一気に自分と池田町を結びつける凝集エネルギーを爆発させるのである。甲子園野球がこの盆と重なることで、池田町民は、カレンダーリー（周期的）に自己アイデンティティを確認し、自分と池田町との結びつきを再認識しているといえよう。

#### ⑤ 池田町民と甲子園

池田高校野球部が、全国大会出場を決めて甲子園で負けるまでの経過を池田町にてフィールドワークし、記述したことは以上のごとくである。池田の人々は、甲子園出場に伴う寄付金やパレード、祝賀会、甲子園詣でそして、儀式としての壮行会など＜共同事業＞に参加し、共通体験す

ることで、自分と池田町、さらに自分と池田高校とのかかわりを自分史の中で思い起こしながら、自分とは何者であるかといった自己アイデンティティを確認するのである。そこには「さわやかで、のびのびした、高校生らしい池高」という甲子園神話が過去の歴史の中で生まれ、甲子園で活躍し、日本の池高になったことを思いおこさせる機会（壮行会における長老格の人物による激励の言葉や挨拶など）が含まれている。こうした共同体験の上に、池田町でテレビ観戦することは、自分と池田高校との絆を深め、一体化し、選手の戦う姿に感情移入し熱烈な声援を送ることになるのである。また、池田にあってこのような甲子園野球が、祖先や自分の家族、生まれ故郷を阿波踊りという無意識のうちに身についたリズムにひたる盆で再認識するのと同じ時期に行われることで、カレンダー（周期的）に、まさに夏のひとつの行事として自分とは何かを明確にする機会なのである。甲子園野球は、池田町にあって、個人個人が、その人生に沿いながら、自分とは何者であるかを認識させる文化的なパフォーマンスなのだ。

甲子園野球と池田町民とのかかわりは、以上のように理解できるが、その中で、「さわやかで、のびのびした、高校生らしい池高」という甲子園神話はどのように作られてきたのか。池田町民が、池高野球の中核と認める高文也監督にスポットをあてよう。

#### 5. 神話生成の中核－監督高文也－

池田高校の甲子園での活躍そして神話は、監督である高文也氏が原動力であるといっても過言ではない。高文也氏のライフ・ヒストリーを追って、そのパーソナリティ形成史と甲子園とを関連づけてみよう。（注



### 3 参照)

葛文也氏は、大正12年8月28日、徳島商業の教員である父、新吉のもとに5人兄妹の長兄として生まれる。徳島師範付属小学校に入学するが、エリートとしての自分や父に対しての反発からガキ大将として突っ張っていたという。6年生の時、ピッチャーとして県大会で優勝している。徳島商業1年の時は、野球部を指導していた父に対する反感と、17、18歳の上級生の封建的な態度を嫌って一時テニス部へ。しかし、昭和14、15年には、稲原監督の精神面重視の根性野球に反発しながら三度甲子園に行く。昭和16年慶応大学の受験に失敗、同志社大学経済学部に入學。高校時代と違って自由な雰囲気の中で野球に興じた。昭和18年、学徒動員がかかり、二等水兵として佐世保へ。その後鹿児島、土浦、静岡、牧の原平、姫路、百里原と移動。軍隊経験の中で、食物に対するいじましさと恐怖心から酒を飲むことを覚えた。また、ひとつの型に入れ、規則正しく管理することへの反感を抱きながら、個性尊重の重要性を確信したという。昭和20年天理市(旧丹波市)で終戦を迎え、すぐに同志社大学に復学。そこでは自分の将来とか何かの手段としてではなく、純粋な形でスポーツすることのおもしろさや楽しさを味わった。また、ピッチャーとして奮闘する自分に優越感を覚えたという。昭和21年9月、日鉄広畑に入社するが、食糧事情の悪さから翌22年徳島へ帰郷し、日本通運へ入り、野球チーム「オール徳島」の一員としてプレイするようになる。昭和25年3月11日挙式。しかし翌12日より単身でプロ球団東急フライヤーズに入団するため東京に行く。このプロでの生活は大きな挫折となる。三度しか登板できず、背番号16をもらっていたことで巨人軍川上氏と対比され、酒におぼれるどん底の時代を経験する。そしてその年の暮れには徳島へ帰郷後、池田に来る。翌26年4月から池田高校社会科教師とな

り、27年からは正式に監督に就任。後援会を作り、「甲子園は遠かったけど楽しかった。」という監督生活を送るようになる。昭和30年秋の県大会に決勝まで初めて進出するも徳島商業に0対11で敗退。その後、35年春の県大会で初優勝し、四国大会に駒を進める。地元後援会も熱狂し、かなりの数が応援に行ったという。その夏には、南四国大会まで進出したがあと一步で甲子園大会初出場はならなかった。甲子園初出場は、昭和46年のことで監督就任以来19年目であった。

これら葛文也氏のアイデンティティ形成の歴史から池田高校の甲子園での活躍や「神話」を直接作り出すいくつかの特徴がみられる。葛文也のこれまでの言説と、第2回調査のインタビューから述べていこう。第一には、野放図の性格がある。葛氏は教え子の畠山選手と自分が似ていることから以前次のように言っている。「(畠山選手は)はみ出しもんちゃうか、ひとくせもふたくせもあるタイプやな、放言居士。言いたいこと、思うことをパッパッと。人のことを考えずに公害をまき散らしよる。私がそれと一緒にすわ。人の迷惑を考えんと、はたのことを考えんと、言いたいことをバンバン言った。はたのおる人にいろいろ迷惑がかかる。」<sup>24)</sup> 葛文也監督の教え子で現在コーチをしている同校保健体育科教諭岡田康志は、葛のことを「素直で、ずばずばいうし、あんな人おらんけーの。どこへいっても人気でるんやないか。」とした上で今までの池田高校の活躍も「葛さんやからできたんやないか。」と言う。自分の思ったこと言いたいことをどんどんやっていくということについて、特別後援会会長の大和真二も葛監督を評して次のように述べる。少し長いがインタビューから引用すると、

「葛さんは、根っからの野球好きやね。それとそうさせる環境、坊ちゃん育ちやったからね。そのふたつが交錯する。熱中することができる



性格と環境があつたちゆうことですね。それ以外のことは全部捨ててる。それ以外のこと、例えば家庭のこととか、家のつき合いのこととか、そんなこと全部奥さんにまかせっきりにしてしもうて、自分はもう野球一筋でやる。それで、非常に頭のいい人。才能豊かな人。ま、講演なんかお聞きになったことがあるかどうかよく存じませんけどね、非常に頭のいい方ですね。そしてその野球というものを通して自分のその人生を考えていく、哲学を考えていく。そういうスタイルですね。それがやっぱり人にアピールするんじゃないですかね。やはり、葛さんのアピールゆうのは、一筋なものがやはり、甲子園でのテレビで映ってくるベンチの姿等をみてもね、ひとつのものに徹した人間にみえる、風貌もあるし、発言もあるし、そりゃやっぱり人を魅了する。どんな人でも魅力的に見えるわな。あまり八方美人はね、そりゃ、やっぱりアピールしませんわね。」と、自分の思ったことをなりふりかまわず、一筋にやる人物と葛を評している。そして、「そういうその池田高校に対しての先生の一筋な熱意っていうものをみんなやっぱり愛していますね。地元の人は、」とつづける。この性格は、野球の戦術、戦略面でも影響を及ぼす。「守り、守りばかりしいよったら、作戦が消極的になる。攻撃的な野球がでкинようになってくるんですよ。攻撃を主にしてやっておった場合、積極的になるんですね。この方が勝つ率が多いからね。やっぱし、高校野球は、金属バットでしょう、消極的にバントとかそういう戦術を使うときは負けるね。なぜかちゆうたらね、バントでは一点しか取れんでしょう。…そういうときは、その一点を争う、非常に危ないはらはらするようなゲームになってきますから、かえってプレッシャーがかかる気がするんですね。」というように葛監督は攻撃を野球の中心に据えている。昭和63年(1988)7月29日の徳島県予選決勝も「気楽に打たすという

のは鉄則です。」とテレビのインタビューに答えている。実際、シーズン中は練習のほとんどを打撃練習にさいている。昭和63年の全国大会を前にした練習では3時間のうちほとんどを打撃練習とその応用にさき、守備ノックは最後の20分ほどであった。山をいただくグラウンドに、2つのピッチングマシーンとバッティング・ピッチャーによって3つのバッティング・ゲージに向かってボールが走る。140kmを超えるスピードボール、130kmのボールそしてピッチャーがプレートより2mくらい前で投げたボールを、1番打者から順に、規定より重い1100gのバットでフルスイングするバッティング練習が中心なのである。

薦監督は、「四国の野球っていいですが、やっぱり松山商業みたいに手がたく、緻密にやる野球はどう思いますか。」という質問にこう答えている。「そういう野球もそりゃ必要じゃけんど、子供のびんな、そんなことしてたらな。野球の技術的にな。巨人の上田君みたいになってしまう。あんなプロ野球で、あんな短くもってな、打ちよる。なーんや魅力がない。」せこせここと1点づづとっていくよりも積極的に、プレッシャーのかからない野球を選手の将来も考えてのびのびと大きくスイングさせているのである。コーチであり池田高校教諭岡田康志は「どんなに（守備が）うまくなってもエラーはする。打って返さなならん。だから打つ練習をする。」と薦が言っていたとした上で、「打ち勝つのが理想や。ま、なかなかそうはいかんけど。」と述べ、「緻密な野球じゃないけんそりゃー。大雑把やと思うは。」と薦の攻撃中心の野球を評している。さらに第三の特徴として、甲子園という舞台に上がった時のリラックス・ムードがある。選手だった当時をふり返って岡田は、「甲子園にいる時と、ここ（池田）にいる時とまったくころっと変わるわ。甲子園にいったら本当自由や。そのへんの操縦術がものすごいうまいで。い



つも試合でもあんまり何もいわんけどな。言ってもできへんもん、できないんやったら、初めから何も言わんで、プレッシャーかけないでや  
した方がええからじゃろ。」と甲子園でのびのびとやらす高監督を表現  
する。

山あいの町の子供たちに  
一度でいいから大海を  
見せてやりたかったんじゃ

#### 池田高校野球部

監督 高文也

と求められた色紙に書く高にとって、目標はあくまで甲子園出場にある。  
高自身の甲子園大会そしてプロ野球での経験をふまえて四国の田舎に住  
む子どもたちに「大海」を見せてやることを目標とするのだ。そして  
「大海」に出たら選手を自由に、解き放ってやる。そうした思いをシン  
ボリックに表現しているのがこの色紙であろう。「甲子園まで行ったら  
細かなことまでいうことはない。生徒たちをリラックスさせてやればえ  
えんじゃから。」そして、「もうガミガミ言わんこっちゃね。うまいこ  
とムードに持って行って、のせる、リズムにのせていく。」というよう  
に、甲子園ではまさに「大海」に選手を解き放ち、のびのびとプレイさ  
せようとするのである。

この高文也は池田町民にあってどう位置づけられているのか。高は、  
駅前の飲食店に勤務する篠田早苗が「池高あつての池田町や。」といわ  
れる池田高校野球部の中核ではあるが、池田のコスモロジーにおいて野  
球一筋に徹し、野放図で、やりたいことをどんどんやっていく性格は  
「すごく親しみにある、その辺のおっさんと言う感じでみんなに受けと  
められている。」（岡田康志） 田舎町の池田は、とかく閉鎖的で、他

人のうわさ話を多くしているところである。このコスモロジーにあって、それとは反対にズバズバ自分の言いたい事を言い、全国が注目する舞台に上がり、テレビの前でも池田町とかわらぬ振舞い、言動をみせる蔦に池田町民は引きつけられるのである。しかしながら、蔦自身は、池田町の人々との関わりについて、「だけんど、結局、学校でもなんでもな、池田の町でも浮かんようにしとらなあかんな。浮いてしもうたらまずい。」

というように池田町独自のコスモロジーの中に自分があることを絶えず意識している。蔦文也は「他の学校から監督をやってくれという声があったことに対して）わしゃーもう、ほんま、池田にお世話になつとるんじゃで、そんなこといわれとるけんど。池田いうたら弱い時に助けてくれた人もおるし、ほんま、ほんなこと、やっぱし、そういうような人に対してそんなことはできん。優勝したからちゅうて、学校かわって給料もらったってな。プロ野球や。」と自分でも池田を離れず、池田という地で、池田高校野球部を監督し、作り上げてきたことを明確に意識している。このように蔦文也は自分でも池田町という土地で監督していることを充分意識し、又、池田町民も自分達の町にあっては出現しにくいパーソナリティの持ち主といった意識を持ちながら、シンボルとして認識しているのである。

このように蔦文也のパーソナリティを基盤にして池田高校は甲子園で活躍し、神話を作ってきた。それでは、蔦自身は、池田高校の神話をどう認識しているのだろうか。

「今まで1番印象深い試合いうたら、「さわやかイレブン」やな。そうじゃ。弱いチームであそこまでもっていく。それがおもしろい。水野ん時は、あれは、ほんまに「強い」っていうチーム。弱いのを強うにする。どういうふうにして上位に進出するかいうのがやっぱり、その過程



がやっぱりな。んー、おもしろいわな。あれじゃ、岡田君の時（昭和54年夏）あのドカベンとやって（準決勝で香川選手のいる浪商とあたり2対0で勝利する）全部かなわんといわれた時に、ああいうときのビシャーッ！とやる。勝負のおもしろさやね。」と何試合もの中で、さわやかいレブンを葛文也は、印象に残るものとして挙げている。そして「さわやかで、のびのびした、高校生らしい池高」という神話を意識し、そうあってほしいと願いまたそうだったことを次のように述べている。

「さわやかだったというのはあった。けど、今はもうさわやかだていうのではないよ。はっきりいって。（高校生らしいといわれることを）目標にしとったけんどなあ。最近ではもういかな、はっきりいうて、ええ子もおるけんど、悪い子もおる。どこの野球部でも抱えている問題ちゅうのは池田もある。」というように、過去において「さわやかで、高校生らしい池高」という神話を作り上げようとし、また実際「さわやか」であったことを認めている。しかしながら、同時にそのような神話がすでに過去のものであることをはっきり言及しているのである。昭和63年（1988）の全国大会に出場する際、壮行会において池田高校長大西重忠氏が、「さわやかに戦ってまいりたいと思います。」と述べているように葛監督をはじめとして学校関係者は、「さわやかで、のびのびした、高校生らしい池高」の神話を生成し、そして再生産したいと考えていることがわかる。この点について、コーチで教諭の岡田康志も「僕らは、さわやかさっていうのは結構意識しているけど、最近の子らはそんなにうまくいかな。高校生らしいゆうたって、合理的やし、自分のためにならんこととか、例えば、打つのはおもしろいかもしらんけど、ランナーになって走ったりというのは、さけたりするけーのー。さわやかさいうたって、やっぱり、その年の性質にもよるけーのー。」とさわやかさ

や高校生らしいといった池田高校の神話を意識し、そうあってほしいと願っていることは確かだが、現実問題としてそうではないことを明らかにしている。

「さわやかで、のびのびした高校生らしい池高」という神話はともかくも 葛文也のパーソナリティ形成史にのっとり、葛の野放図の性格、攻撃野球そして甲子園でのリラックスといった独特の特徴によって、葛自身にも意識されながら作られてきたことはこれまでで理解できる。しかしながら、現在において、監督、コーチ、そして、校長といった学校に関わる者たちが、なんとかしてそのような神話的イメージのチームにしたいと考えるが、その神話は現場には生きていないのである。後援会長の大和真二氏の言説は、神話と葛文也そして現在を明確に表現している。  
「さわやかさっていうのは、やはり49年(1974)のイレブンにありますね。その時に「さわやかさ」をアピールしましたね。それは、ほんとうに山の子で、都会ずれしてない。で、みんなそのいなかの近くから通ってきて、いわゆる都会ずれしてないっていうか、いなかの純朴なっていうか、そういうものがそのまま野球に出てきた。それを「さわやか」というんですね。今の高校生は必ずしも「さわやか」ではないと思いますね。昭和49年当時からみればね、くらべものにならないと思います。それは、やっぱり社会のせいもあると思う。若者のね、ものの見方や考え方がずい分変わってきたと思いますね。だけれどもその中でどうね、そういう「さわやか」なものを生み出していくかという葛先生の考え方と生徒との考え方とが必ずしも一致しないところがあると思う。そこに葛先生の苦悩があると思いますね。だけれども、世相が変わってきたという、ものの考え方も変わってきた。その中で葛さんはやっぱりその「さわやかさ」をその中で求めていこうと苦悩していると思いますね。それが今の



敗戦にもつながってきていると思います。去年（昭和63年夏の大会）出てますね。今年の春も、夏も、また来年（平成2年）の春も出れないですね。3、4回。そりゃ、やっぱり、生徒の質が、質ではなしに、練習量がどうとかなんとかという問題よりも、そういうところに問題がある。それはだけど、池田高校に限ったものではないんじゃないか。だけど蔦先生はそういうものを求めていく。やっぱり教育者ですね。彼はね。」

#### 6. テレビ局による池田高校神話の生成

「さわやかで、のびのびした、高校生らしい池高」の神話は、蔦監督を中核に過去において作られ、そして現在もその神話を生きようとする思いがあることは前節でわかった。それでは、メディアはどう神話と関わるのか。実際、池田町や池田高校を取材しながら、テレビ局の制作者（カメラマン、スタッフ）は、池田の神話をどう考え、テレビを通じて映し出すのであろうか。昭和63年（1988）全国大会出場時に取材しにきた、スタッフを追いながら分析する。（第1回調査のフィールドワークより）

池田高校が甲子園出場を決めた翌日、7月30日のグラウンドは、常連のファン以外にたくさんの見物人そして特集番組を制作するための取材陣が動いていて賑々しい。毎年甲子園大会を中継するテレビ局は、選手のプレイを追いながら、アナウンサー、解説者のコメントそして適当なタイミングで応援する音を入れたり、様々なカメラアングル、選手のアップの表情を交えつつ、甲子園野球を神話を作り、誇張して伝えている。実際に、テレビ局の人たちはどういう意図でどのように取材しているの

だろうか。池田高校を取材して六年になる四国放送のカメラマンは以下のように述べてくれた。「わしはもう先生にずばり言うんですよ。こんなこと言うてって。……なかなか言うてくれるまでえーと（長く）かかる。」「やっぱりね、作る上においても、いろんなことなんぼ言うてくられても使えんて。ずばり、先生、こんなこと聞きたいんや、こんなこと言うてっていうもん。ずばり言う方がいいもん。」と製作者の意図を如実にカメラの前にいる高監督らに言っていることがわかる。そして、「撮ったやつ全部出せるわけではないのだから、きめていかなくっちゃ。わしも厚かましくなってしまうて、そうやって言うてもらわなんだ、気がすまんようになってしまったな。」と続ける。そして池田高校の神話について、こう述べている。「池田のイメージは、大事にしちよるよ。池田が出るとみんな見てくれるけん。スポンサーがついていくら出してくれて、何ぼのもんじゃけん。」と池田高校のこれまでの神話をスポンサーや視聴率をふまえた上で、再強化して伝達しようとする意図がみえる。実際にプレイし、画面に出てくるのは、池田高校の選手達や監督、コーチである。事実は事実であるけれども、カメラ・アングル、コメント、そして全体の構成の仕方によって、「もうひとつのストーリー」「もうひとつの事実」が作られ、視聴者に伝えられていることがはっきりとわかる。

#### 7. 池田高校神話の連環性と再生産

「さわやかで、のびのびした、高校生らしい池高」という神話は、高文也監督のパーソナリティと野球観を中核に、長年、池田高校野球部を指導する中で、その基盤が作られ、それが、甲子園大会で活躍すること



で、メディアによって取り上げられ、メディア側の意図もあって生成されてきたものである。しかしながら、これらはもちろん池田町のコンテクストとまったく切り離されてきたものではなく、萬文也自身も「池田の地にあつての自分」というように池田町という田舎町の閉鎖的な特質、町に一高しかない池田高校生徒たちに対する「我が町の子ら」という意識が存在し、自然環境とそこからくる池田高校気質とが積み重なって形成されたものである。

そして、この神話は、甲子園に出場するたびごとに、池田町民に繰り返し表現される。甲子園出場に伴う寄付金や壮行会といった共同体験は、自分の人生史における池田町と自分との関わりを再認識させ、自分とは何かといったアイデンティティの再認識の場であり、過去における甲子園での活躍そして池田高校神話を思い起こさせ、反芻するのである。

さらに、池田高校という学校教育の場で、甲子園に行った池高として見られているという意識から、「さわやかで、のびのびした、高校生らしい」池高生という神話を強化していこうとする言動がみられる。こうしたことは、池田高校東祖谷分校教諭の阿部隆が、「さわやかで、質実剛健、高校生らしさという校風があつて、萬監督という人がおつて、野球部が中心になって学校のイメージを作つたという感じ。ほんでそれが全国でそのように報道されて、また学校がそのイメージに沿つてできてくるという感じ。これは絶対あるは。(生徒)個人の意識として見られとるなつていう感じあるは。」と表現していることでも明らかである。

池田町にあつてその自然環境やコスモロジーを背景にした池田高校気質を基盤にして、町の代表として池田高校が甲子園大会に出場することから、萬文也のパーソナリティや野球観を中核に、テレビ局の意図もあ

って、「さわやかで、のびのびした、高校生らしい池高」という神話が作られた。そして、この神話は、池田高校において、その神話を強化していこうとする意図がみられ、また、甲子園大会に出場を決めるたびごとに、共同体験としての寄付金や壮行会といった事業の中で自分のアイデンティティを再確認すると共に、池田高校神話を思い起こし、再び心に刻むのである。こうしたことから、池田町民にとって池高の神話は、以下のような連環性をもって、再生産され、そして再解釈されているといえる。

「さわやかで、のびのびした、高校生らしい池高神話」

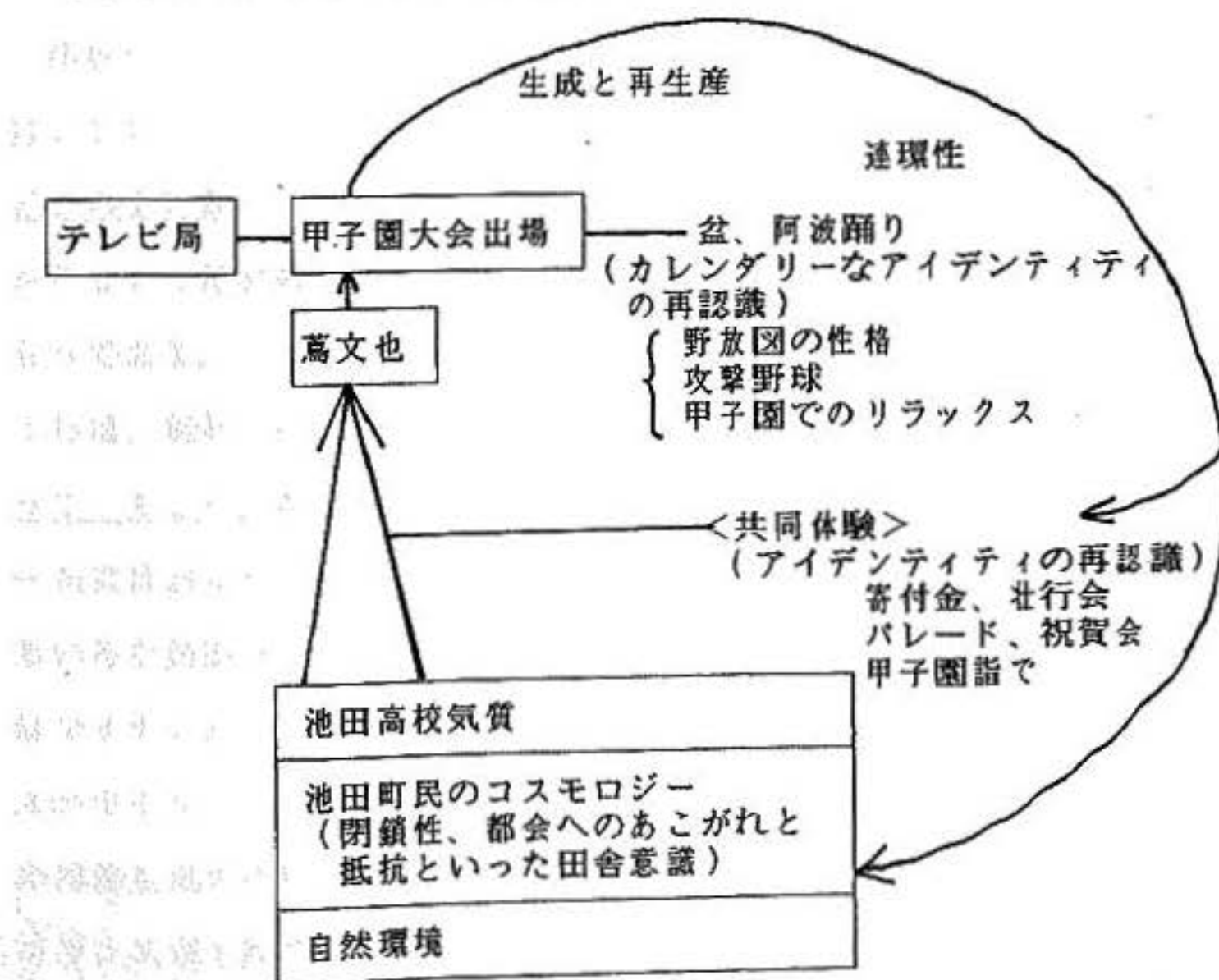


図5-1. 池高神話の連環性と再生産



## 8. 神話に対抗する事実 - 対抗神話の生成へ -

前節で述べているように、池田高校の神話は、今日でも連環性をもって再生産されていることがわかる。しかしながら、5. 神話生成の中核 - 葛文也監督 - のところでも述べたとおり、葛文也監督や岡田康志コーチが、神話を意識し、実際にそれを生きようとしているが現実には、それに対抗した事実が見られる。葛文也は、池田神話が、過去のものであることを認めた上で、次のように述べている。

「（池田高校野球部が、過去において）さわやかだったというのはあった。けど、今はもうさわやかだっていうのはないよ。はっきりいって、（高校生らしいといわれることを）目標にしとったけんとなあ、最近ではもういかんな、はっきりいうて、ええ子もおるけん、悪い子もおる、どこの野球部でも抱えている問題ちゅうのは池田もある。」「（さわやかさという池田高校神話について）実際はな、そんなことないな。両面もっておる。ええ面と悪い面とな。それが、今一番極端に出とるはな、うちは、純朴なんと、そうでない野球ばかりしとる子とな。野球病になって、ちょっと頭にきて、たばこ吸うたりな、そういうのも、今年のチームにはおるわな。世の中が、こんなに複雑になるもんじゃけんな。いろいろな誘惑がありおるでな。野球に結びつけて、これは野球するのにはマイナスか、プラスかちゅうことを考えないかんな。な。それをプラスかマイナスかちゅうのをなかなかわからん子がおる。な。」池田高校の神話生成の中核となった葛文也のめざす高校野球は、「やっぱりこう、バランスがとれてな、いかんけんな。3つがな。体とお性根と技術と。特に高校野球は、そうじゃな。職業としてやるのはゼ二もうけでこりゃやるからな。これは職業やないんやからな。」というように、高校生と

して、生活のなかですべてにバランスがとれ、勉強も野球も生活の一部として成り立っていなければならないのである。「野球ばかり生活の一部に入って、勉強が入とらんやつがおる、勉強せなんて余計なことする。たばこ吸うたりな。」と高校生として必要なことをやらず、野球ばかりを考えて生活している選手は薦のいう「悪い子」であってそれが引き起こす問題に頭を痛めている。

薦は、現実には起こっているこのような問題の一因は、地元池田町付近以外から、甲子園大会に出場したいがために、野球だけをやりに池田高校に入学し、野球部に在籍する、いわゆる野球留学してくる状況（池田高校野球部員としては、薦の方針で県内の中学校を卒業した者しか入学させていない。しかしながらこれはたてまえで、徳島県内の中学校以外の生徒は、中学3年の2学期もしくは3学期に、徳島県内の中学校に転校（多くは、同じ三好郡内にある三好中学校）して、名目上そこを卒業して池田高校に入学してくる。）にあるとして、次のように述べる。

「池田にきたら（甲子園に）いけるとこう思うとる。思うとるけどそうは……。現実はどうではない。だけんもう、青年期の理想主義にはやってはしってるな。夢をみてここへ来るんじゃ。ところが現実はどうでない。そういうところからいろいろ問題が起こってくるわけじゃ。欲求不満になってな。その、欲求不満におちいった時に、自分がこう、ものごとをきちんと考えてやってくれりゃええやけど。それがもうすぐこう、ゆがんだ方向へ走ってしまう。いやらしい。生からの非行少年いうんやないけどな。そういうふうになったら口実をつけて親も子どもも言うしな「先生が、平等にやらさんからじゃ。」そういうなことを言うし。そう、ほなけん、うまいこと成功した場合は、悩みも何もないけどな。思い通りになった子は。もうほなけん、思い通りになかなか現実として



はならん。ほなけんど、欲求不満におちた時のその人間のとるべき態度で1番ええのが、やっぱり自分が水準をちょっとひとつさげてからものごとを考えるちゅうふうにしてくれりゃええんに。そうはみんなせんけんな、このごろ。」平成2年(1989)11月の時点で1、2年生部員は28名であり、池田町を包含する三好郡出身者は14名、その他の徳島県内出身者が9名、残り5名は、大阪、京都、広島といった関西圏出身者である。コーチで教諭をしている岡田康志も「地元の子」と「よそから来たの」という表現を使って、「地元の子らは、技術はなくても、こうせーと言ったら、素直やし、非常にまじめに何でもするけど、技術がついていかんのや。よそから来たのは、合理的やね。技術はうまいけんど、中学校のときは、うまかったか知らんけど、その鼻をグッと折らなあかん。バキンときれいに折れた子はよう伸びる。じゃけーへんに折れて、へんな方へ行ってしまうおる。」と甲子園大会出場を目標に、野球のためだけに池田高校に野球留学してくる他県出身の選手が自分の期待にそぐわず、挫折して問題を起こしている現実を述べている。このように野球留学してくる選手は、リトルリーグやボニーリーグまたはシニアリーグ出身者である。

蔦や岡田は、都市圏大阪の、リトルリーグ、ボニーリーグそしてシニアリーグによる選手層の厚さを認識し、田舎の弱さを「リトルリーグとかボーイズがない」(蔦)といった表現を使い、甲子園に出場し、勝つためにはこのような選手が必要であることを認めながらも、技術だけで、野球ばかりを考えている彼らが思うように勝てないあるいは、レギュラーとして使ってもらえないことからくる非行化した行為を問題視する。ここには、日本の野球のシステムすなわち、プロ野球を頂点とし、リトルやボニーリーグから、シニアリーグそして甲子園大会で活躍してプロ

野球選手になることや大学に推薦入学し、ある者は実業団を経て、プロ選手になるルートが存在している事実と、甲子園神話を意識し、高校生らしい、バランスのとれた全人間的な発達の中で野球を考えようとする。葛や岡田の意識とのせめぎ合いがみられる。池田高校の神話を再生産しようとする者とプロへの道、純粋にチャンピオンスポーツのみを考え、野球だけを考えようとする選手との現実的な確執なのである。

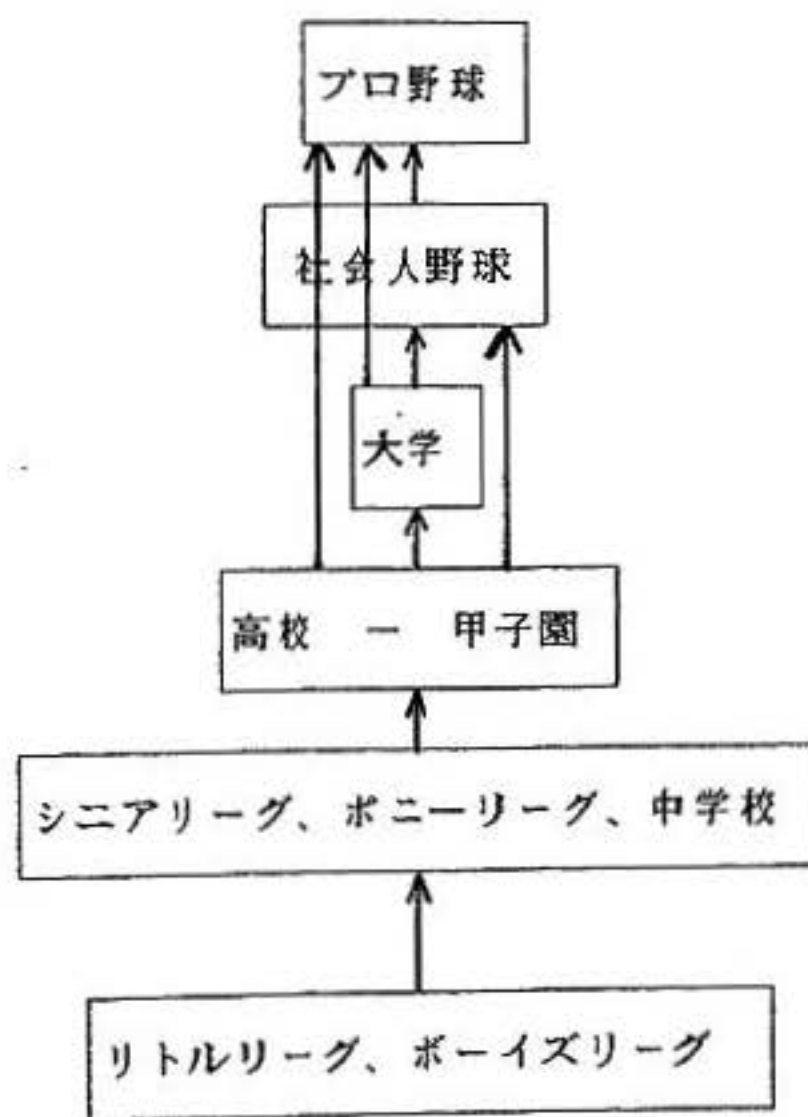


図5-2. プロ野球を頂点とした日本の野球界



このように野球を生活そして人生において中心に考えようとする選手の存在は、プロ野球を頂点とした日本の野球界が、図5-2. に示すようなシステムをもっていることの証左である。池田での、神話に対抗する現実からは、このような図式が見えてくるのだ。こうしたシステムの存在とそのシステムの中で生きようとする選手（特に徳島県外から野球留学している選手があてはまる）は、選手本人だけでなくその親をも巻き込む。平成元年11月の第2回調査の時、2年生のピッチャー松林秀一郎は、京都出身であるが、この母親もまた中学の時から、池田町にアパートを借りて住み、入学後練習を毎日見に来る生活を続けている。松林選手の母親は、以下のように述べている。「（京都の舞鶴から息子が）池田町へ行きたいっていうからびっくりしました。中学3年の時、こっちへ来まして。徳島県内の中学じゃないと入れないんで、ふたりでこっちに来たんです。はじめて池田に来る時、あの山の中を列車でゴトゴト揺られて走ってくる時にね、私、戦争中疎開していたもんですから、それ思い出しましてね。何か、ジーンとくるものがありました。そして葛さんの家の前のあの古い町並みがすごく良かったんです。だから、ここだったら子どもを預けようと思いました。それに夫が、野球をやっ  
て、昔、200人を越える報徳学園にレギュラーではなかったん  
ですけど、甲子園行く15人の中に入ったんですね。子どもの時分に、  
鍛えなきゃあかん、いうんですよ。息子がちょうど、昭和47年生まれで、「さ  
わやかイレブン」の年に生まれたんですよ。イレブンで活躍した野木  
さんという方が、あの子が行くところだった西舞鶴高校の先生をして  
おられるんですよ。偶然なことに。」自分の経験そして、父親の野球との関わりを含めて、過去に甲子園で活躍した池田でその神話を生きることが夢みて池田に来た子どもを応援する自分をこのように述べる。中学の3年

時より高校を息子秀一郎が卒業するまで、夫は京都で単身で暮らし、「3年たったら、むこう（京都）へ戻りますが、3年間こちらにずっといようかと思い」母親はひとりでアパートに住んでいるのである。「別に（息子と）話をするわけじゃないんですが。寮に（息子が）入っているし、ごはんも朝は寮で食べて、昼は学校で、夜はあのレストラン（学校から300mくらい行った吉野川沿い）にあり、そこで寮に入っている者は食べる。）へ行って食べるんですよ。練習見てちょっと言葉かわすくらいで、ただ動きをみているとみんなの様子がわかりますから、毎日見に来てます。練習見てれば安心ですから。」と11月の寒い夜も、ナイターの練習の中、毛布を下半身に巻いてじっと見つめている。

こうした、保護者に対して、そしてそのような行為に走らせる状況を葛文也はどう感じているのか。以下のように言っている。

「練習を見に来る人というのは、ほとんど父兄が多いんで、過剰じゃ。来んでもええのに来よるんで、ほんま、はっきりいうてそうです。子供が練習しちよるんだから、ほっときゃええんじゃ。いちいちいちいち来て。心配なんやね。ほんな、子供のことをかまって、子供がかわいそうじゃ。かえって自由にさした方がええ。」と過剰に子供に目をかける、保護者に対し、批評した上で、その状況を次のように述べる。「こんでもええのに来とる子もおるわ。わしらに言わしたら。わしは、もう来てもらわんでもええのに、来とるちゅうな。そりゃのう、どういうこんかちゅうたら、来んでもええと言うとんのにの、子供がどうしても池田へ来たいちゅうとん。親がもう、結局負けてしもうて、子供が来て、親がそこにおる。（松林秀一郎の母親のこと）」

池田に行ったら甲子園に行けると思う子どもに対し、親が自分たちの経験をふまえて過剰に子どもたちに接する現状は、「卒業したら大学へ



……」という母親の期待もあり、ひとつの日本野球界のシステムの上に、神話と対抗させる現実を生んでいる。

「さわやかで、のびのびした、高校生らしい池高」の神話は、葛文也監督をその中核にし、池田町の自然環境、町民のコスモロジー、さらにそこから醸成されてきた池田高校気質を基盤にして甲子園という大舞台に出て活躍した歴史の中で、メディアの意図もあって、作られた。それは、甲子園出場に伴う共同事業や学校教育の場で連環性をもって、再生産、再確認されてきている。しかしながら、現在では図5-2. に示したような、日本の野球界のシステムが存在し、神話とは対抗する事実がそのシステムを生きる選手によって生み出されている。池田高校の神話は、過去を思い起こさせ、自分と池田の関わりを再確認させる意識の上での鎮であるが、現実にかかるそれに対抗する事実とせめぎ合っているのである。

注1)

池田町においてたばこ産業の歴史は古く、天明3年(1783)に一戸だったものが、寛政から慶応年間に相つぐ増加で23戸となり、明治3年の戸籍簿において、全戸数239戸のうち、「刻み屋」36戸、刻み屋に雇われた日雇いが105戸であった。明治27年(1894)、29年には蒸気機関、石油発動機の導入で手工業から機械工業になり、明治35年(1902)の県統計では、県下のたばこ製造業134工場のうち74工場を人口25,739人の池田町で占めていたことがわかる。明治30年たばこ専売法が施行されて以来、たばこ専売の工場として存続している。

注2)

アイデンティティという語に関して、栗原彬は、E. H. Erikson の定義から次のようにまとめている。「第一に、「自分自身のなかに一貫して保たれている斉一性」、第二に、「ある種の本質的性格を他者と永続的に共有すること」を意味し、同時に両者の相互関係を表す。すなわち個人を個人たらしめているある中核的なものと集団の内的凝集の本質的部分とをリンクする機制である。この概念は多様な要素を含み、第一に個人的存在証明の意識された感覚、第二に個人的性格を持続せんとする無意識の努力、第三に自我総合、第四に集団の理想と属性への内的連帯の維持を同時に表現する」<sup>25)</sup>としている。そして、「エリクソン本来の用語は<エゴ・アイデンティティ>として発達論的見地から、青年期または引き延ばされた青年期に顕在化する主要な自我機制として限定的に用いられてきた。」<sup>26)</sup>が、「…<アイデンティティ>は「自分は何者であるか」の自己定義と、取り替えのきかない社会的役割のパターンを身につける自我の統合機制」<sup>27)</sup>であっ



て、「それは少年期の断片的な諸々の＜同一視＞(identifications)の合計以上の何ものである。」<sup>28)</sup> している。

本論文では、池田町における自分個人の存在証明(personal identity)と、身許証明、帰属証明といった集団帰属証明(group identity)の総合としてアイデンティティという語を用いている。

### 注3)

パーソナリティは、G. W. Allport の検討から、「環境に対する個人の適応の仕方を規定するような、心理系の個体内における力動的体制である」<sup>29)</sup> と定義できる。栗原彬は、個人の生活史に沿ったパーソナリティの漸成を見るためには、i) 人生の比較的初期に形成されて、持続する定礎的な部分と、ii) 人生の後半に形成される相対的に意識的・構成的な部分とを区別する事が重要であるとした上で、R. A. Levine の見出したパーソナリティ・ジェノタイプ(genotype 元型、発生型)とパーソナリティ・フェノタイプ(phenotype 顕型、現象型)に区別し、適用している。<sup>30)</sup>

パーソナリティ・ジェノタイプは、ある個人に固有の、持続的な性向や気質であり、衝動、認知、適応の行動に深く関わり、禁止や一般化といった変換の能力として現れるパターンである。この型は、幼児期から青年期までに獲得され、人生後期の発達と学習を規定する。このジェノタイプの源泉は、素因的発生によるもの、幼児期における親(または親代り)への反応・感受・フラストレーション・愛着のパターン、親からの分離の際の恐怖と憎悪、無意識のファンタジーと失われたものへの同一視のパターン等のほか、とりわけ、青年期に至るまでの創傷経験とそれによる抑圧形成のパターンが重要であるとされる。

これに対して、パーソナリティ・フェノタイプは、人生の比較的後期に、パーソナリティ・ジェノタイプの派生体として構成されて、相対的な自立性を獲得するもので、フェノタイプの本体は、社会的な役割遂行のパターンであるとされる。このタイプは、人生後期に拡大する社会圏のなかで、個人の行動に装填されていく可視的な規則性であって、社会的態度、価値、集団関係、技能、知識、選好等に現れるその人らしさの一貫性である。フェノタイプの日常的によく見る表現は、個人のマナーリズムや禁止などで、それらは無意識の衝動に対する防衛の表現がしだいに固定化し、規範化したものであるとされ、個人の性向にとどまらず、社会層に共通の性格を示すことがある。したがって、このタイプは、主として現在の環境圧力に反応し、社会の支配的な規範がここに浸透するとされる。<sup>32)</sup>

本論文では、以上のような概念と方法から、薦文也のパーソナリティ形成史と甲子園神話について、以下のような枠組みでインタビュー調査から分析している。

- ①薦の青年期後期までに形成される解くべき人生の課題及び課題を解決しようとする独特の形式をパーソナリティ・ジェノタイプの中核としてとらえ考察する。(父との関係、野球とのかかわり)
- ②引き延ばされてきた青年期及び初期の職業生活において、彼の葛藤を通して社会的セクションでどのように働きかけようとしたかについて考察する。(野球生活)
- ③社会圏の中で、指導者としてのパーソナルな課題とその解決方法について、パーソナリティ・フェノタイプとして考える。(池田高校の監督と甲子園)



④環境、社会的共鳴盤と蔦のパーソナリティについて考える。（蔦監督と池田町民のコスモロジー）この視点で、まとめられたものが5、神話形成の中核－蔦文也監督－である。

<資料1>

以下は池田高校がこれまで甲子園大会に出場し、それについて新聞報道されたものから抜粋したものである。(朝日新聞のスポーツ面、徳島判からのマイクロコピー複写による。)

# 池田 甲子園初出場の夢果す

勝利の暁に池田のライオンズが第一打を放つ瞬間 (池田新聞提供)

## 見事サヨナラ勝ち 池田の追撃徳商を倒す

### 自然の延長戦

池田	徳島商業
1 池田 1	徳島商業 0
2 池田 1	徳島商業 0
3 池田 1	徳島商業 0
4 池田 1	徳島商業 0
5 池田 1	徳島商業 0
6 池田 1	徳島商業 0
7 池田 1	徳島商業 0
8 池田 1	徳島商業 0
9 池田 1	徳島商業 0
10 池田 1	徳島商業 0
11 池田 1	徳島商業 0
12 池田 1	徳島商業 0
13 池田 1	徳島商業 0
14 池田 1	徳島商業 0
15 池田 1	徳島商業 0
16 池田 1	徳島商業 0
17 池田 1	徳島商業 0
18 池田 1	徳島商業 0
19 池田 1	徳島商業 0
20 池田 1	徳島商業 0

池田	徳島商業
1 池田 1	徳島商業 0
2 池田 1	徳島商業 0
3 池田 1	徳島商業 0
4 池田 1	徳島商業 0
5 池田 1	徳島商業 0
6 池田 1	徳島商業 0
7 池田 1	徳島商業 0
8 池田 1	徳島商業 0
9 池田 1	徳島商業 0
10 池田 1	徳島商業 0
11 池田 1	徳島商業 0
12 池田 1	徳島商業 0
13 池田 1	徳島商業 0
14 池田 1	徳島商業 0
15 池田 1	徳島商業 0
16 池田 1	徳島商業 0
17 池田 1	徳島商業 0
18 池田 1	徳島商業 0
19 池田 1	徳島商業 0
20 池田 1	徳島商業 0

### 歌声響く池田高

池田高校の選手たちは、試合終了後、校舎の前で合唱を披露した。彼らの歌声は、勝利の喜びを表現し、周囲の人々を感動させた。この瞬間は、彼らにとって特別な思い出となるだろう。

日本コソタクトレース

山田コソタクト  
TEL: 087-1234567

伊月 内科

〒123-4567 東京都千代田区  
伊月 内科  
TEL: 03-1234567

昭和46年(1971)7月30日



運拔高校野球 欲部集 池田 龍雄

THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS

目のさめる集中打

和歌山工に快勝

[illegible]

和歌山工一地区 ①和歌山地区工一、二区の各、二区を合併  
上河、野本町の両二区打て並置、互にを支配するの法一區を  
併置し、和歌山工一地区 ②和歌山地区工一、二区の各、二区を合併

池高旋風にわく地元

油高騰見につく地元  
「これでは儲けません」と、農産物商賣の業者が、農家の心をなやませるべく、各地の農協に呼びかけ、農産物の共同販売をすすめている。農協は、農家の利益を守るため、農産物の共同販売をすすめている。農協は、農家の利益を守るため、農産物の共同販売をすすめている。

【海田】 決勝進出めざし決意新た

[illegible]

一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、

## 決めた快打一発

倉敷工を突き放す

電話 03-3588-8888

[illegible][illegible]

1. **Identify the main idea of the passage.**

昭和49年(1974)4月5日, 6日.



# 甲子園に闘志新た

きょうから練習再開  
開田の選手はパレードにわく地元



開田の選手はパレードにわく地元



開田の選手はパレードにわく地元



花咲く「覇者たれ」

開田の選手はパレードにわく地元

開田の選手はパレードにわく地元

開田の選手はパレードにわく地元



開田の選手はパレードにわく地元

開田の選手はパレードにわく地元



開田の選手はパレードにわく地元



開田の選手はパレードにわく地元



人情深くおっとり

開田の選手はパレードにわく地元

昭和54年(1979)7月29日、8月1日、2日。



# 阿波球児 さわやかに入場

## 落ち着きと感動と

池田の15人 腕振り黒土踏み

【本紙記者池田五郎】阿波球児のさわやかな入場は、観客の心を打ち、感動を呼んだ。池田の15人は、腕振り黒土踏みのパフォーマンスで、観客の心を打ち、感動を呼んだ。池田の15人は、腕振り黒土踏みのパフォーマンスで、観客の心を打ち、感動を呼んだ。



# 優勝旗 ぜび阿波路へ

全国高校野球選手権大会

## 声援にVサイン

池田高元氣に出発



【本紙記者池田五郎】阿波球児のさわやかな入場は、観客の心を打ち、感動を呼んだ。池田の15人は、腕振り黒土踏みのパフォーマンスで、観客の心を打ち、感動を呼んだ。

【本紙記者池田五郎】阿波球児のさわやかな入場は、観客の心を打ち、感動を呼んだ。池田の15人は、腕振り黒土踏みのパフォーマンスで、観客の心を打ち、感動を呼んだ。

【本紙記者池田五郎】阿波球児のさわやかな入場は、観客の心を打ち、感動を呼んだ。池田の15人は、腕振り黒土踏みのパフォーマンスで、観客の心を打ち、感動を呼んだ。

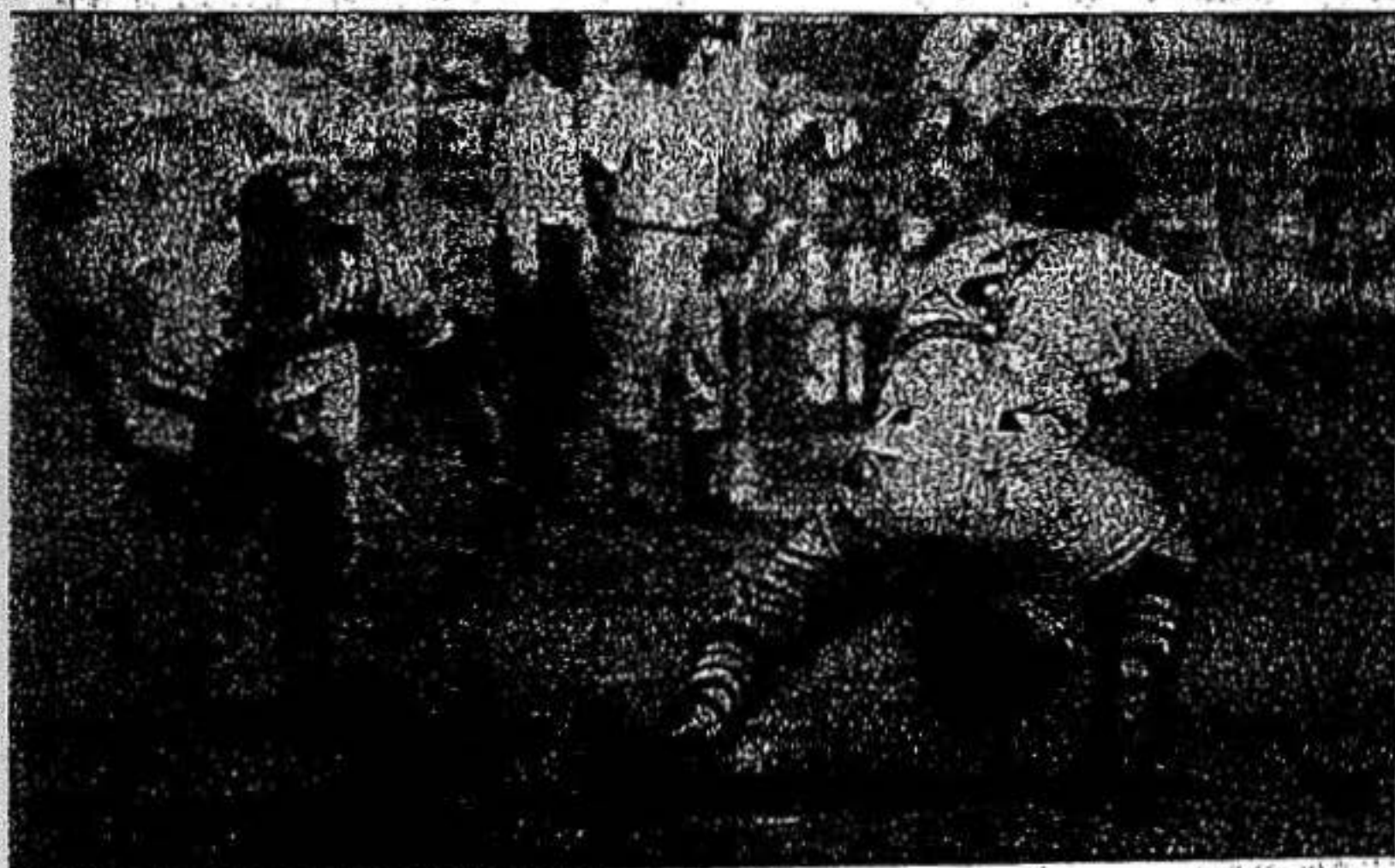
【本紙記者池田五郎】阿波球児のさわやかな入場は、観客の心を打ち、感動を呼んだ。池田の15人は、腕振り黒土踏みのパフォーマンスで、観客の心を打ち、感動を呼んだ。

昭和54年(1979)8月5日, 9日.



池田「8強」一番乗り

池田	0	0	0	0	0	0	4	1	0		5
中京	0	0	0	0	1	0	0	0	1		2



# 中京を打ち砕く

[illegible]

まず同点だ

[illegible]

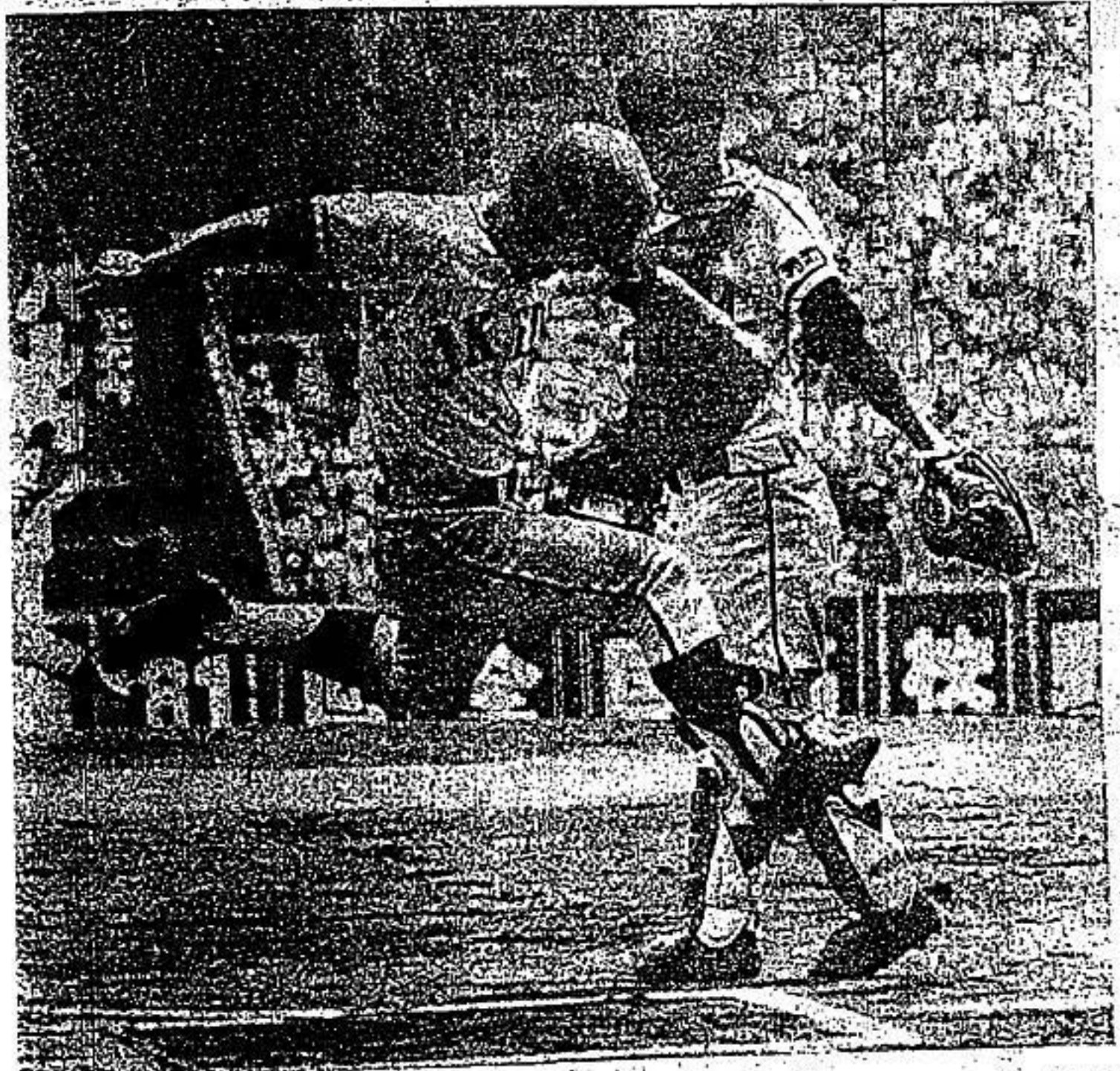
空輸号外

主編 朝日新聞社・日本高野連



# 池田輝<準優勝>

也 田	1	0	0	1	1	0	0	0	0		3
實 島	1	0	0	0	0	1	0	2	X		4



食島の春宴連環阻めず

魔の8回逆転許す

闘し、さやかブレイを敗陣中千園のグラウンドに残した選手たちに、現案の相手は明りやまなかつた——個目新聞片、日本高野連主催の第六十一回全国高校野球選手権大会決勝戦は二十二日行われ、徳島代表・徳川は、春、夏連続初戦をねらう和歌山代表・箕島と対戦した。徳川の力投と山びこ打役の活躍で先制したが、力の箕島に逆転されて敗れた。徳島勢の準優勝は三十五年の徳島西以来二十一年より三回目、準優勝初めてとう。

先制パンチ実らず

陸田一、文島、一、四、五、陸田一、一、口、芝、山、下、一、四、五、の、左、中、間、二、

先 典  
メロイ  
【題 目】  
山下原北野町南  
山田園水田山田  
山田園水田山田  
【著 者】  
山下原北野町南  
山田園水田山田  
山田園水田山田

1. **RECEIVED**  
 2. **RECEIVED**  
 3. **RECEIVED**  
 4. **RECEIVED**  
 5. **RECEIVED**  
 6. **RECEIVED**  
 7. **RECEIVED**  
 8. **RECEIVED**  
 9. **RECEIVED**  
 10. **RECEIVED**  
 11. **RECEIVED**  
 12. **RECEIVED**  
 13. **RECEIVED**  
 14. **RECEIVED**  
 15. **RECEIVED**  
 16. **RECEIVED**  
 17. **RECEIVED**  
 18. **RECEIVED**  
 19. **RECEIVED**  
 20. **RECEIVED**  
 21. **RECEIVED**  
 22. **RECEIVED**  
 23. **RECEIVED**  
 24. **RECEIVED**  
 25. **RECEIVED**  
 26. **RECEIVED**  
 27. **RECEIVED**  
 28. **RECEIVED**  
 29. **RECEIVED**  
 30. **RECEIVED**  
 31. **RECEIVED**  
 32. **RECEIVED**  
 33. **RECEIVED**  
 34. **RECEIVED**  
 35. **RECEIVED**  
 36. **RECEIVED**  
 37. **RECEIVED**  
 38. **RECEIVED**  
 39. **RECEIVED**  
 40. **RECEIVED**  
 41. **RECEIVED**  
 42. **RECEIVED**  
 43. **RECEIVED**  
 44. **RECEIVED**  
 45. **RECEIVED**  
 46. **RECEIVED**  
 47. **RECEIVED**  
 48. **RECEIVED**  
 49. **RECEIVED**  
 50. **RECEIVED**  
 51. **RECEIVED**  
 52. **RECEIVED**  
 53. **RECEIVED**  
 54. **RECEIVED**  
 55. **RECEIVED**  
 56. **RECEIVED**  
 57. **RECEIVED**  
 58. **RECEIVED**  
 59. **RECEIVED**  
 60. **RECEIVED**  
 61. **RECEIVED**  
 62. **RECEIVED**  
 63. **RECEIVED**  
 64. **RECEIVED**  
 65. **RECEIVED**  
 66. **RECEIVED**  
 67. **RECEIVED**  
 68. **RECEIVED**  
 69. **RECEIVED**  
 70. **RECEIVED**  
 71. **RECEIVED**  
 72. **RECEIVED**  
 73. **RECEIVED**  
 74. **RECEIVED**  
 75. **RECEIVED**  
 76. **RECEIVED**  
 77. **RECEIVED**  
 78. **RECEIVED**  
 79. **RECEIVED**  
 80. **RECEIVED**  
 81. **RECEIVED**  
 82. **RECEIVED**  
 83. **RECEIVED**  
 84. **RECEIVED**  
 85. **RECEIVED**  
 86. **RECEIVED**  
 87. **RECEIVED**  
 88. **RECEIVED**  
 89. **RECEIVED**  
 90. **RECEIVED**  
 91. **RECEIVED**  
 92. **RECEIVED**  
 93. **RECEIVED**  
 94. **RECEIVED**  
 95. **RECEIVED**  
 96. **RECEIVED**  
 97. **RECEIVED**  
 98. **RECEIVED**  
 99. **RECEIVED**  
 100. **RECEIVED**

昭和54年(1979)8月21日.



# さわやか池田に歓迎の渦

「ようやったでわ」

健闘はめ握手攻め



池田市のさわやか祭りに参加した学生たちが、市民らと握手を交わしている。背景には、祭りの装飾や建物が見える。学生たちは元気な表情で、市民たちとも笑顔で交流している様子が写っている。

池田市さわやか祭りに参加した学生たちが、市民らと握手を交わしている。	池田市さわやか祭りに参加した学生たちが、市民らと握手を交わしている。	池田市さわやか祭りに参加した学生たちが、市民らと握手を交わしている。	池田市さわやか祭りに参加した学生たちが、市民らと握手を交わしている。
池田市さわやか祭りに参加した学生たちが、市民らと握手を交わしている。	池田市さわやか祭りに参加した学生たちが、市民らと握手を交わしている。	池田市さわやか祭りに参加した学生たちが、市民らと握手を交わしている。	池田市さわやか祭りに参加した学生たちが、市民らと握手を交わしている。
池田市さわやか祭りに参加した学生たちが、市民らと握手を交わしている。	池田市さわやか祭りに参加した学生たちが、市民らと握手を交わしている。	池田市さわやか祭りに参加した学生たちが、市民らと握手を交わしている。	池田市さわやか祭りに参加した学生たちが、市民らと握手を交わしている。
池田市さわやか祭りに参加した学生たちが、市民らと握手を交わしている。	池田市さわやか祭りに参加した学生たちが、市民らと握手を交わしている。	池田市さわやか祭りに参加した学生たちが、市民らと握手を交わしている。	池田市さわやか祭りに参加した学生たちが、市民らと握手を交わしている。

昭和54年(1979)8月24日.



# 今年こそ深紅の大優勝旗を

池田 盛んな声援受け出発

【本紙記者池田 隆雄】「今年こそ深紅の大優勝旗を」と、池田市立高校の選手たちが、今年度の全国大会を目指して、大勢の応援を受け、出発した。選手たちは、大勢の応援を受け、出発した。選手たちは、大勢の応援を受け、出発した。



池田市立高校の選手たちが、今年度の全国大会を目指して、大勢の応援を受け、出発した。

## 半時間汗を流す 元気いっぱい初練習

【本紙記者池田 隆雄】池田市立高校の選手たちが、今年度の全国大会を目指して、大勢の応援を受け、出発した。選手たちは、大勢の応援を受け、出発した。選手たちは、大勢の応援を受け、出発した。



池田市立高校の選手たちが、今年度の全国大会を目指して、大勢の応援を受け、出発した。

## 攻めの野球 基本の連続で 本領発揮期待

【本紙記者池田 隆雄】池田市立高校の選手たちが、今年度の全国大会を目指して、大勢の応援を受け、出発した。選手たちは、大勢の応援を受け、出発した。選手たちは、大勢の応援を受け、出発した。



池田市立高校の選手たちが、今年度の全国大会を目指して、大勢の応援を受け、出発した。



池田猛打 きょうも頼むぞ!

[illegible]

山の子思いのまま

「都会早実」ほんろう

[illegible][illegible][illegible]

「号外」に喜び再び

町  
歌  
前  
商  
店  
街  
と  
横  
断  
筋



REINFORCEMENT OF AN EXISTING CONCRETE BEAM

[illegible][illegible]

此乃一經方之妙用也。凡患此症者，服此藥後，其效如神。此藥乃一經方之妙用也。凡患此症者，服此藥後，其效如神。此藥乃一經方之妙用也。凡患此症者，服此藥後，其效如神。

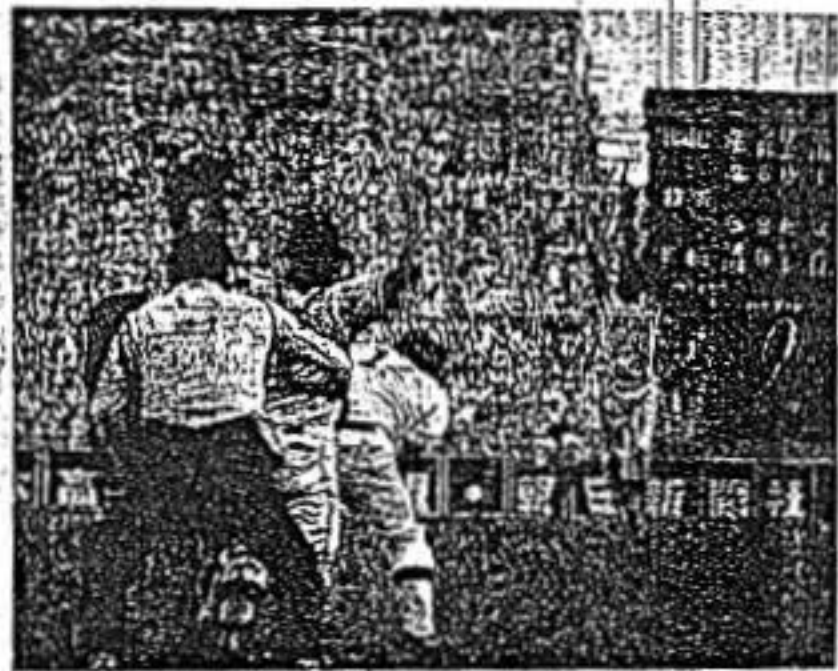


# 頂一の日本 田池涛怒

池田 600 015 000 12  
広島 001 001 000 12

## 野武士野球みごとと開花

### 「現代っ子長慶」存分の力



「現代っ子長慶」存分の力  
野武士野球みごとと開花  
広島県立広島商業高校の野球部は、今年度の夏の甲子園大会で、初戦から決勝まで、一歩も引かず、全試合を勝利で飾り、優勝を果たした。この快挙は、部員一人ひとりの努力と、指導者の指導の賜である。特に、投手の活躍が目を引く。この活躍は、部員一人ひとりの努力と、指導者の指導の賜である。



この快挙は、部員一人ひとりの努力と、指導者の指導の賜である。特に、投手の活躍が目を引く。この活躍は、部員一人ひとりの努力と、指導者の指導の賜である。

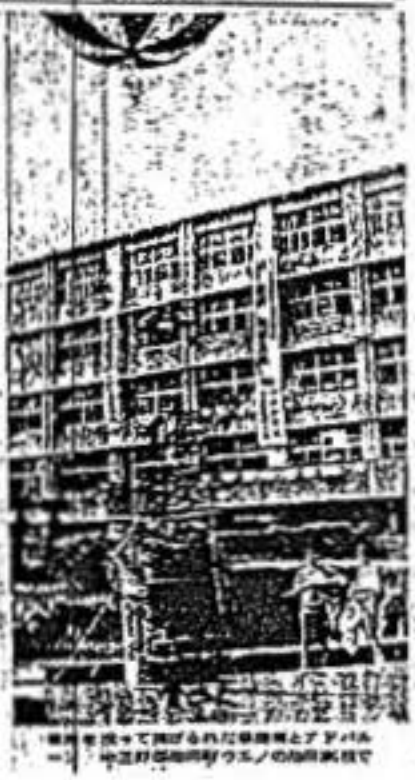
## 生徒全員で勝ち取った

「現代っ子長慶」存分の力  
野武士野球みごとと開花  
広島県立広島商業高校の野球部は、今年度の夏の甲子園大会で、初戦から決勝まで、一歩も引かず、全試合を勝利で飾り、優勝を果たした。この快挙は、部員一人ひとりの努力と、指導者の指導の賜である。特に、投手の活躍が目を引く。この活躍は、部員一人ひとりの努力と、指導者の指導の賜である。

僕らの力を全部出した  
広島県立広島商業高校の野球部は、今年度の夏の甲子園大会で、初戦から決勝まで、一歩も引かず、全試合を勝利で飾り、優勝を果たした。この快挙は、部員一人ひとりの努力と、指導者の指導の賜である。特に、投手の活躍が目を引く。この活躍は、部員一人ひとりの努力と、指導者の指導の賜である。

## 祝賀垂れ幕次々

スーパーは記念セール  
広島県立広島商業高校の野球部は、今年度の夏の甲子園大会で、初戦から決勝まで、一歩も引かず、全試合を勝利で飾り、優勝を果たした。この快挙は、部員一人ひとりの努力と、指導者の指導の賜である。特に、投手の活躍が目を引く。この活躍は、部員一人ひとりの努力と、指導者の指導の賜である。



勝利を祝って掲げられた優勝旗とアパル  
中道野郎団のウエノの旗が映る

**ヒフ科**  
入道堂  
皮膚科  
電話 082-231-1111

**渡辺病院**  
内科 外科 小児科  
電話 082-231-1111

**斎藤**  
電話 082-231-1111

**渡辺病院**  
内科 外科 小児科  
電話 082-231-1111

**斎藤**  
電話 082-231-1111

**渡辺病院**  
内科 外科 小児科  
電話 082-231-1111



# 徳島版

徳島新聞社  
 〒770-8555 徳島市八幡町一丁目  
 電話 087-221-1111  
 電報 52111  
 郵便 徳島新聞社  
 〒770-8555 徳島市八幡町一丁目  
 電話 087-221-1111  
 電報 52111  
 郵便 徳島新聞社

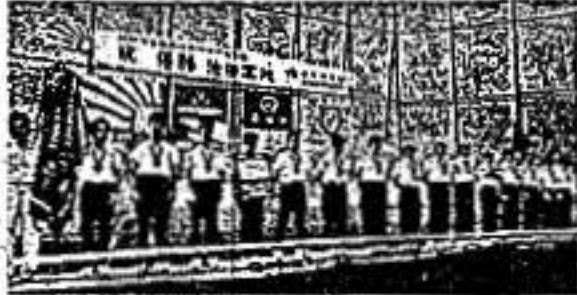
徳島新聞社  
 〒770-8555 徳島市八幡町一丁目  
 電話 087-221-1111  
 電報 52111  
 郵便 徳島新聞社



理上に並びたいの言葉を交わす  
 一三好市立小の児童は徳島工  
 業グラウンドで



フェリーで徳島入りする乗客たち  
 を待つ数人の人だち



徳島小の児童から「徳島県民会館」を  
 指図を贈られる徳島県立三好郡徳島町  
 の市立徳島工業グラウンドで

## いよっ日本一

### 池田高チーム帰郷



徳島県立池田高等学校の生徒たちが、徳島県立三好郡徳島町の市立徳島工業グラウンドで、徳島県民会館に参拝した。生徒たちは、徳島県民会館の歴史を学び、徳島県民会館の発展に貢献することを誓った。

## 市街に沿道に人人

### 2年生 来年の活躍を誓う

徳島県立池田高等学校の2年生たちが、徳島県立三好郡徳島町の市立徳島工業グラウンドで、徳島県民会館に参拝した。生徒たちは、徳島県民会館の歴史を学び、徳島県民会館の発展に貢献することを誓った。

昭和57年(1982)8月23日



# 徳島版

徳島県内各支店  
徳島市 徳島支店 (087) 211-1111  
鳴門 鳴門支店 (087) 211-1111  
小松島 小松島支店 (087) 211-1111  
... (list continues with various branch locations and phone numbers)

## 今更に二

徳島県内各支店  
徳島市 徳島支店 (087) 211-1111  
鳴門 鳴門支店 (087) 211-1111  
小松島 小松島支店 (087) 211-1111  
... (list continues with various branch locations and phone numbers)

### 池田 夏春連覇 確かな手ごたえ

#### のびのび野球で帝京倒

池田の夏春連覇は、確かな手ごたえを示している。のびのびとした野球で、帝京を倒した。この勝利は、池田の野球部にとって大きな励みとなる。今後の試合でも、この調子で戦ってほしい。

池田の野球部は、この勝利で、夏の大会に向けての自信を確立した。今後の練習でも、この調子で戦ってほしい。

# 力の池田 夏春連覇

## 水野、横浜商を2安打完封

### 連打で加点

水野は、横浜商を2安打で完封した。連打で加点し、チームの勝利に貢献した。この活躍は、水野の野球技術の高さを示している。

水野は、この試合で、2安打を放ち、チームの勝利に貢献した。この活躍は、水野の野球技術の高さを示している。

水野は、この試合で、2安打を放ち、チームの勝利に貢献した。この活躍は、水野の野球技術の高さを示している。

水野は、この試合で、2安打を放ち、チームの勝利に貢献した。この活躍は、水野の野球技術の高さを示している。

水野は、この試合で、2安打を放ち、チームの勝利に貢献した。この活躍は、水野の野球技術の高さを示している。

## PL打線 パワー満点



爆発力に池田あ然

一年生、投打にはづち

[illegible]

**THE UNIVERSITY OF CHICAGO**  
 5408 S. UNIVERSITY AVE.  
 CHICAGO, ILL. 60637  
 TEL: 773-936-5000  
 FAX: 773-936-5000  
 WWW: WWW.CHICAGO.EDU

**RESEARCHER**  
The research group is looking for a person with a background in the field of research and development in the area of computer graphics and image processing. The person should have a minimum of a Master's degree in a related field and have experience in the use of computer graphics and image processing software. The person should also have experience in the use of computer graphics and image processing hardware. The person should be able to work independently and be able to communicate effectively with others. The person should be able to work in a team environment and be able to manage a project. The person should be able to work in a fast-paced environment and be able to meet deadlines. The person should be able to work in a team environment and be able to manage a project. The person should be able to work in a fast-paced environment and be able to meet deadlines.

1967-1968  
 1968-1969  
 1969-1970  
 1970-1971  
 1971-1972  
 1972-1973  
 1973-1974  
 1974-1975  
 1975-1976  
 1976-1977  
 1977-1978  
 1978-1979  
 1979-1980  
 1980-1981  
 1981-1982  
 1982-1983  
 1983-1984  
 1984-1985  
 1985-1986  
 1986-1987  
 1987-1988  
 1988-1989  
 1989-1990  
 1990-1991  
 1991-1992  
 1992-1993  
 1993-1994  
 1994-1995  
 1995-1996  
 1996-1997  
 1997-1998  
 1998-1999  
 1999-2000  
 2000-2001  
 2001-2002  
 2002-2003  
 2003-2004  
 2004-2005  
 2005-2006  
 2006-2007  
 2007-2008  
 2008-2009  
 2009-2010  
 2010-2011  
 2011-2012  
 2012-2013  
 2013-2014  
 2014-2015  
 2015-2016  
 2016-2017  
 2017-2018  
 2018-2019  
 2019-2020  
 2020-2021  
 2021-2022  
 2022-2023  
 2023-2024  
 2024-2025  
 2025-2026  
 2026-2027  
 2027-2028  
 2028-2029  
 2029-2030  
 2030-2031  
 2031-2032  
 2032-2033  
 2033-2034  
 2034-2035  
 2035-2036  
 2036-2037  
 2037-2038  
 2038-2039  
 2039-2040  
 2040-2041  
 2041-2042  
 2042-2043  
 2043-2044  
 2044-2045  
 2045-2046  
 2046-2047  
 2047-2048  
 2048-2049  
 2049-2050  
 2050-2051  
 2051-2052  
 2052-2053  
 2053-2054  
 2054-2055  
 2055-2056  
 2056-2057  
 2057-2058  
 2058-2059  
 2059-2060  
 2060-2061  
 2061-2062  
 2062-2063  
 2063-2064  
 2064-2065  
 2065-2066  
 2066-2067  
 2067-2068  
 2068-2069  
 2069-2070  
 2070-2071  
 2071-2072  
 2072-2073  
 2073-2074  
 2074-2075  
 2075-2076  
 2076-2077  
 2077-2078  
 2078-2079  
 2079-2080  
 2080-2081  
 2081-2082  
 2082-2083  
 2083-2084  
 2084-2085  
 2085-2086  
 2086-2087  
 2087-2088  
 2088-2089  
 2089-2090  
 2090-2091  
 2091-2092  
 2092-2093  
 2093-2094  
 2094-2095  
 2095-2096  
 2096-2097  
 2097-2098  
 2098-2099  
 2099-2100  
 2100-2101  
 2101-2102  
 2102-2103  
 2103-2104  
 2104-2105  
 2105-2106  
 2106-2107  
 2107-2108  
 2108-2109  
 2109-2110  
 2110-2111  
 2111-2112  
 2112-2113  
 2113-2114  
 2114-2115  
 2115-2116  
 2116-2117  
 2117-2118  
 2118-2119  
 2119-2120  
 2120-2121  
 2121-2122  
 2122-2123  
 2123-2124  
 2124-2125  
 2125-2126  
 2126-2127  
 2127-2128  
 2128-2129  
 2129-2130  
 2130-2131  
 2131-2132  
 2132-2133  
 2133-2134  
 2134-2135  
 2135-2136  
 2136-2137  
 2137-2138  
 2138-2139  
 2139-2140  
 2140-2141  
 2141-2142  
 2142-2143  
 2143-2144  
 2144-2145  
 2145-2146  
 2146-2147  
 2147-2148  
 2148-2149  
 2149-2150  
 2150-2151  
 2151-2152  
 2152-2153  
 2153-2154  
 2154-2155  
 2155-2156  
 2156-2157  
 2157-2158  
 2158-2159  
 2159-2160  
 2160-2161  
 2161-2162  
 2162-2163  
 2163-2164  
 2164-2165  
 2165-2166  
 2166-2167  
 2167-2168  
 2168-2169  
 2169-2170  
 2170-2171  
 2171-2172  
 2172-2173  
 2173-2174  
 2174-2175  
 2175-2176  
 2176-2177  
 2177-2178  
 2178-2179  
 2179-2180  
 2180-2181  
 2181-2182  
 2182-2183  
 2183-2184  
 2184-2185  
 2185-2186  
 2186-2187  
 2187-2188  
 2188-2189  
 2189-2190  
 2190-2191  
 2191-2192  
 2192-2193  
 2193-2194  
 2194-2195  
 2195-2196  
 2196-2197  
 2197-2198  
 2198-2199  
 2199-2200  
 2200-2201  
 2201-2202  
 2202-2203  
 2203-2204  
 2204-2205  
 2205-2206  
 2206-2207  
 2207-2208  
 2208-2209  
 2209-2210  
 2210-2211  
 2211-2212  
 2212-2213  
 2213-2214  
 2214-2215  
 2215-2216  
 2216-2217  
 2217-2218  
 2218-2219  
 2219-2220  
 2220-2221  
 2221-2222  
 2222-2223  
 2223-2224  
 2224-2225  
 2225-2226  
 2226-2227  
 2227-2228  
 2228-2229  
 2229-2230  
 2230-2231  
 2231-2232  
 2232-2233  
 2233-2234  
 2234-2235  
 2235-2236  
 2236-2237  
 2237-2238  
 2238-2239  
 2239-2240  
 2240-2241  
 2241-2242  
 2242-2243  
 2243-2244  
 2244-2245  
 2245-2246  
 2246-2247  
 2247-2248  
 2248-2249  
 2249-2250  
 2250-2251  
 2251-2252  
 2252-2253  
 2253-2254  
 2254-2255  
 2255-2256  
 2256-2257  
 2257-2258  
 2258-2259  
 225



地区	人数	性别	年龄	职业	文化程度	健康状况	婚姻状况	经济状况	其他
北京	100	男	25	教师	大学	良好	已婚	中等	无
上海	120	女	30	医生	高中	一般	未婚	较差	有
天津	80	男	20	工人	初中	良好	已婚	中等	无
武汉	90	女	28	护士	大学	良好	已婚	中等	有
广州	110	男	35	经理	高中	一般	已婚	较好	有
深圳	130	女	22	程序员	大学	良好	未婚	中等	有
成都	70	男	27	工程师	高中	良好	已婚	中等	无
西安	60	女	32	会计	初中	一般	已婚	较差	有
昆明	50	男	24	司机	小学	良好	已婚	较差	无
拉萨	40	女	29	文员	高中	一般	未婚	较差	有
乌鲁木齐	30	男	21	学生	大学	良好	未婚	中等	无
海口	20	女	33	保洁	初中	一般	已婚	较差	有
郑州	10	男	26	厨师	小学	良好	已婚	较差	无
济南	15	女	31	销售	高中	一般	已婚	中等	有
南京	25	男	23	文员	大学	良好	未婚	中等	有
杭州	35	女	27	教师	高中	良好	已婚	中等	有
苏州	45	男	34	工人	初中	一般	已婚	较差	有
无锡	55	女	28	护士	大学	良好	已婚	中等	有
常州	65	男	36	经理	高中	一般	已婚	较好	有
南通	75	女	37	会计	初中	一般	已婚	较差	有
扬州	85	男	38	司机	小学	良好	已婚	较差	无
镇江	95	女	39	文员	高中	一般	未婚	较差	有
泰州	105	男	40	学生	大学	良好	未婚	中等	无
宿迁	115	女	41	保洁	初中	一般	已婚	较差	有
徐州	125	男	42	厨师	小学	良好	已婚	较差	无
连云港	135	女	43	销售	高中	一般	已婚	中等	有
盐城	145	男	44	文员	大学	良好	未婚	中等	有
淮安	155	女	45	教师	高中	良好	已婚	中等	有
宿迁	165	男	46	工人	初中	一般	已婚	较差	有
徐州	175	女	47	护士	大学	良好	已婚	中等	有
连云港	185	男	48	经理	高中	一般	已婚	较好	有
盐城	195	女	49	会计	初中	一般	已婚	较差	有
淮安	205	男	50	司机	小学	良好	已婚	较差	无
宿迁	215	女	51	文员	高中	一般	未婚	较差	有
徐州	225	男	52	学生	大学	良好	未婚	中等	无
连云港	235	女	53	保洁	初中	一般	已婚	较差	有
盐城	245	男	54	厨师	小学	良好	已婚	较差	无
淮安	255	女	55	销售	高中	一般	已婚	中等	有
宿迁	265	男	56	文员	大学	良好	未婚	中等	有
徐州	275	女	57	教师	高中	良好	已婚	中等	有
连云港	285	男	58	工人	初中	一般	已婚	较差	有
盐城	295	女	59	护士	大学	良好	已婚	中等	有
淮安	305	男	60	经理	高中	一般	已婚	较好	有
宿迁	315	女	61	会计	初中	一般	已婚	较差	有
徐州	325	男	62	司机	小学	良好	已婚	较差	无
连云港	335	女	63	文员	高中	一般	未婚	较差	有
盐城	345	男	64	学生	大学	良好	未婚	中等	无
淮安	355	女	65	保洁	初中	一般	已婚	较差	有
宿迁	365	男	66	厨师	小学	良好	已婚	较差	无
徐州	375	女	67	销售	高中	一般	已婚	中等	有
连云港	385	男	68	文员	大学	良好	未婚	中等	有
盐城	395	女	69	教师	高中	良好	已婚	中等	有
淮安	405	男	70	工人	初中	一般	已婚	较差	有
宿迁	415	女	71	护士	大学	良好	已婚	中等	有
徐州	425	男	72	经理	高中	一般	已婚	较好	有
连云港	435	女	73	会计	初中	一般	已婚	较差	有
盐城	445	男	74	司机	小学	良好	已婚	较差	无
淮安	455	女	75	文员	高中	一般	未婚	较差	有
宿迁	465	男	76	学生	大学	良好	未婚	中等	无
徐州	475	女	77	保洁	初中	一般	已婚	较差	有
连云港	485	男	78	厨师	小学	良好	已婚	较差	无
盐城	495	女	79	销售	高中	一般	已婚	中等	有
淮安	505	男	80	文员	大学	良好	未婚	中等	有

[illegible][illegible]

昭和58年(1983)8月21日.







晴れやかに郷土入り

選抜高校野球「全国一」祝う

池田が総理の座に就くや、陸海へ帰って来た。甲子園出場から十五年、夏夏をわけて三度も金銀二に、すこいぞ池田  
一、前年十八回優勝の野球大会（日本高校野球連盟、毎日新聞社主催）で、四回の優勝を飾った浦田は六日、阪神甲子園球  
場から優勝杯を引出て帰郷、陸海市内の連年球技三好運動会町内で開かれた祝賀会で勝利を報告した。阿波路はさうの直前、  
選手たちの間は、ピンクの花に多らず舞っていた。



順衆の拍手に包まれて、折田忠治・池田校長、萬監督ら先頭に行進する池田選手たち。1977年、雄略球場で



便所故老先刻に授け金庫に入る事だ青三評語田町で

野球場連立、甲子園の非人公  
たちをひと国界よと、少年

午後二時、折からの強い風にバックスクリューに下がる二機。機師の顔は蒼蒼と大きく開く中、選手たちのバスが到着した。白装の武蔵野、優勝旗を大々そとに持つ藤原圭司、白い色紙の中までしっかりと優勝杯を握る長谷川一馬。中子園ではいつも列の最後尾に並ぶ小倉な大叔乎、既田選手がきこるは顔から三番目、うまの本調子が光る森田選手、学生服の胸に優勝メダルが輝いていた。力強い足

行で、アースに向かうとき、  
 温泉、野山、風景を眺めながら手  
 巾で遊んだ。  
 「何なるドンチにも動じ  
 ず、島中に探検しなみなんは  
 島を野山探検のつもりです」と、黒  
 島野山の自然を愛する者は自然の  
 めに遊んでたんだ。「黒島の  
 風景を勝手に盗った。自然山の景  
 観は、島中に自然と魅力を与え  
 てくれます」と、松本太郎氏が  
 片、探検を愛する自然に、黒島  
 も別れるような自然。  
 選手を代表、マイクに向かう  
 た黒島選手は「明日からは一か  
 ら出撃し、夏に向けがなり家  
 す」と力強くあいさつした。頂  
 上を歩いた選手たちの新しい旅  
 いが、もう始まる。旅をゆる  
 がすハンザイに導かれ、選手た

---

ちほイマヤンドを二回、四回  
 バスで黒島町へと向かった。  
 選手たちが黒島町に到着した  
 たのは午後四時十分。黒島町  
 の日本では、黒島町長が  
 ドでは、約千人が黒島町を  
 待ちわびていた。選手たちを  
 迎へる人の数が、ぐんぐん天  
 空をなぞ、竹野の東上は黒島  
 選手を黒島町が一人ずつ紹介  
 その十五人に、黒島町長が黒島  
 島からくさ島を助けた。二三  
 月二十一日、みなさんを通り出  
 した時、黒島も二度と、ひと  
 かに期待していたのが、正解と  
 なり、本場についた。夏の土  
 会でも、ぜひ黒島を「  
 黒島町がマイクを持った。  
 「おこれる者は久しからず、と  
 いふ言葉もある。まずまずの

ひきしめたい」・「團圓主將が「あすから夏の大会の日まで二から練習します」と、力強く決意を述べると、一般と大会は別で「団圓」・「夏の大会」であるという説明を、「と、敵対的視ひ、我々と町の人のための心が、ひとつに結び合つた。」

ちばイマヤンドを二回、門ひ  
 パスで熊田町へと向かった。  
 選挙先が熊田町に決り、競い  
 たのは午後五時十分。投票会場  
 の日本では、熊田町、勇次郎ラン  
 ドでは、約三千人が集まり、電  
 子投票機を操作する。選挙先を  
 持ちわけていた。選挙先を取  
 り締めるのが、ぐんぐん大太  
 きくなる。竹村の腹上には、選挙  
 選挙を監督する一人ずつ紹介  
 その十五人に、真黒熊田熊田町  
 長ららで、選挙先を取った。三三

4月7日.

昭和61年(1986)4月7日.



〈資料 2〉

12時10分駅前の喫茶店。第2試合が終わってテレビにかじりついていた数人のファンはさあはじまるぞという感じである。

池田高校の学校紹介。

「出たぞ。」

「あれみたら、きれいやな池田も。」

スタンド応援席を映し出す

「だれぞ、知ってる人がでるかもしれん。」

戦力分析

「池田は守備力と投手力があれじゃなあ。」(5がついている)

阿波踊りの話も突如、

「池田も昼ごろからおどりがでるんやろか。」

〈1回表：池田攻撃〉

「4. 5. 6……14、行って11日目や、もうダレとるやろな。」

「これはしてみなわからんしけんの。」

ショートゴロ、一塁へショートバウンド

「ア!」「うまくいかんわ、なれるまでは。」

人なみも消え自動車も減った。

「葛さんの人徳やね。東京でもね、地元以外は池田応援しますよ。素朴なところもあるしな。葛先生のな、そうゆうのがなええんや。」

と東京から帰省してきた三好郡出身のおじさん。

(試合がはじまるので列車を途中下車したとのこと)

「嫁が池校出身で勝つと知らん人もどんどん電話くれるんですよ。」

〈2回表：池田攻撃〉

バントで送る。解説「甲子園戦法ですね。」に、笑い。2アウトランナー3塁。

「あーあ！」しかし、ここで3塁打が出て一点。

「やっぱ打つ！いくら打てんいうてもね。」

「入ったで。」

ボールカウント 0-3 から桜間2塁打。二点目。

「おー！」「打つ打つ。」「やはり攻めですね。」

〈2回ウラ〉

2アウトからエラーがでる

「あっあっあー。軽率だったね。今のは。」

ランナー1塁からセンター前。「あー」

しかし三振でチェンジとして「んー。」

〈3回表：池田攻撃〉

応援席を映し出すとテレビの前へのりだす。

女性リーダー

「女やな。」ここでボリュームを上げる。

ノーアウト1塁からライトフライ「あー、残念。」

1アウト1塁でヒット「あー」

2アウト2、3塁で応援席を写す。

「池田はほうほうから来るでね。人気があるで。池田だけやったら知れとるけどな。林さんちの子も応援団入っとるってなけどな。」と地元のおじさん。

3アウト。「あーあ。」

〈3回ウラ〉



浜松商応援席。「いっぱいじゃな。」「(バス)90台!!」

アナ「打倒池田で増えたのでしょうか。」

に笑い。「打倒池田! 打倒巨人か!」

エラーが出て

「またエラーじゃ。何が守備じゃ。」笑い、

外をみて、お手伝いのおばちゃんが

「誰も歩きよらんわ。」

2アウト2塁カウント 1-1 からストレートはずれて 1-2 .

「ほしい!」

フェアボール

「あー、ほしいなー。」

「にいちゃんいのかー。」

顔見知りのおじさんが入ってきて、おばちゃんがきく、

「優勝戦になったらな。」とおじさん。

「池田の人、みんな行くでそりゃ。」とおばちゃん。

甲子園との心理的な距離が、何回も行っていることもあってすごく近い。

「池田勝つとええな。にーさんとこの家にいるしな。(選手が)」

桜間(池田のピッチャー)のアップ。

「この子投げるとき帽子が横へいくな。桑田に似とるしな。PLのとき  
の。」

3アウト、蔦監督のアップ

〈4回表：池田攻撃〉

「蔦さんや。」「おもしろいな。」「打て打ていっとる。」

「あれがうけるんですよ。」

「もの言うとき歯入れとるかな。」

「歯ぐらい入れたらええ。」

「酒飲むと嫁さんがつきまとっとるな。」

「家やってあそこにマンションできて。」

「マンションだろ。」

2アウト1塁からレフトへ飛球

「あー、とっとるでやー。」笑い。

「落としとったらなー。」

(スローモーション)「ほしかった。」

〈4回ウラ〉

おばちゃんはカレーを食べ食べまたコーヒの豆をけずりながらそして  
お客さんに「いらっしゃい！」といいながらテレビに注目。

ノーアウトでレフトフライ。

「こりゃ入った！」しかしアウト。

「桜間いうたらどこの子？」

「どこの子やら知らん。」

〈5回表：池田攻撃〉

「高知のピッチャーは欲しかったな。」(前日高知商業が敗退している。)

「あっち、こっちから誘いがかかるのにちょっと値打ちが落ちたな。」

ここで一回喫茶店を出て町へ。阿波踊りのハッピを着た子供たちが自  
転車に乗って走っていく。ジャスコの1階。テレビ中継の前にいすが4  
列。おばさん、おじさんが並んでみている。その数15名。新聞社のカメ  
ラマンがふたり来ている。

〈5回ウラ〉

ノーアウト1塁。キャッチャーから牽制球、間一髪セーフ。

「あー！」笑い。座布団持ちのおばさんや、コーラを飲みながらのおば



さんなどかなり腰をすえてじっくり見ている様子。入口にあるため必ずみんな立ちどまって見ていく。

1アウト2塁でショートゴロ三塁アウト拍手。それほど表情を変えずにじっとみている。

2ベースヒットが出て、2対1と池高リード。

「あーっ」下をむく人もある。

2アウト2塁、1塁線惜しいところファウル  
食い入るようにみつめ、肩に力が入る。

レフト前ヒット

「はよー、はよー」ホームイン。 〈2対2〉

くやしがる「同点じゃ、」

「だめじゃな。負けおるで。」

「負けたらどないしょ。」

ライト線ファウル

「またじゃ。」

盗塁を刺そうとキャッチャーが投げるもセンターへ。

「あーあー!」「キャー!」という若い人の声も。ショートゴロ、

「また!」アウトで、肩の力がぬける。

5回ウラが終わって、商店街へ。各店には人もいない。

6回ウラ終了時土佐寿司へ入る。店員の夫婦と顔なじみのお客さん3人でテレビを見ている。

〈7回表：池田攻撃〉

ノーアウトでセンター前ヒット。

「よっしゃー」アナ「2本目のヒットです。」

「2本目。」

「これが（この打者が）2本目や。」

まるでアナウンサーと会話をしているようだ。

バントで2塁フォースアウト、

「あっ、あー」次の瞬間はさまれる。

「暴走しとる。大暴走じゃ。」

リプレイをみて、

「いいプレーや。」

「なにをしよるんや、ほんまに池高は。」

「応援せんぞ、ほんまに。」かなり強い口調。

〈7回ウラ〉

NHKから朝日放送にチャンネルを変える。

「NHKはやっぱだめや。」

「球がそろいよるわ。」

1アウトからレフト前ヒット

「高めや」「全部球そろいよる。」

リプレイをみて

「高いな。」

2アウト3番西尾で

「これにさっきやられたんや。」

池高チアガールアップ

「池高のチアガールはブスばかりやな。」

サードゴロで

「あー！サードはレギュラーやけどへたやな。」

「まともにほうれよ。」



〈8回表：池田攻撃〉

NHKに変える。

「もっと楽勝に見えるかと思ったら見れんな。腹立つなほんまに。」

また朝日放送にかえて、一番杉本からの好打順

「いけー。打って打って打ちまくれ。」

「ほー、初球からいきよるな。」

ショートゴロ、エラーする。

「あー、やった。やってくれてたわ。めったに出えへんからな。」

伝令が出て

「池田は絶対（バントを）やらんがな。打つときはワイワイやるが。」

バント

「送った！やったやった。」

ノーアウト2塁。カウント2-2で3番千石ファウル

「あああああー、全然あたったらんわ。」

三振

「あー。」思わず頭を下に向ける。

「低めのー……。」

2アウト2塁。伝令が出る。

2アウト1、2塁になって、

「長打力があるのは、あるんじゃけん。1発ガチンといけばな。」

牽制球

「なかなか、このピッチャーうまいことタイミングはずしたりするな。」

セカンドフライ

「あーだめや。うまいことタイミングはずされとるは。」

「だめだめ。」

CM時にNHKに。

〈8回ウラ〉

「NHKみたら打たれるん。尾籾さんやないといかんわ。」

（朝日放送の解説者は、箕島高監督の尾籾氏）

センター前にポテンヒット

「あらあら、エラーや。」「あほ一か。」

1アウト1塁

2アウト2塁

「あーよかった。」

ショートゴロ、深いところから

「エラーしおったら野球やらんぞ。」

〈9回表：池田攻撃〉

「せりあいに弱いけんな。」

「あ、振っとる。」三振でアウト。

2アウトでアナ「攻めて攻めて攻めまくる池田野球……。」

「攻めとらせんて。」

桜間から振り。

「あらっ」

「一服できるからええわ、民放は。」

〈9回ウラ〉

「12点くらいとっとたらええのにな。」

「コマーシャルせなんだからな。」

「もう、そっぽむいてしまうわ。」貧乏ゆすりの主人。

「カーブ」三振1アウト「よし。」

「あのタマだけ。」



ボールが浮いて 1-3 「あー」下を向く。

センターフライ。「助かった。」

「左バッターは全部カーブでいいんちゃう。」

ショート横へのゴロ、

「おい」「おいおいおいおい、もー。」

リプレイをみて

「とれん。」

「覆いけ、覆い！」

「いかん、コントロールない。逆やったらいいけど。」

「カーブはいいが直球は高め浮いとる。」

ライト線ぎりぎりのファウル

「これで3本目か、ライトぎりぎりは。」

「カーブ行けよ。カーブ、カーブ。カーブぞ。」

9回ウラ終了「真鍋（池田町長）に言うてこないかん。甲子園行って  
代えろって。（ピッチャーを）」

池高チアガールが映る

「下から2人なんてドブスばっかしや。」

センターフライを打ち上げる。

「あああー、クソボールじゃないか。あんなん。」

1アウト。

「きのうの練習はバタバタやったんらしいで。甲子園の室内練習場で。」

「よー待ちきらんと開いてしもうて打ちよるで。」

三振。

「あーやられた。まるっきりヤマはずれとるわ。」

サードゴロ、3アウト

「あらとらないかん。」無言で下を向く。

〈10回ウラ〉

「カーブ打たれ出したら、ほおるタマないわ。」

「ピッチャー榎への代え時もむずかしい。」

「まだ、マウンドへ1回もいかんという。」

「ピッチャーよう代えん監督なのに代えるかい。」

キャッチャーのアップをみて、

「県大会ではえらいよかったのに。甲子園いったらダメやな。」

「三遊間抜けたらおわりじゃな。」

「ウェスト1個もせんな。」

カウント 2-2 からカーブで三振

「あー、よかった。」(上を見上げて)

「2-2 からきめ球はあのボールって向こうもわかっとな。」

「ワシが甲子園いかなんだら池高すんなり勝てんのかな。」

甲子園への心理的な距離はまことに近い。

〈11回表：池田攻撃〉

ファーストファウルフライ

「またダメや」「なんであんな打ち上げるんだろな。」

「打てよ一発。ボーンと。」

「打てるんはこれ(4番鳥谷)か6番の和田じゃな。」

「打てそーで、みょうに打てんピッチャーやな。」

2アウトファーストファウルフライ

「あかん。」「インコースはくるわ。カーブはくるわ。」

〈11回ウラ〉

デッドボール



「あ、デッドボール」

「ピッチャーか。」

「握力がないなってきとるんやな。覆出したれやもー。」

酒屋のおじさんが入ってきて

「負けよるがいな。」

「せこい試合しよるな。」

「またバントじゃゆうて。」

バント

「カバー、カバー。」

「内野安打！」「胃が痛いな。」

「もう1塁ランナー関係ないやけんな。」

ワイルドピッチ。ノーアウト2, 3塁。

思わずテレビの方に体が向かう。

選手がマウンドに行く。

「はじめてじゃけんな。マウンドよったの。」

カウント 0-2 から 0-3。

「バテてもうとるわ。」

フォアボールで満塁。

「満塁や。」

「左やろ。」「ホームゲッターが最高やけどな。」

「あらら、握力が劣えとんじゃ。」

「桜間じゃのうて畠山が出とるんちゃうか。」笑い

センターフライ、センターがスライディングキャッチ、

「タッチアップしとらん！もうけたー。」大騒ぎ。

「ゲッター。」

「これでなんでタッチアップせんねん。」

「ランナー出るわ」

2アウトからサードゴロ。

「しっかりやれ。」アウトで、「おーおーおー」大騒ぎ

「高松まで戻って来ておった。瀬戸大橋渡ったわ。首の皮一枚や。」

〈12回表：池田攻撃〉

「こんどはこっちがええわ。」

センター前へ

「ぬけたー。」手をたたく。

「たたきつけて、こう。」

「送ったらいかん。打て。」「正攻法で攻めないかん。いつものパターンで、こうなったら……。」

「ゲッターとられたって。」

「葛さんが打て打てほらいけ、ほらいけいうて。」

「誰にかえた11番。西尾？大村？」

「好きなよーにやらせもー。」

「うなぎみたいなやつやな。静岡も。」

「つかんでもつかんでもヌルヌルヌルヌルしとるわ。」

セカンドフライでダブルプレイ

「あーあ。」「血圧あがるわいやもー。」

「心臓が止まらんなんだらええやない。」

「もう代えてやってもええんじゃないか。もう次は。」

バッター桜間、フォアボール。

「よーし。」

「さっきセンター誰やった。」



「ここで打ったら役者やけんどなー。」

「MVPよ。」

レフト前ヒット

「よっしゃ、よしやー。」

2アウト1. 2塁バッター杉本。大振り、

「ウワーッ！」

「一発ゴボーン！と打て！」

センターフライ

「いけいけいけ！いけ！」

「あー。」

奥さんは、「せこいで。」

「こんな見よっただけで仕事にならんで。」

〈12回ウラ〉

アナ「試合開始12時42分ですからもう3時間です。」

「もう3時間じゃ。」

アナ「15個目の三振！」

「記録ってなんぼ？」

なじみの客が外をみている。

「車、走っとるん？」と、主人

「まだ、走っとるのおるな。」と客。

サードゴロ

「ああいうゴロやて、ミスしおったらいかんで。」

「永井はどヘタやった。」(OBの選手)

〈13回表：池田攻撃〉

「2番からやろ」「はよ、やれやー。」

センター前ヒット

「もう姑息な考えしたらいかん。4番打たせ。」

センターフライ

「あー。」2アウト

ランナーディレイドスチール

「いけいけいけー」2アウト3塁

「ここで1本がないじゃけん、こまるな。エラーからんだら1点じゃけん。」

「キャッチャーがとるのやめた言うたら、バสบールでいいんじゃきんに。」

「カーブ、ほーっておるんか。」

「まっすぐばかりやったけんど。カーブ、カーブじゃ。」

「あー」

三振。思わず後ろにひっくり返りそうになる主人。

〈13回ウラ〉

レフト前ヒット、ノーアウト1塁、

「こればかりじゃ。さっきからヒヤヒヤにしどうし。血圧だってあがっとるぞ、かなり。」

初球ファウル

「はじめは、あんなボールちゃうわ。」

「そうや、カーブや。」

三振でチェンジ、

「あれでは、榎使えんわな。榎やったら押し出しもあるしな。」

〈14回表：池田攻撃〉



「これ（甲子園に）行かんでよかったな、大将。」

「行とったらきのう 5時半まで飲んで大変や。

これで終わって帰ってこないかんし。」

「よっしゃ。あーちょっと足らん足らん。」

2アウト、ランナー桜間のアップ、

「もう肩で息しとるきに。」

2アウト1塁、ライト線ファウル

「あそこばっかしや。4本も5本も。」

ランナー桜間のアップ、

「ひいひい言うとるで。」

「恐怖の9番バッターみたいに山口よんできたろうか。」（過去に活躍した選手の名まえ）

「いカーん」

チェンジ。

〈14回ウラ〉

明日の仕事について話す主人と客。

センター前

「あーあ。」「またや、もうあかん。」

バント

「もうバントでもなんでもゴロが転がったらヒヤヒヤするわ。」

「また、これに回ってきたん。」バッター加藤。

「イライライライラ、ほんまに頭にくるやっちゃ。」

「踊りが手につかんのやろ。」

踊っていた子どもをつれて、その父も入ってくる。

1アウト1、2塁、蔦監督のアップ、

「葛さんも妙に精彩がないんじゃ。」

バント、ピッチャーとれず。

「つかめない。」

「握力がないんやな。」

「もうあかんわ。」

2アウト満塁、

スクイズ、ファウル。

「あー助かった。」顔をみあわす主人と客。

「三振しかない。」カウント 2-0。

「よしよしよしよし。」「勝負じゃ。」アナ「200 球目」という。

「200 球やて。」

ファーストゴロ、3-2-4 のダブルプレー。

「よしや、よーし。」

2アウト2・3塁。

「気抜くなよ。」「この1球勝負じゃ。」

「あれ、ボールいわれるのと、ストライクとえらい違うよ。」

「また、高めや。」

「もう出してもいいんじゃない（フォアボールを）。」

フォアボール、

「もー高いんじゃ。」

2アウト満塁、左中間へのヒット。

「やられたー。」

「1回戦でございますか。」と行って出ていく客。

2対3で浜松商業にやぶれる。

校歌終了、スタンドへ挨拶後、ベンチで帰り支度のナインを映す。



じっとみている。

「まいったねー。」

「もう踊りだけや。」

池田高校は、浜松商業に延長14回、2対3で敗退。

池田町の人々は、「せこいわ、もー」とか、「わやじゃ。」とか、「ごじゃごじゃ。」といういい方で負けたことを言い表す。「せこい」は、みみっちいというより、弱いとか、だめなこと。「わや」は、期待はずれ。「ごじゃ」は、無茶苦茶のことである。

## 第5章 引用文献

- 1) B. K. Malinowski; 寺田和夫, 益田義郎訳; 大西洋の遠洋航海者,  
中央公論社, 1967, p. 340.
- 2) C. Geerts; 吉田禎吾ら訳; 文化の解釈学 [ I ], 岩波書店, 1987,  
p. p. 6-11.
- 3) 同上書, p. 24.
- 4) 同上書, p. 40.
- 5) 同上書, p. 14. および p. 26.
- 6) 同上書, p. 32.
- 7) J. L. Peacock, 今福龍太訳; 人類学と人類学者, 岩波書店, 1988,  
p. 218.
- 8) 同上書, p. 218.
- 9) 同上書, p. 149.
- 10) 同上書, p. 153.
- 11) 同上書, p. 156.
- 12) 同上書, p. 157.
- 13) 同上書, p. 157.
- 14) 同上書, p. 11.
- 15) 同上書, p. 10.
- 16) 同上書, p. 247.
- 17) 前掲書 2), p. 28.
- 18) 前掲書 1), p. 82.
- 19) 大黒明; さびしい過疎の村 行政関係者はどう見ているのか,  
徳島新聞社; 徳島新聞, 昭和45年 2月22日, 1970.
- 20) 徳島県立池田高等学校; 創立50周年, 1972, p. p. 63-65.



- 21) 同上書, p. p. 63-64.
- 22) 同上書, p. 64.
- 23) 同上書, p. p. 64-65.
- 24) 葛文也, 山際淳司; 強うなるんじゃ! 集英社, 1983, P. 14
- 25) 栗原彬; 歴史とアイデンティティ 近代日本の心理=歴史研究,  
新曜社, 1982, p. 12.
- 26) 同上書, p. 12.
- 27) 同上書, p. 13.
- 28) 同上書, p. 13.
- 29) G. W. Allport, 詫摩武俊他訳; パーソナリティー心理学的解釈一,  
新曜社, 1982.
- 30) 前掲書25), p. 39.
- 31) 前掲書25), p. 40.
- 32) 前掲書25), p. p40-41.

## 第6章 結章

本論文は、甲子園野球が文化的パフォーマンスとして、「<sup>イメージ</sup>像やストーリーの束から構成された、我々の意識の表層を決定するための思考の枠組み—モデルであって、ひとつの共同体においてその集団意識の中で、「固定化」したコノテーションとして共通の解釈を呼び起こす作用をもつもの」である神話をどのように伝達し解釈されているのかを明らかにすることが目的である。そしてこのために、歴史、現代におけるメディアの作用、さらに実際のコンテクストの場で神話の生成、伝達及び解釈について考察した。（図参照）

甲子園野球は、日本武士道の精神を背景にした、元気の精神たる校風の発揚の場としての試合—必勝主義と精神修養を基本にした猛練習、さらにこれを全校挙げて応援するといった「一高精神」とそれに続く、早慶時代の安部磯雄の考え方（国際平和主義を基盤とし、「必ずしも勝負にあらず」と考え、運動家の品性や人間性、フェアプレイを重視する（彼はこれを武士道の精神とアナロジーで捉えた））をその理念の端緒とする。そして、地方ごとの中等学校野球大会が、いくつも行われていた状況下、朝日新聞社が、全国中等学校（高等学校）野球連盟と共に、全国大会を開催する中で、「純真で」「男らしく」「すべてに正しく、模範的な」「青少年」が「スポーツマンシップ」と「フェアプレイ」の「精神」で「地方の代表」として「洩刺たる妙技」をみせるという甲子園野球の神話を、それに対抗する事実を処分しながら歴史的に醸成してきたのである。

このように歴史的に醸成されてきた神話は、現代においてテレビにより伝達されていることがわかる。テレビ放送の量的、質的分析により、



「すがすがしさ」「一所懸命さ」「友情」「一体感」「努力」「礼儀正しさ」「郷土意識」といった神話的メッセージが、テレビを通じて伝達されまた解釈されているのである。

それでは、共同体の中で甲子園神話が、どう解釈され、それをどう生きているのか。これを考察したのが、池田町におけるフィールドワークである。そこでは「さわやかで、のびのびした、高校生らしい池高」という神話が、自然環境と町民のコスモロジー、池田高校気質を基盤として、高監督を中核に、メディア（テレビ局）の影響もあって生成されてきたことがわかった。そして、その神話を、甲子園出場のたびごとに、自分のアイデンティティ確認の意味も含めて、池田町民の意識の中に再生産され、解釈されるのである。しかしながら、現実において、日本の野球のヒエラルキー構造を基盤とする選手達によって神話に対抗する事実（野球のみを生活と考えること、非行、処分、過保護）が生じている。池田町において「さわやかで、のびのびした、高校生らしい池高」という神話は、これに対抗する事実とのせめぎ合いの中にあり、神話を生きたいとする意識と現実との確執が起こっているのである。

この池田町でのフィールドワークの結果は、池田というコンテクストの中から示されたものだが、現代社会において甲子園野球の神話が人々の中に生きていることそして、それに対抗する事実とのせめぎ合いの中で、神話を再生産し、解釈しようとする人間の意識を写し出す。反神話的事実を認識しながらも、甲子園野球の「高校生らしさ」や「青春」「青年」像を惹起する神話を肯定し、期待し、それに感動する人間が見えるのである。

これまで、体育学にあって、甲子園大会が教育として、学校のクラブ

活動においてやり過ぎ、行きすぎを警告してきた。しかしながら、その歴史、メディアの作用さらにコンテクストにスポットをあてて、人間と甲子園野球とのかかわりを広い視野をもち、その中で、具体的に考えることはなされなかった。

現在高校野球が教育上問題であるのは、まさしく本論文で言うところの神話とそれに対抗する事実の露呈という関係が、複雑にからみ合って我々の目前にあるということだ。野球のみを生活の中で考え、リトル・リーグ、ボーイズリーグ→シニア・リーグ→高校野球→(大学野球→社会人野球)→プロ野球という日本野球界のシステムに生きる選手を、チャンピオン・スポーツへの道として明確に位置づけ、そこで養成される選手や監督・コーチと、甲子園神話を純粋に教育の場で生きようとする者とをはっきり区別しなければならないのである。本研究から、朝日新聞社、高野連さらにメディアが、今後甲子園野球の神話をどう伝達していくのかがその問題を解くカギとなることがわかる。本研究は、教育の現場にあって神話を純粋に生きるか、それに対抗する事実を生じるチャンピオン・スポーツへの道を明確に作っていくか、それを考える現実の具体的な思考を提示することに寄与する。



# 『甲子園野球の神話作用』

## I. 甲子園野球の歴史的神話性

### <歴史>

—高精神—

「心を正しく身を修むる」ための籠城主義  
精神修養の場としての寄宿舍

↓  
「校友会」

元気の精神たる校風の発揚の場としての試合—必勝主義  
精神修養、猛練習—鍛錬主義

↑  
日本武士道精神

→「彌次隊」→全校応援  
壮行会

- ①「一高式練習」
- ②勝利至上主義
- ③全校挙げての応援

—早慶時代—

早稲田、慶応大学への伝播

大学選手の中高等学校へのコーチ派遣

旧制高等学校主催の中高等学校野球大会の開催（各地方で）

安部磯雄（国際平和主義、「必ずしも勝敗にあらず」、  
フェアプレイ、運動家としての品性や  
人間性の重視＝武士道）

スポーツジャーナリスト  
としての元選手

朝日新聞社

橋戸頑鉄  
押川春浪  
飛田穂洲

全国中高等学校優勝野球大会

↓  
全国高等学校野球選手権大会

- ・舞台、儀式、「野球大会の歌」
- ・組織の単独性
- ・神話生成の仕掛けとしての処分

「純真で」「男らしく」「すべてに正しく、模範的な」  
「青少年」が「スポーツマンシップ」と「フェアプレイ」  
の「精神」で「地方の代表」として、「洗練たる妙技」  
をみせる甲子園野球

← 阪急電鉄

← 阪神電鉄

## II. 現代の甲子園野球神話

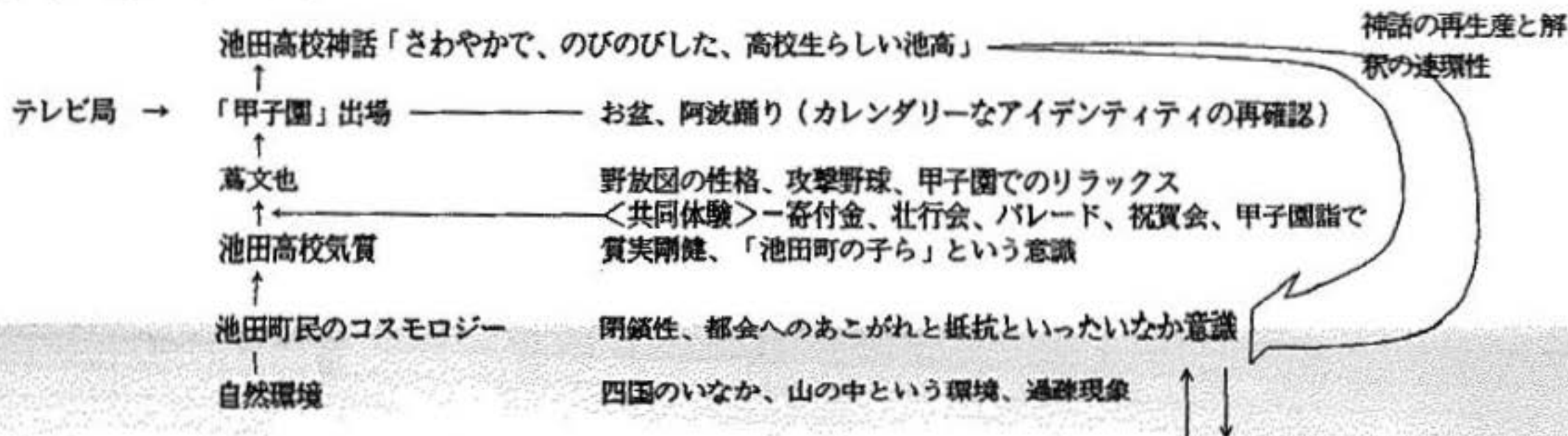
### <記号学>

テレビメディアによる神話生成(質的、量的なメッセージ)

「すがすがしさ」「一所懸命さ」「友情」「一体感」「努力」「礼儀正しさ」「郷土意識」

## III. コンテクストの地平における甲子園野球神話

### <フィールドワーク>

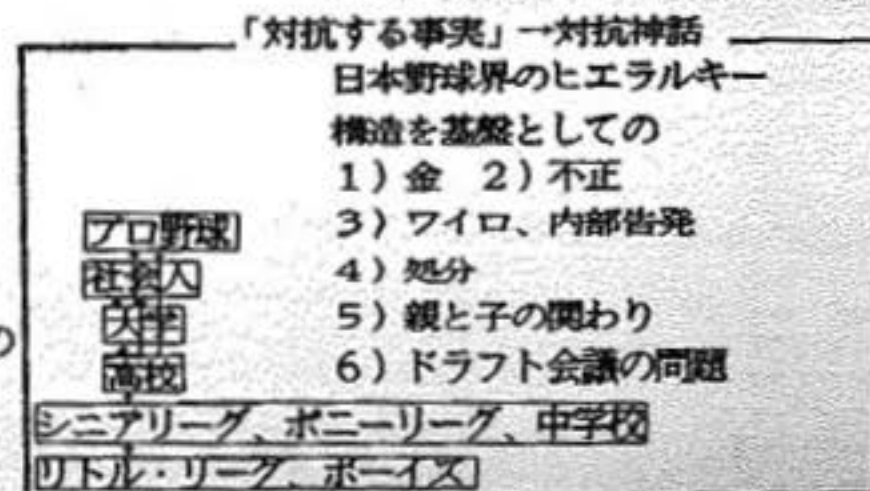


## IV. 甲子園野球の神話的意味

甲子園野球神話に魅せられる我々

○カレンダーなアイデンティティ確認の儀式としての甲子園  
(集合的無意識と「個」における記憶のよび戻し)

○甲子園神話の強調による「青年」像、「青春」像、「こども」のイメージの  
肯定ならびに、自己基盤の確定化 → それを活性化する対抗神話





## 引用・参考文献一覧

この引用・参考文献一覧は、各章ごとに引用文献と参考文献を区別し、参考文献については、アルファベット順に列記している。

### 序 章 引用文献

- 1) J. J. MacAloon, 光延明洋訳 ; 文化的パフォーマンス, 文化理論, J. J. MacAloon編 ; 世界を映す鏡, 平凡社, 1988, p.p. 11-12.
- 2) V. Turner, 今福龍太訳 ; リミナリティとパフォーマンスのジャンル, J. MacAloon編 ; 世界を映す鏡, 平凡社, 1988, p.p. 38-39.

### 参考文献

- 1) 朝日新聞社 ; 朝日新聞, 1986.11.19.
- 2) K. Blanchard, A. T. Cheska ; The Anthropology of Sport An Introduction, Bergin & Garvey, 1985.
- 3) J. G. Cawelti ; Myth, Symbol, And Formula, Journal of Popular Culture, Vol. 8-1, 1974, p. p. 1-9.
- 4) 栗原彬, 今防人, 杉山光信, 山本哲士編 ; 身体 of 政治技術, 新評論, 1986.
- 5) R. Lipsky ; Toward a Political Theory of American Sports Symbolism, J. C. Harris, R. J. Park ; Play, Games & Sports in cultural contexts, Human Kinetics, 1983, p.p. 79-92.
- 6) 日本体育協会 ; 国立競技場霞ヶ丘競技場歴代有料入場券発売ベスト 10, 月刊国立競技場, 1984年5月号, 日本体育協会, p. p. 6-9, 1984.
- 7) 総合ジャーナリズム研究所 ; スポーツ番組の変遷, 総合ジャーナリ

## 第1章 引用文献

- 1) 梶原景昭; 象徴論, 綾部恒男編; 文化人類学15の理論, 中央公論社, 1984, p. p. 205-207.
- 2) James G. Frazer; The Golden Bough, A Study in Magic and Religion, Abridged Edition, Macmillan, 1925.
- 3) Emile Durkheim; 古野清人訳; 宗教生活の原初形態(上)(下), 岩波書店, 1975.
- 4) Sigmund Freud; 高橋義孝, 下坂幸三訳; 精神分析入門(上)(下), 新潮社, 1977.
- 5) B. K. Malinowski, 寺田和夫, 増田義郎訳; 西太平洋の遠洋航海者, 中央公論社, 1967, p. p. 338-339.
- 6) 同上書, p. 340.
- 7) 同上書, p. p. 339-340.
- 8) M. Mauss, 有地亨ら訳; 社会学と人類学 I, II, 弘文堂, 1976.
- 9) C. Geertz, 吉田禎吾ら訳; 文化の解釈学 I, 岩波書店, 1987, p. 24.
- 10) E. Leach, 青木保, 宮坂敬造訳; 文化とコミュニケーション, 紀國屋書店, 1981, p. 9.
- 11) V. Turner, 今福龍太訳; リミナリティとパフォーマンスのジャンル, J. J. MacAloon編; 世界を映す鏡, 平凡社, 1988, p. p. 38-39.
- 12) J. J. MacAloon, 光延明洋訳; 文化的パフォーマンス, 文化理論, J. J. MacAloon編; 世界を映す鏡, 平凡社, 1988, p. p. 11-12.
- 13) 同上書, p. p. 28-29.
- 14) V. Turner, 大橋洋一訳; パフォーマンスとしての人類学, 現代思想,



- Vol. 9-12, p. p. 79-80, 1981.
- 15) 山口昌男；見世物の人類学へ，見世物の人類学，三省堂，1983，  
p. 145.
- 16) Roger Caillois, 久米博訳；神話と人間，せりか書房，1983, p. p.  
9-36.
- 17) Erich Fromm, 外村大作訳；夢の精神分析 — 忘れられた言語 — ，  
東京創元社，1971, p. p. 9-29, p. 203.
- 18) Victor Turner; Myth and Symbol, International Encyclopedia  
of the Social Sciences 10, Crowell Collier and Macmillan,  
1968, p. 578.
- 19) 同上書，p. 578.
- 20) 同上書，p. 579.
- 21) 同上書，p. 579.
- 22) 同上書，p. 579.
- 23) 同上書，p. 578.
- 24) 同上書，p. 578.
- 25) B. K. Malinowski, 国分敬治訳；神話と社会，創元社，1941, p. p. 26-  
44.
- 26) 同上書，p. p. 154-155.
- 27) 同上書，p. p. 154-155.
- 28) V. Turner; Myth and Symbol, International Encyclopedia of the  
Social Sciences 10, Crowell Collier and Macmillan, 1968, p. 578.
- 29) 松村武雄；神話学言論 上巻，培風館，1940, p. p. 1-28.
- 30) C. Lévi-Strauss, 仲沢紀雄訳；今日のトーテミズム，みすず書房，  
1970, p. 166.

- 31) 同上書, p. 167.
- 32) V. Turner: Myth and Symbol, International Encyclopedia of the Social Sciences 10, Crowell Collier and Macmillan, 1968, p. 579.
- 33) C. Lévi-Strauss, 大橋保夫訳; 野生の思考, みすず書房, 1976, p. p. 21-27.
- 34) 同上書, p. 22.
- 35) 山口昌男; 神話の語るもの, 文化人類学の視角, 岩波書店, 1986, p. p. 134-157.
- 36) 山口昌男; 神話的始原児トロッキー, 歴史・祝祭・神話, 中公文庫, 1978, p. p. 174-176.
- 37) 吉田敦彦+山崎賞選考委員会; 神話学の知と現代, 河出書房新社, 1984, p. p. 30-40.
- 38) V. Turner, 今福龍太訳; リミナリティとパフォーマンスのジャンル, J. J. MacAloon編; 世界を写す鏡, 平凡社, 1988, p. p. 38-39.
- 39) J. J. MacAloon, 光延明洋訳; 文化的パフォーマンス, 文化理論, J. J. MacAloon編; 世界を写す鏡, 平凡社, 1988, p. p. 11-12.
- 40) 山口昌男; 見世物の人類学へ, ヴィクター・ターナー, 山口昌男編, 見世物の人類学, 三省堂, 1983, p. 145.
- 41) 中沢新一; 街路の詩学, 思想, 1977年10月号, No. 640, 岩波書房, p. 127, 1977.
- 42) 同上書, p. 125.
- 43) 同上書, p. 128.
- 44) P. Bouissac, 中沢新一訳; サーカス — アクロバットと動物芸の記号論, せりか書房, 1984, p. p. 19-20.
- 45) 前掲書41), p. p. 136-137.



- 46) V. Turner, 大橋洋一訳 ; パフォーマンスとしての人類学, 現代思想,  
Vol. 9-12, p. p. 79-80, 1981.
- 47) 山口昌男 ; 神話と想像力, 知の祝祭, 青土社, 1977, p. 234.
- 48) 同上書, p. 234.
- 49) 同上書, p. 239.
- 50) 同上書, p. 240.
- 51) 同上書, p. 240.
- 52) 同上書, p. 241.
- 53) 花輪光 ; ロラン・バルト, みすず書房, 1985, p. p. 122-123.
- 54) V. Turner, 梶原景昭訳 ; 象徴と社会, 紀伊國屋書店, 1981, p. p. 15-  
207.
- 55) J. J. MacAloon, 光延明洋訳 ; 文化的パフォーマンス, 文化理論,  
J. J. MacAloon編 ; 世界を写す鏡, 平凡社, 1988, p. p. 11-12.
- 56) V. Turner, 今福龍太訳 ; リミナリティとパフォーマンスのジャンル,  
J. J. MacAloon編 ; 世界を写す鏡, 平凡社, 1988, p. p. 38-39.
- 57) V. Turner, 大橋洋一訳 ; パフォーマンスとしての人類学, 現代思想,  
Vol. 9-12, p. p. 79-81, 1981.
- 58) 山口昌男 ; 見世物の人類学へ, V. Turner, 山口昌男編 ; 見世物の人  
類学, 三省堂, 1983, p. 145.
- 59) Clifford Geertz ; Deep Play : Notes on the Balinese Cockfight,  
edit. by J. Harris and R. J. Park ; Play, Games & Sports in  
Cultural contexts, Human Kinetics, 1983, p. p. 39-77.
- 60) Robertto Da Matta ; 社会の<内なる>スポーツ | 国民劇・国民  
祭としてのフットボール, Victor Turner, 山口昌男編, 見世物の  
人類学, 三省堂, 1983, p. p. 246-287.

- 61) 山口昌男；相撲の宇宙論，Victor Turner，山口昌男編，見世物の人類学，三省堂，1983，p.p. 317-326.
- 62) Victor Turner；Liminal to Liminoid, in play, Flow and Ritual: An Essay in Comparative Symbolology, in Play, Games & Sports, Human Kinetics, 1983, p.p. 123-164.
- 63) Susan Birrell, Sport as Ritual; Interpretations from Durkheim to Goffman, in Social Forces, Vol 60-2, 1981, p.p. 354-376.
- 64) Alyce Taylor Cheska; Sports Spectacular: The Social Ritual of Power, Marie Hart and Susan Birrell; Sport in the Socio-Cultural Process 3rd. Edition, Wm. C. Brown Company Pub., 1981, p. p. 368-383.
- 65) Mary Jo Deegan, Michael Stein; American Drama and Ritual: Nebraska Football, International Review of Sport Sociology, Vol. 13-3, 1978, p. p. 31-44.
- 66) Margaret Carlisle Duncan; The Symbolic Dimensions of Spectator Sport, Quest Vol. 35, 1983, p. p. 29-36.
- 67) Richard Lipsky; Toward a Political Theory of American Sports Symbolism, Edit. by J. C. Harris and R. J. Park; Play, Games & Sports, in cultural contexts, Human Kinetics, 1983, p. p. 79-92.
- 68) Scotto Kilmer; Sport As Ritual: A Theoretical Approach, Association for the Anthropological Study of Play, The Study of Play: Problems and Prospects, Leisure Press, 1977, p. p. 44-49.
- 69) 橋本純一；メディア・スポーツに関する研究Ⅱ，筑波大学体育科学系紀要 Vol 9, 1986, p. p. 43-52.



- 70) R.H.Prisuta; Televised Sport and Political Values, Journal of Communication Vol29-1, 1979, p.p.94-102.
- 71) A. Clarke, J. Clarke; Highlights and action replays-Ideology, sports and the media, Edit. by J.Hargreaves; Sport, Culture and Ideology, 1982, p.p.62-87.
- 72) Michael R. Real; The Super Bowl: Mythic Spectacle, in Mass-Mediated Culture, Prentice-Hall, Inc., 1977, p.p.90-117.
- 73) Hal Himmelstein; Television Myth and The American Mind, Live TV Sports and the TV Event, in Television Myth and the American Mind, Praeger, 1984, p.p.1-8, p.p.233-252.
- 74) 前掲書69) .
- 75) 前掲書72) , p.p.90-117.
- 76) 前掲書73) , p.p.233-252.

#### 参考文献

- 1) 青木保; 儀礼の象徴性, 岩波書店, 1984.
- 2) S. Birrell, J.W. Loy.JR. ; media sport: hot and cool, Sport, culture and society a reader on the sociology of sport, 2nd edit., Lea & Febiger, 1981, p.p.296-307.
- 3) P. Cressant, 加藤茂, 稲沢由美子, 矢島忠夫訳; レヴィ=ストロースの世界, 現代思想, Vol.1-5, p.p.82-110, 1973.
- 4) R. Cummings; Double Play And Replay: Living out There In Television Land, Journal of Popular Culture Vol.8-2, 1974, p.p.73-82.
- 5) E. Durkheim, 宮島喬訳; 社会学的方法の規準, 岩波書店, 1978.
- 6) E. Durkheim, 宮島喬, 川喜多喬訳; 社会学講義, みすず書房, 1974.

- 7) M. Eliade, 中村恭子訳 ; 神話と現実, セリカ書房, 1984.
- 8) R. Firth ; Symbols : Public and Private, London, 1973.
- 9) 蒲生正男, 山田隆治, 村武精一編 ; 文化人類学を学ぶ, 有斐閣,  
1979.
- 10) 橋本純一 ; メディア・スポーツに関する研究 (I) — メディア・  
スポーツ研究の経緯と可能性 —, 第12回東京体育学会資料, 1985.
- 11) 橋爪大三郎 ; はじめての構造主義, 講談社, 1988.
- 12) 飯坂良明 ; 現代社会をみる眼, 日本放送出版協会, 1973.
- 13) 石田英一郎 ; 文化人類学入門, 講談社, 1976.
- 14) V. Ivanov, V. Toporov, 北岡誠司編訳 ; 宇宙樹・神話・歴史記述  
— モスクワ・タルトゥ・グループ文化記号論集 —, 岩波書店,  
1983.
- 15) C. G. Jung, K. Kerény, 杉浦忠夫訳 ; 神話学入門, 昌文社, 1975.
- 16) J. Juszezak ; Les sources du symbolisme, Sedes, 1985.
- 17) 河合準雄 ; 昔話の深層, 福音館書店, 1977.
- 18) G. Kenyon, B. McPherson ; Becoming involved in physical activity  
and sport : a process of socialization, Physical Activity :  
Human Growth and Development, Academic Press, 1973.
- 19) K. Kerrane ; Reality 35, Illusion 3 : Notes on the Football  
Imagination in Contemporary Fiction, Journal of Popular  
Culture, Vol. 8-2, 1974, p.p. 83-98.
- 20) 近藤衛 ; 新聞・ラジオ・テレビの内容分析及び受け手の反応分析,  
九州大学体育学研究1-1, 1959, p.p. 1-2.
- 21) 近藤衛 ; スポーツ新聞及び週刊誌のスポーツ記事の内容分析と読書  
の反応分析, 福岡学芸大学紀要10, 1960, p.p. 129-139.



- 22) C. Lévi-Strauss; *L'anthropologie Face Aux Problemes Du Monde Moderne*, サイマル出版会, 1988.
- 23) C. Lévi-Strauss, 有地亨, 伊藤昌司, 山口俊夫訳; マルセル・モース論文集への序文, *社会学と人類学 I*, 弘文堂, 1973, p. p. 1-46.
- 24) C. Lévi-Strauss, 川田順造訳; *悲しき熱帯*, 中央公論社, 1967.
- 25) C. Lévi-Strauss, 仲沢紀雄訳; *今日のトーテミズム*, みすず書房, 1970.
- 26) J. W. Loy, B. D. McPherson, G. Kenyon; *Sport and Social Systems*, Addison-Wesley, 1979.
- 27) J. J. MacAloon; *An Observer's View of Sport Sociology; Sociology of Sport Journal*, Vol. 4-2, 1987. June, p. p. 103-115.
- 28) J. J. MacAloon; *Double Vision: Olympic Games and American Culture*, J. O. Segrave and D. Chu; *The Olympic Games in Transition*, Human Kinetics, 1988.
- 29) J. J. MacAloon; *Encountering Our Others: Social Science and Olympic Sport*, *The First International Conference on the Olympics and East/West and South/North Cultural Exchange in the World System*, 1987.
- 30) J. J. MacAloon; 祝祭の中の裸者 — 現代オリンピックにおける遊びとパフォーマンスの諸ジャンル, 山口昌男, V. Turner編; *見世物の人類学*, 三省堂, 1983.
- 31) J. J. MacAloon, 光延明洋訳; 近代社会におけるオリンピックとスペクタクル理論, J. J. MacAloon編, 光延明洋ら訳; *世界を映す鏡*, 平凡社, 1988, p. p. 389-442.
- 32) B. McPherson; *Socialization into the role of sport consumer* :

A theory and causal model, Univ. of Wisconsin, 1972.

- 33) 松本健一；「努力」型から「趣味」型へ スポーツの世相史，正論，  
135号，サンケイ出版，1984，p.p. 50-61.
- 34) D. Morris, 白井尚之訳；サッカー人間学，小学館，1983.
- 35) 中村雄二郎，山口昌男；人類学と哲学の間 — 文化人類学への期待  
と注文，理想No. 62，理想社，p. 167，1985.
- 36) 大西国男；父兄のマス・コミュニケーション接触とスポーツ関心  
について，茨城大学教育学部紀要17，1967，p. p. 209-227.
- 37) 大西国男；中学生のマス・コミュニケーション接触とスポーツ関心  
について，茨城大学教育学部紀要16，1966，p. p. 283-304.
- 38) B. G. Rader, 平井肇訳；スペクテイタースポーツ，大修館書店，  
1987.
- 39) 佐伯聰夫編；現代スポーツの社会学，不味堂，1984，p. p. 273-309.
- 40) 清水諭；開かれたスポーツ人類学の扉，体育科教育，Vol. 34-2，  
1986，p. p. 52-53.
- 41) E. Snyder, E. Spreitzer；Family influence and involvement in  
sport, Reseach Quartely 44 (Oct.), 1973.
- 42) 祖父江孝男；文化人類学のすすめ，講談社，1976.
- 43) P. M. Schuhl, F. L. Ulley, J. Seznec, F. Hard, M. Eliade, 野町啓，  
松村一男，高田勇，加藤光也，久米博訳；神話の系譜学，平凡社，  
1987.
- 44) D. Sperber, 菅野盾樹訳；人類学とは何か その知的枠組を問う，  
紀伊國屋書店，1984.
- 45) D. Sperber, 菅野盾樹訳；象徴表現とはなにか 一般象徴表現論の  
試み，紀伊國屋書店，1979.



- 46) A. Swingewood, 稲増龍夫訳; 大衆文化の神話, 東京創元社, 1985.
- 47) V. Turner; Dramas, Fields, and Metaphors Symbolic Action in Human Society, Cornell Univ. Press, 1974.
- 48) V. Turner; Myth and Symbol, International Encyclopedia of the Social Sciences 10, crowell collier and Macmillan, p.p. 576-582.
- 49) V. Turner, 富倉光雄訳; 儀礼の過程, 思索社, 1976.
- 50) 上野千鶴子; 構造主義の冒険, 勁草書房, 1985.
- 51) 梅棹忠夫編; 人類学のすすめ, 筑摩書房, 1974.
- 52) D. Q. Voigt; Myths After Baseball: Notes on Myth in Sports, J. C. Harris and R. J. Park, Play, Games & Sports in cultural contexts, Human Kinetics, 1983, p.p. 93-106.
- 53) 山口昌男; 文化人類学への招待, 岩波新書, 1982.
- 54) 山口昌男; 文化の詩学 I, II, 岩波書店, 1983.
- 55) 山口昌男; 文化と両義性, 岩波書店, 1975.
- 56) 山口昌男; 知の遠近法, 岩波書店, 1978.
- 57) 山口昌男; 知の祝祭, 青土社, 1977.
- 58) 山口昌男; 道化的世界, 筑摩書房, 1975.
- 59) 山口昌男; 演ずる観客 劇空間万華鏡, 白水社, 1984.
- 60) 山口昌男; 本の神話学, 中央公論社, 1977.
- 61) 山口昌男; 河童のコスモロジー 石田英一郎の思想と学問, 講談社, 1986.
- 62) 山口昌男; 構造とテクスト, 現代思想, Vol. 9-7, p.p. 64-76, 1981.
- 63) 山口昌男; 民俗芸能としての相撲 — パフォーマンスとコスモロジー —, 民俗芸能研究第5号, p.p. 1-13, 1987.

- 64) 山口昌男；仕掛けとしての文化，青土社，1980.
- 65) 山口昌男；新編人類学的思考，筑摩書房，1979.
- 66) 山口昌男，市川浩；身体論とパフォーマンス，学燈社，1985.
- 67) 山口昌男；相撲における儀礼と宇宙観，国立歴史民俗博物館研究報告第15集，p. p. 99-130，1987.
- 68) 吉田敦彦，松村一男；神話学とは何か，有斐閣，1987.
- 69) D. Zillman, J. Bryant, B. S. Sapolsky；The enjoyment of watching sport contests, Sports, games, and play Social and psychological viewpoints, Lawrence Erlbaum Associates, 1979.

## 第2章 引用文献

- 1) R. Barthes, 沢村昂一訳；記号学の原理，零度のエクリチュール，みすず書房，1971，p. p. 195-201.
- 2) 花輪光；ロラン・バルト，みすず書房，1985，p. p. 122-123.
- 3) 清水諭；スポーツの神話作用に関する研究 — 全国高校野球選手権大会テレビ中継におけるテレビの神話作用について —，体育・スポーツ社会学研究6，道和書院，p. p. 215-232，1987.
- 4) R. Barthes；Roland Barthes par roland barthes, Seuil, 1975, p. 170.
- 5) 同上書，p. 164.
- 6) R. Barthes, 沢崎浩平訳；テクストの快楽，みすず書房，1977，p. p. 86-87.
- 7) R. Barthes, 花輪光訳；文学の記号学，みすず書房，1981，p. 37.
- 8) 前掲書4)，p. 108.
- 9) 前掲書6)，p. 53.



- 10) 前掲書 2), p. p. 121-122.
- 11) 前掲書 2), p. p. 123.
- 12) 前掲書 2), p. p. 123.
- 13) R. Barthes, 沢村昂一訳 ; 記号学の原理, 零度のエクリチュール, みすず書房, 1971, p. p. 195-196.
- 14) 同上書, p. p. 196-197.
- 15) R. Barthes ; Mythologies, Editions du Seuil, 1957, p. p. 199-200.
- 16) 前掲書 2), p. 108.
- 17) 前掲書 7), p. 11.
- 18) R. Barthes, 沢崎浩平訳 ; S/Z, みすず書房, 1978, p. 10.
- 19) 前掲書 7), p. 11.
- 20) 前掲書 18), p. 141.
- 21) 前掲書 4), p. 161.
- 22) 前掲書 2), p. 117.
- 23) R. Barthes, 花輪光訳, テクストその理論, 現代思想 Vol. 9-7, 青土社, p. 77, 1981.
- 24) 同上書, p. 77.
- 25) 同上書, p. p. 80-85.
- 26) C. Lévi-Strauss, 大橋保夫訳 ; 野生の思考, みすず書房, 1976, p. 28.
- 27) 菊幸一 ; 近代日本におけるプロフェッショナル・スポーツの成立形態とその社会的条件に関する研究 — プロ野球の成立を中心にして —, 教育学博士論文, 筑波大学, 1988.
- 28) Denis McQuail, 竹内郁郎, 三上俊治, 竹下俊郎, 水野博介訳 ; マスコミュニケーションの理論, 新曜社, 1985, p. 53.

- 29) 同上書, p. 56-58.
- 30) 同上書, p. 68-69.
- 31) 同上書, p. 68-69.
- 32) 同上書, p. p. 145-146.
- 33) 同上書, p. 150.
- 34) 同上書, p. 148.
- 35) Myles Breen, Farrel Corcoran; Myth In The Television Dis-  
course, in Communication Monographs, Vol. 49-2, 1982, p.p. 127-  
136.
- 36) C. Greeriz, 吉田禎吾ら訳; 文化の解釈学 [I], 岩波書店, 1987,  
p. 24.
- 37) 同上書, p. 40.
- 38) 同上書, p. 14及びp. 26.
- 39) 同上書, p. 32.

#### 参考文献

- 1) R. Barthes; L'empire des Signes.
- 2) R. Barthes, R. Howard trans; The Eiffel Tower and other  
mythologies, Hill and Wang, 1979.
- 3) R. Barthes, 花輪光訳; 記号学の冒険, みすず書房, 1988.
- 4) R. Barthes, 花輪光訳; 物語の構造分析, みすず書房, 1979.
- 5) R. Barthes, 沢崎浩平訳; 第三の意味 映像と演劇と音楽と, みす  
ず書房, 1979.
- 6) D. J. Boorstin, 星野郁美, 後藤和彦訳; 幻影の時代 マスコミが製造  
する事実, 東京創元社, 1964.



- 7) P. Bourdieu, 今村仁司, 港道隆訳 ; 実践感覚 I , みすず書房, 1988.
- 8) P. Bourdieu, 石崎晴己訳 ; 構造と実践 [ブルデュー自身によるブルデュー] , 新評論, 1988.
- 9) P. Bourdieu, 桑田禮彰訳 ; 身体の社会的知覚, 栗原彬ら編 ; 身体の政治技術, 新評論, 1986, p. p. 79-92.
- 10) P. Bourdieu, 田原音和訳 ; どうしたらスポーツマンになれるか — スポーツへの社会学的アプローチ — , 栗原彬ら編 ; 身体の政治技術, 新評論, 1986, p. p. 44-78.
- 11) Bulletin S.T. A. P. S. ; Anthropologie des techniques du corps, S. T. A. P. S. , 1984.
- 12) Bulletin S.T. A. P. S. ; Corps Espace — Temps, S. T. A. P. S. , 1987.
- 13) M. L. De Fleur, S. Ball-Rokeach ; Theories of Mass Communication, 3rd Edit., Longman, 1966.
- 14) E. B. Dennis ; The Media Society evidence about mass communication in america, W.M. C. Brown Company, 1978.
- 15) V. Eco et I. Pezzini ; La semiologie des Mythologies, Communications, No. 36, Seuil, 1982.
- 16) V. Eco, 池上嘉彦訳 ; 記号論 I , II , 岩波書店, 1980.
- 17) V. Eco, 澤井繁男訳 ; 量産性における創造, 現代思想, Vol. 14-7, 青土社, p. p. 99-115, 1986.
- 18) D. M. Fonteyn, 湯河京子訳 ; The Magic of Dance バレエの魅力, 新書館, 1986.
- 19) 福井憲彦, 山本哲士編 ; actes No. 1~No. 5, 日本エディタースクール出版部, 1986-1989.
- 20) 早川善治郎, 藤竹暁, 中野収, 北村日出夫, 岡田直之 ; マス・コミ

コミュニケーション入門, 有斐閣新書, 1979.

21) 市川雅; 舞踊のコスモロジー, 勁草書房, 1983.

22) 市川雅; 行為と肉体, 田畑書店, 1972.

23) 池上嘉彦; エーコの記号論, 現代思想, Vol. 9-9, 青土社, p.p.  
174-187, 1981.

24) 池上嘉彦; 記号論への招待, 岩波書店, 1984.

25) 北村日出夫; テレビ・メディアの記号学, 有信堂, 1985.

26) J. Kristeva, 原田邦夫訳; 記号の解体学 セメイオチケ1, せりか  
書房, 1983.

27) J. Kristeva, 中沢新一, 原田邦夫, 杉浦寿夫, 松枝到訳; 記号の生  
成論 セメイオチケ2, せりか書房, 1984.

28) 黒田日出男; 姿としぐさの中世史, 平凡社, 1986.

29) R. Laban, 神沢和夫訳; 身体運動の習得, 白水社, 1985.

30) L. A. S. A. (Laboratoire de Sociologie Anthropologique de  
L'Université de Caen); Lectures de Pierre Bourdieu Cahiers  
Du L. A. S. A. No. Spécial 8-9, 1<sup>er</sup> semestre, 1988.

31) J. Mander, 鈴木みどり訳; テレビ・危険なメディア ある広告マン  
の告発, 時事通信社, 1985.

32) 丸山圭三郎; バルトとソシュール 記号学と言語学の問題をめぐっ  
て, 現代思想, Vol. 8-7, 青土社, p.p. 63-71, 1980.

33) 丸山圭三郎; 文化のフェティシズム, 勁草書房, 1984.

34) 丸山圭三郎; フェティシズムと快楽, 紀伊國屋書店, 1986.

35) 丸山圭三郎; 言葉と無意識, 講談社, 1987.

36) 丸山圭三郎; 生命と過剰, 河出書房新社, 1987.

37) D. Miller and J. Branson; Pierre Bowrdien: culture and praxis,



J. Austin-Broos Edit. ; creationg culture profiles in the study of culture, Allen & Unwin, 1987, p. p. 210-225.

38) 中村雄二郎 ; ロラン・バルトと記号学について, 現代思想, Vol. 8-7, 青土社, p. p. 72-76, 1980.

39) 西館一郎編 ; ユリイカ Vol. 16-9, 青土社, 1984.

40) 野村雅一 ; ボディランゲージを読む — 身ぶり空間の文化 — , 平凡社, 1984.

41) 佐藤毅, 細谷昂, 竹内郁郎, 藤竹暁編 ; 社会学セミナー4 社会心理 マス・コミュニケーション, 有斐閣, 1972.

42) W. Schramm, 学習院大学社会学研究室訳 ; 新版マス・コミュニケーション マス・メディアの総合的研究, 東京創元社, 1968.

43) 多田道太郎 ; しぐさの日本文化, 筑摩書房, 1972.

44) 竹内郁郎, 児島和人編 ; 現代マス・コミュニケーション論 \* 全体像の科学的理解をめざして\*, 有斐閣, 1982.

45) 内山芳美, 岡部慶三, 竹内郁郎, 辻村明編 ; 講座 現代の社会とコミュニケーション, 東京大学出版会, 1973.

46) 宇波彰 ; 『ミトロジー』再読, 現代思想, Vol. 8-7, 青土社, p. p. 200-206, 1980.

47) I. P. Winner and T. G. Winner, 今井成美訳 ; 文化記号論入門, 現代思想, Vol. 6-3, p. p. 110-171, 1978.

48) 山田實 ; マス・コミュニケーション研究の展開, 芦書房, 1981.

49) 山脇巖編 ; ライフサイエンス Vol. 13-11, 生命科学振興会, 1986.

### 第3章 引用文献

1) 庄野義信編著 ; 六大学野球全集, 上巻, 改造社, 1931, p. p. 5-6.

- 2) 中沢不二雄監修, 浦岡偉太郎編; 野球史, 東京都新聞社, 1957, p. 1.
- 3) 前掲書1), p. 1.
- 4) 前掲書2), p. 2.
- 5) 前掲書1), p. 7.
- 6) 前掲書1), p. p. 7-8.
- 7) 前掲書1), p. p. 9-10.
- 8) 前掲書2), p. 3.
- 9) 大和球士; 野球五十年, 時事通信社, 1955, p. p. 11-12.
- 10) 菊幸一; 近代日本におけるプロフェッショナル・スポーツの成立形態とその社会的条件に関する研究 — プロ野球の成立を中心にして —, 教育学博士論文, 筑波大学, 1988, p. 75.
- 11) 田原茂作; 日本野球史, 原生閣書店, 1929, p. p. 44-47.
- 12) 同上書, p. 47.
- 13) 同上書, p. 50.
- 14) 前掲書10), p. 77.
- 15) 前掲書11), p. 24.
- 16) 大和球士; 野球百年, 時事通信社, 1976, p. 23.
- 17) 同上書, p. 24.
- 18) 前掲書10), p. p. 46-48.
- 19) 前掲書1), p. 17.
- 20) 第一高等学校校友会; 野球部史校友会雑誌号外, 1903, 木村毅編; 明治文化資料叢書, 第10巻スポーツ編, 風間書房, 1972, p. 178.
- 21) 第一高等学校校友会野球部編; 第一高等学校野球部史 — 明治二十四年頃まで —, 庄野義信編著; 六大学野球全集, 上巻, 改造社,



- 1931, p. 19.
- 22) 同上書, p. 20.
- 23) 前掲書20), p. 179.
- 24) 前掲書20), p. 180.
- 25) 前掲書21), p. 22.
- 26) 前掲書20), p. 180.
- 27) 高橋左門; 旧制高等学校研究, 昭和出版, 1978, p. 116.
- 28) 同上書, p. 106.
- 29) 同上書, p. 228, 及び第一高等学校寄宿寮編; 向陵誌, 第一高等学校寄宿寮, 1930, p. 3.
- 30) 同上書, p. 132.
- 31) 前掲書27), p. 137.
- 32) 中馬庚; 野球, 前川文栄堂, 1867, p. p. 61-63.
- 33) 前掲書20), p. 183.
- 34) 前掲書16), p. p. 38-45.
- 35) 第一高等学校校友会編; 校友会雑誌, 明治28年(1895), 第一高等学校校友会, 1895, p. p. 231-232.
- 36) 君島一郎; 日本野球創世記, ベースボールマガジン社, 1972, p. 101.
- 37) 前掲書20), p. 189.
- 38) 前掲書20), p. 189.
- 39) 前掲書20), p. 190,
- 40) 前掲書20), p. p. 230-231.
- 41) 前掲書20), p. p. 231-232.
- 42) 前掲書20), p. 197.
- 43) 前掲書20), p. 202.

- 44) 大和球士；高校野球五十年，時事通信社，1856，p. p.13-17.
- 45) 田島龍夫；野球使用，愛知県立第一中学校校友会，1905，p. p. 20-23.
- 46) 日下裕弘；明治期における『武士的』，『武士道』的野球信条に関する文化社会学的研究，体育・スポーツ社会学研究会編，体育・スポーツ社会学研究4，道和書院，1985，p.33.
- 47) 前掲書10)，p. 54.
- 48) 前掲書44)，p. p. 7-8.
- 49) 前掲書44)，p. 8.
- 50) 五十公野清一；日本三球人，世界文庫，1968，p. p. 119-120.
- 51) 前掲書1)，p. 45.
- 52) 前掲書1)，p. 45.
- 53) 前掲書16)，p. 103.
- 54) 安部磯雄；野球と共に三十年，青年と理想，岡倉書房，1936，p. p. 300-301.
- 55) 前掲書50)，p. 129.
- 56) 前掲書50)，p. 135.
- 57) 前掲書50)，p. p. 144-146.
- 58) 前掲書1)，p. 46.
- 59) 前掲書16)，p. p. 92-103.
- 60) 前掲書50)，p. 190.
- 61) 平野正朝；投手の位置（後編），野球手報4，1905，p. 138.
- 62) 伊勢田剛；野球，寶永館，1911，p. p. 1-2.
- 63) 安部磯雄；早稲田大學野球選手の米國行に就いて，萬朝報，明治38年3月26日，1905.



- 64) 安部磯雄 ; 国際競技の意義, 運動界, Vol.12-2, p.3, 1931.
- 65) 安部磯雄 ; 国際的競技, 運動世界6号, p.p.1-3, 1908.
- 66) 安部磯雄 ; 国際競技の序幕, 運動界, Vol.12-1, p.4, 1931.
- 67) 安部磯雄 ; 競技運動と勝敗の感念, 運動世界9号, p.3, 1908.
- 68) 安部磯雄 ; 余の野球観, 野球年報10号, p.p.293-294, 1912.
- 69) 安部磯雄 ; 競技運動と勝敗の感念, 運動世界9号, p.1, 1908.
- 70) 安部磯雄 ; 学校と運動, 運動世界16号, p.p.1-5, 1909.
- 71) 安部磯雄 ; 公平なる競技, 運動界Vol.12-4, p.p.2-5, 1931.
- 72) 安部磯雄 ; 運動家の不節制, 運動界Vol.11-8, p.p.2-5, 1930.
- 73) 安部磯雄 ; 運動家の心得べきこと, 運動界Vol.11-11, p.p.2-5, 1930.
- 74) 安部磯雄 ; 運動の精神, 北原鉄雄編 ; アルス大運動講座位置輯, アルス, 1926, p.3.
- 75) 安部磯雄 ; 武士道と運動競技, 運動世界19号, p.1, 1909.
- 76) 安部磯雄 ; 野球の三徳, 橋戸信編 ; 最近野球術, 博文館, 1905, p.p.199-211.
- 77) 前掲書50), p.140.
- 78) 前掲書1), p.p.43-44.
- 79) 前掲書1), p.44.
- 80) 前掲書1), p.44.
- 81) 櫻井彌一郎 ; 野球, 野球年報第5号, p.p.110-117, 1907.
- 82) 青木泰一 ; 勝敗は冷視すべきものか, 野球年報第5号, p.p.149-152, 1907.
- 83) 神吉英三 ; 雑感, 野球年報第8号, p.p.179-185, 1910.
- 84) 押川春浪 ; 最近野球術に序す, 橋戸信 ; 最近野球術, 博文館, 1905,

p. p. 5-7.

85) 押川春浪；大日本的ベースボール，月刊ベースボールVol. 1-1, p. 3, 1908.

86) 押川春浪；野球を武道とせよ，運動世界 4 - 1, p. p. 2-4, 1911.

87) 前掲書50)，p. 310.

88) 飛田穂洲；野球生活の思い出，ベースボールマガジン社，1986, p. 346.

89) 同上書，p. p. 346-353.

90) 同上書，p. 303.

91) 同上書，p. 353.

92) 朝日新聞社；五十年の回顧，朝日新聞社，1929, p. 256.

93) 朝日新聞社社史編修室；朝日新聞の九十年，朝日新聞社，1969, p. p. 296-297.

94) 高山義三；大會の由來，朝日新聞社；全國中等學校野球大會史，1929, p. p. 122-123.

95) 田村木国；誕生まで，朝日新聞社；甲子園グラフィティ I，朝日新聞社，1984, p. 98.

96) 田村省三；斯くして大會は生れた第一回大會大會史，1929, p. p. 103-104.

97) 前掲書95)，p. 97.

98) 前掲書96)，p. 104.

99) 朝日新聞；野球と其害毒，庄野義信編著；六大学野球全集，上巻，改造社，1931, p. 142. および，朝日新聞社；朝日新聞（明治44年8月29日より9月29日）マイクロフィルム複写コピー.

100) 前掲書1)，p. p. 140-143.



101)前掲書92), p. 355.

102)前掲書92), p. 256.

103)中尾濟;十四年間の回顧,朝日新聞社,全國中等學校野球大會史,  
1929, p. p. 1-2.

104)上野精一;全國中等學校野球大會第十五年を迎へて,朝日新聞社;  
全國中等學校野球大會史,1929,序.

105)大阪朝日新聞社;全國中等學校野球大會を開催す 社告,大正4年  
7月1日,1915,マイクロフィルム複写コピーより転載.

106)前掲書103), p. 4.

107)久保田高行;高校野球五十年,時事通信社,1956, p. 30.

108)朝日新聞社;全國中等學校野球大會史,朝日新聞社,1929, p. p. 21-  
22.

109)前掲書107), p. p. 41-42.

110)前掲書108), p. 53.

111)前掲書108), p. 53.

112)前掲書107), p. 8.

113)前掲書108), p. 22.

114)前掲書107), p. p. 32-33.

115)前掲書107), p. p. 197-198.

116)朝日新聞社;昭和17年7月22日,朝日新聞社,1942,久保田高行;  
高校野球五十年,時事通信社,1956, p. 210. より

117)前掲書107), p. 211.

118)朝日新聞社;昭和21年1月21日,朝日新聞社,1946,久保田高行;  
高校野球五十年,時事通信社,1956, p. 218-219. より

119)前掲書107), p. 219.

120)日本学生野球協会；日本学生野球憲章，日本学生野球協会，1949.

121)前掲書108)，p. 33.

122)前掲書108)，p. 156-157.

123)全国高校野球連盟；プロ野球の勧誘に関する通達，昭和30年9月，

久保田高行；高校野球五十年，時事通信社，1956，p. p. 301-302.

124)全国高校野球連盟；高校野球選手のプロ野球入団についての申し合

せ事項，昭和30年12月3日，1955.

125)プロ野球実行委員会；高校選手に対する申し合せ，昭和30年12月14

日，1955.

126)前掲書108)，p. 47.

127)前掲書108)，p. 47.

128)前掲書108)，p. 46.

129)朝日新聞社；朝日新聞平成2年5月25日，朝日新聞社，1990.

130)飛田穂洲；怒濤と磯節と野球，飛田穂洲；野球生活の思い出，ベース

ボールマガジン社，1986，p. 37.

131)飛田穂洲；一球洗心，朝日新聞昭和31年8月13日，朝日新聞社，

1956.

132)飛田穂洲；平和の象徴，飛田穂洲；野球生活の思い出，ベースボー

ルマガジン社，1986，p. p. 354-358.

133)飛田穂洲；少年球士に与う，飛田穂洲；野球生活の思い出，ベース

ボールマガジン社，1986，p. p. 43-54.

134)飛田穂洲；興行野球と學生野球，朝日新聞社；朝日新聞，昭和11年

3月16日，1936.

135)飛田穂洲；興行野球と學生野球，朝日新聞社；朝日新聞，昭和11年

3月17日，1936.



136)大和球士；野球百年，時事通信社，1976，p.p.73-75.

137)同上書，p. 66.

138)君島一郎，木下道雄；鯊鰐・一，高三高戦，三高同窓会誌『神陵』

昭和46年第4号，君島一郎；日本野球創世記，ベースボールマガジン社，1972，p. p. 180-183.

139)服部喜久雄；一高三高野球史，旧一高，三高野球部有志，1954，の

グラビア。及び中沢不二雄監修，浦岡偉太郎編；野球史，東京都新聞社，1957，グラビア。より

#### 第4章 参考文献

- 1) 清水諭；Mythology of Sport-Japanese and High School Baseball in Depth Structure, Sport and Humanism Proceedings of The International workshop of Sport Sociology in Japan, 1990, p. p. 215-221.

#### 第5章 引用文献

- 1) B. K. Malinowski；寺田和夫，益田義郎訳；大西洋の遠洋航海者，中央公論社，1967，p. 340.
- 2) C. Geerts；吉田禎吾ら訳；文化の解釈学〔I〕，岩波書店，1987，p. p. 6-11.
- 3) 同上書，p. 24.
- 4) 同上書，p. 40.
- 5) 同上書，p. 14. およびp. 26.
- 6) 同上書，p. 32.
- 7) J. L. Peacock，今福龍太郎；人類学と人類学者，岩波書店，1988.

p. 218.

8) 同上書, p. 218.

9) 同上書, p. 149.

10) 同上書, p. 153.

11) 同上書, p. 156.

12) 同上書, p. 157.

13) 同上書, p. 157.

14) 同上書, p. 11.

15) 同上書, p. 10.

16) 同上書, p. 247.

17) 前掲書 2), p. 28.

18) 前掲書 1), p. 82.

19) 大黒明; さびしい過疎の村 行政関係者はどう見ているのか, 徳島

新聞社; 徳島新聞, 昭和45年 2月22日, 1970.

20) 徳島県立池田高等学校; 創立50周年, 1972, p. p. 63-65.

21) 同上書, p. p. 63-64.

22) 同上書, p. 64.

23) 同上書, p. p. 64-65.

24) 蔦文也, 山際淳司; 強うなるんじゃ!, 集英社, 1983, p. 14.

25) 栗原彬; 歴史とアイデンティティ 近代日本の心理 = 歴史研究, 新

曜社, 1982, p. 12.

26) 同上書, p. 12.

27) 同上書, p. 13.

28) 同上書, p. 13.

29) G. W. Allport, 詫摩武俊他訳; パーソナリティ — 心理学的解釈 — ,



新曜社, 1982.

30) 前掲書25), p. 39.

31) 前掲書25), p. 40.

32) 前掲書25), p. p. 40-41.

#### 参考文献

1) 朝日新聞社, 朝日新聞 徳島地方販売版 1988. 8. 5.

2) 後藤善猛; ああポッケモン“野球”の名付け親 中馬庚協中校長伝,  
教育出版センター, 1983.

3) 五十公野清一; 日本三球人, 世界文庫, 1968.

4) 久保田高行; 高校野球百年, 時事通信社.

5) 毎日新聞社; 別冊1 億人の昭和史 センバツ野球50年, 毎日新聞社.

6) 毎日新聞社; 高校野球 ああ根性と闘魂, 毎日新聞社, 1977.

7) 松尾俊治; ああ甲子園!! 高校野球熱闘史, スポーツニッポン新聞社,  
1976.

8) 三神良三; 小林一三 独創の経営, PHP研究所, 1983.

9) 小此木啓吾; フロイト, 講談社, 1989.

10) 小此木啓吾; フロイト その自我の軌跡, 日本放送出版協会, 1973.

11) 小此木啓吾; 現代人の心理構造, 日本放送出版協会, 1986.

12) 咲村観; 小説 小林一三(上)(下), 講談社, 1988.

13) 佐藤道輔; 甲子園の心を求めて, 報知新聞社, 1979.

14) 清水諭; 「甲子園」の神話学, へるめすNo. 22, 岩波書店, p. p. 19-  
29, 1989.

15) 清水諭; 甲子園野球の神話分析 — 記号学からテキスト分析へ〈池  
田町'88年夏〉, 体育・スポーツ社会学研究会編; 体育・スポーツ

社会学研究 8, 道和書院, p. p. 27-49, 1989.

- 16) 城井睦夫; “野球”の名付け親 中馬庚伝, ベースボールマガジン社, 1988.
- 17) 相馬卓司; センバツ物語, 毎日新聞社, 1988.
- 18) 徳丸杜也; 甲子園の真実, 刊々堂, 1980.
- 19) 徳島県立池田高等学校; 65周年記念誌 桜陵, 1987.
- 20) 津田康; 陽は舞いおどる甲子園 高校野球青春論, サイマル出版会, 1977.
- 21) 葛文也; 攻めダルマの教育論, ごま書房, 1983.
- 22) 生方幸夫; さわやか戦士たち・いま, 英知出版, 1983.
- 23) 山際淳司; スローカーブをもう一球, 角川書店, 1981.
- 24) 山本一郎, 近藤唯之, 殿岡駒吉; 甲子園・熱戦の記録, 河出書房新社, 1976.
- 25) 大和球士; 真説 日本野球史《大正編》, ベースボールマガジン社, 1977.
- 26) 米沢毅; 甲子園野球, 成美堂, 1976.
- 27) 好村三郎; 汗と涙の高校野球, 山手書房, 1976.
- 28) 好村三郎; 白球よ翔べ夏の甲子園 高校野球の心と技, 朝日新聞社, 1988.